

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第100集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第14集

熊野堂遺跡(2)

遺構編 1

1990

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

序

上越新幹線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速鉄道として、昭和57年11月1日に開通いたしました。鉄道の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が、事前の鉄道建設工事に先立って調査されました。本県でも22箇所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録保存されています。

本報告の熊野堂遺跡は、高崎市大八木町に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和49年9月から昭和57年9月にかけて、第1次から第6次にわたる調査を群馬県教育委員会及び当事業団が調査しました。縄文時代から平安時代にかけて継続的に営まれた住居跡402軒等が調査され、古代における本県の歴史を知る上での数々の貴重な資料が得られました。特に県内初出の古墳時代の重層する2枚の水田址は識者から注目されました。これら資料は昭和58年4月から、報告書作成のための整理作業が行われ、既に遺跡の第Ⅰ地区および第Ⅲ地区を対象にした報告書は昭和59年に刊行しました。昭和63年4月からは遺跡第Ⅱ地区の整理作業が行われ、ここに304軒の住居跡等を対象にした報告書を刊行することができました。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、日本鉄道建設公団、JR東日本支社、高崎市教育委員会、地元関係者等から種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、本県の歴史を解明するための資料として、役立てられることを願ひ序とします。

平成2年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1 本書は、上越新幹線建設に伴い事前調査された群馬県高崎市大八木町、群馬郡群馬町大字井出に所在する「熊野堂（くまのどう）遺跡」第Ⅱ地区の発掘調査報告書である。体裁は、遺構編2冊、遺物編1冊、まとめ編1冊の4分冊からなり、本書はその第1分冊遺構編(1)である。

2 第1分冊 遺構編(1)は、住居について掲載した。

3 熊野堂遺跡は、第Ⅰ地区、第Ⅱ地区、第Ⅲ地区からなり、昭和58年度の第Ⅰ地区、第Ⅲ地区の整理および報告時に発掘調査時の遺跡名称を変更、その範囲を統一した。旧称は下記の通りである。

第Ⅰ地区 旧称「J S27 東下井出（ひがししもいで）遺跡」

第Ⅱ地区 旧称「J S26 熊野堂遺跡」

第Ⅲ地区 旧称「熊野堂遺跡A調査区」

このうち、第Ⅰ地区は「熊野堂遺跡(1)」(1984)、第Ⅲ地区は「兩壺遺跡、熊野堂遺跡第Ⅲ地区」(1984)として当事業団で報告している。第Ⅱ地区は、熊野堂遺跡の最終報告であり、第4分冊を3つの地区に関する「まとめ編」としている。

4 発掘調査は、日本鉄道建設公団の委託を受けて昭和49、52、53、54年度を群馬県教育委員会が、昭和56、57年度を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

第1次調査 昭和49年9月9日～50年3月28日

清水和夫 長谷部達雄 前沢和之 飯塚卓二 中里吉伸

第2次調査 昭和53年1月17日～3月25日 細野雅男 下城 正

第3次調査 昭和53年4月10日～54年3月27日

細野雅男 石坂 茂 内田憲治 外山政子 茂木由行

第4次調査 昭和54年4月9日～9月14日 細野雅男 内田憲治 外山政子 宮下万喜子

第5次調査 昭和57年1月18日～3月31日 飯塚卓二 関 晴彦 外山政子 三浦京子

第6次調査 昭和57年4月1日～9月6日

飯塚卓二 女屋和志雄 井川達雄 宮下万喜子 新井順二

5 整理事業は、群馬県教育委員会を通じ、東日本旅客鉄道株式会社の委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が昭和63年4月1日から平成2年3月31日にかけて実施した。

事務担当 白石保三郎 邊見長雄 松本浩一 田口紀雄 上原啓己 神保佑史 住谷 進
笠原秀樹 小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 野島のぶ江 並木綾子
今井とも子 松井美智子 角田みづほ

整理担当 調査研究第2課長 桜場一寿 担当 飯塚卓二 女屋和志雄 関根慎二

囑託員 新井悦子 三浦京子

補助員 今井サチ子 宇佐美征子 岩淵節子 小野寺仁子 筑井弘子 五明志津江
佐藤純子 石井きよ子 立川千栄子 六反田達子 吉田文子 山田キミ子
渡辺フサ枝 阿部幸恵 茂木順子 柴田敏子 原島弘子 安達好子 戸神晴美

大野容子 平林照美 長岡美和子

- 6 発掘調査および整理、報告にあつたは、次の諸氏、諸機関に御指導、御協力を得た。
河原純之 稲田孝司 新井房夫 日比野紘一郎 松谷暁子 石川正之助 石川克博 能登 健
藤原宏志 平沢弥一郎 高崎市教育委員会 群馬県警察本部
- 7 本書の編集は飯塚卓二 女屋和志雄 関根愼二が担当した。
本文執筆 第1章 第1節 森田秀策 第2節、第3節 飯塚卓二 第2章 女屋和志雄
遺構写真 調査時の各担当 水田址の一部は北沢広氏による。
- 8 本遺跡出土の遺物、実測図、写真等の調査資料は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本書での地区番号、遺構番号は調査時のままとしたが、井戸、竪穴状遺構、土坑については一部を変更し、各節に記した。本報告で欠番扱いとしたものも一覽表中等には番号を記載した。
- 2 土坑・溝は、性格・時代が特定できたものだけに限り、個別の平・断面図をあげた。残りの殆どは全体の概念図で位置を示し、法量、重複等の特徴について一覽表に記載した。
- 3 遺構の縮尺 1/30 カマド平・断面図 1/60 住居の平・断面図
1/40 水田
1/80 大型住居 掘立柱建物 井戸 土坑 竪穴状遺構の平・断面図
以上を基本とし、各図にその縮尺を表示した。方位は磁北を表示している。
- 4 方位 調査区基軸線 81.710km以北 N13°E, 81.710km以南 N15°E
住居主軸方位 弥生時代 古墳時代前期は長軸線を基準とする。古墳時代中期以降のカマドをもつ住居はカマド中心軸垂線を基準とする。
- 5 長さ 幅 1/20平面図を基準に計測した。
- 6 遺構図の断面図にある黒ぬりは石を示す。角安石は角閃石安山岩の略称として使用した。
- 7 本書で記述した降下火山噴出物の年代観は以下である。
浅間A軽石 天明3年(1783年) 浅間B軽石 天仁元年(1108年)
二ツ岳FP 6世紀中頃 二ツ岳FA 6世紀初頭
浅間C軽石 4世紀中頃
- 8 住居図中に使用したスクリーントーンは焼土と炭化物、灰の分布を示す。推定の柱穴は柱穴番号を付した。また、床面中の線描写は硬い範囲を示す。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査に至る経過と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の立地と周辺の遺跡	3
1 遺跡の位置	3
2 遺跡の立地	3
3 周辺の遺跡	5
第3節 調査の概要	14
第4節 基本土層	21

第2章 検出された遺構

第1節 遺構の概要と時代別変遷	23
第2節 竪穴住居址	30
第3節 掘立柱建物(以下2分冊)	301
第4節 井 戸	312
第5節 水田と畠	316
第6節 溝	347
第7節 1号方形周溝墓	353
第8節 土 坑	357
第9節 竪穴状遺構	379
第10節 東京電力鉄塔用地調査区	383

図 版 1～94

第1分冊

図 版 95～129

第2分冊

插图目次

第 1図	熊野堂遺跡位置図1/5万「標名山・前橋」使用	6
第 2図	熊野堂遺跡周辺の旧地形区分	7
第 3図	熊野堂遺跡周辺の主要道路	13
第 4図	調査区位置図	19
第 5図	II地区発掘調査区域図(1/2000)	20
第 6図	基本土層	22
第 7図	弥生時代住居分布図	25
第 8図	古墳時代住居分布図	26
第 9図	奈良時代住居分布図	27
第 10図	平安時代住居分布図	28
第 11図	1号・2号住居址遺構図	31
第 12図	3号・4号住居址遺構図	32
第 13図	5号住居址遺構図	34
第 14図	6A号・6B号住居址遺構図	35
第 15図	6C号住居址遺構図	37
第 16図	7号・12号住居址遺構図	38
第 17図	8号・9号住居址遺構図1)	40
第 18図	8号・9号住居址遺構図2)	41
第 19図	10号住居址遺構図	43
第 20図	11号住居址遺構図	44
第 21図	13号・21号住居址遺構図	46
第 22図	14号・19号住居址遺構図	47
第 23図	15号・23号・37号・38号住居址遺構図	49
第 24図	16号・17号住居址遺構図	51
第 25図	20号住居址遺構図	52
第 26図	22号・34A・B号・39号住居址遺構図	54
第 27図	24号住居址遺構図	55
第 28図	25号・52号住居址遺構図	56
第 29図	26号・40号・44号・53号・56号・58号住居址遺構図	59
第 30図	27号・41号・48号・55号住居址遺構図	61
第 31図	29号・35号・36号・46号住居址遺構図	63
第 32図	30号住居址遺構図	65
第 33図	31号～33号住居址遺構図	66
第 34図	42号住居址遺構図	68
第 35図	43号・47号・49号・59号・60号住居址遺構図	70
第 36図	57号・61号住居址遺構図	73
第 37図	50号・57号・61号・63号住居址遺構図	74
第 38図	64号・65号・66号住居址遺構図	76
第 39図	67号住居址遺構図	78
第 40図	68号・79号住居址遺構図	80
第 41図	69号住居址遺構図	81
第 42図	70号・76号住居址遺構図	83
第 43図	71号・77号・78号住居址遺構図	85
第 44図	72号住居址遺構図	86
第 45図	73号・74号住居址遺構図	87
第 46図	75号住居址遺構図	89
第 47図	80号住居址遺構図	90
第 48図	81号住居址遺構図	92
第 49図	82号住居址遺構図	93
第 50図	84号住居址遺構図	94
第 51図	85号・86号住居址遺構図	96
第 52図	87号・108号・230号住居址遺構図	98
第 53図	88号・98号住居址遺構図	100
第 54図	89号住居址遺構図	101
第 55図	90号住居址遺構図	101
第 56図	91号・93号・94号・113号住居址遺構図	104

第 57 区	95 号住居址道標図	105
第 58 区	96 号住居址道標図	106
第 59 区	97 号住居址道標図	107
第 60 区	99 号住居址道標図	108
第 61 区	100 号・101 号・109 号・111 号住居址道標図	111
第 62 区	102 号住居址道標図	112
第 63 区	103 号~107 号住居址道標図	114
第 64 区	110 号住居址道標図	116
第 65 区	112 号住居址道標図	117
第 66 区	114 号住居址道標図	118
第 67 区	115 号住居址道標図	119
第 68 区	116 号住居址道標図	121
第 69 区	117 号住居址道標図	122
第 70 区	118 号・119 号住居址道標図	123
第 71 区	120 号・152 号住居址道標図	125
第 72 区	121 号~126 号・165 号住居址道標図	128
第 73 区	127 号・128 号住居址道標図	129
第 74 区	129 号~131 号・140 号住居址道標図	131
第 75 区	132 号・237 号住居址道標図	133
第 76 区	134 号住居址道標図	134
第 77 区	135 号住居址道標図	136
第 78 区	136 号住居址道標図	137
第 79 区	137 号住居址道標図	138
第 80 区	138 号・149 号・150 号住居址道標図	140
第 81 区	139 号・148 号住居址道標図	141
第 82 区	141 号・142 号住居址道標図	142
第 83 区	144 号・147 号住居址道標図	144
第 84 区	145 号住居址道標図	146
第 85 区	151 号・160 号住居址道標図	147
第 86 区	153 号住居址道標図	149
第 87 区	155 号住居址道標図	150
第 88 区	156 号・157 号住居址道標図	152
第 89 区	158 号・159 号・161 号・163 号住居址道標図	153
第 90 区	158 号・161 号住居址道標図	154
第 91 区	159 号・163 号住居址道標図	156
第 92 区	164 号住居址道標図	157
第 93 区	166 号住居址道標図	159
第 94 区	167 号住居址道標図	160
第 95 区	168 号住居址道標図	161
第 96 区	169 号住居址道標図	162
第 97 区	170 号住居址道標図	164
第 98 区	171 号住居址道標図	165
第 99 区	172 号住居址道標図	166
第100 区	173 号住居址道標図	167
第101 区	174 号住居址道標図	168
第102 区	176 号住居址道標図	170
第103 区	180 号住居址道標図	172
第104 区	181 号住居址道標図	173
第105 区	182 号住居址道標図	175
第106 区	184 号住居址道標図	176
第107 区	185 号住居址道標図	177
第108 区	186 号住居址道標図	179
第109 区	187 号住居址道標図	180
第110 区	188 号・198 号住居址道標図	181
第111 区	189 号住居址道標図	182
第112 区	194 号住居址道標図	184
第113 区	195 号・201 号~203 号住居址道標図	185
第114 区	196 号住居址道標図	188
第115 区	197 号住居址道標図	189

第116區	199号住居址遺構區	190
第117區	200号住居址遺構區	191
第118區	209号住居址遺構區	192
第119區	210号住居址遺構區	194
第120區	213号住居址遺構區	196
第121區	214号住居址遺構區	197
第122區	215号住居址遺構區	198
第123區	218号住居址遺構區	199
第124區	219号住居址遺構區	200
第125區	220号住居址遺構區	202
第126區	221号住居址遺構區	203
第127區	223号·226号·227号·239号住居址遺構區	206
第128區	224号住居址遺構區	207
第129區	229号住居址遺構區	209
第130區	231号住居址遺構區	210
第131區	232号·236号住居址遺構區	212
第132區	233号住居址遺構區	213
第133區	234号住居址遺構區	214
第134區	238号住居址遺構區	215
第135區	240号住居址遺構區	217
第136區	241号·242号·247号住居址遺構區	219
第137區	243号·245号·246号住居址遺構區	221
第138區	248号·257号住居址遺構區	223
第139區	250号·256号住居址遺構區	226
第140區	251号·259号·261号住居址遺構區	227
第141區	252号·253号住居址遺構區	228
第142區	254号住居址遺構區	229
第143區	262号住居址遺構區	232
第144區	3区1号住居址遺構區	233
第145區	3区2号住居址遺構區	234
第146區	3区3号住居址遺構區	235
第147區	3区4号住居址遺構區	236
第148區	3区5号住居址遺構區	238
第149區	3区6号住居址遺構區	240
第150區	3区7号住居址遺構區	241
第151區	3区8号住居址遺構區	242
第152區	3区9号住居址遺構區	243
第153區	3区10号住居址遺構區	244
第154區	3区12号住居址遺構區	245
第155區	3区15号·3区16号·205号·206号住居址遺構區	247
第156區	4区2号住居址遺構區	248
第157區	4区3号住居址遺構區	249
第158區	4区4号住居址遺構區	250
第159區	4区5号住居址遺構區	251
第160區	4区6号住居址遺構區	252
第161區	4区7号·8号住居址遺構區	253
第162區	4区9号住居址遺構區	255
第163區	4区10号住居址遺構區	256
第164區	4区11号住居址遺構區	257
第165區	4区12号住居址遺構區	259
第166區	4区14号住居址遺構區	260
第167區	4区15号住居址遺構區	262
第168區	4区16号住居址遺構區	263
第169區	4区17号住居址遺構區	264
第170區	4区18号住居址遺構區	265
第171區	4区19号住居址遺構區	267
第172區	4区21号住居址遺構區	268
第173區	4区22号住居址遺構區	269
第174區	4区23号住居址遺構區	270

第175図	4区24号住居址遺構図	271
第176図	4区25号住居址遺構図	272
第177図	4区26号住居址遺構図	273
第178図	4区27号住居址遺構図	274
第179図	4区28号住居址遺構図(1)	275
第180図	4区28号住居址遺構図(2)	276
第181図	4区29号住居址遺構図	277
第182図	4区30号住居址遺構図	278
第183図	4区31号住居址遺構図	279
第184図	1号・2号・4号掘立柱建物	302
第185図	3号・5号掘立柱建物	303
第186図	6号・7号・9号掘立柱建物	305
第187図	8号・10号掘立柱建物	306
第188図	掘立柱建物全体図(1)	308
第189図	掘立柱建物全体図(2)	309
第190図	1号・3号井戸	312
第191図	2号井戸	313
第192図	C水田・F A水田基本土層	317
第193図	C水田(1)	320
第194図	C水田(2)	321
第195図	C水田(3)	322
第196図	C水田断面図	324
第197図	8号溝	325
第198図	C水田耕土下の遺構分布図	328
第199図	F A水田 1区	331
第200図	F A水田 2区	332
第201図	F A水田の水口と足跡(1)	335
第202図	F A水田の足跡(2)	336
第203図	F A水田水口断面図	337
第204図	2区畝址	339
第205図	3区畝址	340
第206図	C水田面積比グラフ図	341
第207図	F A水田面積比グラフ図	342
第208図	3区1号・2号・3号溝	348
第209図	1号前方後方形周溝基遺構図(1)	355
第210図	1号前方後方形周溝基遺構図(2)	356
第211図	縄文時代土坑分布図	358
第212図	縄文時代土坑	359
第213図	弥生時代土坑	360
第214図	土坑・溝全体図(1)	361
第215図	土坑・溝全体図(2)	362
第216図	土坑・溝全体図(3)	363
第217図	土坑・溝全体図(4)	364
第218図	土坑・溝全体図(5)	365
第219図	土坑(1)	366
第220図	土坑(2)	367
第221図	1号・2号・4号・5号・6号整穴状遺構	382
第222図	東電鉄塔用地調査区全体図	385
第223図	東電鉄塔用地調査区1号住居址	386
第224図	東電鉄塔用地調査区2号住居址	387
第225図	東電鉄塔用地調査区3号住居址	388
第226図	東電鉄塔用地調査区4号住居址	390
第227図	東電鉄塔用地調査区1号掘立柱建物	391
第228図	東電鉄塔用地調査区土坑	392
第229図	東電鉄塔用地調査区溝	394
第230図	235号住居址遺構図	280

図版目次

- 図版 1 熊野堂遺跡と丹野川上流域の遺跡群 (航空写真 南から)
- 図版 2 熊野堂遺跡全景 (航空写真 南から)
- 図版 3-1 熊野堂遺跡調査前風景 (南から)
2 熊野堂遺跡調査風景
- 図版 4-1 第2次調査風景
2 第3次調査風景
- 図版 5-1 基本土層 (表土からC水田まで)
2 基本土層 (表土からシルト質土まで)
- 図版 6-1 1号住居址
2 1号住居址カマド遺物出土状態
3 1号住居址床面下土坑
- 図版 7-1 2号住居址
2 2号住居址カマド
3 3号住居址
- 図版 8-1 3号住居址
2 4号住居址 (東から)
3 5号住居址
- 図版 9-1 6A号住居址
2 6B号住居址
3 6C号住居址
- 図版 10-1 7号住居址 (西から)
2 7号住居址カマド
3 7号住居址カマド
- 図版 11-1 8号 (左)・9号 (右) 住居址
2 8号・9号住居址遺物出土状態
3 9号住居址三彩小壺出土状態
- 図版 12-1 9号住居址カマド
2 9号住居址カマド
3 9号住居址カマド左壁の石組み
- 図版 13-1 10号住居址
2 10号住居址
3 11号住居址
- 図版 14-1 11号住居址
2 13号住居址
3 13号住居址
- 図版 15-1 14号住居址
2 14号住居址カマド
3 15号住居址 (東から)
- 図版 16-1 16号住居址
2 16号・17号住居址
3 20号住居址
- 図版 17-1 16号住居址カマド
2 17号住居址カマド
3 20号住居址カマド
- 図版 18-1 21号住居址 (西から)
2 22号住居址
3 23号住居址
- 図版 19-1 21号住居址カマド
2 22号住居址カマド
3 23号住居址カマド
- 図版 20-1 24号住居址カマド
2 24号住居址カマド
3 25号住居址 (東から)
- 図版 21-1 26号住居址
2 27号住居址
3 27号住居址

- 図版 21-1 29号住居址
 - 2 29号住居址
 - 3 30号住居址
- 図版 23-1 31号住居址
 - 2 31号・32号・33号住居址
 - 3 34号住居址
- 図版 24-1 35号住居址
 - 2 35号住居址
 - 3 35号住居址カマド
- 図版 25-1 37号・38号住居址
 - 2 41号住居址
 - 3 41号住居址カマド
- 図版 26-1 42号住居址
 - 2 42号住居址カマド
 - 3 42号住居址カマド
- 図版 27-1 43号住居址
 - 2 44号住居址
 - 3 45号住居址
- 図版 28-1 46号住居址
 - 2 47号住居址
 - 3 27号(下)・48号(上)住居址
- 図版 29-1 49号住居址
 - 2 49号住居址遺物出土状態
 - 3 49号住居址遺物出土状態
- 図版 30-1 50号住居址
 - 2 57号・59号・60号・61号・63号住居址
 - 3 57号住居址
- 図版 31-1 57号住居址
 - 2 57号住居址カマド付近遺物出土状態
 - 3 57号住居址貯蔵穴付近遺物出土状態
- 図版 32-1 58号住居址
 - 2 58号住居址遺物出土状態
 - 3 59号住居址
- 図版 33-1 64号(右)・65号(左)住居址
 - 2 64号(右)・65号(左)住居址
 - 3 64号(左)・66号(右)住居址
- 図版 34-1 67号住居址
 - 2 67号住居址
 - 3 68号住居址(北から)
- 図版 35-1 69号住居址
 - 2 69号住居址遺物出土状態
 - 3 69号住居址馬骨出土状態
- 図版 36-1 70号住居址
 - 2 70号住居址遺物出土状態
 - 3 71号住居址
- 図版 37-1 73号(左)・74号(右)住居址
 - 2 73号(左)・74号(右)住居址遺物出土状態
 - 3 73号住居址カマド内瓦出土状態
- 図版 38-1 76号住居址(北から)
 - 2 77号(左)・78号(右)住居址
 - 3 77号住居址カマド
- 図版 39-1 79号住居址(西から)
 - 2 79号住居址遺物出土状態
 - 3 79号住居址東南隅遺物出土状態
- 図版 40-1 81号住居址(北から)
 - 2 81号住居址遺物出土状態
 - 3 81号住居址灰軸陶器出土状態
- 図版 41-1 82号住居址
 - 2 84号住居址(西から)

- 3 84号住居址カマド
- 図版 42-1 85号住居址 (西から)
- 2 86号住居址
- 3 86号住居址カマド断面
- 図版 43-1 88号住居址 (西から)
- 2 88号住居址カマド断面
- 3 89号 (下)・90号 (中)・91号 (上) 住居址 (東から)
- 図版 44-1 89号住居址 (西から)
- 2 90号住居址 (西から)
- 3 91号住居址 (北から)
- 図版 45-1 91号 (上)・93号 (下) 住居址 (北から)
- 2 94号住居址・48号 (上)・49号 (下) 土坑 (北から)
- 3 95号住居址 (西から)
- 図版 46-1 96号住居址 (南から)
- 2 96号住居址 (北から)
- 3 97号住居址 (西から)
- 図版 47-1 99号住居址 (西から)
- 2 99号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 100号 (右)・101号 (左) 住居址 (北から)
- 図版 48-1 100号 (右)・101号 (左) 住居址遺物出土状態
- 2 100号住居址東隅遺物出土状態
- 3 102号住居址 (西から)
- 図版 49-1 103号~107号住居址 (北から)
- 2 103号~107号住居址遺物出土状態 (北から)
- 3 105号住居址和同開功出土状態
- 図版 50-1 109号・101号・109号 (中央)・111号住居址 (西から)
- 2 109号 (中央)・111号 (左) 住居址遺物出土状態
- 3 109号住居址壁跡小孔列
- 図版 51-1 110号住居址 (西から)
- 2 110号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 110号住居址基石出土状態
- 図版 52-1 112号住居址 (西から)
- 2 112号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 113号住居址遺物出土状態 (東から)
- 図版 53-1 113号住居址 (東から)
- 2 115号住居址 (北から)
- 3 115号住居址遺物出土状態 (北から)
- 図版 54-1 116号住居址 (西から)
- 2 116号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 117号住居址 (南から)
- 図版 55-1 119号住居址 (南から)
- 2 120号住居址 (西から)
- 3 120号住居址遺物出土状態 (西から)
- 図版 56-1 121号~131号住居址遺物出土状態 (西から)
- 2 127号住居址 (北から)
- 3 132号・133号住居址 (北から)
- 図版 57-1 134号住居址 (西から)
- 2 134号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 134号住居址遺物出土状態
- 図版 58-1 135号 (中央)・136号 (右下)・137号 (左上) 住居址遺物出土状態 (南から)
- 2 136号住居址号 (東から)
- 3 139号 (上)・148号 (下) 住居址・57号 (下)・58号 (上) 土坑
- 図版 59-1 138号住居址 (西から)
- 2 138号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 138号住居址鉄鏝出土状態 (西から)
- 図版 60-1 141号住居址遺物出土状態 (西から)
- 2 141号 (上)・142号 (下) 住居址 (東から)
- 3 143号住居址 (西から)
- 図版 61-1 144号住居址 (東から)

- 2 145号住居址 (南から)
- 3 138号 (中央)・149号 (左)・150号 (右) 住居址 (東から)
- 図版 62-1 149号 (左)・150号住居址遺物出土状態 (東から)
- 2 120号 (左)・153号 (右) 住居址 (北から)
- 3 153号住居址野蔵穴付近遺物出土状態 (東から)
- 図版 63-1 156号住居址 (東から)
- 2 159号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 159号住居址カマド残存状態 (西から)
- 図版 64-1 164号住居址 (西から)
- 2 159号 (左上)・163号住居址 (西から)
- 3 3区南半 (136号住居址付近から南を望む)
- 図版 65-1 166号住居址 (北から)
- 2 168号住居址 (西から)
- 3 169号住居址 (西から)
- 図版 66-1 170号住居址 (北から)
- 2 171号住居址 (西から)
- 3 173号住居址 (西から)
- 図版 67-1 178号住居址 (東から)
- 2 181号住居址 (西から)
- 3 181号住居址野蔵穴遺物出土状態
- 図版 68-1 182号住居址 (西から)
- 2 184号住居址 (西から)
- 3 185号住居址 (北から)
- 図版 69-1 186号住居址 (南から)
- 2 187号住居址 (西から)
- 3 188号住居址 (西から)
- 図版 70-1 194号住居址 (西から)
- 2 195号住居址 (西から)
- 3 196号住居址 (西から)
- 図版 71-1 197号住居址遺物出土状態 (西から)
- 2 200号住居址 (西から)
- 3 201号 (上)・4区31号 (下) 住居址 (西から)
- 図版 72-1 202号 (上)・201号 (中)・4区31号 (下) 住居址 (西から)
- 2 209号住居址 (北から)
- 3 210号住居址 (北から)
- 図版 73-1 214号住居址 (西から)
- 2 215号 (上)・220号 (下) 住居址 (北西から)
- 3 219号住居址 (北から)
- 図版 74-1 221号住居址 (西から)
- 2 229号住居址 (西から)
- 3 230号住居址 (西から)
- 図版 75-1 87号 (左下)・108号 (右下)・230号 (上) 住居址
- 2 231号住居址 (西から)
- 3 232号住居址 (西から)
- 図版 76-1 248号住居址 (西から)
- 2 248号住居址カマド遺物出土状態
- 3 250号住居址 (西から)
- 図版 77-1 253号住居址 (西から)
- 2 253号住居址カマド遺物出土状態
- 3 257号住居址 (西から)
- 図版 78-1 258号住居址 (北西から)
- 2 259号 (左)・261号住居址 (北西から)
- 3 262号住居址 (北西から)
- 図版 79-1 3区1号・2号住居址 (西から)
- 2 3区1号住居址遺物出土状態
- 3 3区2号住居址 (西から)
- 図版 80-1 3区2号住居址カマド残存状態
- 2 3区4号住居址遺物出土状態 (西から)
- 3 3区4号住居址カマド遺物出土状態 (西から)

- 図版 81-1 3区5号住居址(西から)
- 2 3区5号住居址貯蔵穴付近遺物出土状態
- 3 3区7号住居址(西から)
- 図版 82-1 3区7号住居址カマド残存状態
- 2 3区8号住居址・3区3号溝(北西から)
- 3 3区8号住居址貯蔵穴遺物出土状態
- 図版 83-1 3区9号・10号・12号住居址(南から)
- 2 3区9号住居址カマド残存状態
- 3 3区10号住居址カマド残存状態
- 図版 84-1 4区6号・7号・8号住居址(南から)
- 2 4区10号・11号・14号・15号住居址(北から)
- 3 3区1号~7号・4区28号住居址(北から)
- 図版 85-1 4区2号住居址(西から)
- 2 4区3号住居址(南から)
- 3 4区4号住居址遺物出土状態
- 図版 85-1 4区6号・7号・8号住居址(南から)
- 2 4区7号住居址カマド
- 3 4区9号住居址(南東から)
- 図版 87-1 4区10号・11号・14号住居址(北西から)
- 2 4区10号住居址
- 3 4区11号住居址
- 図版 88-1 4区12号住居址(南から)
- 2 4区14号住居址
- 3 4区14号住居址遺物出土状態(1)
- 図版 89-1 4区14号住居址遺物出土状態(2)
- 2 4区15号住居址(北から)
- 3 4区16号住居址(北から)
- 図版 90-1 4区17号・18号・19号住居址(南から)
- 2 4区18号・19号住居址遺物出土状態(南から)
- 3 4区18号住居址遺物出土状態
- 図版 91-1 4区18号住居址遺物出土状態
- 2 4区22号住居址(西から)
- 3 4区22号住居址カマド残存状態
- 図版 92-1 4区23号住居址(北から)
- 2 4区25号住居址(北から)
- 3 4区26号・27号・29号・30号・31号住居址(西から)
- 図版 93-1 4区26号住居址遺物出土状態
- 2 4区27号住居址(西から)
- 3 4区27号住居址カマド残存状態
- 図版 94-1 4区28号(左)・3区3号(右)住居址
- 2 4区28号住居址カマド・貯蔵穴(西から)
- 3 4区28号住居址遺物出土状態
- 図版 95-1 2次調査区全景(南から)
- 2 3区全景(北から)
- 図版 96-1 1号~5号掘立柱建物(北から)
- 2 1号~3号掘立柱建物(北から)
- 3 1号掘立柱建物
- 図版 97-1 2号掘立柱建物(北から)
- 2 3号掘立柱建物(南から)
- 3 4号掘立柱建物(西から)
- 図版 98-1 5号掘立柱建物(西から)
- 2 6号掘立柱建物(北西から)
- 3 7号掘立柱建物(南から)
- 図版 99-1 7号掘立柱建物(西から)
- 2 7号掘立柱建物(南から)
- 3 8号掘立柱建物(南から)
- 図版100-1 1号井戸
- 2 2号井戸(北から)
- 3 2号井戸(断面)

- 図版101-1 3号井戸
 2 3号井戸・246号住居址 (南から)
 3 3号井戸付近金銀 (北から)
- 図版102-1 C水田北半部 (南から)
 2 C水田 (西から)
- 図版103-1 C水田の畦畔と8号溝 (南から)
 2 8号溝 (側道 西から)
 3 C水田 (側道中央部 北西から)
- 図版104-1 8号溝 (東から)
 2 8号溝断面
 3 C水田畦畔断面
- 図版105-1 C水田畦畔列 (東から)
 2 C水田畦畔列
 3 C水田畦畔
- 図版106-1 C水田下11号・12号溝 (北から)
 2 C水田下遺物出土状態
 3 C水田下遺物出土状態
- 図版107-1 FA水田北半部 (南から)
 2 FA水田南半部 (北から)
- 図版108-1 FA水田 (手前) とC水田 (奥) (北から)
 2 FA水田の冠水状態 (北から)
 3 FA水田大畦と小区画 (南から)
- 図版109-1 FA水田の畦畔と水口
 2 FA水田の冠水状態
 3 8号溝とC水田区画 (北から)
- 図版110-1 FA水田の畦畔と足跡
 2 FA水田中足跡の拡大
 3 FA水田調査風景
- 図版111-1 FA水田 (側道 南西から)
 2 FA水田 (側道 北西から)
 3 FA水田 (側道 北西から)
- 図版112-1 3区畠址 (北東から)
 2 3区畠址 (北東から)
 3 2区畠址 (北から)
- 図版113-1 1号溝 (南西から)
 2 2号溝 (北西から)
 3 3号溝 (北東から)
 4 4号溝 (西から)
- 図版114-1 5号溝 (東から)
 2 6号溝 (東から)
 3 7号溝 (東から)
 4 13号溝 (北東から)
- 図版115-1 4号溝断面
 2 14号溝 (東から)
 3 16号溝 (東南から)
- 図版116-1 26号溝 (北から)
 2 28号溝 (北から)
 3 4号 (右)・36号 (左) 溝 (北から)
- 図版117-1 36号溝 (南から)
 2 39号溝 (西から)
 3 40号溝 (南から)
- 図版118-1 24号溝 (西から)
 2 34号溝 (南西から)
 3 37号溝 (西から)
- 図版119-1 1号方形周溝墓 (南から)
 2 1号方形周溝墓 (南から)
 3 1号方形周溝墓前方部 (北から)
- 図版120-1 1号方形周溝墓土層断面
 2 1号方形周溝墓土層断面

	3	1号方形周溝墓北東隅C軽石上出土土器群
図版121-1	1	1号土坑
	2	7号土坑
	3	11号(左)・12号(右)土坑
図版122-1	1	13号土坑
	2	30号(左)・31号(右)土坑
	3	50号土坑(西から)
図版123-1	1	36号土坑
	2	36号土坑
	3	69号(左)・70号(右)土坑(南から)
図版124-1	1	123号土坑
	2	151号土坑(南から 弥生時代)
	3	152号(中央)・153号(左上)・154号(左下)土坑(南から)
図版125-1	1	155号土坑(南から 縄文時代)
	2	158号土坑(西から)
	3	205号土坑(西から)
図版126-1	1	192号土坑(南から)
	2	192号土坑馬歯出土状態
	3	192号土坑付近全景(南から)
図版127-1	1	199号土坑緑釉出土状態(西から)
	2	199号土坑緑釉段皿出土状態
	3	205号土坑遺物出土状態(西から)
図版128-1	1	1号竪穴状遺構
	2	3号竪穴状遺構
	3	4号竪穴状遺構
図版129-1	1	5号竪穴状遺構
	2	5号竪穴状遺構
	3	6号竪穴状遺構

表 目 次

第1表	熊野堂遺跡II地区住居址一覧表	281
第2表	熊野堂遺跡II地区掘立柱建物址一覧表(以下 第2分冊)	311
第3表	古墳時代C水田計画表	343
第4表	古墳時代FA水田計画表	344
第5表	熊野堂遺跡II地区溝一覧表	349
第6表	熊野堂遺跡II地区土坑一覧表	358
第7表	熊野堂遺跡竪穴状遺構一覧表	371

第1章 発掘調査に至る経過と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過

1 上越新幹線建設と埋蔵文化財の保護

わが国で最初の高速公共大量輸送機関となった東海道新幹線が開通したのは東京オリンピック大会が開かれた昭和39（1964）年10月のことである。その後、昭和44年5月には東名高速道が全通して、高速自動車時代を迎え、翌45年3月からは大阪で万国博覧会が開かれた。

東京と新潟を結ぶ上越新幹線の基本計画が発表になったのは昭和46年1月であり、同年4月には、整備計画が発表された。そして同年10月14日、日本鉄道建設公団（以下鉄建公団と略称）は二十万分之一の地図で、沿線ルートを公表、それによると、群馬県下は南が藤岡市から北の利根郡水上町まで、3市3町4村を通過、県内の延長は約71kmの65％がトンネルといわれ、駅は高崎と上毛高原駅（仮称）を予定していた。この46年には県内で、関越高速自動車道と国道17号線の大型バイパスとしての上武国道の路線も決まりよいよ本県での三幹線時代を迎えることになった。

昭和47年5月、鉄建公団東京新幹線建設局は群馬県当局（企画部幹線交通対策室、47年11月から幹線交通課、53年から交通対策課）に対し、新幹線関連の公共事業の調査を照会してきた。県は直ちに文化財調査に関して群馬県教育委員会に照会、県教委では、この年4月に発足していた文化財保護室で分布調査を実施した。その結果を同年7月に県を通じて鉄建公団へ提出し、以後は県教委と鉄建公団との間で具体的な折衝が進められることになった。

分布調査の結果マークされた埋蔵文化財包蔵地は93カ所に達したが、直接路線用地にかかわるのは22カ所であることが確認され、これについては工事着工前に、原則として記録保存を前提にした発掘調査を行うこととし、昭和47年度末までの間に鉄建公団と県教委との間で事務的な折衝が続けられた。

2 群馬県内での発掘調査開始

昭和48年度に入り、4月1日付けで群馬県教育委員会は事務局の文化財保護室（定員10名）を文化財保護課（定員30名）に昇格拡充、上越新幹線・関越自動車道・上武国道のいわゆる三幹線地域における埋蔵文化財保護対策の体制を整えると共に、鉄建公団との間で「上越新幹線に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」（全体契約）と、併せて「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」（年度契約）を締結した。この協定書により、昭和48年度を第1年次とし、以後昭和57年度の第10年次まで、発掘調査が実施され、その後今日までその整理・報告書づくり（昭和62年度から委託者が東日本旅客鉄道株式会社に変更）が継続されてきたのである。

群馬県内における上越新幹線建設地域の最初の発掘調査は、昭和48年5月、上越国境も近い利根郡月夜野町内で始まった。中山トンネル北側の月夜野町大字上津の十二原遺跡である。この遺跡は比較的小規模だったこともあって順調に進み、同年8月には、すぐ北側の大原遺跡にも着手することができた。この年、上越新幹線工事は県下14カ所で一斉に開始されている。

現地における発掘調査は、まず用地の確保と調査担当者・補助者・人夫等の人的体制や器材等の準

備を含めた調査体制の整備ということが前提になる。鉄建公団側による用地買収が終了した個所については問題を生じないが、未買収の段階での調査入りの場合には地権者や地権者会側との事前折衝から始まり、諸条件の整備に多くの時間と労力を費す結果となった。県教委としても、従来全く経験したことのない大規模なプロジェクト事業を行うこととなったため、試行錯誤的な経過により対応を迫られるという大きな試練の連続であった。

3 高崎市市内での発掘調査開始

上越新幹線地域にかかわる発掘調査の全体年度計画や、各遺跡ごとの個別計画については、鉄建公団用地課と群馬県教委文化財保護課とによる定例協議の席で行うことを原則とし、県当局（幹線交通課）にも可能な限り立会いを求め、県側や市町村情勢についての提供を受けることとした。

上越新幹線建設ルートで県内で最も広い面積をかかえる高崎市では各農協を単位に地権者会が組織され、昭和47年5月には高崎地区上越新幹線対策連合会が結成されていた。昭和48年7月16日には、高崎駅北方の飯塚町などを管下にもつ塚沢農協の関係者が、月夜野町内において既に始まっていた文化財調査の実情や地権者会の鉄建公団への対応について現地調査をしたとの情報もあった。

昭和48年9月18日の定例協議では、高崎市内の国道17号（高前バイパス）をはさむ飯塚町から下小島町（現在緑町）内における延長670mのうち既買収地170mの区域についてはすぐにも調査可能だが、残りの区域については10月中旬の秋の収穫後には可能ではないかとの見通しが出てきて、1班による体制準備の要請があった。そこで10月に入り、調査担当者を決めると共に諸準備を始め、10月22日、下小島遺跡の南部間屋町側の既買収地内での調査に着手した。

昭和48年秋の収穫期後、11月から12月にかけて、高前バイパス北側の下小島町内と、井野川をはさんだ大八木町内における地権者会の動きが相互に連動して急展開をみせた。すなわちまず下小島町では、11月26日と12月27日の2回、下小島町公民館で開催された地権者会の席上、鉄建公団・高崎市・県教委が出席し、文化財調査の目的や方法について説明し、理解と協力を求めた。現段階では用地が未買収のため借地用式によることとし、また調査期間中は農作物の栽培、収穫もできないことから補償についても併せて考えることとして了解を得た。また大八木町内についても12月5日と22日、さらに翌49年1月11日の3回にわたる中川農協での地権者会において交渉を行い、了解に達した。なお12月5日には、鉄建公団と県教委との間で、高崎市市内における用地をめぐる情勢と今後の対応について詳細にわたる折衝を行っている。

このように地元との折衝が着落したことにより1月27日から29日にかけて、下小島町（区画整理地域は昭和55年に緑町と町名変更）から大八木町内の延長約1.7kmについて、路線用地の幅くい打ちを行い、さらに2月4・5日には官民境界立会いの後、一筆測量に着手した。

その後、3月12日における県教委と鉄建公団との定例協議で、(1)月夜野町内にあって最大の事業面積をもつ上毛高原駅周辺の調査入りは早くも7月頃になるとみられること(2)新年度の4月からは高崎市市内の大八木町内入りを本格的に検討する段階にあることが明らかになり、同月20日にはこれを確認した。

前年10月から調査を続けていた下小島遺跡は、平安時代の水田遺構や地割の検出という大きな成果をあげ、それ以後の高崎周辺における古代水田遺構調査の端緒となった。調査は48年度内の3月末ま

では終了せず、49年4月15日になってようやく埋てん作業を終了することができた。

4 大八木町内の融通寺・熊野堂遺跡の調査開始

高崎市北方の大八木町内の遺跡は主要地方道高崎渋川線と井野川右岸との間にひろがる融通寺遺跡と、井野川左岸の熊野堂遺跡（第Ⅱ地区）との二箇所が上越新幹線建設ルートにかかわっていた。

このうちまず融通寺遺跡については、前述の下小島遺跡の終了をまって、昭和49年4月15日に開始されたが、下小島町内の調査と同じく人夫の調達には極めて苦慮した。都市とその周辺にあつては遊休人口はほとんどなく、県教委のそれまでの調査に参加していた群馬郡榛名町や、高崎市栗原町・八幡原町の方々に応援を求めたり、春季・夏季・冬季休み中の学生アルバイトの雇用など関係者の努力が潜在的に続けられたものの、根本的な打開策とはならず調査期間の長期化の要因となった。

昭和49年6月18日実施の定例協議で、月夜野町・群馬町・高崎市内など、ほぼ全県下における全般的情勢の検討がなされた。その結果、(1)月夜野町内の上毛高原駅周辺の調査は、現地における用地交渉が進展せず、今年度内の着手は事実上困難であるみとおしであること、(2)従って当初予定していた高崎市大八木町内の融通寺遺跡の調査を7月までという短期間でなく長期的な対応として計画し直すこととし7月以降に上毛高原入りを予定していた1班は融通寺へ投入して2班編成での推進も考慮するという情勢の変化があった。

その後、高崎駅南方の佐野地区でも地権者会の動きがみられた。すなわち8月19日、上佐野町公民館において烏川左岸の上佐野町舟橋遺跡の地権者会が開かれ、文化財調査に関する説明を行い、9月に入って了解に達したことにより、県教委では調査体制の再編成計画をたて、月夜野町大原遺跡の2次調査終了を待って11月から上佐野町舟橋遺跡の調査が始められた。

熊野堂遺跡の調査入りは、昭和49年の夏以後、本格的に検討された。井野川を渡る架橋工事の着手という工事計画もあり、既に調査入りしていた井野川右岸の融通寺遺跡だけでなく、左岸の熊野堂遺跡も早急にとという方針の鉄建側の意思には、県下市町村のうち最も用地交渉が難航していた群馬町に隣接していた地域でもあるという側面もあったと思われる。また大八木町内における全面的な調査の開始には、借地の開始時期の共通性という現地における対地権者対策事情ともからんで、鉄建側からの強い要望は熊野堂地区でも早急な調査着手を検討されたいということであった。

しかし、県教委側としては、限られた調査体制、つまり上越新幹線地域全体で6人という職員体制の中で、しかも長期にわたる調査の関係上複数人員の配置が基本であることと、計画的にみとおしをもって進行することとしていたため編成にはいつも苦慮を強いられていた。そうした事情と現地での農作業、つまり秋蚕に使う桑の樹を切ってからという要望に依り、熊野堂遺跡Ⅱ地区の開始は昭和49年9月9日であった。地元大八木町地権者会の須藤英男氏には終始大変お世話になった。

1次調査は、以後50年3月28日まで実施されたが、他の調査地域との関係からしばらく中断され、2次調査は53年1月17日から3月25日まで、3次調査は53年4月10日から54年3月27日、4次は同54年4月9日から9月14日、5次を57年1月18日から3月31日、そして最後に残った側道部分は上越新幹線の開業（昭和57年11月15日）直前の57年4月1日から9月6日まで実施し、前後9年に及ぶ文字通り長期にわたる発掘調査を終了したのである。

（森田秀策）

第2節 遺跡の立地と周辺の遺跡

1 遺跡の位置

熊野堂遺跡は、群馬県高崎市大八木町字熊野堂・字下熊野平と、これに接する群馬郡群馬町井出字東下井出、群馬町福島字熊野堂にかけて所在する。遺跡は、高崎市街地の北北西に位置しており、高崎駅から約4.5kmの距離である。また県道柏木沢・高崎線が遺跡のほぼ中央を東西に通っているが、遺跡はこの道路が県道高崎・箕郷線と交叉する地点の東側で、ちょうど井野川の左岸にあたる。

2 遺跡の立地

関東平野の北西最奥部に接して、那須火山帯に属する海拔1,449mの榛名山（第四紀成層火山）がある。榛名山東南麓⁽¹⁾には、相馬ヶ原扇状地とも呼ばれる山麓扇状地が広がっているが、熊野堂遺跡はこの山麓扇状地と前橋台地との境界は、明確には捉えられないものの、2千5百分の1都市計画図によると本遺跡を含めて北側は、以南に比して等高線の間隔がやや狭くなっていることに気付く。それは、海拔110m付近を境としており、熊野堂遺跡は榛名山山麓扇状地から前橋台地へのまさに変換点に位置しているといえる。

前橋台地には、東から牛池川・染谷川・唐沢川・井野川・榛名白川などの中小河川が東南方向へと流れている。いずれも榛名山山麓扇状地から伏流水を集めて前橋台地に至っており、前橋台地上では台地表面の沖積化が進んでいる。これらの中小河川は、いずれも前橋台地の南方で烏川に合流しているが、かつては井野川や榛名白川は前橋台地内でたびたび氾濫し、付近の田畑に被害を及ぼすことも少なくはなかった。

熊野堂遺跡周辺は、山麓扇状地と前橋台地との変換点付近に位置していることから、地下水位が高い。現在では工業用水の汲み上げ等によって湧水は殆どみられなくなったが、江戸時代においては、井出集落付近には湧水が各所に所在しており、また集落の井戸も非常に浅かったという。

熊野堂遺跡は、弥生時代から平安時代にかけての遺構が主体を占めているが、第I地区から発見されたこの時代の井戸が極めて浅い（弥生時代後期約1.0m、古墳時代後期約1.5m、平安時代～2.5m）という状態からすると、当時においてはさらに地下水位が高く、台地末端付近からの湧水も豊富であったと推定される。

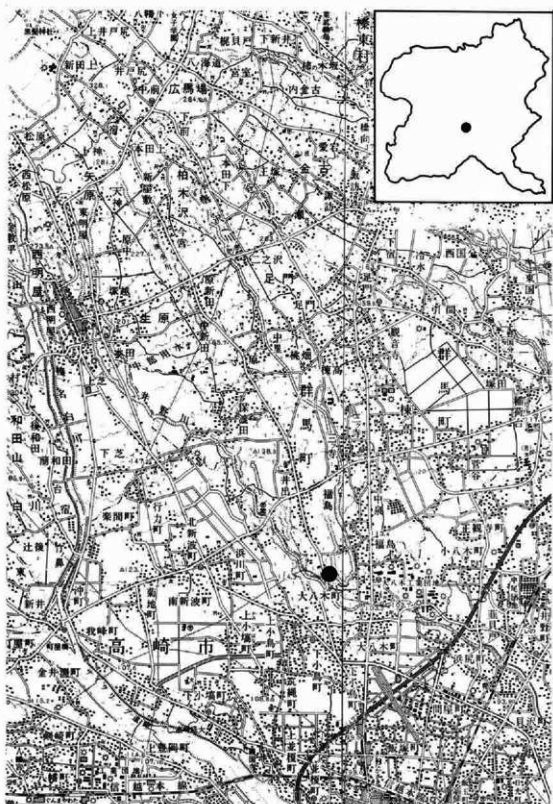
井野川中流域（ここでいう中流域とは、群馬町保渡田付近から高崎市大八木町付近までの約3km）においては、本遺跡をはじめ同道遺跡⁽³⁾・御布呂遺跡⁽⁴⁾・芦田貝戸遺跡⁽⁵⁾等において浅間C軽石層下の古墳時代初頭から平安時代に至る水田址が発見されている。これらの水田址は、井野川の流路に沿って両岸に周囲より約1mほど下がったテラス状地形部分に存在している。このテラス状地形は、幅50～200mで、井野川流路に沿って両岸に約3kmほど続いているが、井野川の現流路面より4～5m高いという特徴がある。2千5百分の1都市計画図で検討すると、井野川右岸テラス状部分の外側には、高さ50cm～1m、幅100～200mの自然堤防を認めることが出来る。この自然堤防は、群馬町保渡部落南方、東谷川と分流する付近に始まり、井野川が東へ向きを変える高崎市大八木町付近では幅約500mとなり、それより下流では不明瞭となっている。この事実は、井野川中流域両岸に存在するテラス状地形は、井野川のかつての氾濫原であったことを示しており、各遺跡の水田下に存在する粘質土からこれを裏

づけることが出来る。

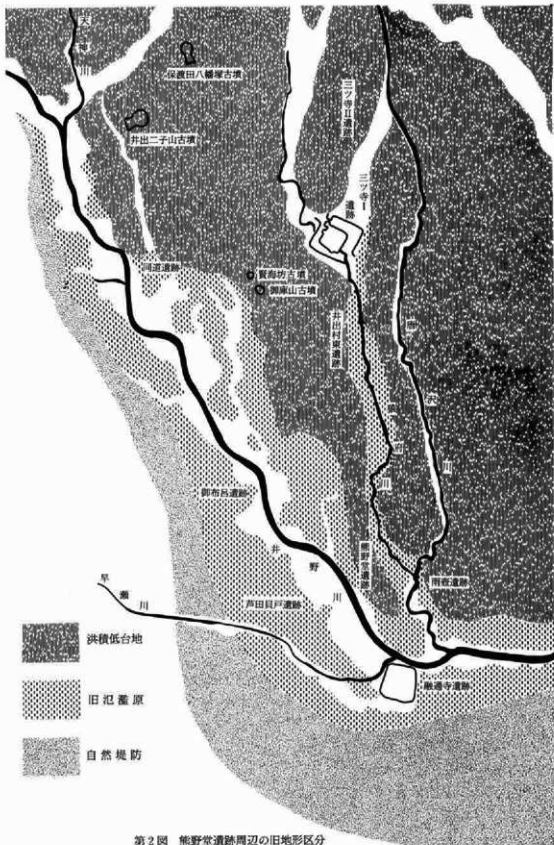
井野川中流域のテラス状地形の成因については、本遺跡の調査結果により判明している。すなわち第Ⅰ地区においては、Ⅰ地区南端の古墳時代後期住居群の存在する部分を除いて、それより北側の新幹線本線から西側道にかけては、地形が緩やかに西側へと傾斜している。この緩やかに傾斜する部分については、地山にローム層が存在するものの、西側に近づくに従いロームが粘質化し白っぽくなっている。また浅間C軽石層下に堆積する黒褐色土についても、本線から西側道部分においては粒子が細かく粘性が非常に強くなっており、斑状・管状の斑文がみられる部分が多くなっている。このことは浅間C軽石層下の黒褐色土形成の段階で、この部分は湿地帯となったことを示している。この湿地帯となった部分は、井野川の両岸に帯状に広がるテラス状地形の末端に位置しており、本遺跡第Ⅰ地区の浅間C軽石層下の黒褐色粘質土は、井野川中流域で発見されている浅間C軽石層下水田址の粘質土に対応するものであることがわかる。

本遺跡第Ⅰ地区において、浅間C軽石降下以前に湿地帯となった部分には、縄文時代前期住居が存在する。しかし弥生時代後期に、この黒褐色粘質土の上面近くから切り込んで住居・井戸・土坑・溝等が造られるまでの間には、何の遺構も造られていない。黒褐色粘質土中には、縄文時代中期の土器片が多く含まれているが、それはこの間に水位が上昇し湿地帯となったために、より高い部分から廃棄されたものと考えられる。本遺跡第Ⅰ地区の浅間C軽石層下の堆積土の状態と、そこに造られた遺構の在り方からは、縄文時代前期住居が廃棄され、弥生時代後期住居群が造られるまでの間に、井野川河床の上昇および下降がおこなわれたことが推定出来るのであるが、それは本遺跡第Ⅱ地区の水田下より発見された井野川の旧河床からも推定できる。なお井野川旧河床の存在する部分は、現地表面においてもやや凹んでおり、この凹みは東側に帯状に続く。また帯状の部分をも東に延長していくと井野川の現流路に重なってくる。

現在の井野川河床は、井野川中流域の両岸に広がるテラス状地形より約5m低くなっている。しかし本遺跡第Ⅱ地区の水田址下方から発見された井野川⁽⁶⁾旧河床は、海拔104.5mであり、西方50mを流れる現井野川河床が海拔101.5mなので、井野川旧河床は現在の河床よりも3m高かったことになる。井野川両岸のテラス状地形に存在する同遺跡・御布呂遺跡・芦田貝戸遺跡の現地表面は、それぞれ付近の井野川河床より約5m上方であるが、テラス状地形の存在する付近の井野川河床が現在よりも3m高かったとして考えると、井野川旧河床と浅間C軽石直下の粘質土との関係は次のようになる。最も上流に位置する同遺跡では、地表下約1mに浅間C軽石が堆積しているので、井野川旧河床よりも浅間C軽石直下の粘質土の方が約1m上方となる。また御布呂遺跡および芦田貝戸遺跡では、浅間C軽石がそれぞれ地表下2mと2.5mに堆積しているので、井野川旧河床と殆ど同レベルか若干井野川旧河床の方が高いということになる。なお本遺跡第Ⅰ地区の遺構の状況から、井野川の水位が最も高くなった時期は、縄文時代前期末～弥生時代中期の間と考えられるので(第Ⅱ地区水田址下の旧河道においては、河床上の埋没土より縄文時代中期加曾利E式期の土器片が複数発見されているので、これに近い時期であった可能性もある)、井野川が熊野堂遺跡の旧河道を流れていた時期のテラス状地形部分は、古墳時代初頭の浅間C軽石降下面よりさらに低かったことが当然考えられる。つまり熊野堂遺跡を流れていた当時の井野川河床は、浅間C軽石が地表下2～2.5mに堆積する御布呂遺跡・芦田貝戸遺



第1図 熊野堂遺跡位置図1/5万「標名山・前橋」使用



第2図 熊野堂遺跡周辺の旧地形区分

跡付近では、当時の地表面よりも河床の方が高かった可能性が考えられるのである。

かつて熊野堂遺跡の水田下を流れていた旧井野川は、現在の位置に流路を変えた。それはおそらく旧井野川が周囲よりも河床の高い天井川となったことによるものと考えられる。しかし一旦流路を変えた井野川は、下向侵食を開始し、現在までに河床を約3mほど降下させた。それに加えてかつての氾濫原上には、数回にわたって火山噴出物が堆積し、見かけ上の台地状地形が形成されたのであろう。ところで、流路を変えた井野川は下向侵食を開始するが、それは弥生時代以降も続いていたらしい。本遺跡第Ⅰ地区弥生時代後期の井戸は、ローム上面からの深さが1.0m前後であるが、古墳時代後期では1.5m前後となり、平安時代頃では2～2.5m前後となる。このことは、本遺跡の比較的古い段階では地下水位がかなり高かったことを示しており、このことは井野川中流域における灌漑用水の問題、ひいては初期農耕集落の問題を考える上で見逃すことの出来ない点である。

熊野堂遺跡の東側には猿府川が流れている。猿府川は第Ⅱ地区の東側で、さらに東を流れる唐沢川に合流して唐沢川となり井野川に注いでいるが、この猿府川を合流した唐沢川にも両岸にテラス状地形が存在する。このテラス状地形は、井野川との合流点から続き、北側は三ツ寺Ⅰ遺跡古墳時代豪族居館址の付近まで続いている。猿府および唐沢川のテラス状地形は、井野川流路の上流にあたるので、井野川のテラス状地形と一連のものと考えられる。なお唐沢川のテラス状地形部分にあたる本遺跡第Ⅲ地区東側部分（右岸）や雨壺遺跡西側部分（左岸）においては、ローム漸移層直上は粘質土となっており、本遺跡第Ⅰ地区と同様に井野川の河床上昇と関連するものであることがわかる。

熊野堂遺跡は、井野川と猿府・唐沢川に挟まれた洪積微高地と、かつての氾濫原よりなる。洪積微高地部分は南北に約600m続き、北端では海拔115mであるが、南端では海拔108mとなっている。したがって微高地部分の勾配は約1000分の12となる。テラス状地形を呈するかつての氾濫原は、北側を除く洪積微高地の周囲に存在しているが、洪積微高地よりも50cm～2m低くなっており、第Ⅱ地区南端や第Ⅲ地区西端のように、低い部分では水田が確認されている。

3 周辺の遺跡

熊野堂遺跡では、縄文時代から中世にわたる遺構が発見されている。ここではこの時代に限定して本遺跡と関連づけながら周辺の遺跡をみていきたい。

縄文時代

調査された縄文時代の遺跡は比較的少ない。前期の遺構として、本遺跡第Ⅰ地区からは諸磯Ⅱ式期の住居址1軒が発見されている。また本遺跡の北側約2kmに位置する三ツ寺Ⅱ遺跡からは、黒浜式および諸磯Ⅱ式期の住居址と土坑が検出されており、いずれも沖積地に面した低い洪積台地上に位置している。中期では調査例がやや多い。本遺跡から唐沢川を隔てた雨壺遺跡からは、阿玉台式期の住居址2軒と土坑2基、それに竪穴状遺構2基、また大八木箱田池遺跡では加曾利E式期の住居址2軒と土坑、さらに保渡田Ⅱ遺跡からは加曾利E式期の新段階の敷石住居址が発見された。なお、清里長久保遺跡からも加曾利E式期の住居址10軒が検出されている。中期段階で最も多く遺構が調査されたのは、上野国分僧寺・尼寺中間地域であろう。加曾利E1式期からE4式期に至る住居址27軒があり、また土坑も多く発見されているが、土坑については前期諸磯Ⅱ式期と後期称名寺式期がこれに加わる。中期の遺構の分布は、前期同様に洪積微高地であるが、『群馬町の遺跡』によると、町内の前期遺物

散布地（遺跡）は8箇所であるが、中期になると42箇所と増大している。また中期のうち3分の2以上が加曽利E式期で占めている。この点について鬼形芳夫氏は、榛名山東南麓箕郷町内の遺跡分布調査の結果から、勝坂・阿玉台期の延長線上にある遺跡地が7遺跡地、黒浜・諸磯a期や諸磯b期の遺跡地と重複して散布が認められるものが6遺跡地で、その他は新遺跡地形成によるもので16遺跡地が数えられ、この時期に住居地の拡大が行われたことがうかがえる。

後期の遺跡として、本遺跡から唐沢川を隔てた雨壺遺跡がある。雨壺遺跡からは堀之内式期の住居址1軒が唐沢川に面して一段低くなった部分に存在していた。また正観寺遺跡においては、称名寺式期の敷石住居址が、鳥羽遺跡においては晩期初頭式期の住居址が発見されている。後期の遺跡の特徴として中期においては殆どみられなかった比較的低地に進出するという傾向がみられる。本遺跡周辺における縄文時代の遺跡発掘調査は、最近増えつつあるとはいえ小規模なものであり、集落の在り方や土器様相の検討は今後の課題といえる。

弥生時代

本遺跡周辺における弥生時代の遺跡は多い。しかしその殆どは中期後半から後期にかけてのものである。中期前半の遺跡として、榛名山東南麓の箕郷町中善地や金敷平があり岩櫃山式系の土器が発見されている。しかし本遺跡の周辺ではこの時期の遺跡は現在のところ発見されていない。

中期後半になると、本遺跡をはじめ周辺地域での遺構の検出例がある。この時期の土器は、かつて杉原荘介・乙益重隆両氏が「高崎市附近の弥生式遺跡」（考古学10巻10号）の中で、竜見町および剣崎遺跡出土土器を紹介するにあたり、「弥生式の所謂櫛目式に先行して古式弥生式土器との中間に位するものと考えられ、信濃の栗林・松本城山等に於いても一様式として認められた」とした一群にあたる。なおこの土器群については、竜見町式土器と呼ばれることが多い。ところで、杉原・乙益氏が上記論文中において竜見町式土器という型式を設定したという見解（相京氏、群馬文化）⁽¹⁷⁾がある。しかし杉原・乙益氏の論文中にそのような記述は認められず、誤認かと思われる。また、「竜見町式土器は栗林式の影響のもとに成立・展開した」という見解（平野氏三県シンガ）⁽¹⁸⁾もあるが、現段階においてこのように理解することには無理がある。なぜなら「竜見町式土器」は、栗林式の影響のもとに成立・展開した土器様式なのか、あるいは栗林式そのものであるのか、さらには栗林系土器群の中の竜見町小様式として扱えるべきなのか等については、これまで殆ど論議されておらず、今後の研究課題そのものだからである。したがって現段階では、杉原荘介氏が栗林式系統と称していることから、栗林系土器としておくのが妥当であろう。

栗林系土器を出土した遺跡として、本遺跡第II地区をはじめ唐沢川を隔てた雨壺遺跡（住居址1軒）がある。また住居址7軒、溝2条、土坑5基が調査された浜尻遺跡は、本遺跡から約1.5km井野川下流で、標高98～99mの舌状に張り出した微高地の縁辺に存在していた。また距離はやや離れたが、清里庚申塚遺跡⁽¹⁹⁾では21軒の住居址が発見されたが、V字溝に囲まれた環濠集落となっている。さらに新保遺跡⁽²⁰⁾では、8軒の住居址と大溝があり、大溝の面からは木製品が出土している。中期後半時期の調査例は後期に比べると少なく、集落の在り方や土器様相の解明はこれからの課題である。

後期に入ると遺跡数は増大する。この時期の土器は、樽式土器と呼ばれており、本遺跡でも36軒が調査されている。樽式期の遺構が検出された付近の遺跡として、雨壺遺跡・井出村東遺跡・菅谷遺跡・

諸口遺跡・正観寺遺跡・井野遺跡・日高遺跡・新保遺跡・等非常に多い。なかでも日高遺跡や新保遺跡からは住居に近い同一台地上に方形周溝墓が造られているが、新保遺跡においては主体部として複数の壺棺・長方形土坑が確認されている。

日高遺跡においては、水田址が発見されている。集落が存在する低台地下の狭い谷水田であるが、渡り木とともに古墳時代初頭（4世紀中葉頃）に降下したとされる浅間C軽石層が上面を覆っていた。報告書によれば、「弥生水田は廃棄からC軽石の降下まで100年前後の時間帯が経過したにもかかわらず、その間水田の畔や面の一部に流出が生じているものの堆積は微弱であった」という。日高遺跡周辺の冬は寒く風も強い。夜には霜柱が立ち日中には溶け、畔の表面を崩落させる。毎日がこれの繰り返しとなる。強風によって運ばれた台地上の土は、谷地地形部分に堆積する。100年間も原形をあまり損なわずに畔が残るというようなことが現実であり得るであろうか。弥生水田と認定する上で最も重要と考えられるこの点について、報告書には説明されていないが、まずこの説明が必要ではないか。

弥生時代後期遺跡の殆どは、中期後半の粟林系土器を出土する遺跡と同様に、沖積地に面した微高地上に存在している。最近では新保遺跡のように、初頭から終末まで続く遺跡も調査されており、遺構・遺物の変遷を踏まえた今後の研究の進展が期待される。

古墳時代

古墳時代の遺跡は非常に多い。本遺跡からは浅間C軽石降下直前の住居址や水田址・畠址・周溝墓が発見されているが、この時期の遺跡は井野川流域には多い。浅間C軽石層下から発見された新保遺跡141号住居址や本遺跡第I地区のS字状口縁台付壺は、浅間C軽石降下直前に築造された貝沢柳町遺跡1号方形周溝墓出土のバレススタイル壺形土器とともに東海地方西部の元屋敷式古段階の様相をもっている。貝沢柳町遺跡出土のバレススタイル壺形土器と同段階の土器は、長野県松本市弘法山古墳からも出土しており、浅間C軽石の降下は4世紀前半代である可能性が強い。

古式土師器を出土する前期の遺跡として、雨瀬遺跡（住居址2軒）、大八木遺跡（水田址）、芦田貝戸遺跡（水田址）、間道遺跡（水田址）、鈴の宮遺跡（周溝墓4基）、上大類北宅地遺跡（周溝墓1基）、貝沢柳町遺跡（方形周溝墓4基）、元島名遺跡（周溝墓4基）など非常に多い。住居立地の特徴としては、本遺跡第III地区9号住居址のように古段階のものについては、後期弥生集落と同一台地かその付近である場合が多く、この時期の後半期には弥生集落の希薄なさらに南方の沖積地へと集落が拡散していく。本遺跡第II地区の前方後方形周溝墓は、浅間C軽石降下前の築造であり、群馬県内の同種遺構の中では現在のところ最も古い。また本遺跡から約8km井野川下流には全長115mの規模をもつ元島名将軍塚古墳（前方後墳）がある。元島名将軍塚古墳の主体部からは四獣鏡・石剣等が、周堀内からは、古式土師器が出土している。

中期に入ると、特に大型化した前方後円墳が出現する。本遺跡の南々東8kmの烏川流域に存在する浅間山古墳は、全長171mの規模をもつ。しかし5世紀も後半に入ると浅間山古墳のような特におおきな前方後円墳は造られなくなり、全長100m前後の前方後円墳が周辺地域に出現する。本遺跡の北約2kmの保渡田古墳群（二子山110m、八幡塚102m、薬師塚90m）や、南々西2kmの上並榎稲荷山古墳（115m）、また平塚古墳（105m）・不動山古墳（94m）・岩鼻二子山古墳（110m）からは5世紀後半を中心とした時期の棺内副葬品や埴輪が発見されている。これらの古墳はいずれも舟形石棺を主体部として

おり、それは群馬県西部地域の特徴でもある。なかでも保渡田古墳群は、猿府川上流約1kmに存在する三ツ寺I遺跡（5世紀後半の豪族館跡）に関わる豪族の墳墓と考えられており、これらが井野川および猿府川のかつての氾濫原上の水田遺跡を基盤としていることは、第3図によっても明らかである。

三ツ寺I遺跡や保渡田古墳群が成立した5世紀後半は、関東地方において鬼高期とも呼ばれる時期で次の6世紀にかけて、集落が、前代に比してより高所へ、より低地へと進出する時期である。それは、この時期に古墳の分布がより高所へ、より低地へと広がる現象とも対応する。

古墳時代以降

「保渡田古墳群」や三ツ寺I遺跡の古墳時代豪族居館の築造が、この地域での開発史での段階的に発展してきた面期と文字どおり生産力の高さを示すとすると、その一方で同じ6世紀代2度にわたる榛名山二ツ岳の噴火は被害甚大なるがゆえに、復旧という新たなものの胎動と生産域を始めとする集落を取り巻く地域の再編成を余儀なくさせている。地域の拠点であったはずの豪族居館の消長と断絶はその傍証であり、居住域を継続させながらも生産域で水田形成の停止、「畠作」盛行への転換が推定されることは、地域の再編成を7世紀以降へ通ずる変化の前ぶれを意味している。

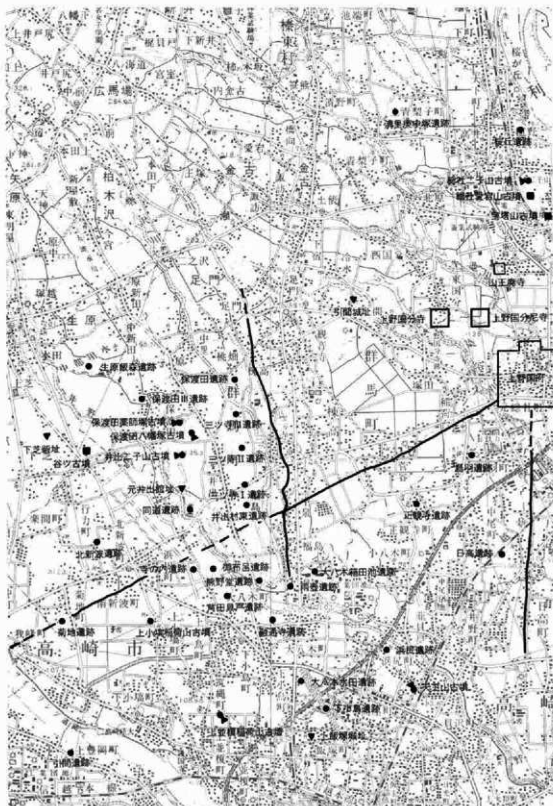
この点に関しては、鬼形芳夫氏らによる遺跡の時代別動態から地域の開発や集落の特徴を解明しようとした「群馬町の遺跡」（群馬町教委 1986）や、同道遺跡の調査、報告以来、この地域の開発史に視点をすえて井野川流域の低地での水田形成と並んで開析台地上での「畠作」盛行を提起する能登健氏の研究¹⁰⁾があり、それに詳しい。

6世紀以降になると、右島和夫氏によると「総社古墳群」の形成により、「前橋台地」でも同古墳群周辺が後に律令政治の中核域へと発展する卓越した地域であるとされ、「保渡田古墳群」から「総社古墳群」への勢力推移が提起されている。反面このことは、古墳時代までが井野川流域といった水系を単位とする地域のまとまりを見るのが多かったのに対して、水系を越えて「前橋台地」といった広範な地域へと統括されたことを意味しよう。例えば、台地上を東西に横断する「推定 東山道」の存在は、前代までの水系に示される縦の基軸を人工の「道」で東西に大きく転換させたものであり、開発の実態が台地上での「畠作」の普及・盛行と密接に関係するものである。

8世紀以降では、「倭名類聚抄」によると本遺跡がある高崎市大八木町、群馬町大字井出は「群馬郡」に属し、律令制度の史実とこの地域との結びつきが推定される。「群馬郡」には次の13の郷名があげられている。「長野 奈加乃、井出、小野 乎乃、八木、上郊 加無佐土、群切 安木利、島名 之万奈、群馬、桃井 毛毛乃井、有馬 安利万、利刈 止加利、駅家、白衣」で、郷名の考証や現在地との比定については尾崎喜左雄氏の論論文の中に詳しい。本遺跡周辺に関する郷としては、現在の地名との関係から「長野、井出、八木、上郊」があげられる。石川正之助氏は、発掘資料である本遺跡の南にある「融通寺遺跡」の概報¹¹⁾の中で、その遺跡周辺を「八木郷」の一部であると推定されている。現状では、考古学での発掘資料と文献史料が直接に結びつく例はないが、郷名と地名の類似を一つのヒントに累積された8世紀以降の発掘された多くの遺構と遺物の分析が地域解明の課題である。中世になると、考古学の発掘で確認し得た11世紀以降空白をもって14世紀以降の「館」が井野川流域に数多く残っている。その大きな背景は、15世紀後半に隆盛期を迎える「長野氏」の擡頭による。「館」の分布を見ると、井野川右岸の榛名山二ツ岳噴火のF P土石流を基盤とする扇状地形上にその多くがあり、扇頂部台地先端部上の箕輪城を拠点とした特徴をもっている。

第2節 註

- 1 橋名山東麓の地形に関しては次の文献を参考とする。
新井朋夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要』自然科学編10巻4号
高山昭雄 1971 「橋名山東・南山麓の地形——とくに軽石流の地形について——」『地理学報告』第36・37合併号
愛知教育大学地理学会
上毛新聞社 1977 「群馬のおいたちをたずねて」下
沢口 宏 1982 「日高遺跡付近の地形」『日高遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 2 本遺跡のある海拔110m付近は前橋台地上にのる相馬ヶ原扇状地の傾斜変換点に相当する。同一地形に占地する高崎市日高遺跡は、この崖面に続く谷淵から広がる谷地を閉鎖した水田が形成されているが、この湧水を水溜とする案内でも初期に属す水田の好例といえる。また、群馬町大字井出は、万葉集、東歌341「伊香保の八尺の塚瀬に立つ虹の瀬ろまでもさ窟をさ窟て水田」にうたわれた、八尺（やさか）の塚瀬（い）にも比定され、井野川流域での大規模な灌漑施設の存在が推定されている。井出の集落を成立から発展まで歴史地理の上で研究したものに次がある。
南雲栄治 1974 「橋名山東麓における井出集落の歴史地理学的研究」群馬県高等学校教育研究会地理部会
- 3 石坂 茂ほか 1983 「阿道遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 神戸聖吾 関口 修 高橋政子 1980 「御布呂遺跡」高崎市文化財調査報告書第18集 高崎市教育委員会
- 5 田村 孝 関口 修 1979 「芦田貝戸遺跡 I」高崎市文化財調査報告書第9集 高崎市教育委員会
田村 孝 小野和之 金井潤子 1980 「芦田貝戸遺跡 II」高崎市文化財調査報告書第19集 高崎市教育委員会
- 6 井野川田河床は昭和57年度の第6次調査で、水田址のある1区25グリッドから2区25グリッドにかけてその一部が確認された。規模は南北の上幅端で約90m、確認した最深部で海拔104.56m前後である。北端は洪積世のシルト質土の上にローム層が堆積しているのに対して、南端はシルト質の上に徐々に黒褐色粘質土が堆積しているのが見られ、地積状態と土層性状を異にする。埋没は縄文時代中期以降に急激に進行を始めたらしく、C水田形成前には凹地形の湿地状態と推定され、極めて短期間である。このことは、集落形成とも密接に関係すると考えられ、後代に継統する弥生時代中期後半が巨変となろう。井野川河床の変化については次の文献がある。
能登 健 1983 「利根川の遷替えと遺跡の立地」『地理』第28巻12号
- 7 坂下 正ほか 1986 「三ツ寺I遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 8 坂井 隆ほか 1984 「熊野堂遺跡 第Ⅱ地区・雨雲遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 9 現在、当事業団で1991年報告書発行にむけて整理中である。概要は当事業団の「年報」1（1982）にある。
- 10 高崎市教育委員会 1983 「大八木箱田遺跡」高崎市文化財調査報告書第44集
- 11 群馬町教育委員会 1982 「昭和56年度埋蔵文化財調査略報 保護田I遺跡 中林遺跡」群馬町埋蔵文化財報告第4集
- 12 相原建史ほか 1986 「清里長久保遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 13 木津博明 板岡正信 1986 「上野国分寺・尼寺中間地域 I」同上
- 14 群馬町教育委員会 1986 「群馬町の遺跡——分布調査から見た地域のうつりかわり——」
- 15 高崎市教育委員会 1982 「正観寺遺跡群 IV」高崎市文化財調査報告書第36集
- 16 市 隆之 1982 「鳥羽II遺跡」『年報』1 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 17 相原建史 1984 「群馬県における地方史研究の動向 考古 弥生時代」『群馬文化』200号記念特集
- 18 平野進一 1986 「電見町式土器の分析について」『東日本における中期後半の弥生土器』群馬県考古学談話会ほか
- 19 相原建史ほか 1981 「清里・庚申塚」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 20 佐藤明人ほか 1986、1988 「新保遺跡 I」『新保遺跡 II』同上
- 21 井出村東遺跡調査会 1983 「井出村東遺跡」
- 22 群馬町教育委員会 1980 「菅谷遺跡発掘調査報告」群馬町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 23 同上 1984 「諸古墳調査概報」同上 第11集
- 24 尾崎喜左雄 1957 「歴史編 上代及び中世の村 天降遺跡について」『中川村誌』
- 25 平野進一ほか 1982 「日高遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 26 高崎市教育委員会 1986 「貝原町遺跡」高崎市文化財調査報告書第74集
- 27 同上 1979 「大八木水田遺跡」同上 第12集
- 28 同上 1978 「鈴の宮遺跡」同上 第4集
- 29 同上 1983 「上大塚北宅地遺跡」同上 第37集
- 30 同上 1979 「元島名遺跡」同上 第6集
- 31 同上 1981 「元島名将軍塚古墳」同上 第22集
- 32 能登 健 1983 「群馬県下における埋没田調査の現状と課題」『群馬県史研究』17号
1986 「里積み集落の研究——集落変遷からみた農耕地の拡大過程とその背景——」『内陸の生活と文化』
- 33 右島和夫 1985 「前橋市総社古墳群の形成過程とその因果」『群馬県史研究』22号
1986 「保護田3古墳について」『三ツ寺I遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 34 尾崎喜左雄 1968 「群馬部」『群馬文化』100号
1968 「さぬ」(佐野)『群馬大学教育学部紀要』第18巻第15号
1968 「上野国郡制成立の一考察」『信濃』第20巻第1号
- 35 石川正之助 1975 「融通寺遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報』I 群馬県教育委員会
1975 「融通寺遺跡」『同上』II 同上
- 36 山崎 一 1971・72 「群馬県古戦場址の研究」上、下 群馬県文化事業振興会



第3図 熊野堂遺跡周辺の主要遺跡



第3節 調査の概要

遺跡名	熊野堂（くまのどう）遺跡
調査地区	第II地区
所在地	群馬県高崎市大八木町字熊野堂・字下熊野平（地番については第3図）
調査主体	1次調査 群馬県教育委員会（文化財保護課） 2次調査 // 3次調査 // 4次調査 // 5次調査 ㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団 6次調査 //
調査期間	1次調査 昭和49年9月9日～昭和50年3月28日 2次調査 昭和53年1月17日～昭和53年3月25日 3次調査 昭和53年4月10日～昭和54年3月27日 4次調査 昭和54年4月9日～昭和54年7月31日 5次調査 昭和57年1月18日～昭和57年3月31日 6次調査 昭和57年4月1日～昭和57年9月6日
調査区域	大宮起点81.64km～82.00km
調査面積	8,800㎡
調査担当・調査員	1次調査 担当者 長谷部達雄 清水和夫 前沢和之 飯塚卓二 調査員 中里吉伸 2次調査 担当者 細野雅男 3次調査 担当者 細野雅男 調査員 石坂 茂 内田憲治 外山政子 茂木由行 4次調査 担当者 細野雅男 調査員 内田憲治 外山政子 宮下万喜子 5次調査 担当者 飯塚卓二 関 晴彦 調査員 外山政子 三浦京子 6次調査 担当者 飯塚卓二 女屋和志雄 井川達雄 調査員 宮下万喜子 新井順二

各次の調査方法と経過・調査遺構概要

1次調査（本線の調査）

調査区域は全長360m（新幹線大宮起点81km640～82km00）、市24mの範囲で、南端を井野川に接し、北へ上るに従ってわずかに東へ緩いカーブをもつ帯状である。調査区の設定は、調査地域の北端に位置する新幹線中心杭82km00から81km797を見通したラインを基準軸とし、北より4区(96m)、3区(102

m)、2区、1区とした。グリットは3m×3mを基本として、基準線に平行する軸をアルファベットで示し、直行する軸を算用数字で表示した。またグリットの呼称はすべて東南隅を基準とした。調査は市松模様掘り進んだが、遺構が調査区域全体に密に広がり、かつ重複していることが判明した結果、12m×24mで遺構確認面まで掘り下げた。土層については、南北基準線セクションを連続させることを原則とし、部分的に住居址の床面構造との関連からローム下の榛名山基盤シルト層まで掘り下げた。3区以南の未調査区では、遺構の範囲の確認と土層調査のため、巾杭に沿って2m×5mの5本の試掘トレンチを入れた。本調査の遺構平面実測は1mのグリットで行い、遺物分布図は平板による方法をとった。

本調査区は昭和49年9月9日から昭和50年3月28日まで実施した。4区北端から3区北側部分の132mを発掘し、第一次調査を終了した。当初の計画では調査区全域を完掘する予定であったが諸所の事情により、未調査区は次回調査に実施することになった。

本調査の初期の段階で遺構が広く重複して分布することが確認でき、その後、住居址、溝状遺構の覆土中の浅間C軽石と榛名山二ツ岳噴出物一降灰層(FP)が問題となった。今回の調査では最終的に49軒の住居址、15基の土坑、4本の溝を検出した。また未調査区については、トレンチによる遺構の広がりをつかむ調査を実施して終了した。

(遺構の概要)

確認できた遺構は住居址49軒、土坑15基、溝4条であった。

住居址は樽式土器を伴うもの8軒、石田川期1軒、和泉期7軒、鬼高期7軒、真間～園分期8軒、時期不明16軒、プラン検出のみ2軒であった。

土坑は円形プラン、不整形プラン、中くびれの楕円形などがあるが、時期を確定できる状態の遺物は出土していない。

溝状遺構も土坑同様に時期を確定できるものはない。

2次調査(本線および西側道の調査)

本調査は昭和49年度の第1次調査に引き続く第2次調査である。調査区は第1次調査(北より4区-96m、3区-102m)を踏襲し、2区(90m)、1区(90m)として、予備調査と本調査とを行った。調査方法については次の点を基準とした。

3m×3mグリットを基本単位とした。グリット設定の基準線は、既設の新幹線用センター杭に準拠し、グリットの表示は基準線に平行する軸をアルファベットで、直行する軸を算用数字で表し、東南隅を基準とした。本遺跡の調査対象区域は上越新幹線大宮起点81km640から81km880までである。

(予備調査)

昭和53年1月より実施し、新幹線工事の都合上、路線地内の西側の地域、巾18m、長さは1区(72m)、2区(90m)、3区(60m)を行った。3m×3mグリットを市松模様掘りに設定し遺構の検出を試み、その結果、住居址、ピット等をほぼ全域に於て検出したため、本調査を要することと決定した。

(遺構の概要)

本調査で検出された遺構は、住居址22軒、土坑5基、溝1条である。住居址は真間期2軒、園分期19軒、不明1軒であり、土坑と溝は時期不明である。

(調査結果の概要)

第1次調査の調査区域は台地で、弥生時代より住居を営んでいたことが確認されている。今回の調査では、谷状地形に榛名山給源の土石流等が堆積し地形を変化させた後、ここに進出し住居を営むようになった過程が明らかにされた。殆どの住居址が砂礫層（榛名山F Aの水成二次堆積層）まで掘り込んでいるので、排水は良好であったろうし、張り床の必要性があったのではなかろうか。

10号住居址以外は、出土遺物が非常に少なく、土師器片と須恵器片がわずかに出土しているのみである。

調査後、上記の本調査区域の表土を排土し、遺構確認を行った結果、重複の著しさが確認され、長期間、住居の営まれていたことが想定できた。

第3次調査（本線および西側道の調査）

本調査は昭和49年度の第1次調査、昭和52年度の第2次調査に引き続く第3次調査であり、昭和53年4月10日より昭和54年3月27日まで調査を実施した。調査方法は第2次調査の方法を踏襲し、1区—45m（第2次調査の末調査区域）、2区—90m、3区—30mを発掘調査した。巾は、第2次調査同様18mである。

遺跡は榛名山東南部裾部の先端に位置し、榛名山に源を発し東南流する井野川が、遺跡の南端を流れている。遺跡地は、台地の区域とかつては谷状地形であった区域とで成り立っている。谷状地形であった区域は、湿地地であったため、泥炭質粘質土等が堆積したり、浅間火山噴出の軽石（C軽石）の堆積、又、榛名山一峰二ツ岳噴出の火山灰（F A）と、それに伴う土石流、更に、二ツ岳爆裂（F P）に伴う土石流等の堆積により、現在の地形に変化したものである。しかし、榛名山裾部のため、北西より東南にかけて緩やかな傾斜を成している標高108mの微高地である。

調査が進行するに従い、文化層が3層であることが判明した。上層より順次、竪穴住居址等、水田遺構、更に水田遺構である。従って、上層より下層へと順次調査をした。しかし、2区の北の区域及び3区は台地上であるため、文化層は単層であった。

(遺構と出土遺物)

かつて、谷状地形を成していた区域では、前述の如く文化層が3層あり、上層より奈良及び平安時代の遺構、榛名山F A降灰層の下に水田遺構、浅間C軽石層下にも水田遺構が、更に水田遺構下に溝と土坑とが検出された。

本調査で検出された遺構は、竪穴住居址80軒、掘立柱建築遺構5棟、溝13条、土坑51基、竪穴状遺構6基、水田遺構2面である。

(調査結果の概要)

(1) 調査区域内は、かつての谷状地形区域と台地の区域とに分かれる。谷状地形の区域では下部より浅間火山C軽石層下の水田遺構と榛名山F A降灰層下の水田遺構とが検出された。この上に榛名山一峰二ツ岳給源の土石流（F A及びF P）が堆積している。更にその後、暗褐色土が堆積し現在の地形に変化したものである。井野川対岸の融通寺地域にもこの土石流の堆積がみられ、広範囲に堆積したことがうかがわれる。

(2) 本調査で検出した住居址で、真間期の遺構はちらばりをみせているが、国分期の遺構は数カ所

に集中している。そのため規模、形状等のはっきりしない遺構が多くなっている。

調査面からの掘り込みは、概して真間期が深く、国分期は浅い傾向である。出土遺物も真間期が多く、国分期は少なく破片が多い。

カマドについては、真間期の付設場所は東壁のやや南寄り、主体部を住居址内に置いているが、国分期になると、東壁の南寄りで主体部を住居址の外に出している。

(3) 本遺跡から二面の水田遺構が検出され、両遺構ともに火山噴出物に埋没されている。そのため当時の姿を現在に再現したものと考えられる。

榛名火山一峰二ツ岳噴出の降灰層（FA）下の水田遺構の構築順序は、最初大群で大区画をなし、次に東西の小群、最後に南北の小群によって小畦群を形成したものと推定される。

(4) 本調査により、水田遺構、竪穴住居址、掘立柱建築遺構、溝、土坑、竪穴状遺構が検出された。浅間火山C軽石層下の水田遺構の耕作時期は、谷状地形に青黒色泥炭質粘質土が堆積した後、耕作が開始され、浅間火山C軽石降下により廃絶されるまでである。

榛名火山一峰二ツ岳の降灰層（FA）下の遺構の耕作時期は、浅間火山C軽石降下後、黒色泥炭質粘質土が堆積し、ここに畦畔が作られ水田耕作が始められ、榛名火山一峰二ツ岳噴出のアッシュ（FA）で廃絶されるまでである。

谷状地形に堆積した榛名火山一峰二ツ岳給源の土石流まで掘り込んで構築された遺構（文化層3層の内の最上層）の時期は、真間期以降であり、台地区域では樽期以降である。従って、谷状地形に榛名火山給源の土石流が堆積し、湿潤地の乾燥化に伴い、台地の住居区域が井野川沿いへ拡大されたことがうかがわれる。

(5) 本年度調査の区域は限定されており、調査区域外へ遺構が続いていることなどにより熊野堂遺跡は、本調査区域より広範囲であり、又、井野川対岸の融通寺遺跡とも合わせて検討の必要性がある。

4次調査（本線および西側道の調査）

前年度の3次調査に続く4次調査であり、2区の北端から3区が調査対象となった。調査は、1～3次調査の方法を踏襲している。

検出遺構として住居址66軒、井戸1基、土坑23基、竪穴遺構1基、溝1条がある。大部分が住居址であり、重複が著しい。なお住居址の時代は、弥生時代、古墳時代（前期・後期）、奈良時代、平安時代である。

5次調査（側道調査）

本遺跡の調査は、昭和49年度以来、4次にわたって実施されてきた。高架部分と左側道の大部分は既に終了し、今次の調査は一部残っていた左側道と、それと対応する右側道の一部が調査の対象となった（大宮起点81.9km～82km、面積1,300㎡）。遺跡は榛名山東南裾部の低い洪積台地上に位置し、榛名山の中腹より東南方向へ流れている井野川と、その支流である狼野川とに挟まれている。なお群馬町東下井出遺跡は、本遺跡の北側に連続する同一の遺跡である。

（遺構の概要）

検出された遺構は住居址48軒、土坑21基、溝18条、方形周溝墓1基、溜井1基等である。

第6次調査（側道調査）

昭和56年度の調査に続く6次調査であるが、調査自体は連続している。5次調査で掘りあげた遺構を今回実測し、さらに下に重複する遺構を調査しており、調査地区と調査遺構は、大部分2年次にまたがっている。なお、調査区は、大宮起点81km640～82km00までである。

（調査の結果）

1次から4次までの調査において、弥生時代から歴史時代にわたる遺構が発見されているが、今回新たに発見された遺構は次の通りである（一部本線と側道にまたがっている遺構をふくむ）。住居址119軒、掘立遺構5棟、古墳1基、土坑78基、溝15条、井戸3基、溜井遺構1基、水田2面。

旧称東下井出遺跡と遺跡統一

高崎市熊野堂遺跡の調査は、本年度で完了した。それに伴い、旧称東下井出遺跡と連続する同一の遺跡であることが判明したため、両遺跡を熊野堂遺跡で統一することにした。なお、従来東下井出遺跡と呼称した、群馬町部分を熊野堂第I地区、高崎市熊野堂遺跡を熊野堂遺跡第II地区とする。また、県道柏木沢・高崎線改良に伴う旧称熊野堂A地区を整理・報告時に本遺跡と統一した熊野堂遺跡第III地区とした。

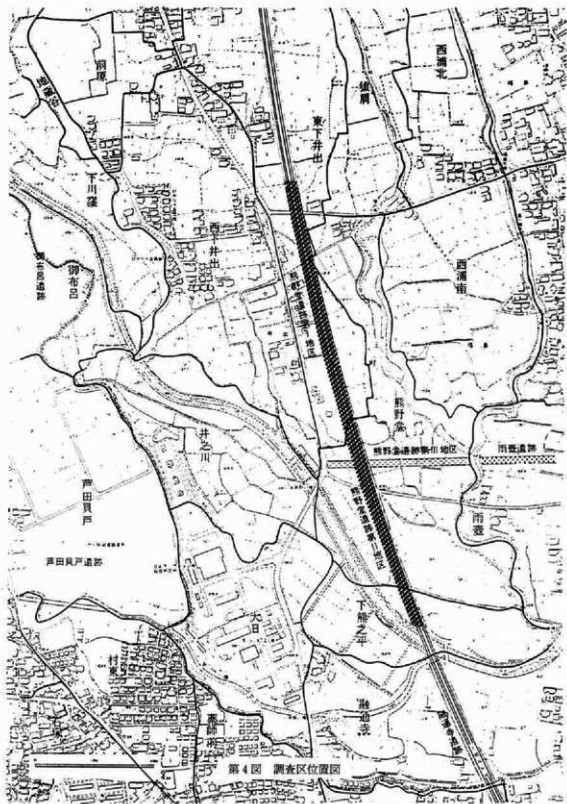
（飯塚卓二）

上記の概要は、群馬県教育委員会発行の「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報」II・V・VI、当事業団発行の「年報」1・2を飯塚がまとめたものである。各概報の執筆者は下記である。

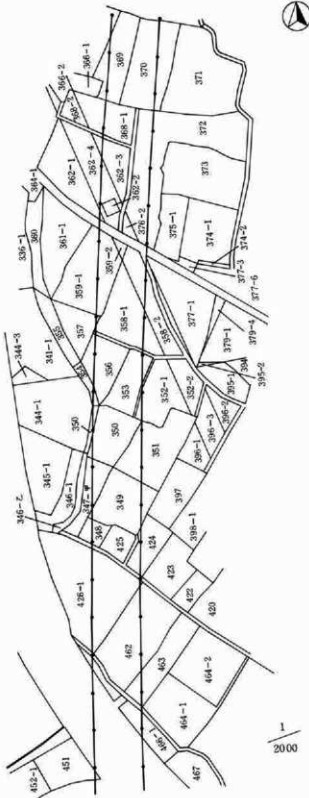
第1次 清水和夫、長谷部達雄、第2次・第3次 細野雅男 第5次・第6次 飯塚卓二



第1地区溜井全景（航空写真 西から）



第4図 調査区位置図



第5図 II地区発掘調査区域図(1/2000)

第4節 基本土層 (第6図)

熊野堂遺跡は、東側を流れる猿府川と唐沢川、西側を流れる井野川とにはさまれた洪積台地上に位置する。全体では、北端の第I地区4区で標高115m、南端の第II地区1区の井野川寄りで105mと総延長約1kmの間に10mの高低差がある。さらに第II地区では、2区22~26グリット付近で台地部分と低地部分とを分ける1m前後の段差がある。

この第II地区内の段差は、第6次調査時の2区以南の深掘りによる断面観察ローム層の堆積有無をちがいとして二分されること、低地部分とした範囲は井野川と推定される東南流する旧河道が埋没、発達したことが判明した。時期としては、旧河道は沖積世に入り埋没が始まり、C水田が形成されるまでには湿地状態から徐々に平坦化が進み、水田を受け入れる基盤となっていたことがわかる。この地形環境は、遺構分布とも密接に関係し、各時代の集落形成の要因の一つでもある。

基本とする土層は、この台地部と低地部分の代表2例をあげる。

Iは台地南端寄りの230住東側地点である。標高108.50m前後で低地部と約70cmの比高差がある。

- 1 表土 全体に浅間A・B軽石を含む。現在の耕作土を含み厚さ20~40cm前後である。
- 2 黒色土 浅間C軽石をまばらに含む。1層で上半部を削平される。遺構確認面である。
- 3 黒色土 浅間C軽石を含まず、下部では褐色、粘質化したローム漸移層となる。
- 4 上部ローム層 3層下部とは波頭状に堆積する。
- 5 板鼻黄色浮石層(YP)
- 6 5層中の鉄分らしい沈着物が多い部分である。
- 7 ローム層 全体に砂質化が進み灰白色土の斑点が目立つ。
- 8 7層の重層で灰白色の細粒砂が部分的にレンズ状に見られる部分。
- 9 灰色シルト質土

IIは2区中央部、旧河道でも中央部付近と推定される地点である。

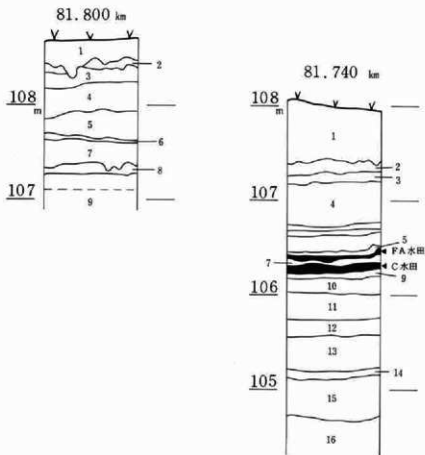
- 1 表土 Iの1層と同性状で厚さ60cm前後である。
- 2 褐色土 浅間B軽石を含む。
- 3 褐色土 2層と同性状で鉄分沈着で区別される。
- 4 ニツ岳F P土石流 色調、軽石の大きさと有無で4層に細別される。上半部は軽石を含む褐色土を基本とする。最下部はピンク色の粘性土で黄白色や灰白色土との互層である。
- 5 ニツ岳FA
- 6 黒色粘質土 FA水田耕土
- 7 浅間C軽石
- 8 黒色粘質土 C水田耕土
- 9 黒色粘質土
- 10 黒色粘質土
- 11 黒色粘質土
- 12 黒色粘質土
- 13 褐黄色粘質土
- 14 黄茶色砂質土
- 15 黄色砂質土
- 16 青灰色シルト質土

遺構確認面は、台地部では2~4層中でほぼ一面の状態なのに対して、低地部分では4層中と2枚の火山噴出物で分層した状態にある。特に4層は上下で時代相を異にする鍵層である。

第I～III地区の土層対応関係は次の様である。表記方法は各報告に従う。

第I地区	第II地区	第III地区
第1層 耕作土	1層 表土	第①層 耕作土
		第②層 茶褐色砂質土
		第③層 暗茶褐色砂質土
第2層 暗褐色土		
第3層 黒褐色土	2層 黒色土	第④層 暗褐色粘質土
第4層 黒褐色土	3層 黒色土	第⑥層 黒茶褐色粘質土
		第⑦層 茶褐色粘質土
第5層 ローム層	4層 上部ローム層	第⑧層 黄褐色粘質土
	5層 板鼻黄色浮石層	

浅間山や二ツ岳起源の火山噴出物は、分層の示標とはなり得たが純層での一枚の層としては確認できず、低地部や一段低い井戸や溝の埋没土中といった遺構中に分布が限定されている。



第6図 基本土層

第2章 検出された遺構

第1節 遺構の概要と時代別変遷

熊野堂遺跡はⅠ～Ⅲ地区の3つの調査区からなる。このうち、Ⅰ地区については同じ上越新幹線建設に伴う発掘調査にかかる、Ⅱ地区からみると北側に連続したもので昭和59年度に「熊野堂遺跡」(1)として報告されている。また、Ⅲ地区は、県道柏木沢～高崎線の建設に伴う発掘調査にかかる、Ⅱ地区とは4区4～12グリットで東西方向に交差し、同じく昭和59年度に「雨壺遺跡、熊野堂遺跡Ⅲ地区」として報告されている。

このⅠ～Ⅲ地区は、調査時には別々の遺跡名をもって呼ばれていたが、整理、報告時に担当者協議の上、「同一の地形上にある連続した遺構の広がり」という見解から、地区名だけを異にした「熊野堂遺跡」として遺跡名称の統一がはかられている。今後での混乱をさける意味からも、各々の旧名称を付記すると次の様である。

旧名称 東下井出遺跡——熊野堂遺跡Ⅰ地区

熊野堂 遺跡—— // // Ⅱ地区

熊野堂A調査区—— // // Ⅲ地区 へと名称が変更され、統一されている。

以上の名称変更と統一を見たが、調査時に於ける記録類一切と各報告に至るまでの実績報告、概要を示した当事業団の「年報」やⅠ地区の浅間C軽石下の畠にふれた「考古学研究」、Ⅱ地区の水田址にふれた諸論文については旧名称が使用されたままで変更はしていない。

本報告対象のⅡ地区は、水田址の発見以来、「月刊文化財」181号—水田特集号—(1978)から「群馬県史」資料編2(弥生・土師)(1986)に至るまで、その概要が発表されてきた、旧来の熊野堂遺跡に相当する。本報告では、Ⅰ・Ⅲ地区の報告の後をうけてⅡ地区の基本事実のほかに3つの地区を総括するものである。

1 遺跡の範囲とⅡ地区

遺跡の範囲は、3つの地区を合せて南北約900m、東西約250mが調査結果から推定される。地形としては、猿府川右岸にある南北走向の台地上、井野川と唐沢川、猿府川との合流点から北へ約300m付近までの全体に及ぶと考えられる。同一の地形上としては上記の範囲だが、井野川を隔てた南の「融通寺遺跡」ではほぼ同一の時代相の推移が見られ、特に水田址の広がり強い関連性であろう。また、猿府川東の台地上、「雨壺遺跡」も同様であり、時代、時期に限定しなければ遺構はⅡ地区付近を中心にして連続しており、広義の井野川と唐沢川、猿府川との合流部付近にある遺跡群として一括する方がよく、逆に同一地形上の広がりをさして遺跡名を統一した理由もここにある。

Ⅰ地区の概要

ここからは、住居74軒(縄文時代前期1、弥生時代後期20、古墳時代後期23、古代30)、掘立柱建物9棟、畠6面、道路状遺構1、溝29条(弥生2、古墳7、古代12、不明8)、溜井2基(古墳時代後期と古代各1)、井戸15基(弥生3、古墳2、古代2、不明4)、土坑59基(弥生8、古墳5、古代1、

中世1、不明44)が確認されている。

第II地区の概要

ここでは、住居302軒(弥生時代43、古墳時代62、古代197)、掘立柱建物11棟、井戸3基、土坑186基、溝43条、竪穴状遺構7基、方形周溝墓1基、水田址2面(各約2100㎡)、畠2箇所が確認されている。

第III地区の概要

ここでは、住居20軒(弥生時代3、古墳時代5、古代9、不明3)、掘立柱建物9棟、溝7条(古墳2、古代3、不明2)、土坑3基(弥生、古墳、不明各1)、井戸2基、水田址、中世館址1が確認されている。

以上、3つの地区を合計すると住居総数396軒、掘立柱建物29棟の集落規模となる。時代別にみた内訳は以下のとおりである。

縄文時代 住居1軒、土坑7基

弥生時代 住居66軒、土坑10基、井戸3基、溝8条

古墳時代 住居83軒、井戸3基、溝15条、方形周溝墓1基、水田址2面

古 代 住居243軒、掘立柱建物29棟、土坑約100基、井戸11基、溝30条以上、竪穴状遺構7基、
道路状遺構2箇所、水田址1箇所、畠2箇所

中 世 館址1、溝4条

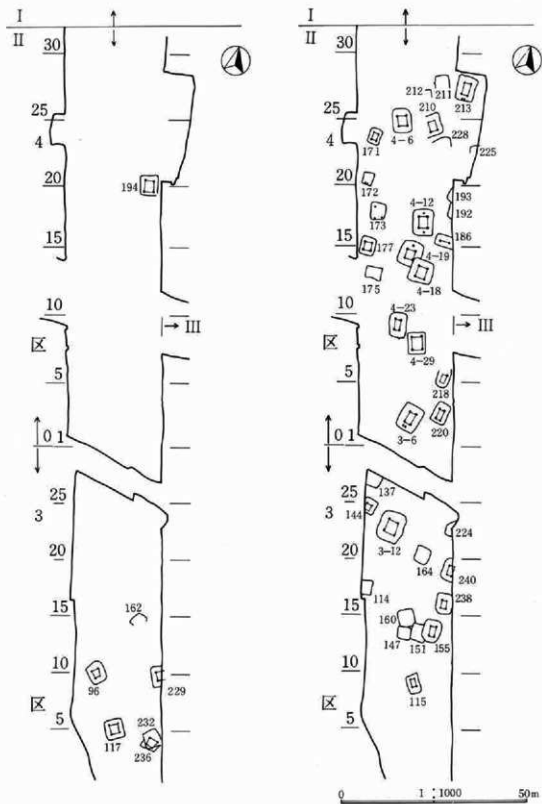
2 第II地区の時代別変遷

熊野堂遺跡は、縄文時代前期に始まり、弥生時代中期後半以降、平安時代11世紀後半まで大小の画期を経ながら、ほぼ継続的に集落が形成された前橋台地上でも拠点的な集落の一つである。しかも、井野川寄りの低地には古墳時代の重複する水田址、台地北側では畠地があり、住居域と生産域が一体で見られる資料が提供されている。第II地区は、3つの調査区の中でも年代幅、遺構数とも最も多く、安定した集落形成の推移がみられ、全体の中でも中心を占めている。その推移は、7～10図に遺構の中でも主体となる住居変遷を8期に区分して示した。

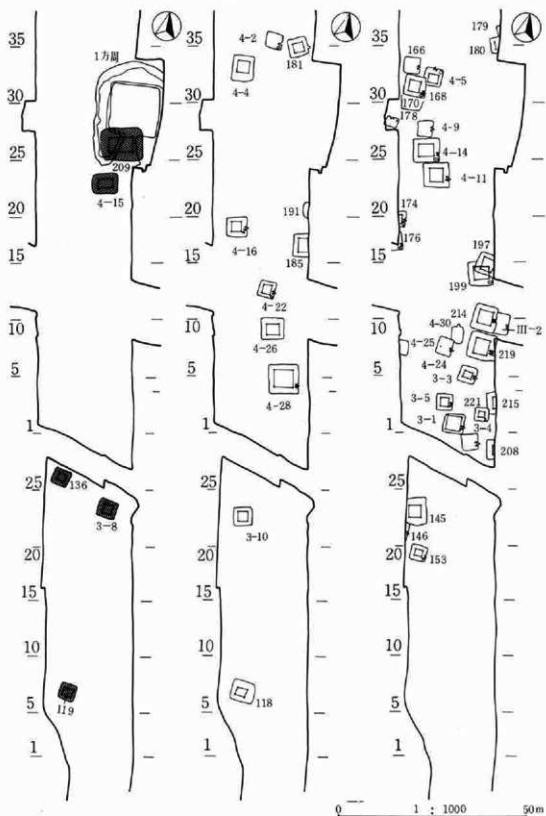
7図は弥生時代の中期後半と後期を示す。集落の形成は、中期後半に台地中央部付近に南北2群で始まり、後期には36軒、残る2地区を合計すると66軒を越す規模となる。後期は、形状、方位、重複の点から3期前後に区分でき、この地域の中で拠点集落としての性格をおびてくる。

8図は古墳時代の前期、中期、後期で4世紀から7世紀を示す。弥生時代から古墳時代への移行期の断続的な画期と5世紀前半の空白という画期を経て、後代まで継続していく安定した集落の形成期である。この間には4世紀代、6世紀代の火山災害があり、生産主体が水田から畠地主体への変化、それに伴う居住域の変更、集落構成の再編成が推定される。その背景では、北約2kmにある豪族居館三ツ寺1遺跡の出現と消長とが関係し、居館を支える集落の一つにまで発展したと考えられる。

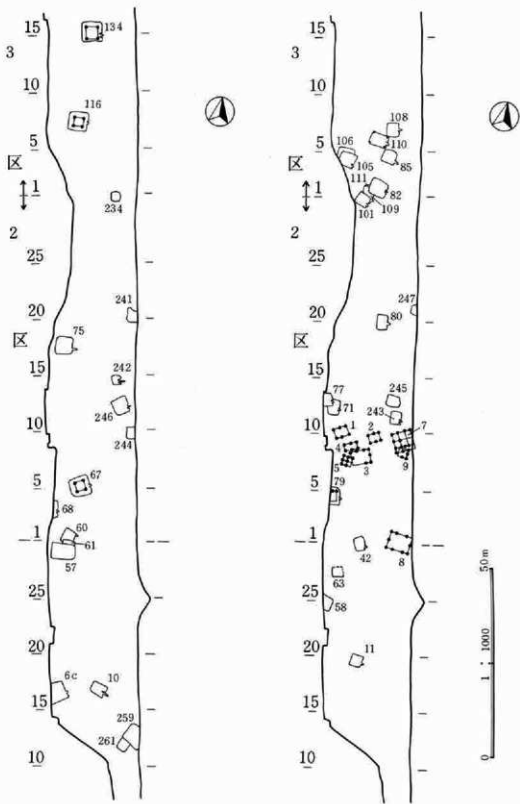
9図と10図は8世紀から11世紀までを示す。律令体制の消長に関する時期で、前代までの様相は継続され、8世紀後半代には区画溝で囲まれた掘立柱建物群が出現している。その後は、同一占地内で重複が繰り返されて区画、規則的なものが徐々に消失し、隣接する融通寺遺跡、雨堂遺跡と同一様相で集落形成が推移する。11世紀以降は中世の館で拠点に回帰するが、畠地主体の景観へと推移する。



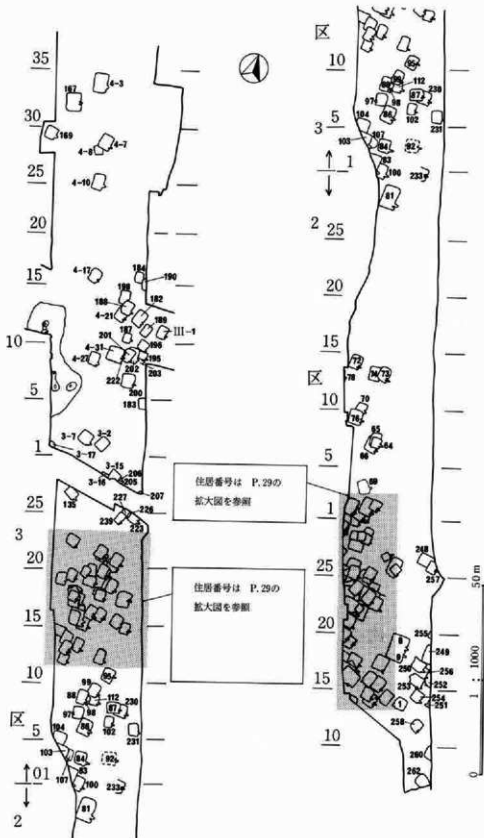
第7図 弥生時代住居分布図



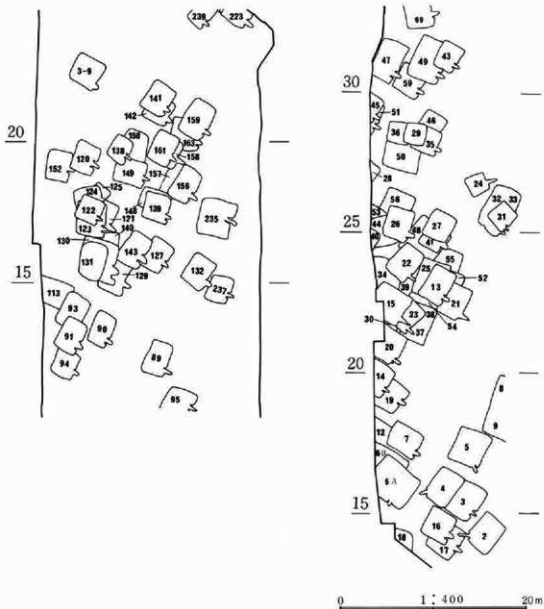
第8図 古墳時代住居分布図



第9図 奈良時代住居分布図



第10図 平安時代住居分布図



平安時代全体図の拡大

第2節 竪穴住居

はじめに

遺構の掲載順序は、1住に始まり262住まで、3区1住に始まり4区31住までと番号順を基本とした。しかし、複数が重複する場合は記録した原因をあえて分離せず、当初のまま掲載した。従って番号が大幅に前後する場合がある。重複関係は古い方から矢印で示した。分量は $\frac{1}{2}$ 。原因を基本として主に最大値、遺構として全体状況を示す位置等の基準で計測した。床面を始めとする主要施設の記述は、調査担当者が作成した記録類を参考にしたもので、火山噴出物の表現等に関り最小限の統一をした。

1号住居 (第11図, 図版6-1、6-2、6-3)

位置 1K・L-13・14グリット **主軸方位** N90°E **重複** なし **規模** 縦3.25m 横3.10m **形状** 方形 北壁だけがやや外へ張り出し強い弧をえがく。**床面** 灰白色土と褐色土の混土を貼床する。全体に均質でカマド前周辺が特にかたい。**貯蔵穴** 床面では確認できなかったが、掘り方の北東隅で直径約110cm、断面碗底状の円形土坑がある。埋没土上位で羽釜、甕の破片約50点が出土した。遺物をはきんで黒灰層があることから、カマド改築時の残土を処理するために埋められたとも考えられる。**周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 全体に少量が散在する。羽釜、杯、碗の破片が約100点あるが接合例は羽釜1個体だけである。

カマド **位置** 西壁南寄り **規模** 全長80cm 焚口幅30cm **構造** 全体が壁外に作られる。壁際に袖石をもつ。右が角安石、左が角安石を裏込めにして河原石がつく。支脚は中央部に河原石の割石2点がおかれる。

時期 平安時代 11世紀

2号住居 (第11図, 図版7-1、7-2)

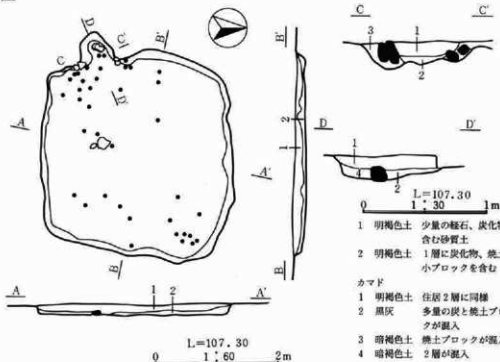
位置 1L・M-13~16グリット **主軸方位** N108°E **重複** 17住→2住 **規模** 縦2.95m 横3.85m **形状** 長方形 **床面** 褐色土の貼床、全体に軟弱でデコボコしているが焚口前が特にかたい。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 全体に少量が散在する。羽釜、杯、碗があるが接合例なし。鉄鍔は西壁中央部付近で出土している。

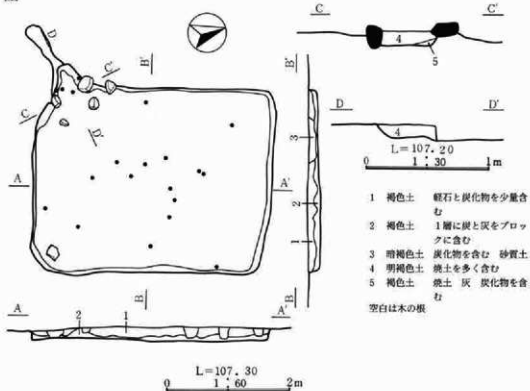
カマド **位置** 南西隅にある。**規模** 全長 170cm 焚口幅約30cm 煙道が約80cmある。**構造** 全体が壁外にある。焚口は、壁際に角安石を組んで作るが袖口を残して崩落している。内部には焼土や黒灰層がブロック状に残り、灰は左袖方向に分布する。

時期 平安時代 11世紀

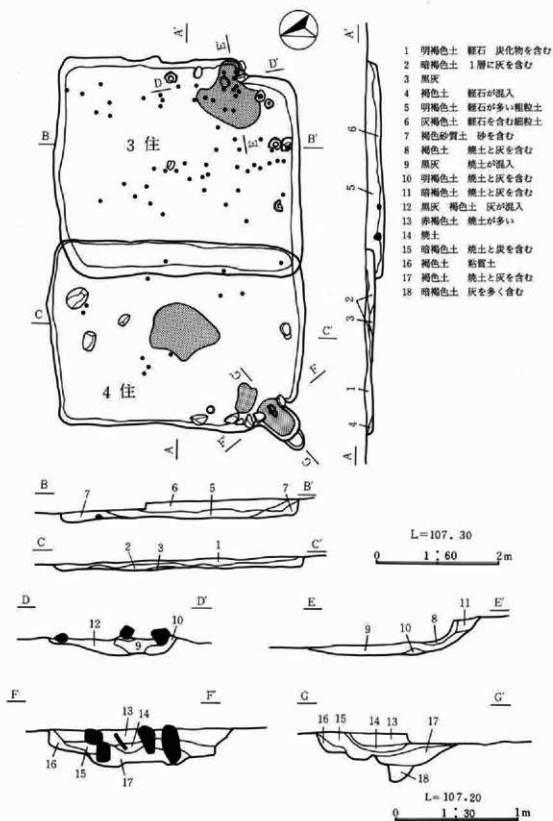
1 住



2 住



第11図 1号・2号住居址遺構図



第12図 3号・4号住居址遺構図

3号住居(第12図, 図版7-3, 8-1)

位置 1L~N-14~16グリット **主軸方位** N72°W **重複** 3住→4住 **規模** 縦3.35m 横3.90m **形状** 長方形 **カマド**以北全体が約30cm張り出している。**床面** 褐色土を貼床する。全体に均質だがデコボコしていて軟弱である。**貯蔵穴**、**柱穴** なし **周溝** 平面図に記録はないが壁際が帯状にくぼむ。

遺物出土状態 全体に散在する。カマド周辺に床直のものが多い。特に東南隅では、報告の杯、椀類が5個体ある。全体では、厚手のコの子甕3個体以上、杯と椀15個体以上、灰釉椀2個体、瓶がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長80cm 焚口幅約25cm 煙道は削平されている。**構造** 煙道を除いて住居内にある。壁体は角安石の転石を芯にして褐色土を盛り上げる。石は左右対に置かれ、特に焚口は鳥居状に組んでいたと考えられる。支脚はないが黒灰と焼土塊が中央部に残る。黒灰は掘り方中にも見られるが、角安石を上面にのせていることからカマドが改築されたと考える。

時期 平安時代 9世紀第4四半紀

4号住居(第12図, 図版8-2)

位置 1M~O-15・16グリット **主軸方位** N105°E **重複** 3住→4住 **規模** 縦2.90m 横4.15m **形状** 長方形 **床面** 灰白色土ブロックを含む褐色土を平坦にする。全体に均質である。焚口前と中央部に黒灰が分布する。**貯蔵穴**、**周溝**、**柱穴** なし

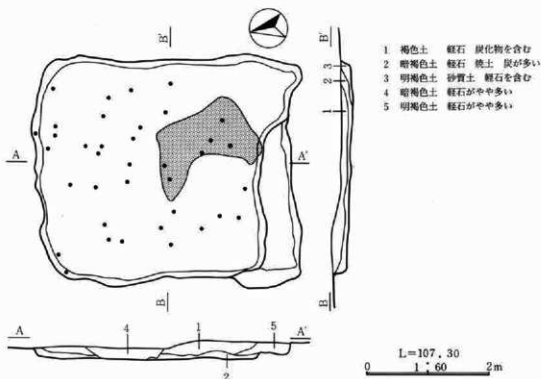
遺物出土状態 全体に甕、杯、椀、灰釉椀の破片が少量散在する。西壁際から南壁寄りにある角安石は、大きさや形状の点からカマド用と考えられる。土器類はカマド内からのものが殆どで後述するカマド改築で掘り方中のものが多い。

カマド **位置** 南西隅 **規模** 全長65cm 焚口幅30cm 掘り方は全長140cm、最大幅130cmの大型の箱形で改築が考えられる。**構造** 全体が壁外に作られる。焚口は壁際に面取りした角安石を袖石としてたてる。壁体は褐色土を掘りこんだままとしている。支脚は、袖石の中間に円筒ハニワの基部破片がすえてある。

カマドの改築 中心を約15cm隅寄りにして新期のものがある。古期のものは、断面Fから袖石の様子わかる。右袖は長さ30cmの面取りした角安石、左袖は新期の下面にあるが凝灰岩を用いている。焚口幅は約40cmである。改築は、火床の中心を隅へ移すとともに焚口を小さくしている。また、掘り方では、火床の中心部に直径約25cm、深さ20cmの円形ピットがあり、黒灰層を主とした土で埋まっていた。断面Gの17層で区分されることから改築時かそれ以前の灰のかき出し穴と考えられる。

時期 平安時代 11世紀第2四半紀

本住居はカマド内で円筒ハニワを使用する唯一の例である。破片では22住でも出土しているが、ともに11世紀前半代の住居で瓦類の使用と合せて変化のきざしを示すものである。



第13図 5号住居址遺構図

5号住居 (第13図, 図版8-3)

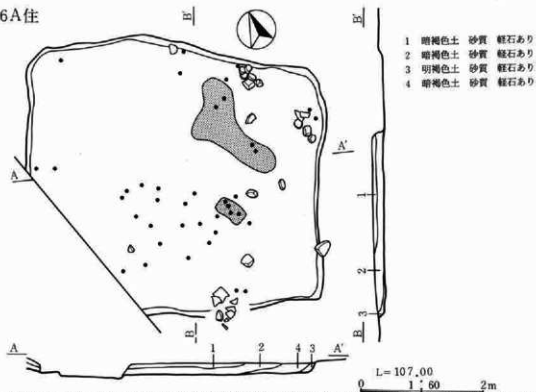
位置 1 L~N-16~18グリッド **主軸方位** N85°W **重複** 10住→5住→無名土坑 **規模** 縦3.80m 横3.90m **形状** 方形 西壁の南隅が段差5~8cm、間口約1m、奥行25cmで小さく張り出す。床面 灰白色土ブロックを含む褐色土を平坦にする。東壁から約1m離れた南壁沿いが約10cmベット状に高くなる。北側を掘りすぎた結果とも考えられるが、断面Aでみると地山から一段高く、本来の構造であると判断される。焚口から約1m離れて中央部付近にかけて灰が分布する。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 羽釜、甕、杯、灰釉椀、円筒ハニワの各破片が39点ある。壁際を除いた中央部の床上10~15cmにある。

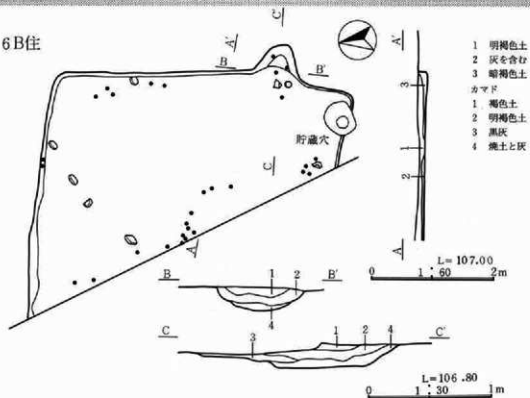
カマド **位置** 東南隅 **規模** 全長約40cm 焚口幅70cm 煙道は削平されている。構造 全体が壁外に作られている。壁際に袖石をもつと考えられるが支脚を含めて石は1点もない。壁体は灰白色土を貼付している。火床には焼土が残る。

時期 平安時代

6A住



6B住



第14図 6A号・6B号住居址遺構図

6 A・B・C号住居 (第14図、図版9-1、9-2、9-3)

この3軒は、1 O・P-15・16グリットにあり、調査時には古い方からC-B-Aの順とされ、個別の住居として記録した。しかし、遺物を含めた整理の結果、A住中央部付近にある粘土塊がB住カマドと判断され、A住で記録した半数程の遺物がC住プラン内に取まること、の2点から下記のように訂正をする。

- 1 A住はプラン図があるものの、図示以外に遺物がなく実態が疑問視される。重複関係からすると、最も新しいか、逆に最古の可能性がある。
- 2 B住は、A住内の粘土塊を東カマドとする最も新しい住居と考えられる。A住内の半数程が改めてB住に帰属する。
- 3 C住は最古の住居でA住内の半数程の遺物が帰属する。

6 A号住居 (第14図、図版9-1)

規模 縦4.25m 横4.65m 南西隅が調査区域外にある。形状 方形 主軸方位 N26°E 床面 灰白色土ブロックと褐色土の混土を平坦にする。B号、C号とは殆ど段差がなく、形状と合せて確定をむずかしくさせている。周溝、柱穴 なし

カマド 東壁の南隅近くに25×20cm大の角安石があるほか痕跡はない。

時期 形状と遺物は不明確であるが、6 B住より古い可能性がある。

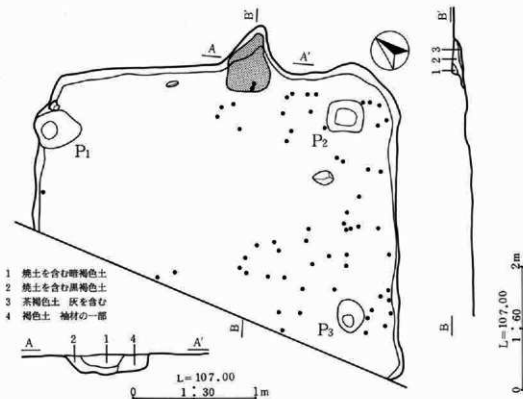
6 B号住居 (第14図、図版9-2)

規模 縦3.90±αm 横4.70m 西壁側が調査区域外にある。形状 長方形 北西隅が段差をもって丸くなることから推定をした。主軸方位 N75°W 床面 C住の床面の上に厚さ2~3cmの貼床を施す。焚口付近はわずかに低くてかたいのに対して、北側は軟らかい。焚口前では貼床の下に厚さ5cm程の灰層がある。貯蔵穴 南壁の東隅寄り壁外にかかっている。上面径で53×40cmの円形で、断面碗底状で深さ20cmを測る。周溝 なし 柱穴 東壁のほぼ中央で西へ約150cmの位置に上面で33×27cm、深さ10cmの円形ピット1基があったが図示していない。

遺物出土状態 数個体づつの破片ばかりの集中が中央部を除いて点在する。北壁側のものに角安石が混在する。羽釜、杯、碗、灰軸碗の破片が約60点あるが報告個体はない。調査時の記録類には紡錘車の記載があったが現存せず記録だけにとどまる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 基底部近くまで削平を受けている。全長80cm 焚口幅40cm 構造 全体が壁外にあると考えられるが、掘り方からすると壁際から約30cmの位置に段差があり煙道との境と推定される。中央部に残る焼土と黒灰層の分布がこの推定を裏付ける。

時期 平安時代 11世紀



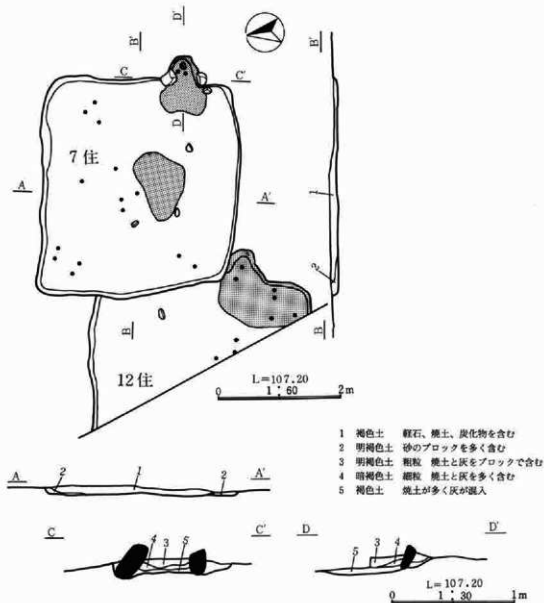
第15図 6C号住居址遺構図

6C号住居 (第15図, 図版9-3)

規模 縦4.95m 横5.76m 北西隅を含む西側は調査区域外にある。主軸方位 N140°W 形状 長方形 床面 褐色土を平坦にしているがA住とレベル差がなく、凹凸をもち遺存状態は悪い。貯蔵穴調査者はP₂と北側の土坑を推定しているが、本遺跡の例としては特異な位置であり確定をさけ、うち1本を柱穴とした。掘り方が確認されていないが、南壁西隅寄りにある須恵器甕の位置を貯蔵穴として推定したい。周溝 なし 柱穴 P₁~P₃を主柱穴とする。上面径と深さは、P₁が53×72cm、30cm、P₂が48×60cm、32cm、P₃が51×42cm、33cmである。柱間は、P₁とP₂が470cm、P₂とP₃が320cmである。遺物出土状態 B住重複部分を除いて、壁際に多く分布する。長甕、杯、須恵器甕があり器形を残すものがある。長さ10cm前後の河原石が多出しているが、カマド右前や東南隅での様子からすると混入ではなく、付属施設と考えられる。カマド前のは二列構成で固定具か台の可能性があり、甕と共存するのは置台か。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長80cm 焚口幅45cm 構造 全体が壁外に張り出す。痕跡は確認できなかったが壁際に焚口が推定される。壁体は褐色土で間口約75cmの掘り方のうち、南側に寄せつけている。火床は床面と差がなく、わずかに灰と焼土が残る。

時期 7世紀 鬼高Ⅲ式 重複 6C住→12住→(6A住)→7住→6B住



第16図 7号・12号住居址遺構図

7号住居 (第16図, 図版10-1、10-2、10-3)

位置 10・P-16~18グリッド 主軸方位 N76°W 重複 6C住→12住→(6A住)→7住、6B住 規模 縦3.40m 横3.15m 形状 不整形 北西隅が突き出る。床面 南半分は重複する6C住と12住の埋没土をそのまま平坦にしているが、北半分はFP土石流を掘り下げた上に褐色土を平坦にしている。全体に不明瞭でかたい部分などないが焚口前と中央部分に灰がうすく分布する。貯蔵穴、周溝、柱穴 不明 掘り方調査がないので断定できない。

遺物出土状態 コの字甕、羽釜、碗、須恵器甕の破片16点がカマド内と中央部付近に散在する。カマド内の羽釜を除いて接合例がなく、遺存状態は悪い。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長50cm 焚口幅40cm 全長は支脚から約60cm外側で角安石の転石がすえられている。焼土や灰の広がりは見られないが煙道施設と考えられる。構造 全体は壁外に張り出して作られる。焚口は住居の壁際であり、長さ25cmを越す角安石の転石を対にたてて袖石としている。壁体は残存せず不明だが、石を芯とせず粘土の痕跡もない。支脚は燃焼部の中央にある。袖石と同じ角安石の割石を使用し、一部を粗く加工し高さ18cm程に仕上げている。中央部から焚口前にかけて焼土まじりの灰が流出した状態で分布する。掘り方は間口80cm、奥行50cmの方台形である。

時期 平安時代 11世紀前半

12号住居 (第16図)

位置 1P-17・18グリット 主軸方位 N77°W

重複 12住→6B住、7住 西半分は調査区域外のために未調査である。

規模 縦2.10+αm 横3.45m 深さ、西側断面によると掘りこみ確認面から約40cm。形状 方形か床面 暗褐色土の貼床、全体に軟弱、東南隅側にかけ出しの灰が分布する。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内と壁際に土師器コの子壺と杯の小破片が10点程出土。

カマド 位置 東壁南寄り、上面削平され掘り方近くが残存。

規模 全長約50cm 焚口幅約50cm 袖石、支脚なし。

袖、煙道 不明

遺存状態 燃焼部から住居東南隅方向へ灰が分布、燃焼部中央に焼土がうすく残存。

時期 平安時代 9～10世紀か

8号・9号住居 (第17図、第18図、図版11-1、11-2、11-3、12-1、12-2、12-3)

この2軒は、調査時の所見では新旧をもった別々の遺構とされたが、新旧関係とプランの確定を念頭に整理した結果、遺物の上では出土状態が床面をはさんだ上下で区別されるだけで、時期差がなく、プランの上でも壁、埋設土にちがいを認め難かった。従って、カマドの作り替えでの時間差はあるものの同一の住居とする。しかし、遺物の記録性、保管上、番号はそのままとする。

位置 1J~L-17~19グリット 主軸方位 N85°W

重複 10住→2溝→8・9住 掘り方とカマドの様子からすると8住が古く9住側に拡張か。

規模 縦4.80m 横6.80m 深さ20cm 形状 長方形 西壁、南壁が少し短い。

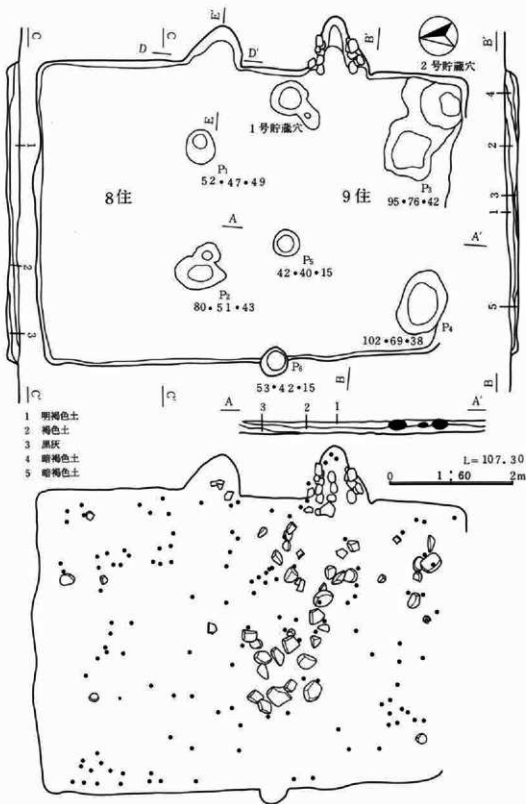
床面 暗褐色土を踏み固めて貼床とする。9住とした南側が3～5cm低いがほぼ平坦である。

貯蔵穴 掘り方で隣近くに2基の土坑が確認された。1号は56×55cmの円形、深さ24cm、2号は方70cm前後の掘り方、深さ40cm、南東隅に接する。

周溝 なし

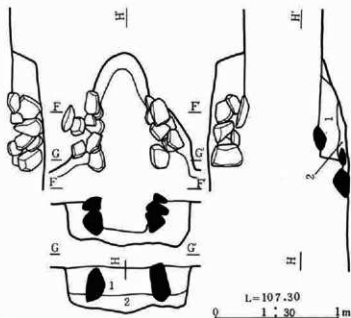
柱穴 9住側にP₁～P₄の主柱穴と時期を異にするらしいP₅とP₆がある。掘り方は円形を基調とする。

掘り方 全体に床面から10cm前後下がり、壁際が帯状にくぼむ。土坑状になるものは柱穴とした以外

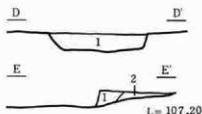


第17図 8号・9号住居址遺構図(1)

9住



8住



9住

- 1 褐色土 軽石が多く、焼土と灰が混入
2 暗褐色土 灰が多く、大粒の焼土が混入

8住

- 1 褐色土 大粒の焼土と灰を含む
2 褐色土 焼土が多く、軽石が混入

第18図 8号・9号住居址遺構図(2)

になく、床の貼り替えに伴うものと考えられる。遺物は9住側の2号貯蔵穴やP₁に多い。

遺物出土状態 全体に多いが、床上10cm前後のものが半数以上ある。個体数は多いが接合例は少ない。9住側中央でカマド石としては大型の角安石大小19個が床直で出土した。掘り方では2号貯蔵穴とP₁に須恵器壺の破片10個体以上約120点が出土した。このうち、4個体分については9住カマド周囲からの破片と接合し、さらに16住のものと接合している。これは、8住から9住側への建て替え時に、8・9住付近の住居群で使用していた須恵器を破片とした上で一括廃棄、その殆どを9住側掘り方に地鎮具様に埋めたと考えられる。同様なことが、8住側床下から出土した奈良三彩の小壺にもいえる。

時期 平安時代 10世紀第1四半紀

8住カマド(第17図、第18図、図版11-1、11-2)

位置 東壁中央北寄り **規模** 全長95cm 焚口幅86cm

袖、煙道 不明

遺存状態 燃焼部左壁に倒れた板状の角安石1石を残す。羽釜、須恵器壺の破片が出土。

9住カマド (第17図、第18図、図版11-1、11-2、11-3、12-1、12-2、12-3)

位置 東壁中央南寄り 8住カマドの南約2m **規模** 全長1.0m 焚口幅40cm 燃焼部両壁に角安石を最大3段、横置きに積む。箱形の掘り方とのすき間は小ぶりの石で補強され、粘質土を充填している。石の一部は面取りされ、壁面は垂直に近い。両袖石は、住居の壁のライン上に内傾して立てられている。支脚は掘り方痕跡のみで、残存していなかった。掘り方は、煙道部が凸形になる箱形で、間口96cm、奥行64cm、袖石を始めとする四隅に径20cm前後の円形の据え穴を持った計画的なものである。すき間の充填土には、甕や杯の破片が粘土の混和補強材として使用されている。焚口前は、方約50cmで浅くくぼむが、その用途は不明である。

煙道 燃焼部の中央から30cm張り出す。燃焼部の床から約20度の勾配でせり上がり、さらに外へのびると推定される。掘り方でも据え穴がないことから、内壁補強の石はないと判断される。

遺物出土状態 須恵器甕、土師器杯等の破片があるが、甕については16住のものや9住側床下から出土したものと接合しているから、その出土位置が示すとおり、すきま充填土の補強材であろう。残る資料の中からカマドで使用されたものは特定できない。

10号住居 (第19図、図版13-1、13-2)

位置 1K~M-16~18グリット **主軸方位** N76°W

重複 10住→8・9住→5住 北壁上面は8・9住との重複で消失、法量は現存値とする。

規模 縦4.23m 横3.05m 深さ34cm **形状** 長方形

床面 暗褐色土を踏み固める。ほぼ平坦だが、南壁中央部が階段状に一段高い。間口80cm、奥行35cmで、住居構築時からの掘り残して入口施設の痕跡と考えられる。

貯蔵穴 床面調査時には確認できなかった。掘り方では4基の円形土坑が確認されたが貯蔵穴として特定できなかった。北西隅のものが78×60cm、深さ10cmで可能性がある。

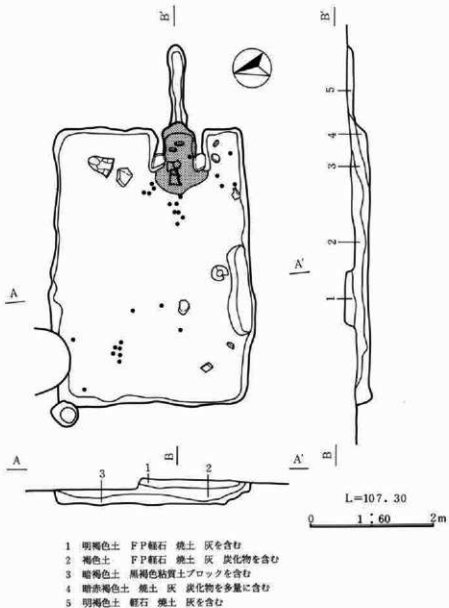
周溝 なし **柱穴** 掘り方では4基の円形土坑が確認されたが、形状と法量に近似値が見られるものの不整列で特定できない。

掘り方 床面から見ると全体が椀底状に10~15cm前後くぼみ、その中で北壁側で3基、南壁側中央で1基、合計4基の円形土坑が確認された。北西隅のものは貯蔵穴の可能性はある。

遺物出土状態 床直状態ではカマド焚口前から半径1m程の範囲と、南西隅から中央部にかけて集中していた。カマド焚口周囲には、袖石である角安石と長甕2個体、南東隅で藍石5点がある。南壁中央近くに須恵器脚付盤1個体がある。この台付盤の出土位置からすると、南壁中央の入口施設としたものは器を置く棚の可能性もある。

カマド **位置** 東壁中央南寄り 燃焼部は住居内にあり、外に長い煙道がのびる。

規模 全長220cm 燃焼部長102cm 焚口幅45cm 煙道長118cm 幅18~25cm 深さ7cm 袖褐色土系の土で長さ約60cmの袖を作り、その端に長さ35~42cmの角安石をたてている。左袖石の横50cmにある角安石は崩落した袖石の一部であろう。焚口前が円形で皿状にくぼむ。煙道 燃焼部中央から外にむかって長くのびる。燃焼部とは約20cmの階段状の段差をもつ。素掘り円筒状であるが、中間の焼け方が弱く、確認先端部で灰が多いという違いを示すことか

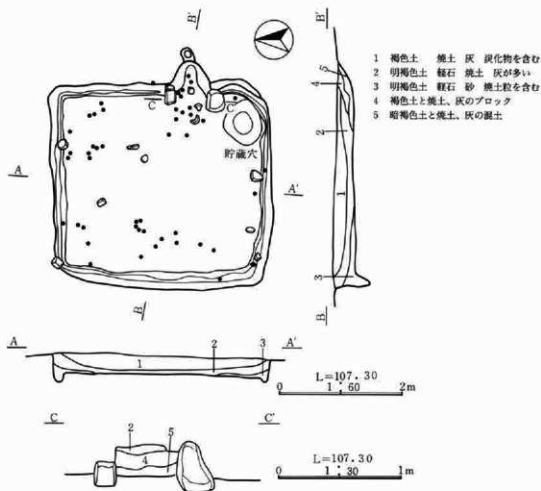


第19図 10号住居址遺構図

ら、中間は何かを埋設補強し、先端は直立の煙突状になると推定される。

遺存状態 長甕は器表の状態からすると煮沸用である。燃焼部内の焼土、灰も互層状に良好な状態にあったことから、このカマドは自然崩落したものであろう。

時期 7世紀第4四半紀



第20図 11号住居址遺構図

11号住居 (第20図, 図版13-3、14-1)

位置 1M・N-19・20グリッド 主軸方位 N90°W 重複 なし

規模 縦3.20m 横3.52m 深さ26cm 形状 方形

床面 FP 軽石、砂利を含む褐色土を平坦に踏みしめている。

貯蔵穴 南東隅にある。67×65cm、深さ20cmの円形土坑

周溝 カマド部分を除いて全周する。底面幅と深さとも5~10cm、断面はU字形だが壁側が直立に近い。貯蔵穴のある南東隅を除いて90度に近い掘り方を持っている。柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド焚口付近を除いて流れこみの状態。長壺、杯、蓋、砥石があり、焚口前から出土した杯の外部底面には「本」の墨書がある。

カマド 位置 東壁中央南寄り 規模 全長105cm 燃焼部長85cm 焚口幅50cm 煙道幅20cm

袖 住居壁に直接、角安石をたてつけて袖石とする。右袖石は一部を面取りし、左は角柱状に成形する。

煙道 燃焼部と約18cmの段差を持っている。確認端部には灰が多い。

遺存状態 燃焼部の内壁は赤く一様に焼けて、床には黒灰層が分布する。中央部には、円柱状に成形した角安石製の支脚の残片があった。

時期 奈良時代 8世紀第2四半紀

13号住居（第21図、図版14-2、14-3）

位置 1M~O-22・23グリット **主軸方位** N75°W **重複** 21住→13住

規模 縦2.70m 横3.85m 深さ30cm **形状** 長方形

床面 暗褐色土の貼床、南側が少し高い。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし **掘り方** 不明

遺物出土状態 全体に分布するが殆ど埋没土1層中にあり、流れこみである。組成は、羽釜、須恵器、壺、杯、碗、灰釉碗に混じって緑釉小片、円筒ハニワ、布目瓦がある。破片が殆どである。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長80cm 最大幅58cm 燃焼部は袋状で内壁が焼けていた。

袖 住居の壁際に土手状の高まりを残す。

煙道 確認部分にない。燃焼部とは階段状の段差を持つ11住のタイプか。

遺存状態 袖石はないが支脚を残す。焚口から燃焼部内には厚さ5cmの灰が残る。遺物は羽釜破片が1点出土し、時期判定資料とした。

時期 平安時代 11世紀

21号住居（第21図、図版18-1、19-1）

位置 1M・N-21~23グリット **主軸方位** N78°W

重複 55住→52住→25住→21住→13住

規模 縦2.65m 横3.68m 深さ18~21cm **形状** 長方形 東南隅はなで肩状で不明瞭。

床面 暗褐色土の貼床、北壁中央に段差9cm、踏み台様の小さな張り出し部分がある。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 いずれも確認できなかった。

遺物出土状態 壁際を除く全体に散在して出土、そのレベルからするとレンズ状に堆積する1層にあり、流れこみと判断される。羽釜、杯、碗、灰釉碗があり、灰釉碗は14住のものと接合する。

カマド **位置** 東南隅 **規模** 全長1m 燃焼部長55cm 焚口幅45cm 煙道幅14~19cm 深さ11cm

袖 残存しない。南壁中央付近にある角安石が袖石か。

煙道 燃焼部の中央から外にのび、10cmの段差を持つ。

遺存状態 燃焼部の床から焚口前には灰が分布。羽釜、皿が中から出土している。

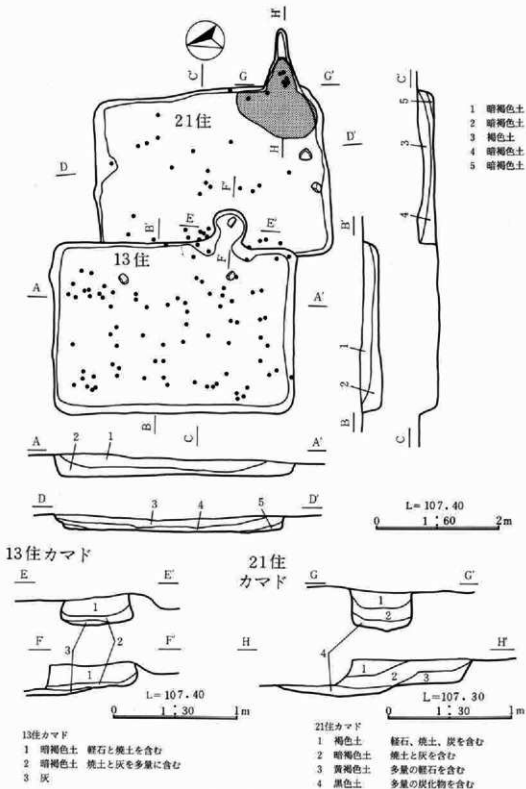
時期 平安時代 11世紀

14号住居（第22図、図版15-1、15-2）

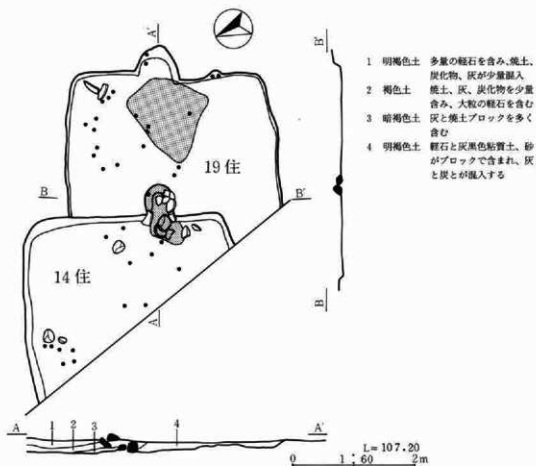
位置 1P-19・20グリット **主軸方位** N69°W **重複** 19住→14住

規模 縦2.85±αm 横3.35m 深さ18~23cm 西側は調査区域外のため未調査。形状 方形か

床面 褐色土の貼床、厚さ2~5cmでやや固く締まっている。



第21図 13号・21号住居址遺構図



第22図 14号・19号住居址遺構図

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 いずれもなし

遺物出土状態 カマド使用の土器と角安石、住居外からの流れこみの土器とがある。カマド使用の土器は燃焼部内壁の補強材としているもので、灰軸椀の破片が21住出土のものと接合している。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長60cm 焚口幅36cm 支脚の位置からすると長い煙道がつく。
袖 住居の壁際に直接、角安石をたてて袖石とし、鳥居状にわたしている。

遺存状態 角安石は焚口付近の構造材として使用され、燃焼部の内壁は土蓋が貼付されていて、構造上のちがいを示している。支脚は燃焼部の中央部にある。内部は、焼土と炭化物、灰が多く、一部が右袖側にかき出されている。

時期 平安時代 11世紀

19号住居 (第22図)

位置 10・P-18・19グリッド 主軸方位 N66°W 重複 19住-14住

規模 縦2.65±0.06m 横3.40m 西側は14住の重複と調査区域外で未調査である。形状 方形か

床面 褐色土の貼床、厚さ4～8cmで灰が互層状態にある。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 いずれもなし

遺物出土状態 須恵器甕、小型台付甕、杯がいずれも破片で散在している。須恵器の甕口縁部片は、8・9住床下出土のものと同一体だが接合しない。

カマド 位置 東壁中央北寄り 規模 焼土の残存範囲をカマドとしたので法量不明。住居内中央にかけて灰が分布する。わずかに小型台付甕の破片が出土している。

時期 平安時代 9～10世紀

15号住居（第23図、図版15-3）

位置 10・P-21～23グリット 主軸方位 N78°W

重複 30住→23住→15住

規模 縦3.95m 横3.20m 深さ15cm 南西隅は調査区域外のために未調査である。形状 方形
床面 暗褐色土の貼床。中央部で良好に見られるが南北両壁側は掘り方と関係してか、少し軟弱。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 写真では中央部付近に円形の土坑が2基判別できるが図面と記録類がない。

遺物出土状態 住居全体に分布するが出土レベルからすると埋没土の1層に含まれるものが多い。この中で甕の胴部破片が22住出土のものと同接合している。組成は、床直で羽釜、杯、椀があり、1層中のものとして甕、砥石がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長135cm 燃焼部長65cm 焚口幅40cm

袖 住居の壁際に袖石を貼付するタイプで図示した角安石は右袖石の可能性がある。

煙道 燃焼部中央から外に素掘り円筒状ののび、先端が煙突様に直立すると考えられる。

時期 平安時代 11世紀前半

23号住居（第23図、図版18-3、19-3）

位置 10・P-21・22グリット 主軸方位 N59°W

重複 30住→23住→15住

規模 縦2.0+αm 横3.40m 深さ7～12cm 西壁は15住重複のために不明。形状 長方形
床面 暗褐色土の貼床、南北で6cmの比高差があるのを始めとして全体に不安定な状態にある。

貯蔵穴 カマド右下、住居東南隅が土坑状にくぼむ。72×67cm 深さ12cm 北側に灰が分布。

周溝、柱穴、掘り方 37・38住、15住との重複のために確定できない。

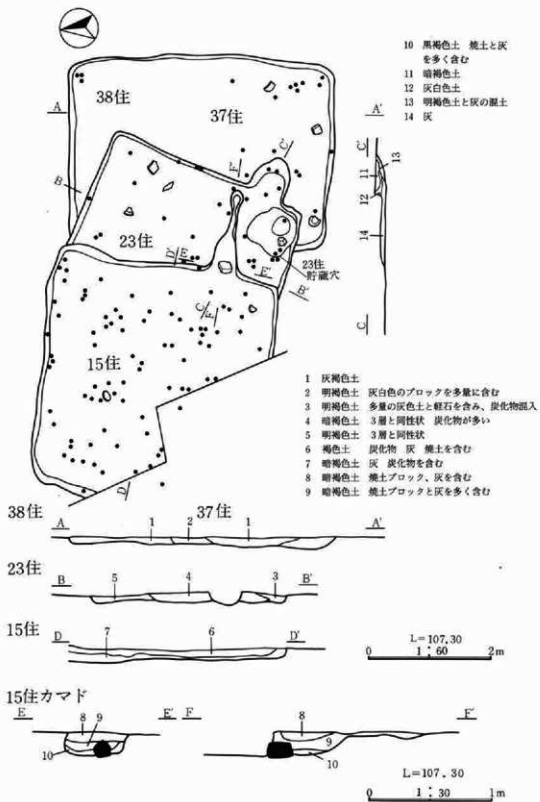
遺物出土状態 住居内に散在する。羽釜、杯、皿、灰釉椀、布目瓦がある。全体で破片数54と少なく焚口前を除いて出土レベルが高い。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長65cm 最大幅55cm

袖 燃焼部は住居外にあり、住居の壁に袖石を貼付するタイプか、残存しない。

煙道 燃焼部先端中央が突出することから、段差をもって外にのびるタイプと考えられる。

遺存状態 袖石、支脚等を残さず、掘り方に近い。しかも上面の殆どを削平された状態で確認された。遺物は羽釜胴部、椀の小破片が数点あるが掘り方の充填土に含まれる。



第23図 15号・23号・37号・38号住居址遺構図

時期 平安時代 11世紀第2四半紀

37・38号住居（第23図，図版25-1）

調査時に2軒としたが、埋没土、遺物、平面形状とカマド等の点で検討したが区別することができず、本報告では1軒とする。番号は、資料の記録、保管上、そのままとする。

位置 1N・O-21・22グリット 主軸方位 N85°W

重複 54住→37・38住→20住、23住→15住

規模 縦3.15m 横4.25m 西壁は南西隅を残して23住との重複のために不明。形状 長方形

床面 暗褐色土の貼床、全体に軟弱で不安定。37住側が4cm前後深い。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 不明

遺物出土状態 37住側の南壁沿いと北東隅で杯、椀、甕が出土。図示した2の杯は、埋没土2層中の混入で、1の椀、3の杯が本住居の時期を示す。

カマド 確認範囲では痕跡がなく、埋没土、床面上でも焼土、灰等の混入や分布が見られなかった。

また、南壁沿いにある角安石も袖石と推定できなかった。従ってカマドはない可能性が高い。

時期 平安時代 10世紀前半

16号住居（第24図，図版16-1、16-2、17-1）

位置 1M～O-13～15グリット 主軸方位 N73°W 重複 17住→16住

規模 縦3.15m 横3.30m 南西隅は確認が深くて不明瞭。形状 方形

床面 暗褐色土の貼床、全体に平坦である。

貯蔵穴 東南隅に遺物の集中が見られ、掘り方でも円形で椀状にくぼんだが確定できない。

周溝 なし 柱穴 掘り方で大小5基のピットがあったが不整列である。掘り方 なし

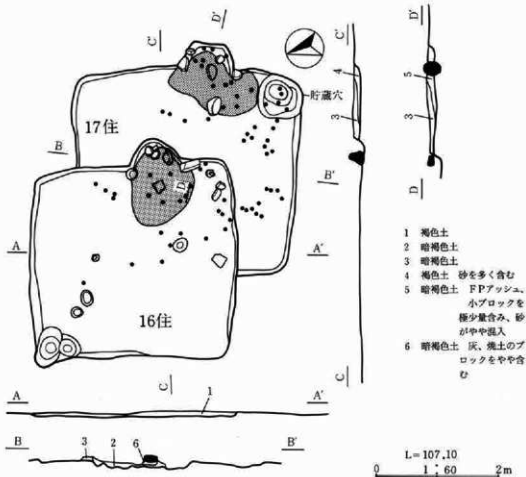
遺物出土状態 カマド内から東南隅に集中、床直に近いものが多く、個体数も多い。コの字口縁壺、杯、椀がある。

カマド 位置 東壁中央南寄り 規模 全長45cm 最大幅82cm

袖 住居の壁際に砂岩の切石をたてる。左袖はすえつけ穴が残る。18×15cmの楕円形、深さ10cmで掘り方からすると切石を内傾してたてる。焚口前にある切石が袖石と考えられる。現存長26cm 幅16～16.5cm 厚さ5.8～6.8cm 被熱で全体に赤い。左袖は、壁際に倒れていた。法量では右袖を少し角柱状にしたもので40cmを越すと推定される。煙道 不明

遺存状態 痕跡だけが焚口の様子、袖石に構造復元の材料がある。燃焼部は、壁外にのびるが箱形の掘り方内に角安石を石垣状に積んだ9住カマドに近い構造と推定される。左壁に2段分が残る、先端に袖と同様切石が使用されている。

時期 平安時代 9世紀末～10世紀初頭



第24図 16号・17号住居址遺構図

17号住居 (第24図、図版16-2、17-2)

位置 1M~O-13・14グリッド 主軸方位 N68°W 重複 17住→16住

規模 縦3.24m 横3.60m 深さ8~10cm 西壁は16住重複で南西隅を残して不明 形状 方形
床面 暗褐色土の貼床

貯蔵穴 南東隅にある。2段の掘り方を持ち、上が73×66cm、下が45×35cmともに方形で段差10cm深さは中央部で床面から28cm。角安石2点がずり落ちた状態にあり、上段の緑石の可能性はある。

周溝 なし 柱穴 床面での確認なし。掘り方で西壁際2基、焚口手前3基の円形ピットがある。

掘り方 なし

遺物出土状態 カマドより南半分で床直が多い。貯蔵穴内、カマド内、南西隅寄りに集中が見られるが個体数は杯、碗に多いものの接合例は少ない。南西隅寄りで◎と墨書した杯が出土している。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長50cm 最大幅72cm

袖 住居の壁際に角安石をたてて袖石とする。煙道 削平を受けて消失する。

遺存状態 箱形で最大幅1mを越す掘り方をもつ。角安石の両袖石と支脚、燃焼部内に2石を

残す。袖石間の1石を位置と大きさの点で支脚ではなく、焚口の間仕切り石とすると、燃焼部を同一とするが焚口と土器のかけ口を2つもつかマドと考えられる。右焚口のものに支脚が残る。左側は内壁に石が貼付されている。

時期 平安時代 10世紀

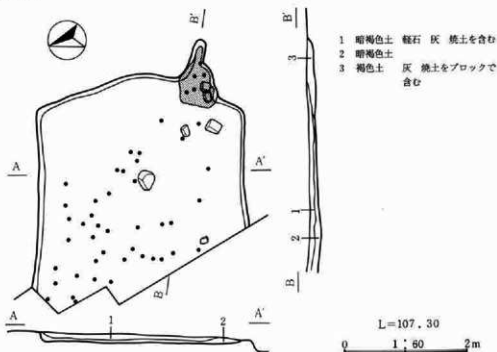
18号住居 (位置は全体図に示す)

位置 10・P-13・14グリット

規模 北東隅から約2mの範囲を確認しただけである。深さ約30cm 形状 方形か

床面 黄白色土のブロックを含む黒褐色土、軟弱で凸凹している。遺物出土状態 土師器の小破片約20点出土

時期 平安時代



第25図 20号住居址遺構図

20号住居 (第25図, 図版16-3, 17-3)

位置 10・P-20・21グリット 主軸方位 N71°W 重複 37・38住→30住→20住

規模 縦3.60+αm 横3.35m 西壁は調査区域外にあり未調査である。深さ18cm 形状 方形か

床面 暗褐色土の貼床 貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 不明

遺物出土状態 カマド内から北西隅にむかって帯状に多い。羽釜、土釜、杯、椀、敲石がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長95cm 最大幅58cm

袖 住居の壁際に角安石の袖石を貼付したと考えられ、焚口前1m付近にある2個がその可能性を持っている。内部にある砂岩の切石は焚口に鳥居状に横架したものである。

煙道 燃焼部から外へ43cmのびる。幅18cm 深さ10cm

遺存状態 浅い椀状の掘り方を持ち、焼土を含む灰が分布する。羽釜、椀が出土する。

時期 平安時代 11世紀

22号住居（第26図、図版18-2、19-2）

位置 10・P-23・24グリット **主軸方位** N60°W **重複** 39住→34A・B住→22住

規模 縦2.75m 横3.85m 深さ17~20cm **形状** 長方形

床面 暗褐色土の貼床、床面直上で炭化物が多量に分布する。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 埋没土1層中でまばらに出土、床直はカマドの周辺と焚口付近がある。羽釜、土釜、杯、椀、円筒ハニワがある。1の土釜は15住出土の破片が接合している。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長120cm 焚口幅35cm 燃焼部は住居内にある。

袖 貼床と同質の土を用いて作る。両袖に石をたてた上に左袖には円筒ハニワの破片を貼付して補強する。また、右袖の壁際にある石は袖の芯とした可能性がある。

煙道 壁外に70cmのびる。上面が焼けているが天井部の可能性がある。幅15cm 深さ10cm

遺存状態 右袖石、支脚は抜き取られている。燃焼部内には灰が残る。

時期 平安時代 11世紀前半

34A・B号住居（第26図、図版23-3）

調査時は、Bの南壁がAからのびる東壁と直交しない、遺物分布にちがいがあ、といった理由から2軒としたが、埋没土等の検討結果からは区分することはできず、1軒分の扱いとして報告をする。

位置 10・P-22・23グリット **主軸方位** N80°W **重複** 39住→34A・B住→22住、15住

規模 縦2.90m 横3.10+αm 南壁に15住、北壁に22住が重複し、ともに不明。**形状** 方形か

床面 灰白色土の小ブロックを含む褐色土の貼床である。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 確認なし 東南隅に円形土坑が重複し貯蔵穴の可能性がある。

遺物出土状態 北半分で記録があり、南は15住の掘り方を含む調査で取り上げられた。いずれも破片、しかも個体数が少なく組成を見ることはできない。報告の1の杯は覆土中からの出土で、15住か22住からの混入の可能性が高く、住居の時期決定資料としては疑問である。

カマド 調査範囲からは確認されていない。15住の重複部分に可能性がある。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

39号住居（第26図）

位置 10・P-22・23グリット **主軸方位** 不明 **重複** 54住→39住→34A・B住

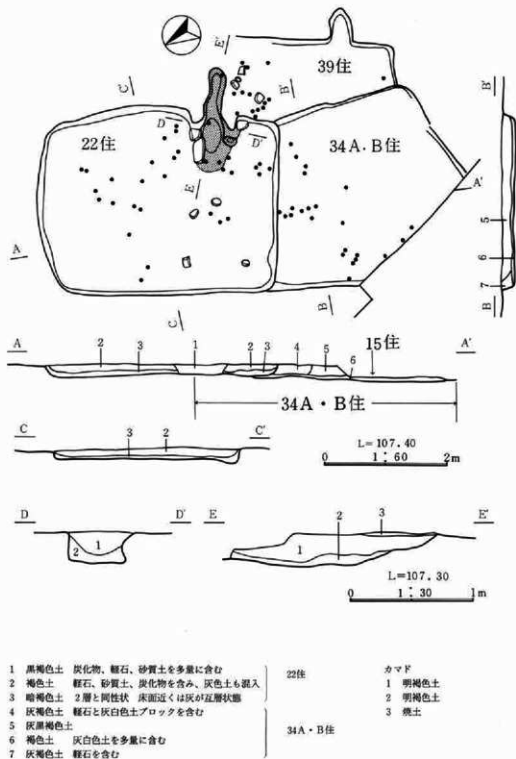
規模 縦2.0+αm 横2.90+αm 重複のために東南隅付近の床面だけが残る。**形状** 不明

床面 暗褐色土の貼床 **貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

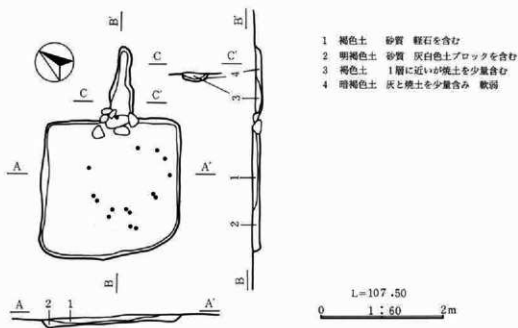
遺物出土状態 北東側の埋没土1層で出土、羽釜、壺、椀、灰袖椀がある。

カマド 東壁南寄りに痕跡を残す

時期 平安時代



第26図 22号・34A・B号・39号住居址遺構図



第27図 24号住居址遺構図

24号住居 (第27図, 図版20-1、20-2)

位置 1L・M-26・27グリット 主軸方位 N125°W 重複 なし

規模 縦、横2.15m 南西隅が特に丸い。形状 方形

床面 灰白色土を含む暗褐色土、南壁側は貼床のために掘りすぎている。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 南北両壁側に黒色土の落ちこみがあるが別の遺構と考えられる。

遺物出土状態 埋没土の1層中に流れこみ状態で羽釜、杯、円筒ハニワの小破片がある。カマド内からは皆無で住居の時期を決定する資料はない。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長120cm 焚口幅37cm 焚口に角安石、砂岩を使用する。

袖 住居の壁際に面取り調整をした角安石を2対内傾してたてる。その上に面取り加工をした砂岩を鳥居状に横架する。砂岩は長さ40cm、幅20cm、厚さ15cm。

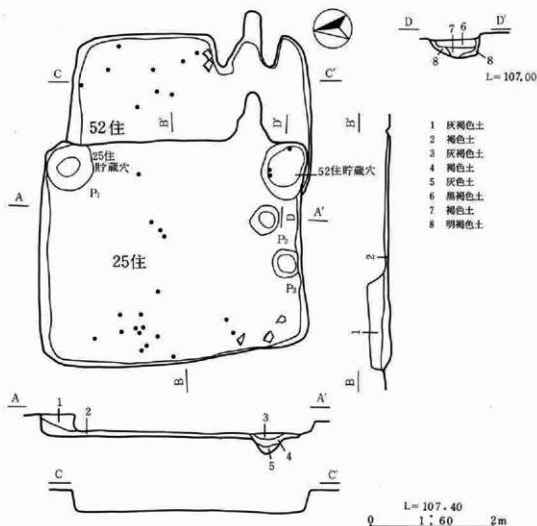
煙道 燃燒部から段差なく56cmのびる。幅17cm、深さ19cmで先端側で灰が多い。

遺物出土状態 袖石の1対は斜め手前に倒れ、横架した砂岩は真下に落下している。支脚の存在は不明だが焚口付近の構造材を残し、自然埋没したものと考えられる。遺物は羽釜片がある。

時期 カマドの構造や埋没土の混入遺物から平安時代の9～10世紀代と考えられる。

25号住居 (第28図, 図版20-3)

位置 1N・O-22～24グリット 主軸方位 N82°W 重複 55住→52住→25住→21住→13住



第28図 25号・52号住居址遺構図

床面 灰白色土のブロックを含む褐色土

貯蔵穴 P₁が相当する。規模は76×73cm、断面椀底状で深さ24cm、遺物は出土していない。

周溝 なし 柱穴 なし P₃とP₄は住居を切る別の遺構、P₃は46×45cm、深さ14cm、P₄は43×41cm、深さ13cmで、P₃は床上からの掘り方を持つ。

遺物出土状態 西壁際から中央部にかけて出土。埋没土の2層中ものが殆どで重複が繰り返えされた中での混入と考えられる。床面に近いものとして杯、椀、須恵器甕の各破片が少量あり、布目瓦は1層中の混入である。

カマド 東壁南寄り掘り方に近い状態が確認された。

時期 52住と21住との重複関係、P₃内の出土遺物の2点から平安時代 10世紀第4四半紀

52号住居 (第28図)

位置 1M・N-22・23グリット 主軸方位 N81°W 重複 52住→25住

規模 縦2.50m 横3.85m 西壁は推定を含み10cm前後広がる可能性がある。形状 長方形

床面 灰白色土を含む暗褐色土を固める。

貯蔵穴 南西隅に楕円形状の土坑がある。規模は88×72cm 断面袋状で深さ29cm、杯の破片が出土。

周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 北壁側とカマド左袖付近に少量が散在する。北壁側は住居外からの流れこみで、羽釜、杯、椀がある。袖際には布目瓦があり、補強材を含んでいる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 掘り方状態で残存 全長95cm 最大幅48cm

袖 住居内に袖をもつ。左袖の布目瓦は補強材。煙道 壁外に舌状の焼土と灰の分布

時期 平安時代 10世紀

26号住居 (第29図、図版21-1)

位置 1 O・P-24・25グリット 主軸方位 N89°W 重複 56住→53住→44住→26住

規模 縦2.95m 横3.55m 形状 長方形 床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土、一部貼床

貯蔵穴 なし 周溝 焚口前を除いてほぼ全周。幅3～6cm 深さ2～13cm 柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 南西隅を除いて全体から出土、埋没土1層中ものが多い。焚口前で出土した小型甕は27住、28住の埋没土中に破片が混入している。ほかに緑釉、鎌、杯、椀、羽釜、灰釉椀がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長70cm 最大幅65cm 袖石は抜かれて掘り方で残る。

袖 住居の壁際に石を貼付するタイプ。焚口手前の4個の角安石は、その位置からみて袖から外されたものと考えられる。煙道 燃焼部中央から段差をもち急勾配で外にのびる。

時期 平安時代 11世紀前半

40号住居 (第29図)

位置 1 P-24・25グリット 重複 58住→53住→44住→40住

規模 北東隅から各1m程を確認する。殆どは調査区域外にある。深さ55cm 形状 方形か

床面 44住埋没土を平坦にする。北端には床下円形土坑があり、暗褐色土で貼床をする。

遺物出土状態 埋没土6層中から羽釜、コの字甕、杯、軒平瓦の破片が出土した。

時期 平安時代

44号住居 (第29図、図版27-2)

位置 1 P-24・25グリット 主軸方位 N116°W 重複 58住、56住→53住→44住→26住、40住

規模 縦2.45+αm 横3.20m 西側は調査区域外のために未調査、東は26住の重複で削平。形状 方形か

床面 褐色土を踏み固めて平坦にする。53住、58住との重複部分は貼床されている。

貯蔵穴、周溝、柱穴 確認範囲内になし

遺物出土状態 床面上で羽釜、甕、杯、蓋、軒平瓦がある。この遺物の周囲には角安石2点があり、軒平瓦と合せてカマドの補強材と考えられる。

カマド 26住との重複で痕跡を残さないが東壁に推定される。

時期 平安時代 羽釜を基準にすると10世紀と考えられる。

53号住居 (第29図)

位置 1P-24~26グリット 主軸方位 N71°W 重複 56住→53住→44住→26住、40住

規模 縦2.75+αm 横3.60+αm 北東隅付近を確認、西側は調査区域で未調査。形状 長方形か
床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土、56住と58住との重複部分は貼床をして平坦にしている。

貯蔵穴 40住床下にある円形状の土坑が考えられる。東南隅にある。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 埋没土2層と12層から壺、碗、皿、鉄滓が破片で16点出土した。2層中のものは北側からの流れこみで、12層中のものが床直に近い。接合関係なし。

カマド 26住と44住との重複部分に推定されるが痕跡なし。

時期 平安時代 壺と碗の特徴からすると10世紀と考えられる。

56号住居 (第29図)

位置 1O・P-25・26グリット 主軸方位 N86°W 重複 56住→53住→44住→26住

規模 縦3.10m 横3.0+αm 南壁側に53住と26住とが重複する。形状 長方形か

床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土 貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 全体に散在し埋没土18層中のものが多い。コの字壺、須恵器壺、杯、碗が各4個体以上ある。破片が38点で接合関係は少ない。

カマド 26住が重複する東壁に推定されるが痕跡なし。18と19層中には灰と炭化物が多く含まれる。

時期 平安時代 羽釜と灰軸陶器を含まず、やや厚手のコの字壺や図示した須恵器杯の特徴からすると10世紀初頭頃と考えられる。

58号住居 (第29図, 図版32-1、32-2)

位置 1P-24・25グリット 主軸方位 N95°W 重複 58住→53住→44住→26住、40住

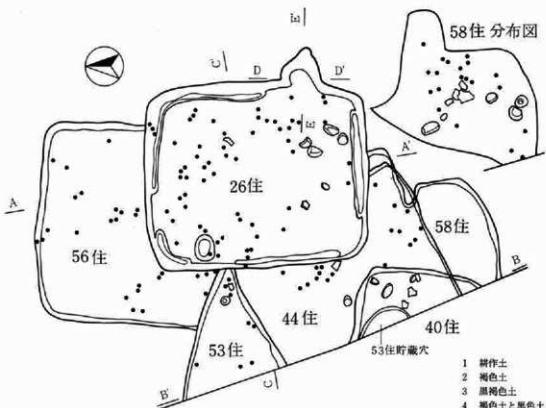
規模 縦1.80+αm 横2.65+αm カマドを含む東南隅付近を確認 形状 不明

床面 地山の暗褐色土を平坦に踏み固めている。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

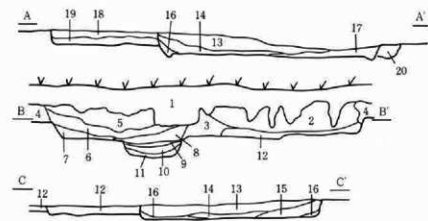
遺物出土状態 確認範囲の中央部に集中し、床直に近い状態で出土した。カマドはこわされた状態と推定されるが、遺物はカマド焚口前から東南隅壁際にかけての分布状況を示す。焚口前には接合例をもつ土師器杯4個体、壁際には須恵器の頸部以上を欠損する長頸壺と碗が並んで出土した。点在する角安石は形状や大きさからしてカマドの焚口から崩落したと考えられる。

カマド 東壁に掘り方と灰の分布を残す。住居内に長さ約25cmの舌状の袖痕跡がある。その位置からすると焚口は70cm前後の幅で、燃焼部の中心は壁前後にある。遺物の出土はなく、支脚の有無も不明である。

時期 奈良時代 8世紀後半



- 1 耕作土
- 2 褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 褐色土と黒色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 粘床
- 10 暗茶褐色土
- 11 暗茶褐色土
- 12 明褐色土
- 13 褐色土
- 14 褐色土
- 15 暗褐色土
- 16 明褐色土
- 17 暗褐色土
- 18 褐色土
- 19 褐色土
- 20 暗褐色土



カマフ

- 1 暗褐色土 軽石を含む砂質土
- 2 淡茶褐色土 多量の焼土と灰が混入
- 3 明褐色土 焼土と灰が少量混入
- 4 灰と焼土

L=107.40
0 1:60 2m



第29図 26号・40号・44号・53号・56号・58号住居址遺構図

27号住居（第30図、図版21-2、21-3、28-3）

位置 1M-O-24・25グリット 主軸方位 N79°W 重複 55住→48住→41住→27住
規模 縦3.25m 横3.15m 形状 方形 床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、重複部分は貼床、埋没土中には多量の炭化物と灰が分布するが特に床面直上に多い。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 埋没土の1層、2層中のものが殆どで床直状態は少ない。羽釜、杯、椀、須恵器壺、灰釉碗、瓶、軒平瓦の破片が約150点出土している。接合例は少なく、破片状態で流れこんだものが大半と考えられるが、硯の様な磨耗面をもつ灰釉碗の底部破片やコークス状に発泡した杯の破片、鉄滓が含まれている。

カマド 痕跡がなく当初からなかったと考えられる。床面直上の炭化物と灰は、埋没土中にも見られることからするとカマド関連ではなく、別の性格と考えられる。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

41号住居（第30図、図版25-2、25-3）

位置 1N・O-24・25グリット 主軸方位 N76°W 重複 55住→48住→41住→27住
規模 縦2.60m 横3.60+αm 北半分が27住床下であり横が20cm位広がるか。形状 長方形
床面 南半分は48住埋没土8層を平坦にする。北半分は灰白色土を含む暗褐色土を平坦にする。
貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 埋没土の4層中と床直上の5層中とから出土し大別される。羽釜、甕、須恵器壺、杯、椀、灰釉段皿、椀、瓶、鉄滓がある。羽釜は3個体以上ありカマド内と東南隅とで接合例がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長68cm 焚口幅40cm

袖 住居の壁に角安石を貼付する。燃焼部内にも2対の角安石が間口18～21cm、間隔7～12cmですえられ、その上面には横架した砂岩切石が崩落していた。

煙道 燃焼部中央から急角度で外に抜けるか。砂岩切石は、燃焼部との縁を切っていたもの。

遺物出土状態 砂岩切石ののって羽釜大形破片、燃焼部内から羽釜破片、椀がある。

時期 平安時代 10世紀第4四半紀

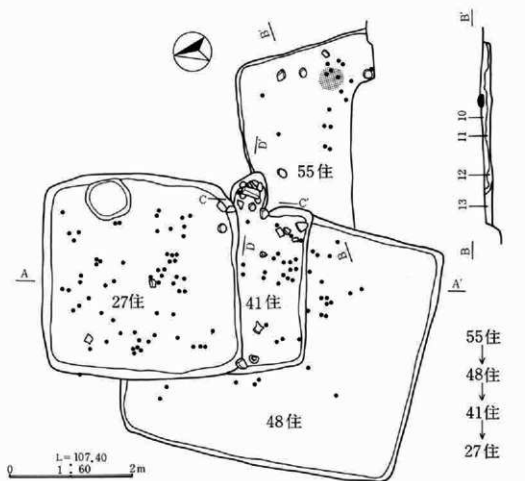
48号住居（第30図、図版28-3）

位置 1N・O-23～25グリット 主軸方位 N66°W 重複 55住→48住→41住→26住、27住
規模 縦3.95m 横4.55m 各壁は重複で大半が基底面で計測。形状 長方形
床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土、重複する住居の掘り方が残り段差があって一定しない。
貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 41住周辺の埋没土7層中で少量出土。羽釜、杯、椀、須恵器壺、蓋、灰釉碗がある。
床直は少なく、図示した1を含めて大半は南壁側から流れこんでいる。

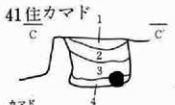
カマド 存在を示す資料がなく不明である。

時期 平安時代



- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 軽石 炭化物が混入 | 8 褐色土 軽石と灰色土が混入 |
| 2 黒褐色土 1層に近いが炭化物が多い | 9 黒褐色土 軽石と灰色土が混入 |
| 3 褐色土 床直に灰と炭化物が多い | 10 明褐色土 軽石と灰色土、鉄分凝集を含む |
| 4 褐色土 軽石を多量に含む | 11 暗褐色土 軽石を含む緻密土 |
| 5 黒褐色土 | 12 淡茶褐色土 軽石を含む緻密土 |
| 6 明褐色土 鉄分凝集が見られる | 13 褐色土 12層に近いが鉄分凝集がある |
| 7 褐色土 軽石を含む | |

41住カマド



- | | |
|--------|-------|
| カマド | |
| 1 暗褐色土 | 3 褐色土 |
| 2 暗褐色土 | 4 灰 |

第30図 27号・41号・48号・55号住居址遺構図

55号住居 (第30図)

位置 1M・N-23・24グリット 主軸方位 N95°W 重複 55住→25住→48住→41住
規模 北東隅付近を確認 縦2.95+αm 横2.20+αm 形状 隅は明瞭 ほぼ直角で方形の可能性
がある。

床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし
遺物出土状態 全体に散在する。埋没土もうすく土層での区別むずかしい。羽釜、コの字甕、杯、椀
の破片22点と鉄滓がある。鉄滓は東壁際の床面に径70cm程の範囲に集中する。滓の大きさは卵大位が
一般的である。図示した杯と椀は埋没土の上層で混入と考えられる。

カマド 確認した範囲に痕跡はない。角安石2点と河原石1点は袖石の可能性はある。

時期 平安時代 10世紀第2四半紀

28号住居 (位置は全体図に示す)

位置 1P-26・27グリット 主軸方位、形状 不明 規模 北東隅から東壁1.95m、北壁1.50mを確認
する。西側の殆どは調査区域外にある。床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土を平坦にする。
貯蔵穴、掘り方 なし 周溝 全周すると思われる 柱穴 北東隅寄りに33×24cm、深さ11cmのピット
が確認された。

遺物出土状態 埋没土中から羽釜、甕、杯の破片11点が出土。接合例、報告個体はない。

時期 平安時代

29号住居 (第31図、図版22-1、22-2)

位置 1O-29グリット 主軸方位 N93°W 重複 57住→50住→46住→36住、35住→29住
規模 縦2.85m 横2.40m 形状 方形 床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土 貯蔵穴、周溝、
柱穴 なし

遺物出土状態 埋没土上層である1層、2層中から殆ど出土。長甕、甕、杯、椀、長頸壺の破片21点
があるが接合例少なく、須恵器椀、刀子各1点がある。東壁際の角安石は本住居に伴うものではなく、
35住埋没土中に含まれる。

カマド なし 埋没土中にも焼土、炭化物、灰がなく、当初からカマドのない堅穴遺構と考えられる。

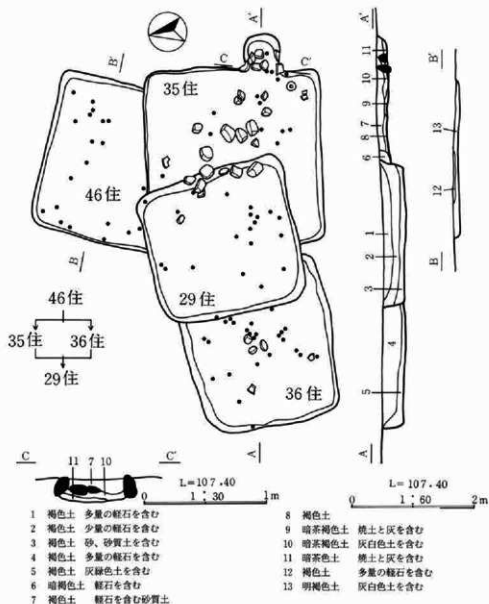
時期 平安時代 9世紀第3四半紀

35号住居 (第31図、図版24-1、24-2、24-3)

位置 1N・O-27・28グリット 主軸方位 N83°W 重複 57住→46住→35住、36住→29住
規模 縦2.70m 横2.80m 北壁で46住、西壁で29住と重複し西壁は南西隅以外は推定。形状 方形
床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土、46住とは殆どレベル差がない。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内から北西方向の住居中央部にかけて集中している。床直に近いものが殆どで
コの字甕、杯、椀、鉄滓がある。ほかにカマド用材と思われる大小20個の角安石が、29住埋没土の上



第31図 29号・35号・36号・46号住居址遺構図

層にまで流れこんだ状態で出土している。報告1の碗は57号出土の破片と接合している。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長65cm 焚口幅40cm

袖 住居の壁際に角安石を貼付する。焚口には一部を調整した3個の角安石を横架する。

煙道 燃焼部から約50度の角度で外にのびる。

遺存状態 袖石のほかにも燃焼部内壁に対角安石を貼付する。焚口から25cmの位置に角安石の支脚が使用時のままに残る。支脚、焚口部の状態からすると自然に倒壊したものでろう。

時期 平安時代 9世紀第4四半紀

36号住居 (第31図)

位置 1 O・P-28グリット **主軸方位** N92°W **重複** 57住→50住→46住→36住→29住
規模 縦2.55m 横2.30m 東壁は29住との重複のため推定を含む。**形状** 方形
床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし
遺物出土状態 埋没土4層の住居中央に集中する。北西方向からの流入傾斜を持ち、須恵器壺、蓋、杯の破片がある。下層の5層中には杯、碗、馬歯がある。馬歯は1本だけで混入したものか。
カマド 確認範囲になし。当初からカマドを持たない竪穴状施設か。
時期 平安時代

46号住居 (第31図、図版28-1)

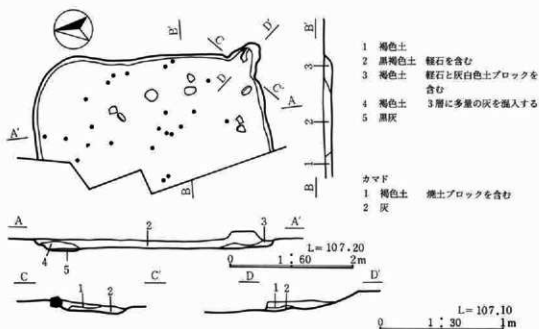
位置 1 N・O-28・29グリット **主軸方位** N68°W **重複** 57住→50住→46住→35住、36住→29住
規模 縦2.55m 横3.50m 29住、36住と重複する南西側半分は壁際での計測値。**形状** 長方形
床面 灰白色土のブロックを含む暗褐色土、36住の床面と殆ど差がない。
貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし
遺物出土状態 全体に散在している。床直に近い状態で長壺、杯の破片がある。長壺は北壁際の両隅での接合関係をもつが、杯とともに6世紀後半代のもので混入と考えられる。
カマド **位置** 東壁南寄りで35住床下に掘り方だけを残す。掘り方の規模は、全長50cm、最大幅42cmの舌状で焼土、灰、炭化物が見られる。
時期 平安時代 9世紀後半

45号住居 (位置は全体図に示す) (図版27-3)

位置 1 P・Q-28~30グリット **主軸方位** N75°W **重複** 57住→51住→45住
規模 縦2.0+ α m 横2.65m 西壁側は調査区域外のために未調査である。**形状** 方形と推定される。
床面 全体が51住プラン内にあり、灰褐色土を平坦にして同一の床として使用する。51住の建替えか。
貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし
遺物出土状態 全体に散在し、北半分は埋没土の上層が殆どで床直は焚口付近にコの字壺、杯がある。角安石は、焚口のものを除いて土器とともに北側から流れこんだものである。
カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長53cm 最大幅55cm 台形状の掘り方での計測値である。
袖、煙道 削平されて痕跡なし。焚口手前の角安石は支脚の袖石の可能性がある。
遺存状態 袖、支脚だけでなく、埋没土中に焼土、灰も少ない。
時期 平安時代 9世紀中頃

51号住居 (位置は全体図に示す)

位置、重複 45住と同様である。**規模** 縦1.75+ α m 横3.70+ α m 東壁沿いだけが確認される。
遺物出土状態 壁沿いとカマド内からコの字壺、杯、皿、刀子が出土している。床直が多い。



第32図 30号住居址遺構図

カマド 東壁中央近くにある。掘り方での全長は60cm、最大幅76cm、壁の出土状態からすると2個体が並んでかけられる構造と考えられる。

時期 平安時代 9世紀中頃 45住より少し古い。

30号住居（第32図、図版22-3）

位置 1P-20・21グリット **主軸方位** N89°W **重複** 30住→20住、23住→15住

規模 縦2.15±αm 横3.75m 西側は調査区域外のために未調査。形状 隅が丸い長方形か
床面 暗褐色土 全体に波打った状態、カマド手前の南壁側に厚さ3～5cmの灰層が分布する。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 床直に近い状態で羽釜、土釜、杯、灰釉碗の破片が40点ある。散在する角安石はカマド用材の可能性をもち、南壁側の2石は灰分布と合せてカマド痕跡とも考えられる。

カマド **位置** 東南隅 **規模** 全長45cm 最大幅52cm

袖 住居の壁際に砂岩の切石を貼付する。

時期 平安時代 11世紀

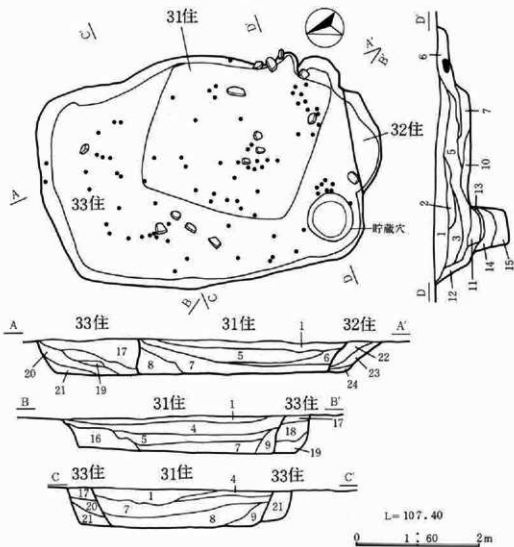
31号住居（第33図、図版23-1、23-2）

位置 1L・M-25・26グリット **主軸方位** N53°W **重複** 33住→32住→31住

規模 縦2.35m 横2.55m 壁は確認されず、埋没土層の状況と推定の基底部による計測値である。

形状 方形と推定したが埋没土の状況では東西方向に拡大するとも判断され、長方形の可能性もある。

床面 32住、33住と同一面で灰白色土ブロックを含む暗褐色土、全体に均質で平坦である。



- | | | | |
|---------|--------------------|----------|-----------------|
| 1 褐色土 | 多量の軽石と灰白色土をブロックで含む | 13 黄茶褐色土 | 灰白色土と褐色土ブロックを含む |
| 2 暗褐色土 | 1層に近いが軽石が少ない | 14 黄茶褐色土 | 灰白色土ブロックが多い |
| 3 暗褐色土 | 1層に近いが暗い色調を呈する | 15 黄茶褐色土 | |
| 4 暗褐色土 | 軽石を多量に含み、かたくなる | 16 暗茶褐色土 | 軽石と灰白色土ブロック混入 |
| 5 褐色土 | 軽石を含む | 17 褐色土 | 軽石を含む |
| 6 灰 | カマドの灰出土 | 18 暗褐色土 | 軽石を含み、床近くに灰が分布 |
| 7 暗褐色土 | 軽石を少量含む | 19 暗褐色土 | 灰白色土ブロックを含む |
| 8 暗褐色土 | | 20 暗褐色土 | 軽石を含む |
| 9 暗褐色土 | 灰白色土が混入 | 21 暗褐色土 | 灰白色土ブロックを含む |
| 10 暗茶色土 | 軽石を少量含む | 22 暗褐色土 | 軽石を多く含む |
| 11 茶褐色土 | 上位に灰白色土ブロックを多量に含む | 23 黄茶褐色土 | 灰白色土をブロック状に含む |
| 12 茶褐色土 | 灰白色土と砂をブロックに含む | 24 暗茶褐色土 | 少量の鉄分凝集と灰を含む |

第33図 31号～33号住居址遺構図

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド部分を除き床直はなく、殆ど埋没土上層に流入している。カマド内から南壁沿いに埋没土6層の灰が厚く堆積するが遺物はこれで上下に区分されるかのようである。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長35cm 焚口幅37cm 住居床面と燃焼部に約20cmの段差がある。

袖 住居の壁際と燃焼部内に角安石が3石残る。袖石との区別がむづかしい。

遺存状態 燃焼部だけが残る。先端で遺物が出土。カマド左脇の住居壁外にかかって舌状の灰層分布があり32住のカマドの可能性はある。

時期 平安時代 11世紀後半 白磁は埋没土の下層中から出土している

32号住居(第33図、図版23-2)

位置 1L・M-25グリット 33住南壁から隅の一部が張り出した状態で確認された。

規模、形状、主軸方位 内部施設については重複部分にあり不明である。床面 31住と同じである。

遺物出土状態 31住、33住と同一範囲で確認をしたが埋没土上位から流れこみの状態で出土した。

時期 平安時代

33号住居(第33図、図版23-2)

位置 1K-M-25・26グリット 主軸方位 不明 重複 33住-32住-31住

規模 縦3.20m 横4.90m 形状 長方形 各壁は少し弧状で南壁は31住との重複で消失している。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土。31住、32住と同一面、全体に均質で平坦である。

貯蔵穴 南西隅に円筒状土坑がある。直径70cm、床面からの深さ60cm 灰白色土の斑状ブロックを含む褐色土で自然埋没。遺物の出土はない。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 31住と同様に埋没土上層で流れこみ状態で多くが出土した。壁際を空白帯とし大半が住居中央部の上層に集中している。いずれも破片ながら羽釜、杯、椀、内黒椀、須恵器壺、蓋、短頸壺、高杯、灰軸椀、軒平瓦がある。9世紀前半代を最古にし10世紀代が主体をなす。接合例は殆どないがカマド前の羽釜個体を時期判定資料とする。

カマド 位置 東南隅 規模 全長45cm 最大幅63cm 掘り方の状態で確認される。袖、煙道 不明

遺物出土状態 焚口手前の床面で羽釜の破片が出土している。

時期 平安時代 10世紀

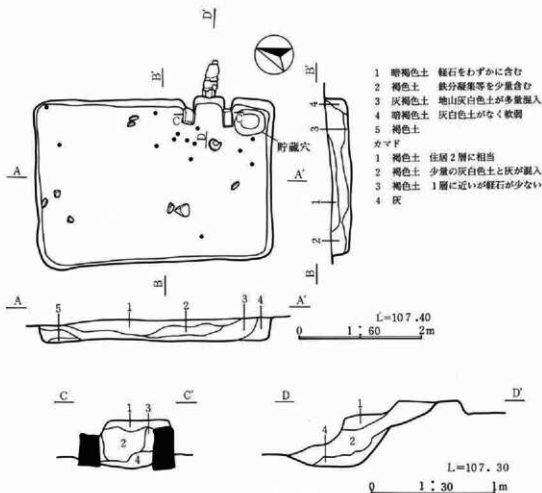
42号住居(第34図、図版26-1、26-2、26-3)

位置 1M・N-29・30、2M・N-01グリット 主軸方位 N110°W 重複 なし

規模 縦2.65m 横3.80m 形状 長方形 南壁と西壁が10~15cm短い。掘り方 四隅は明瞭である。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、全体に均質で平坦堅緻である。

貯蔵穴 カマド右袖で仕切られた格好の住居東南隅が45×55cmの範囲で床面より一段くぼむ。掘り方を持たないが隅の空間を間仕切って施設にしたものと考えられる。



第34図 42号住居址遺構図

周溝 各壁は直線と垂直に近い掘り方で四隅もしっかりとしているが溝状の痕跡はない。

柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 壁際を除いて散在する。埋没土では、上位の1層と2層の流れこみ遺物と3層下部と床直のものに大別される。床直では、焚口手前に杯2個体と燹破片がある。煙道に長甕と丸胴甕が使用されているがカマド本来で使用する煮沸用の大型個体がない。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長130cm 焚口幅45cm

袖 住居の壁から内側20cmの位置に面取り調整をした砂岩を袖石としてたて、その間を褐色土で充填している。埋没土の1層は天井部と考えられる。

煙道 下胴部をうちかき調整した長甕と丸胴甕3個体を煙突状につなげている。確認長60cm、26度の傾きを持っている。燃焼部とは25cmの段差を持ち、壁との間に10cmのすき間がある。

遺存状態 燃焼部は床面から8cm低い椀底状の掘り方で灰が厚く残っていた。煙道も自然埋没した状態で2層が開口部から流入している。焚口横架材、支脚については不明である。

時期 奈良時代 8世紀第2四半紀

43号住居（第35図、図版27-1）

位置 2M・N-1・2グリット 主軸方位 N76°W 重複 60住→47住→59住、43住→49住

規模 縦2.55m 横3.05m 北壁に比べて南壁が20cm狭い 形状 長方形

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、全体に均質で平坦。焚口前が円形に5cm前後くぼみ、中心に直径40cm 深さ10cmの断面碗底状のピットがあく。上面をカマド内からの灰層が床面まで分布する。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 南西側の49住重複部分は貼床を施している。

遺物出土状態 全体に散在するが殆どは埋没土1層中のもので、カマド内が床直である。長壺、杯、羽釜、須恵器甕、碗、灰軸碗の破片があり、カマド内の羽釜に接合例がある位で大半は流れこみである。1層中に混入する土師器碗の破片が南にある60住出土の破片と接合している。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長65cm 最大幅50cm 掘り方は台形状でしっかりしている。

袖 住居の壁際に舌状の基部を残す。住居内に少し張り出す形状と考えられる。

煙道 削平されてない。燃焼部とは段差をもって区別され、傾きのある煙突状のものと考えられる。燃焼部との境に長方形の角安石1個が残るが、上屋施設と関連したものであろうか。

遺存状態 袖は痕跡だけ、天井部も崩落流失している。遺物も羽釜の小破片が左壁側で出土した位で使用時の状態を示していない。

時期 平安時代 10世紀

47号住居（第35図、図版28-2）

位置 1O・P-30～2O・P-2グリット 主軸方位 N80°W 重複 60住→47住→59住、43住→49住

規模 縦3.0m 横4.50m 南西隅だけ調査区域外のために未調査である。形状 長方形

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、焚口前と北壁際は貼床でやや不安定にある。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 貼床下には不整土坑状のものが推定されるが記録類がない。

遺物出土状態 全体に散在し埋没土の上層に多い。約2m離れて接合する土師器碗をみると北西側からの流れこみが考えられる。北壁沿いは敲打具や滑石製紡錘車があり原位置に近い状態である。組成はコの子壺、杯、碗、皿、須恵器甕、蓋の破片があり9世紀後半代のもので主体である。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長60cm 最大幅82cm 掘り方での計測値である。

袖 痕跡はないが壁際が少し高い。煙道 削平されてない。

遺存状態 袖、支脚とも不明で燃焼部も掘り方に近く、下面に灰が見られる位である。遺物は左壁側に甕破片が残る。

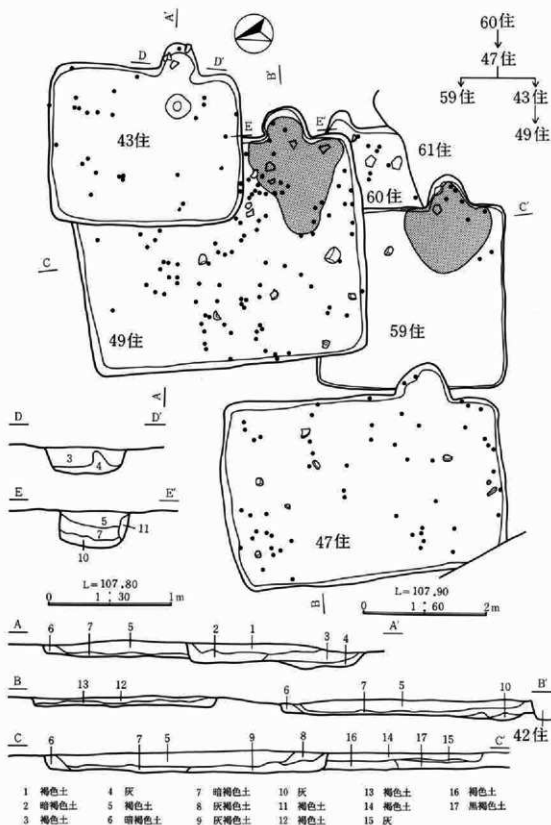
時期 平安時代 9世紀後半

49号住居（第35図、図版29-1、29-2、29-3）

位置 1N・O-30～2N・O-2グリット 主軸方位 N80°W 重複 60住→59住→49住

規模 縦3.45m 横4.45m 北東隅側に43住が重複する。形状 長方形 壁は直線的で垂直の掘り方。

床面 灰白色土ブロックを多く含む暗褐色土、全体に均質で平坦にしている。壁際が少しくぼむ。



第35図 43号・47号・49号・59号・60号住居址遺構図

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし **掘り方** 59住と60住との重複部分は貼床で、掘り方として未調査である。
遺物出土状態 住居中央部に集中するが埋没土上層の5層が多い。カマドに使用された瓦が焚口付近にまで流出しており、接合例も広範囲で多い。9世紀前半の遺物も含むが羽釜が主体で、杯、椀、内黒椀、灰釉椀、須恵器甕、皿のほかにかまどに使用された軒平瓦、軒丸瓦、西壁際から装飾金具4点、鉄鏝、刀子とその種類は多い。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長60cm 焚口幅50cm **袖**、燃焼部内壁に瓦を使用している。

袖 住居の壁際に軒丸瓦を芯としてたてつけ、褐色土を貼付している。

煙道 先端を42住重複で消失する。20cm四方の煙突状で火床面とは10cmの段差、約30度の傾きをもっている。

遺存状態 瓦は左袖を除いて破片となって住居内へ流出している。火床面の灰も焚口前に広く流出しており、煙道から流入する7層からすると崩落後、自然埋没している。

時期 平安時代 11世紀前半

59号住居（第35図、図版30-2、32-3）

位置 10・P-29・30～20-1グリット **主軸方位** N77°W **重複** 60住→61住→47住→59住、43住→49住

規模 縦2.90m 横3.0m 北壁は西隅を除いて49住が重複するために推定する。**形状** 方形
床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。焚口から半径1mの範囲に灰が分布する。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内と東壁寄りで散在する。接合例は重複する47住、60住、61住出土のもののが3例あり、住居の埋没に際して遺物が多方向に動いている。羽釜、杯、椀がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長60cm 最大幅70cm **掘り方**での計測値である。

袖、煙道 削平されて痕跡がない。

遺存状態 焼土、炭化物、灰を多量に残す。中央部の灰釉椀のうちかいた底部は支脚である。

時期 平安時代 10世紀前半 47住とは重複関係が逆転する可能性がある。

60号住居（第35図、図版30-2）

位置 1N・O-30～2N・O-1グリット **主軸方位** N76°W **重複** 60住→61住→59住、43住→49住

規模 縦3.40m 横2.30+αm 東壁を除いて重複のために一部を確認する。**形状** 方形と推定する。
床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。焚口前が楕円形状に5cm程くぼんでいる。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド周辺から流れこみの状態で甕、杯、軒平瓦などが出土する。報告した2点の杯はカマド脇と埋没土中からの出土で、住居の時期決定資料としては不明要素がある。

カマド **位置** 東壁 **規模** 全長45cm 最大幅50cm 椀状にした掘り方での計測値である。

袖、煙道 不明 **遺存状態** 焼土、炭化物、灰は少ない。

時期 7世紀中頃

57号住居 (第36図、第37図、図版30-2、30-3、31-1、31-2、31-3)

位置 1N~P-28・29グリット **主軸方位** N97°W **重複** 61住→57住→63住→50住→51住→45住
規模 縦6.50m 横4.63m 北壁は61住、63住との重複のために消失し推定する。**形状** 長方形
床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。重複する住居とは床面のレベル差がない。
貯蔵穴 東壁の隅隅寄りに2基が推定される。東南隅のものは、59×64cm 深さ25cm。東北隅は、隅全体が袋状になって壁外に約30cm張り出して楕円形をしている。周溝の位置からすると別遺構の可能性もあるが掘り方で区別するのはわずかしく、付属施設として考えておく。

周溝 全周したと考えられる。北壁の殆どと南壁の一部が不明である。規模は基底幅で10~20cm、深さ10cm前後で一定している。カマド部分は当初から途切れている。溝内の小孔の有無は不明である。
柱穴 主柱穴4基がある。P₁は25×24cm、深さ16cm、P₂は2基あり、30×27cm、深さ30cm、22×24cm、深さ27cm、P₃は40×40cm、深さ55cm、P₄は内側の掘り方で33×31cm、深さ23cmを測る。柱間は、東西方向で350cm前後、南北方向で250cm前後である。補助柱穴は確認されていない。**掘り方** なし

遺物出土状態 調査途中まで西半分を62住とし、遺物の扱いを異にしたために一様でないが、図示した東半分の状態が全体に見られた。焚口を中心とする東壁寄りに床直状態が多く、長壺2個体以上、杯、須恵器杯身がある。カマド内から焚口は長壺下部部、杯があり、使用時に近い状態か。中央部から北壁寄りには、埋設土上層が半数で床直には面取りした石、羽口破片、床に据えられた藤の底部がある。土器器に混じって小型の器種であるが杯身や藤の須恵器が使用されている。

カマド **位置** 東壁中央 **規模** 全長65cm 焚口幅50cm

袖 壁の内側に主に粘性のある灰褐色土を用いて舌状の袖を作る。袖石の有無は不明で内側が厚さ5cm程まで焼けていた。**煙道** 削平されてない。

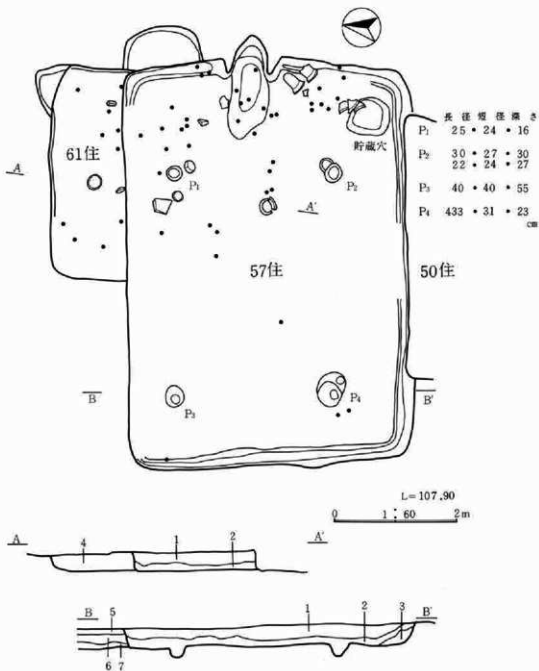
遺存状態 両袖を残して天井部、架設された長壺等が焚口前に崩落した状態にある。内部には焼土、炭化物、灰を先端近くまで厚く残す。

時期 7世紀第4四半紀

61号住居 (第36図、第37図、図版30-2)

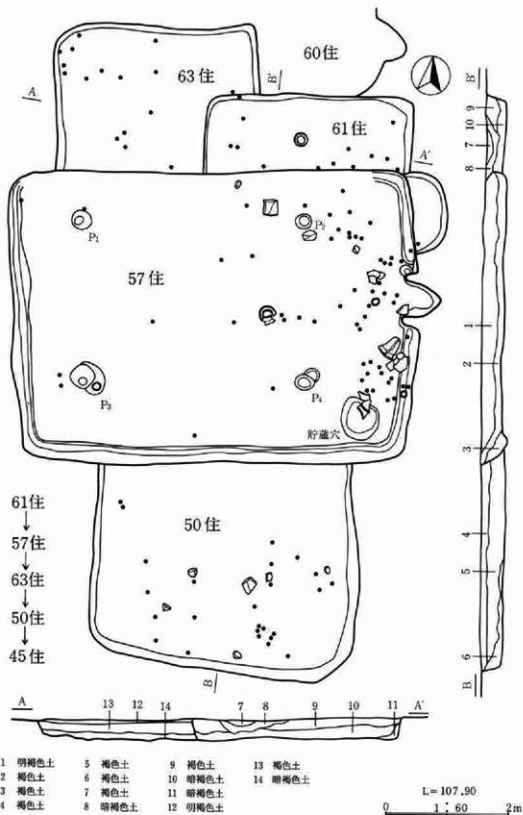
位置 1N・O-29・30グリット **主軸方位** N96°W **重複** 61住→57住→63住→50住→51住→45住
規模 縦3.25m 横1.25+αm 北壁側を残して南半分は57住と重複で消失する。**形状** 方形と推定
床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。57住、63住とレベル差がない。
貯蔵穴 東北隅が壁から35cmの奥行きで三角状に張り出す。57住東北隅と類似した袋状の構造である。
周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 全体に散在し、いずれも埋設土上層で床からは長壺口縁部と敲打具らしい石1点がある。長壺は、57住焚口付近の胴部破片5点と接合し、上面にある46住埋設土中にも混入している。61住使用のものが57住構築に際して、カマドの袖か補強用材として使用されたものと考えられる。カマドは、確認範囲にはなく、埋設土、床面上にも焼土、灰が見られない。



- 1 明褐色土 砂質 多量の軽石と鉄分、炭化物を全体に含む
- 2 褐色土 多量の灰白色土と軽石、炭化物、鉄分を含む
- 3 暗褐色土 灰白色土、鉄分、軽石を少量含む
- 4 褐色～暗褐色土 多量の軽石と灰褐色土ブロックを含む
- 5 明褐色土 多量の軽石と重層する灰色砂質土を含む
- 6 褐色土 地山と細砂土のブロックが混入する
- 7 暗褐色土 炭化物が多く、細砂土ブロックも混入する

第36図 57号・61号住居址遺構図



第37図 50号・57号・61号・63号住居址遺構図

時期 7世紀第3四半紀

50号住居 (第37図, 図版30-1)

位置 1O・P-27・28グリット 主軸方位 N92°W 重複 57住→50住→36住、35住→29住
 規模 縦4.25m 横3.45+ α m 北壁側は57住と重複のために消失する。形状 長方形と推定する。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 全体に少量が散在する。埋没土の上層と中層が殆どで杯、碗、骨片、刀子がある。報告した碗も埋没土5層からの出土で流れこみである。

カマド 確認範囲にない。埋没土中には炭化物が見られるが、床面上にはない。

時期 平安時代 9世紀第2四半紀 確証のある遺物はなく、57住との重複関係から判断する。

63号住居 (第37図, 図版30-2)

位置 1O・P-29・30グリット 主軸方位 N101°W 重複 60住→61住→57住→63住→47住→59住
 規模 縦3.25m 横2.35+ α m 南半分は57住と重複し不明である。形状 方形と推定される。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。61住、57住とは床面のレベル差がない。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 住居に伴うものはない。西壁外と北西隅に別の遺構が推定され、確定できなかったが住居を切る溝が斜めに縦断する可能性がある。遺物は、これら推定の遺構に伴うか流れこみである。

カマド 確認範囲にはなく、埋没土、床面上にも焼土、灰が殆ど見られない。

時期 奈良時代 遺物としての確証がなく、重複関係で判断する。8世紀

54号住居 (位置は全体図に示す)

位置 1N・O-22グリット 13住、15住、21住、23住、25住、38住、39住と重複関係を持ち、そのすき間に床面の一部が残る。重複する中では最古になる可能性があるが、方位、内部施設等については不明である。

規模 東西方向で3.60+ α m 南北では最大1mが計測できる。住居のどの位置かは不明である。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、13住、25住、38住よりも10~20cm高い。

埋没土 灰白色土と鉄分凝集を含む灰褐色土の単一層が確認範囲で見られた。遺物は杯の破片がある。

時期 平安時代 遺物では確認がなく、重複関係によるが古くなる可能性もある。

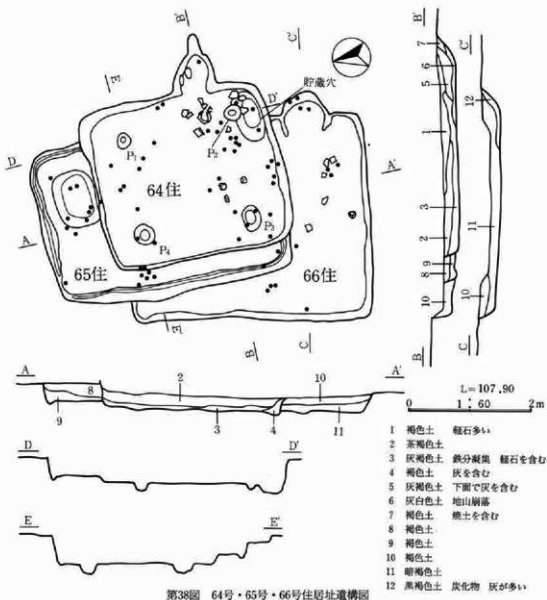
64号住居 (第38図, 図版33-1、33-2、33-3)

位置 2M・N-6・7グリット 主軸方位 N90°W 重複 66住→65住→64住

規模 縦2.65m 横3.0m 形状 方形 床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。

貯蔵穴 東南隅にある。規模は75×43cm、深さ34cmの楕円形で南壁を少し掘りこんで袋状になる。

周溝 なし 柱穴 主柱穴4本がある。P₁は24×21cm、深さ13cm、P₂は26×25cm、深さ18cm、P₃は38×



第38図 64号・65号・66号住居址遺構図

30cm、深さ29cm、P₄は34×27cm、深さ17cm、柱間は東西方向が150cmと165cm、南北が170cmと175cmを測る。

遺物出土状態 埋没土上層への流れこみを除くと、焚口前で下脚部を欠損した甕2個体が出土した。貯蔵穴の際からは須恵器碗がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長95cm 焚口幅42cm 煙道長30cm

袖 残存しない。壁際の地山は掘り残されて、内側に少し肥厚している。

煙道 燃烧部中央から30度の傾きで外に30cmのびる。上幅18cm、底面が焼けている。

遺存状態 底面に残る灰層が壁際から50cm付近まで流出し、甕類が共伴している。燃烧部左壁には1石が補強用に貼付され、1石が支脚の可能性をもっている。

時期 平安時代 10世紀第1四半紀

65号住居 (第38図, 図版33-1、33-2)

位置 1M・N-6・7グリット 主軸方位 N91°W 重複 66住→65住→64住

規模 縦2.55m 横3.75m 南壁と東壁の殆どは64住の重複で消失し推定する。形状 長方形

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土。西壁両端では南が約10cm低く、全体でも少し不安定である。

貯蔵穴 64住北壁に接して大方形土坑があるが確定できない。規模は90×70cm、深さ19cmである。

周溝 全周したと考えられる。規模は基底幅で5cm前後、深さ3～5cmを測る。柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 大形土坑上面、西壁際の際の2箇所に見られるが床直は少ない。コの字甕、杯、碗、灰釉碗の破片がある。接合例も少なく、報告個体はない。

カマド 確認範囲にない。

時期 平安時代 10世紀

66号住居 (第38図, 図版33-3)

位置 2N・O-6・7グリット 主軸方位 N78°W 重複 66住→65住→64住

規模 縦3.25m 横3.80m 東北側に65住が重複するため推定による。形状 長方形

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土。全体に波打ち不安定である。

貯蔵穴、周溝、柱穴 不明

遺物出土状態 カマド内と焚口前1m付近に集中がみられた。床直に近い状態だが接合例は少なく、個体を異にした破片が主である。コの字甕、杯、碗、灰釉碗がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長65cm 最大幅55cm 半円形の掘り方をもっている。

袖 壁際の地山をわずかに掘り残している。住居内に25cmの長さが確認される。

遺存状態 燃焼部から焚口前にかけて厚さ10cm近くで残る灰層が流出した状態にある。

時期 平安時代 10世紀第1四半紀

67号住居 (第39図, 図版34-1、34-2)

位置 2M・O-4～6グリット 主軸方位 N122°W 重複 67住→4溝

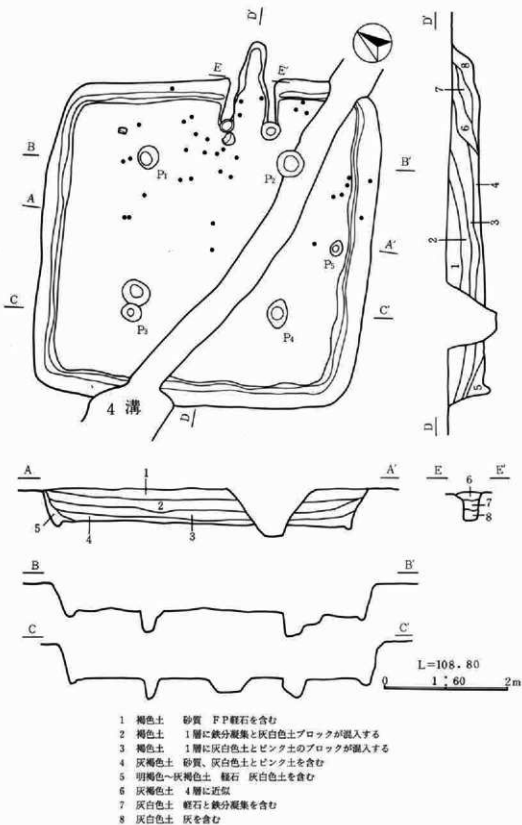
規模 縦5.20m 横5.25m 壁高は58～62cm、床面から30cm付近までは垂直に近い。形状 方形

床面 灰白色土ブロックを多く含む暗褐色土を平坦にする。東壁の北隅からカマドまでの幅1mの範囲が全体から約5cm高いが仕切られた様な痕跡はない。貯蔵穴 なし

周溝 全周する。規模は基底幅で6～8cm、深さ8～14cm、東壁側が浅い。直線的、中に小孔はない。

柱穴 4本主柱穴(P₁～P₄)、補助柱穴1本である。P₁は34×33cm、深さ39cm、P₂は39×41cm、深さ41cm、P₃は34×26cm、深さ38cm、P₄は45×32cm、深さ35cm、柱間は東西240cm、南北230cmを測る。P₅は23×17cm、深さ19cm、中に割石が入っていた。

遺物出土状態 層位では埋没土上面と焚口付近の床直に明確に区分される。床直は、焚口前に小破片が散乱し、袖に使用された長甕を除いて大型器種はなく杯が5個体程あるにすぎない。西半分は、破



第39図 67号住居址遺構図

片すら殆どなく、廃棄時に殆どが屋外に持ち出されたものと考えられる。

カマド 位置 東壁ほぼ中央 規模 全長150cm 焚口幅50cm

袖 端部に長甕下脚部を伏せる。右袖は甕が抜き取られて据えた痕跡を残す。

煙道 舟底状の掘り方を持ち、先端は約50度でせり上る。底面に灰を残す。

遺存状態 天井部、袖ともに崩落、住居内へ流出している。左袖脇の砂岩は、同様に流出した焚口が煙道基部の横架材と考えられる。

時期 7世紀第2四半紀

68号住居（第40図、図版34-3）

位置 2P-2・3グリット **主軸方位** N104°W **重複** 68住→79住→7竪穴

規模 縦1.35+αm 横4.55m 西側の殆どは調査区域外にある。**形状** 方形 隅が丸い。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土 **貯蔵穴**、**周溝**、**柱穴**、**掘り方** 不明

遺物出土状態 カマドから崩落した長甕、袖石が焚口前に集中する。甕は、報告の1が焚口の横架材、2が器表面の状態から煮炊用と推定される。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長50cm 最大幅40cm 住居内に燃焼部をもつ。

袖 端部に砂岩を貼付し、上に長甕を鳥居状に横架する。左袖は北西方向に流出している。

煙道 削平されてない。燃焼部と20cm以上の段差をもち壁外にのびると考えられる。

遺存状態 袖石、焚口上の長甕を残したままで自然崩落している。

時期 7世紀後半

79号住居（第40図、図版39-1、39-2、39-3）

位置 2O・P-3～5グリット **主軸方位** N102°W **重複** 68住→79住→7竪穴

規模 縦2.60+αm 横4.38m 西半分は調査区域外にある。**形状** 方形か 東南隅が張り出す。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、東南隅全体が2～3cm低く焚口前に灰が分布する。

貯蔵穴 掘りこみはないが、床全体の低さ、張り出した状態から東南隅全体を施設として推定したい。

周溝 なし **柱穴** 4基のピットが確認された。形状と規模の点で類似するが配置としては疑問である。住居を切る可能性もあるがP₄は、東南隅の構造と関係することも考えられる。**掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在し、埋没土下層から床直が多い。報告の甕はカマド使用のもので、3が左袖、2はそれと並置された丸底の甕で破片の一部は隣接する69住出土のものと同接している。

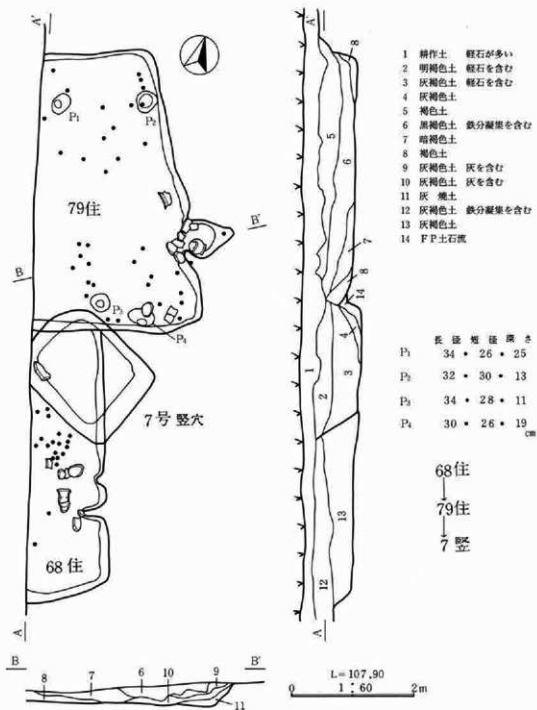
カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長95cm 焚口幅40cm 長甕と丸底甕を並置する構造と推定する。

袖 住居の壁際に石を貼付する。右袖は面取りした角安石を使用する。

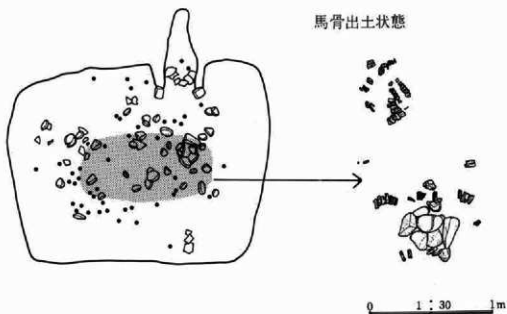
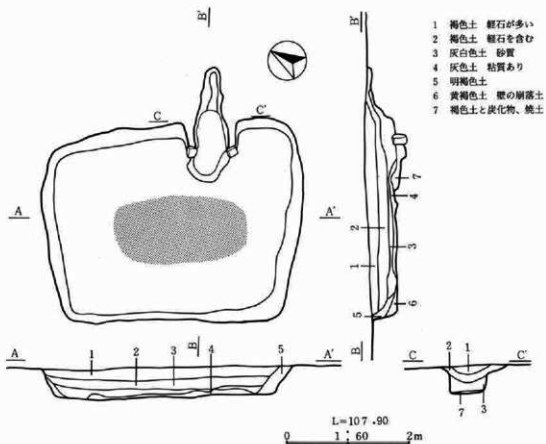
煙道 台形の掘り方中央から約50度の傾きで外にのびる。焼土を含む灰が厚く堆積する。

遺存状態 焚口は、甕をかけた状態で自然崩落している。

時期 奈良時代 8世紀第1四半紀



第40図 68号・79号住居址遺構図



第41図 69号住居址遺構図

69号住居 (第41図, 図版35-1、35-2、35-3)

位置 2N~P-2・3グリット 主軸方位 N118°W 重複 なし

規模 縦3.05m 横4.15m 形状 長方形 短辺の北壁と南壁は平行せず南壁側が広い台形状である。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。南壁から約1mまでが全体に5cm程高くなる。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 壁際約50cmを空白域にして住居中央部に集中する。焚口から中央部に床直のものが多く、須恵器甕、杯に接合例がある。この土器の集中域に重複して、カマド用とは別に40点を越す角安石の分布があり、南壁寄り中央のものは9石を平らに敷いていた。この敷石を頂点に遺物分布の中心から2頭分の馬歯が出土し、その状態から馬の頭部だけを埋葬した施設があったと考えられる。自然堆積した埋没土の様子からすると、住居の廃棄と馬の埋葬が前後した時期と考えられる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長180cm 焚口前の掘りこみを含む。焚口幅45cm

袖 住居の壁際から内側20cmの位置に砂岩の切石を対に置き、壁までを褐色土で充填する。

煙道 燃焼部中央から長さ55cmを測る。基底幅15cm、約30度の傾きをもっている。

遺存状態 内部は自然崩落している。袖石の奥に長さ10cm程の角安石8個が底面上の灰層に混じって直径40cmの半円状にめぐりが支脚なのか。その下面は浅い碗底状の掘り方をもつ。

時期 平安時代 9世紀前半

70号住居 (第42図, 図版36-1、36-2)

位置 2O・P-9・10グリット 主軸方位 N79°W 重複 76住→70住

規模 縦2.55m 横3.05m 形状 方形 床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、不安定である。

貯蔵穴 東南隅にある。60×55cmの円形で深さ16cmを測る。左袖前にも30×23cm、深さ8cmの小ピットがあるが用途不明である。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド前と貯蔵穴を中心にした範囲に多い。貯蔵穴内には杯2個体と灰釉碗1個体がある。破片の一つは、南30mにある57住のものと接合する。報告2の甕は、大型の個体で煙道基部の構造材と見られる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長50cm 焚口幅45cm

袖 右に面取りした角安石、左に地山の掘り残しが舌状の痕跡で残る。煙道 不明

遺存状態 中央部に攪乱がある。内部には、煙道まで続く焼土混じりの灰層が見られるが、天井部、焚口の殆どは自然崩落したと考えられる。

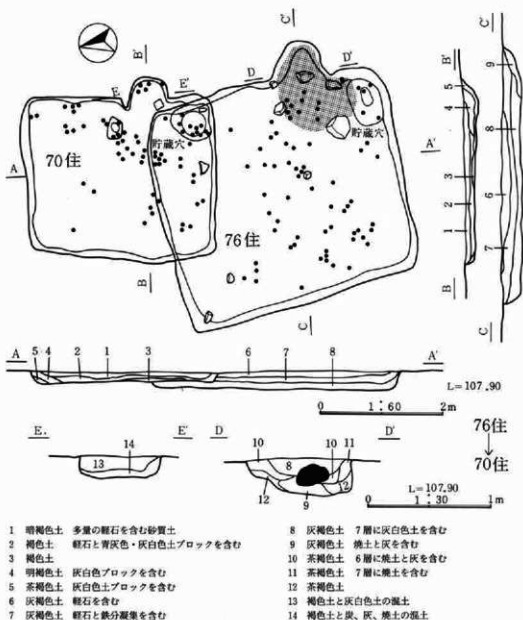
時期 平安時代 10世紀前半

76号住居 (第42図, 図版38-1)

位置 2O・P-8~10グリット 主軸方位 N90°W 重複 76住→70住

規模 縦3.60m 横3.90m 形状 方形 床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。

貯蔵穴 東南隅にある。規模は70×50cm、深さ25cmの楕円形である。周溝、柱穴、掘り方 なし



第42図 70号・76号住居址遺構図

遺物出土状態 70住と重複する北東側を除いて全体に散在する。焚口前にカマドから崩落したコの字甕、小型台付甕があり、貯蔵穴付近の床で杯が出土している。西壁寄りの埋没土上層が多い。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長75cm 最大幅70cm

袖 角安石を袖石に使用するが焚口前に流出している。

遺存状態 外側から焚口前に崩落している。袖石以外の角安石も灰分布の外縁にまで動いている。灰は天井部が崩落する以前に焚口前まで流出している。

時期 平安時代 9世紀後半 焚口前のコの字甕と小型台付甕による。

71号住居（第43図，図版36—3）

位置 2 O・P—11～13グリット 主軸方位 N101°W 重複 77住→71住

規模 縦3.30m 横3.90m 形状 方形 床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にしている。

貯蔵穴、柱穴、掘り方 なし 周溝 東南隅を除いてめぐっていた。基底幅4～6cm、深さ3～4cmを測る。

遺物出土状態 南西隅寄りの床直で14点の河原石とともに杯、蓋が出土している。石は、すり痕や敲打痕、凹痕をもつものがあり、隅の平たい石を台として複数の用途をもった道具と考えられる。この周囲での作業空間が推定される。北壁寄りには埋没土層の破片があり混入と考えられる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長75cm 焚口幅45cm 煙道は削平されている。

袖 住居の壁際に面取りした角安石をすえる。右袖石で長さ32cm 幅18cm 厚さ15cmを測る。

遺存状態 両袖石、内部底面に灰層を残すが焚口の横架材、支脚は取り去り、自然崩落したものと考えられる。内部からは殆ど遺物が出土していない。

時期 奈良時代 8世紀第3四半紀

77号住居（第43図，図版38—2、38—3）

位置 2 P・Q—12・13グリット 主軸方位 N105°W 重複 77住→71住→78住

規模 縦2.60+ α m 横3.65m 西壁側は調査区域外、東南隅に71住が重複する。形状 方形か 床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内から焚口前、住居中央部に散在する。角安石を主とする7点の石が重複するが床直面上のものが多い。焚口前に長燵破片がわずかにある位で、壺を主とする大型器種がなく、大半は杯で接合例が多い。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長65cm 焚口幅40cm

袖 住居の壁際に河原石をたてる。右袖は、長さ約30cmの扁平な石で内傾している。左袖から離れて角安石があるが支脚の可能性もあって確定できない。煙道 不明

遺存状態 右袖石を残して崩落している。内部には厚さ10cm近い灰層を残している。遺物は灰層上面にあり、埋没土混入ではなくカマド周辺での使用土器と考えられる。

時期 奈良時代 8世紀第2四半紀

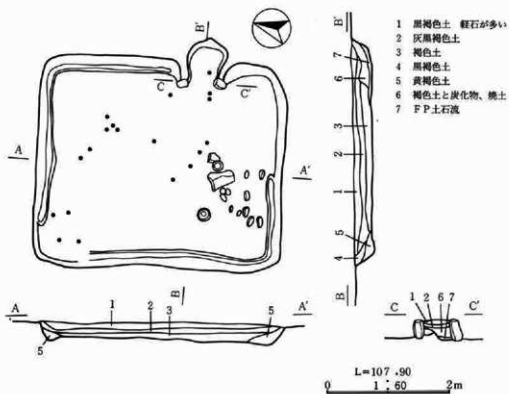
78号住居（第43図，図版38—2）

位置 2 Q—12・13グリット 77住を西へ2.30mずらした位置にある。重複 77住→71住→78住

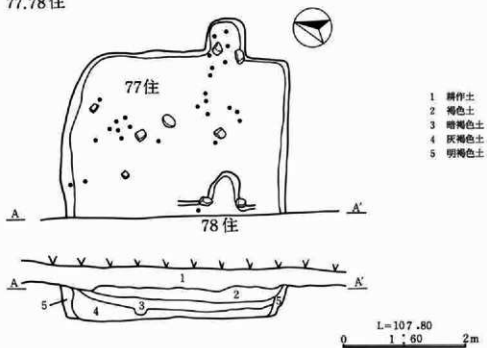
規模 カマドだけが確認され殆どは調査区域外にある。規模は断面では横3.20mを測る。形状 方形か。遺物出土状態 左袖石前で9世紀前半の土師器杯1点があるが流れこみである。カマド 住居の壁際に角安石をたてたもので、底面に灰を残している。

時期 平安時代 9世紀前半か。

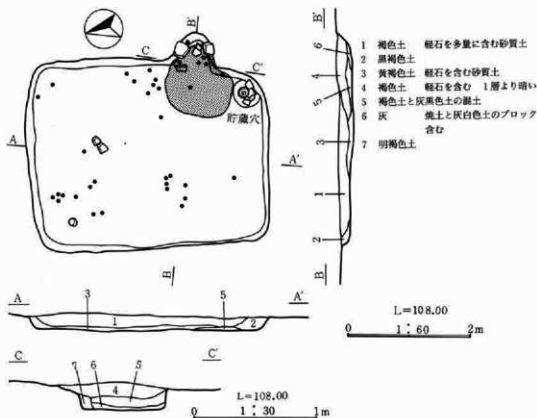
71住



77.78住



第43図 71号・77号・78号住居址遺構図



第44図 72号住居址遺構図

72号住居 (第44図)

位置 2 O・P-13・14グリッド 主軸方位 N80°W 重複 なし 規模 縦3.05m 横3.85m 形状 長方形 北壁に比べて南壁が40cm短い。床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土を平坦にする。

カマド内から焚口前半径60cmの範囲に灰層が分布する。周溝、柱穴、掘り方 なし

貯蔵穴 東南隅にある。40×35cmの円形で深さ7cmの椀底状である。上面に杯がある。

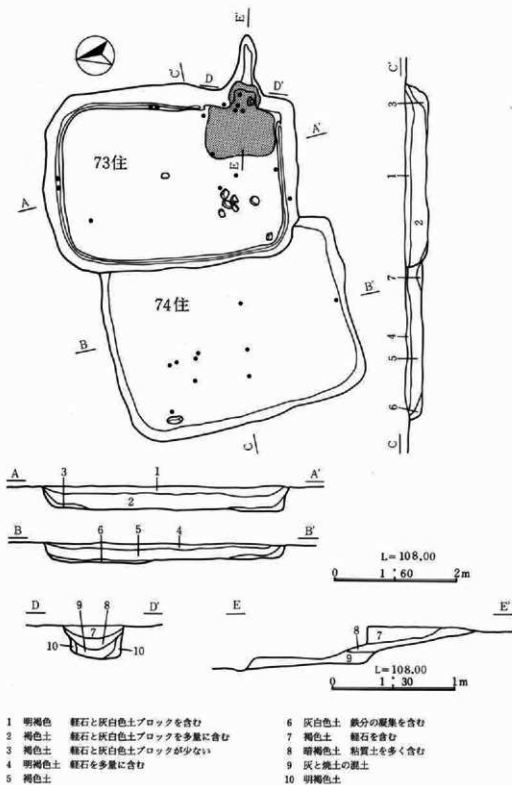
遺物出土状態 東西両壁際に散在する。カマド内のコの字甕と羽釜を除いて大型器種はなく、貯蔵穴での杯、東壁沿いでの椀に接合例が見られる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長60cm 最大幅62cm

袖 不明 煙道 削平されていない

遺存状態 燃焼部中央の両壁に面取りした角安石を貼付する。右は、内壁の補強材と考えられるが、右壁際からコの字甕、左壁際では羽釜の各破片が出土し、同じく補強材の可能性もある。甕の表面には焼土化した粘土が付着し、羽釜は破片状態で被熱し変色している。

時期 平安時代 10世紀第2四半紀



第45図 73号・74号住居址遺構図

73号住居（第45図、図版37-1、37-2、37-3）

位置 2M・N-12・13グリット 主軸方位 N81°W 重複 74住→73住

規模 周溝の基部で計測 縦2.55m 横3.60m 形状 長方形 四隅が丸くなる。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、全体に均質で平坦である。周溝 カマド部分を残して全周する。規模は、基底幅で3～4cm 深さ2～4cm。を測る。貯蔵穴、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内、焚口前の住居中央、壁際に散在する。大型器種がなく、杯、碗、皿がある。カマド内では、内壁補強用として使用した軒平瓦2個体以上、軒丸瓦1点が主に左壁側に重なって出土した。南壁から軒丸瓦、東壁中央に砥石、釘がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長120cm 焚口幅40cm

袖 不明 灰の分布からすると崩落していると考えられる。煙道 長さ70cm 基底幅15cm 燃焼部と15cmの段差と12度の傾きをもつ。

遺存状態 左内壁に軒平瓦を貼付していたが全て焚口寄りに崩落している。大型器種がないことと合すると埋没以前に焚口部、天井部等が取り払われていたと考えられる。

時期 平安時代 11世紀前半

74号住居（第45図、図版37-1、37-2）

位置 2M～O-12・13グリット 主軸方位 N92°W 重複 74住→73住

規模 縦2.80m 横3.90m 東壁は南隅を残して73住が重複するために不明である。形状 長方形

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、全体に均質で平坦である。73住よりも約10cm低い。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 北西隅寄りで少量、しかも埋没土上層で出土している。報告する須恵器杯も埋没土の上層にあって流れこみと考えられる。羽釜、須恵器杯、甕、灰釉碗がある。

カマド 確認した範囲に痕跡はない。

時期 平安時代 9世紀第2四半紀

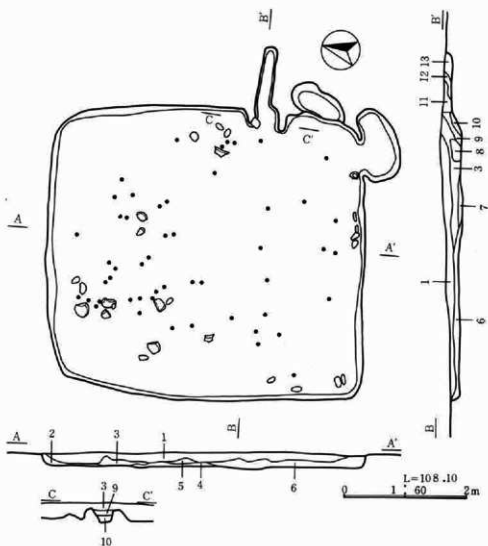
75号住居（第46図）

位置 2N～P-16～18グリット 主軸方位 N101°W 重複 なし 規模 縦4.60m 横5.05m 形状 方形 南壁を除いて弧状になる。隅は少し丸くなり、東南隅は貯蔵穴と確定できないが土坑状に張り出している。カマド右横の掘り方は別の土坑と考えられる。

床面 灰白色土ブロックを含む暗褐色土、東半分は埋没土の乱れがあり、床も不安定である。

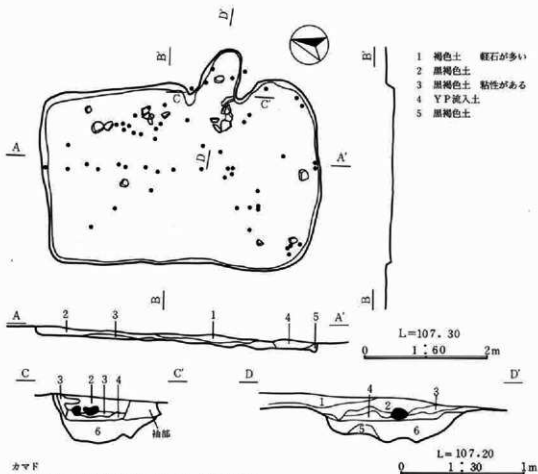
貯蔵穴 東南隅外の隅丸方形の土坑を推定する。規模は110×70cm、長軸は壁とほぼ平行するが、特に独立した掘り方をもっている点に特徴がある。底面は床面よりも約10cm高い。周溝、柱穴 なし

遺物出土状態 南は壁際で床に近いものが多く、特に敲打痕、すり痕をもった棒状の河原石が数個ずつかたまって列をなしている。北は壁際から離れて直径2m程の範囲に集中する。角安石を主とする石が13個、鉄滓3点、古墳時代後の高杯脚部などがあり、埋没中に流れこんだものと考えられる。報告の須恵器蓋と杯は南壁際のものである。



- 1 褐色土 礫石と灰褐色土を含む
- 2 黄褐色土 砂質 黒色土と灰褐色土を含む
- 3 灰黒色土 礫石と灰褐色土を含む
- 4 青黒色土 礫石と黄褐色土を含む
- 5 青褐色土
- 6 青褐色土
- 7 青褐色土
- 8 灰褐色土
- 9 青褐色土 焼土を含む
- 10 灰褐色土 灰、炭化物を含む
- 11 青黒色土 天井部崩落土
- 12 灰褐色土 焼土 炭化物を含む
- 13 灰褐色土 焼土 炭化物 灰を含む

第46図 75号住居址遺構図



カマド

- 1 褐色土 住居の2層に相当 焼土 灰 炭化物を含む
- 2 灰褐色粘質土 褐色粘土を主体に軽石 焼土を含む
- 3 焼土を含む褐色粘質土 炭化物も多く含む
- 4 灰 褐色粘質土を含む
- 5 黒色土とロームブロックの混土 灰を含む
- 6 黒褐色土 住居の5層に相当

第47図 80号住居址遺構図

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長135cm 焚口幅50cm

袖 住居内にあり長さ約30cmを測る。ローム粒を含む青黒色土を用いる。左袖は痕跡を残す。

煙道 長さ90cm 基底幅12cm 燃燒部とは約20cmの段差があり20度の傾きをもっている。

遺存状態 右袖がわずかに残る。内部は焼土、灰が少なく遺物は殆どない。左袖近くの角安石は、その形状から見て支脚の可能性がある。

時期 7世紀末

80号住居 (第47図)

位置 2K・L-19・20グリッド 主軸方位 N103°W 重複 80住-6溝、7溝

規模 縦3.0m 横4.40m 北壁が南壁に比べて30cm短い。**形状** 隅丸長方形 南壁は弧状をなす。
床面 黒色土と黄褐色土の混合土を平坦にする。南北両端で30cm近い勾配をもつが下面にある2枚の古墳時代水田址がくぼんだ結果と考えられる。焚口前には灰が分布する。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし **掘り方** 床下が20～25cm掘り下げられ、不整土坑状をなす。

遺物出土状態 中央より東側にかけて主に床直で出土する。器形を残すものが多く、近い位置での接合例がある。器種は、カマド内の長壺を除いて杯、椀が主で須恵器が多い。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長115cm 焚口幅55cm 135×95cm、略楕円形の掘り方をもつ。

袖 灰色粘土と黒色泥炭土の混合土の上に灰褐色粘土を馬蹄形にめぐらす。住居内に約30cmの長さをもつ。右袖端部から伏せた長壺が出土し、焚口の補強材と考えられる。

煙道 削平されている。残存状態からすると燃焼部と段差をもってさらにのびる。

遺存状態 火床面近くまで削平されているが、袖から燃焼部にかけて構築材の灰褐色粘土を厚く残している。中央の角安石は、灰層上にあるが支脚の可能性もある。掘り方と灰層中からも壺、杯の破片が出土している。

時期 奈良時代 8世紀第1四半紀

81号住居（第48図、図版40-1、40-2、40-3）

位置 2L～N-27～29グリッド **主軸方位** N87°W **重複** なし **規模** 縦4.30m 横6.20m

形状 長方形 南壁と西壁とが弧状になる。**床面** ローム層上面まで掘りこんだ上に、大小のロームブロック、YPを含む褐色土を用いて平坦にしている。

貯蔵穴 東南隅にある。規模は115×90cm、深さ45cmの隅丸方形である。

周溝 床面では確認されなかったが、掘り方では北壁から西壁際をめぐる帯状の掘りこみがみられた。上幅50cm前後、深さ6～21cmと一定せず、底面の凹凸も激しい。壁際床下での造作跡と考えられる。

柱穴 床面では確認されなかった。南壁中央から70cmの掘り方では直径30cm、床面からの深さ55cmの円形ピットがある。このピットと並列して、底面に石を置いた掘りこみがある。石はピット径に等しい20×15cmの割石である。ピットとの間は90cm、底面が10cm高いが、対をなして入口施設の基礎部分と考えられる。この石の周囲からは花卉状に散らした杯、椀の破片があり、埋納具の椽である。

掘り方 壁際の掘りこみのほかにも、黒褐色土を覆土とする不整土坑が中央と北壁側に見られる。ローム漸移層での波頭状をした掘りこみである。

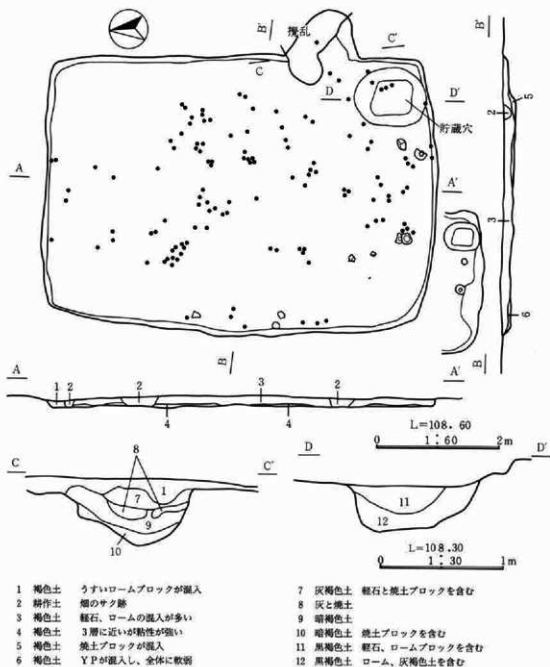
遺物出土状態 北壁側約1mの範囲が少なく、南と西の壁際に杯、椀、皿が多い。床直のものが多いが2点ある線刻紡錘車のうち「上」と記したものの様に床下から出土する例もある。カマド内からの出土量は少なく壺といった大型器種もない。

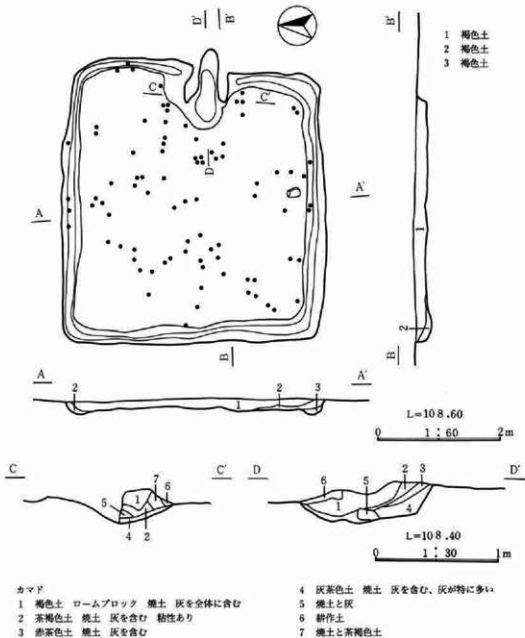
カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長115cm 最大幅110cm

袖 不明 **煙道** 削平されている。火床面と段差をもち壁外にのびる。

遺存状態 左側全体は攪乱されている。

時期 平安時代 9世紀後半





第49図 82号住居址遺構図

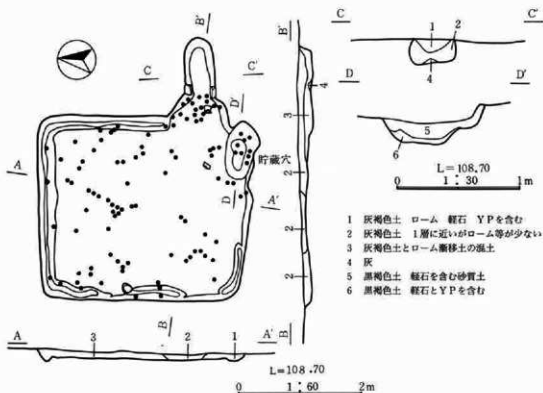
82号住居 (第49図, 図版41-1)

位置 3K~M-1・2グリッド 主軸方位 N88°W 重複 111→109→101→82→100→83住

規模 縦4.45m 横4.25m 形状 方形 北壁が南壁に比べて25cm短い。

床面 ローム層上面まで掘り下げて平坦にしている。貯蔵穴、柱穴、掘り方 なし

周溝 全周する。規模は基底幅で3~12cm、深さ5cm前後を測る。底面は凹凸が激しい。



第50図 84号住居址遺構図

遺物出土状態 全体に散在する。長巻、丸胴壺、羽釜、杯、椀の各個体がある。弥生時代を含めて重複による混入も多く、破片で接合しないものが殆どである。

カマド 位置 東壁中央 焚口と左壁に攪乱をうける。規模 全長95cm 最大幅80cm

袖、煙道 不明 **遺存状態** 底面上に厚く灰層を残す。上面の主要部分は攪乱される。

時期 奈良時代 8世紀

84号住居 (第50図、図版41-2、41-3)

位置 2M・N-2・3グリッド **主軸方位** N93°W **重複** なし **規模** 縦2.90m 横3.40m **形状** 方形 **床面** ロームブロックを含む黒褐色土を平坦にする。

貯蔵穴 東南隅にある。規模は75×45cmの楕円形、断面舟底状で深さ25cmを測る。羽釜、椀、硯の各破片が出土し、カマド内や硯の北東隅の破片との接合例がある。

周溝 全周する。規模は基底幅で5～8cm 深さ4～13cmを測る。柱穴 なし **掘り方** 不明

遺物出土状態 全体に散在する中で焚口に集中している。床直のものが多いが、カマド、貯蔵穴周辺のものを除いて接合例は少ない。羽釜、杯、椀がカマド焚口周辺で、西壁際から台石、凹石、北壁際から砥石、貯蔵穴内から墨書土器が出土した。硯は2片が接合する破損品で、混入である。1点は貯蔵穴中位から、もう1点は北東隅近くから出土している。

カマド 位置 東壁南寄り **規模** 全長150cm 焚口幅90cm

袖 不明 **煙道** 燃焼部と段差なく、さらに75cmのびる。境には、右壁に安山岩、左壁に凝

灰岩切石が貼付してある。間口は25cm、石は内傾している。

遺存状態 左壁寄りに角柱状、凝灰岩の支脚を残す。

時期 平安時代 10世紀前半

83号住居 (位置は全体図に示す)

位置 2N・O-30~3N・O-1・2グリット **主軸方位** N90°W **重複** 111→109→101→82→100→83住 **規模** 縦3.35+αm 横4.70+αm 東北隅を中心とした三角形に確認をした。**形状** 長方形と推定されるが、カマドの位置からすると大型住居と考えられる。

床面 ロームブロック、C軽石を含む黒褐色土を平坦にしている。**貯蔵穴、周溝、柱穴** なし

遺物出土状態 床直が多く全体に散在する。報告したコの字甕、台付甕のほかにも須恵器の甕、杯、碗、羽釜、内黒碗の各破片がある。報告の甕はカマドと袖脇の壁際から出土したもので使用した位置と考えられる。

カマド **位置** 東壁の南寄りか **規模** 全長95cm 最大幅55cm

袖 不明 **煙道** 燃焼部と段差をもってさらに壁外にのびる。コの字甕は煙道との境で内壁を補強したとも考えられる。

遺存状態 コの字甕が出土した右壁に壁体と考えられる角安石らしい石がある。底面には厚さ10cmの灰層があり、焼土の多少で上下に区分できる。

時期 平安時代 10世紀第2四半紀

85号住居 (第51図、図版42-1)

位置 3J~L-3~5グリット **主軸方位** N85°W **重複** 117→85、110→86住

規模 縦3.90m 横3.40m **形状** 方形 **床面** ローム粒を含む暗褐色土、平坦だが全体に軟らかい。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 西側半分に多い。しかし、確認が深く、攪乱もあるために埋没状況は一様でない。長甕、丸胴甕、杯、碗の各破片があるが接合例は殆どない。報告した杯はカマド左脇の出土である。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長150cm 最大幅70cm

袖 住居の壁際、左側の位置に角安石が残る。石と火床面の関係が不明で袖石としては動いている可能性が高い。**煙道** 舟底状の掘り方の外に灰層を伴う浅い掘りこみが続いている。

遺存状態 底面には、焼土の多少で区別される厚さ約10cmの灰層がある。しかし、遺物を含めて袖石、天井部等の主要部分は崩落している。

時期 奈良時代 8世紀中頃

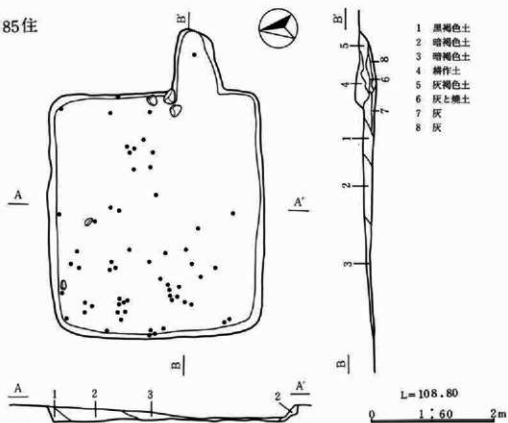
86号住居 (第51図、図版42-2、42-3)

位置 3M・N-5・6グリット **主軸方位** N81°W **重複** 117→119→118→116→110→86住

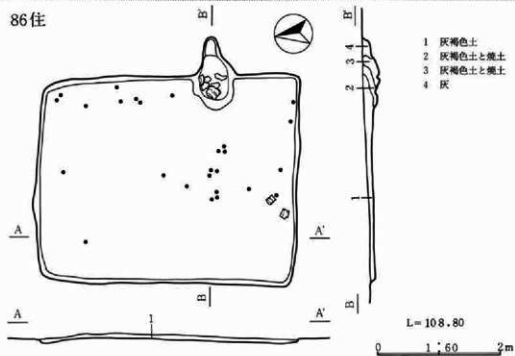
規模 縦3.45m 横4.15m **形状** 長方形 **床面** ロームブロックを含む暗褐色土、平坦で少し軟弱。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

85住



86住



第51図 85号・86号住居址遺構図

遺物出土状態 カマド内を含む東壁際と南壁寄りの中央部で長甕、杯、椀、羽釜、灰釉椀、弥生土器等の各破片が少量出土している。カマド内の甕が使用時の状態のほかは埋没時の混入が殆どである。

カマド 位置 東壁南寄り **規模** 全長110cm 焚口幅40cm 全長は焚口前の掘り方を含む。

袖 住居内に灰褐色をもって作る。殆ど崩落しているが壁際からの長さ約40cmを測る。壁際の位置には半載した長甕胴部を左右対で内壁に補強貼付している。

煙道 燃焼部と8cmの段差をもって筒状の掘り方で壁外にのびる。先端近くまで焼土がある。

遺存状態 埋没土の乱れ方からすると内壁の崩落に始まり、天井部が続いて埋没したと考えられる。壁際に貼付した長甕から煙道にかけて灰が厚く残る。

時期 平安時代 9世紀前半

87号住居 (第52図, 図版75-1)

位置 3J・K-7・8グリット **主軸方位** N106°W **重複** 115→108→87→230住

規模 縦3.60m 横2.90m **形状** 長方形 **床面** ローム粒を含む暗褐色土、平坦。

貯蔵穴 東南隅にある。規模は45×40cmの方形、深さ15cmと小型である。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 北西隅を中心にした西側に多い。単一の埋没土中에서도出土位置の高いものが多く、重複等を理由とする遺物の混濁が考えられる。平面上、層位の中での集中状況からすると、北西方向からの流入も考えられる。報告の3と6の杯は108住の可能性がある。銅鐸が出土した。

カマド 位置 東壁南寄り **規模** 全長55cm 最大幅40cm 230住と調査が前後したために上面を完全に削平された状態で焼土と灰を確認するだけにとどまった。

遺存状態 掘り方で角安石が出土した。

時期 平安時代 9世紀前半

108号住居 (第52図, 図版75-1)

位置 3J・K-6・7グリット **主軸方位** N100°W **重複** 108→87、102→230住

規模 縦3.60m 横4.08m 北東隅付近は87住の重複下にあつて推定する。**形状** 方形

床面 ローム上面まで掘り下げた上に暗褐色土をうすく貼って平坦にする。掘り方はない。

貯蔵穴、周溝 なし **柱穴** 東南隅から70cm内側に28×22cmの円形、深さ13cmのビットが単独である。

遺物出土状態 87住との重複部分で甕、杯の破片が少量ある。

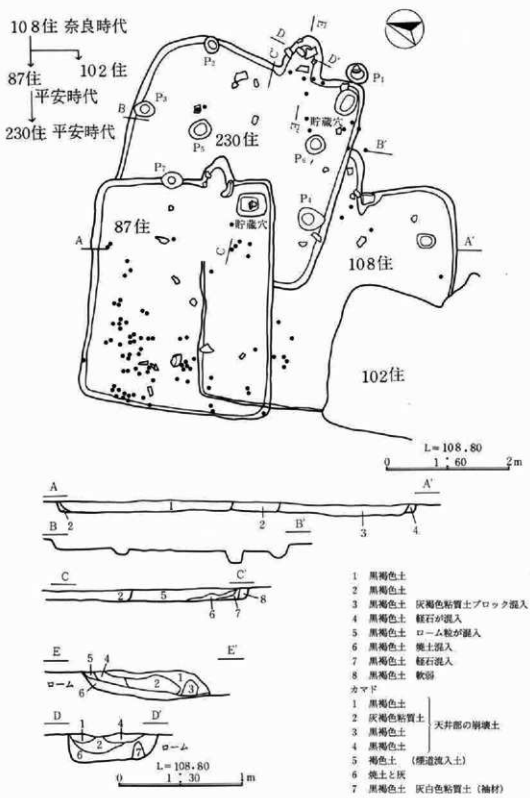
カマド 位置 東壁中央 **規模** 全長110cm 最大幅55cm 煙道から燃焼部中央の上面にかけて近世の耕作痕で攪乱されている。**袖** 右袖に荒割りにした角安石を使用する。

時期 奈良時代 8世紀第4四半紀

230号住居 (第52図, 図版74-3、75-1)

位置 3I~K-6・7グリット **主軸方位** N91°W **重複** 108→87→230住

規模 縦3.35+αm 横3.50m **形状** 方形 **床面** ローム上面まで掘り下げた上に暗褐色土をうすく貼る。87住床面とは殆ど差がない。**貯蔵穴** 東南隅にある。42×21cmの方形で深さ20cmを測る。上



第52図 87号・108号・230号住居址遺構図

面で杯、椀が出土した。周溝 なし 柱穴 壁外を含めて7基の円形ピットが確認されている。P₁は29×23cm、深さ18cm、P₂は34×29cm 耕作痕の可能性が高い。P₃は35×28cm 深さ26cm P₄は42×34cm 深さ42cm P₅は32×28cm 深さ9cm P₆は28×30cm 深さ16cm P₇は33×22cm 深さ9cmを測る。この中でP₅とP₆が対をなして主柱穴の可能性が高い。掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内と貯蔵穴上面と周囲に破片が多い。カマド内ではコの子甕があり、南壁際と住居中央から羽釜が出土している。ともに1～3個体前後と少なく、ほかに台付甕、杯、椀、灰釉陶器がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長95cm 焚口幅60cm

袖 地山を掘り残す。右袖内壁には甕を補強貼付しており、焚口構造の芯材と考えられる。

煙道 火床面とは段差なく約10度勾配でのびる。先端まで焼土、灰が見られる。

遺存状態 火床部には黒と灰色の厚い灰層がある。作りかえている可能性が高い。

時期 平安時代 10世紀第3 四半紀

88号住居 (第53図、図版43-1、43-2)

位置 3M・N-8・9グリット 主軸方位 N90°W 重複 96→116→90→98、88住-52土坑

規模 縦2.50m 横3.75m 形状 長方形 床面 ロームブロックを含む暗褐色土を貼る。重複部分はその埋没土を掘りこんでいる。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内、焚口、壁際に甕、杯、椀の各破片が少量ある。焚口付近で報告2と3の甕、2の小型甕や3の須恵器椀が接合している。甕は、破れ口でのスス付着の様子からすると内壁に補強貼付されたものが内部に破片となって崩落したものと考えられる。小型甕も同様である。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長105cm 焚口幅55cm

袖 燃焼部掘り方からすると住居の壁際に焚口を設けたと考えられる。煙道 不明

遺存状態 底面にはレンズ状の灰層が最大8cmの厚さで残る。壁体は灰白色の砂質土と考えられ、横断面の様子では北側から中段が腰だけの様に崩落している。

時期 平安時代 10世紀前半

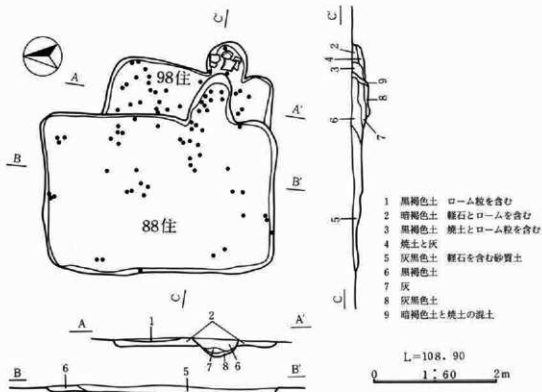
98号住居 (第53図)

位置 3M・N-8・9グリット 主軸方位 N74°W 重複 116→112→98-88住

規模 縦1.0+αm 横2.50m 西側の殆どは88住の重複下にあるが掘り方調査をしていないので不明である。形状 方形の可能性が高い。床面 暗褐色土を平坦にする。88住床下に続く。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 不明

遺物出土状態 カマド内から足釜、甕、椀が出土し、使用時の状態を推定させる。カマドは支脚を残すが報告3の須恵器椀は、この支脚にかぶせて高さを調整したと考えられる。足釜は右壁側で口縁を上にした正位の状態と破れている。右袖先の破片と接合するだけでカマド内にまとも、火床にかけた状態と考えられる。足の部分は欠損し接合例もない。足を欠いたままの浅い土鍋状のものとしても一つの使用方法であろう。被熱による変色とススの付着は、足の位置に近いが底面全体に見られず、



第53図 88号・98号住居址遺構図

側面も限られている。甌は接合例がなく、内側に弧面をもった出土状態からすると内壁補強材である。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長75cm 最大幅60cm

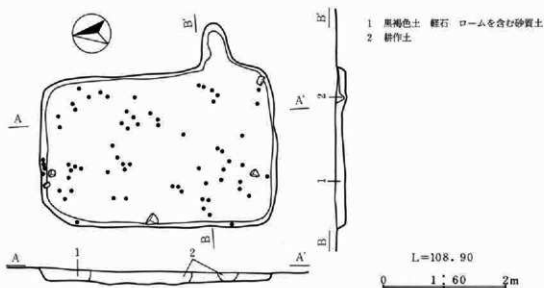
袖 燃烧部の位置からすると住居の壁際に焚口部をもつ。煙道 不明

遺存状態 角安石の支脚を残す。

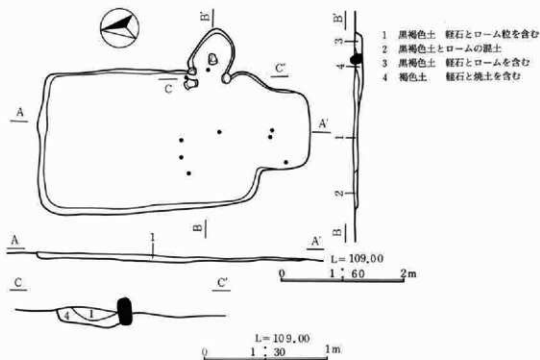
時期 平安時代 10世紀第1四半紀



98号住カマド出土状態



第54図 89号住居址遺構図



第55図 90号住居址遺構図

89号住居 (第54図、図版43-3、44-1)

位置 3 L・M-11~13グリッド 主軸方位 N84°W 重複 151→147→89住

規模 縦2.45m 横3.75m 形状 長方形 床面 ローム層上面まで掘りこんで暗褐色土を貼る。南

壁側は4cm前後高いが凹凸が見られる。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 不明

遺物出土状態 平面的にも層位の上でも全体に散在する。長甕、杯、碗の各破片が流れこみの状態で出土している。報告の剣形石製品は、南西隅近くの流れこみである。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長75cm 最大幅45cm

遺存状態 袖、支脚も残存せず、遺物も殆どない。

時期 平安時代

90号住居（第55図、図版43-3、44-2）

位置 3M・N-12~14グリット 主軸方位 N81°W 重複 なし 規模 縦2.25m 横3.55m 形状 長方形 南壁の隅を外れて張出部がつく。上面の殆どを削平されて埋没土もないが掘り方の規模としては縦1.05m 横70cmを測る。床面に段差はない。床面 ローム漸移層である暗褐色土まで掘り下げて平坦にしている。張出部も同様である。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 焚口部周囲で報告の碗を始めとした少量が出土している。甕、杯、碗、蓋の各破片がある。カマド内に遺物は殆どない。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長80cm 焚口幅40cm

袖 住居の壁際に角安石をたてる。煙道 不明 遺存状態 両袖石と支脚を残す。焼土と灰は少量でかき出されたものか。支脚は袖石とちがい輝石安山岩を使用している。燃焼部のほぼ中央に直立し、火床面からの高さ19cmを測る。

時期 平安時代 9世紀第4四半紀

91号住居（第56図、図版43-3、44-3、45-1）

位置 3O・P-12・13グリット 主軸方位 N78°W 重複 113-93、94-91住

規模 縦2.70m 横3.50m 形状 長方形 床面 ローム層上面まで掘り下げた上にローム粒を含む褐色土をうすく貼床している可能性がある。ほぼ平坦で中央部にだけ灰を含む黒褐色土が分布する。

貯蔵穴 東南隅にある。規模は55×40cmの円形で、椀底状の最深部は9cmを測る。遺物分布は殆どない。周溝 掘り方で壁際が浅くぼわのが確認された。柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 南壁から1m幅を除いた範囲に散在する。羽釜、杯、碗の組成があり、報告2の羽釜の様にカマド内から焚口、北西隅までの接合をもつ例があり、袖石の一つらしい角安石の動きと合わせてみると、カマドから北西方向に遺物が動いている。角安石は、長さ12cm、9cm角の柱状で粗く面取りされたもので支脚の可能性もある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長70cm 最大幅75cm

袖 住居の壁際に面取りした砂岩をたてる。被熱のためかもうくなっている。

遺存状態 袖石を残して崩落、流出している。右壁上の須恵器大甕の胴部破片は、転用品として内壁の補強材として貼付されたものである。

時期 平安時代 10世紀前半

92号住居（位置は全体図に示す）

位置 3J~L-2・3グリット カマド部分が確認できただけで、形状、構造については不明である。**重複** なし **規模** 確認時の埋没土分布範囲を測ると縦3.50m、横3.10mと推定される。これもカマドの横断面でみると火床面以下での範囲であり、旧状はさらに30cm前後広くなると考えられる。

カマド **位置** 東壁 **規模** 全長80cm 焚口幅50cm

袖 住居の壁際に荒削りした砂岩を対でたてる。

遺存状態 焚口部の火床面には掘り方いっばいに灰層を残し、その上の中央部に舌状に焼土がある。遺物は、この焼土とその上層からコの字壺、須恵器壺、蓋の各破片が出土した。

時期 平安時代 9世紀か

93号住居（第56図、図版45-1）

位置 3N~P-13・14グリット **主軸方位** N76°W **重複** 113-93、94-91住

規模 縦2.65m 横3.50m 東南隅は91住が重複して不明である。**形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げた上にローム粒を含む黒褐色土をうすく貼る。**貯蔵穴**、**周溝**、**柱穴**、**掘り方** なし **遺物出土状態** 北側半分と91住重複との壁際に遺物がある。長壺、小型台付壺、碗、須恵器壺、内黒碗の各破片がある。埋没土はうすい黒褐色土のみで、中でも床直のものが多く。

カマド 東壁に推定するが91住の掘り方部分にも痕跡がない。

時期 平安時代 9世紀第3四半紀 報告1、2の土器による。

94号住居（第56図、図版45-2）

位置 3O・P-11・12グリット **主軸方位** N79°W **重複** 113-93、94-91住-54、55土坑

規模 縦2.50m 横2.85m 北壁の91住重複部分は推定する。**形状** 方形 **床面** ローム漸移層の暗褐色土まで掘り下げている。床までが浅い上に部分的に耕作痕が入り、遺存状態は悪い。

貯蔵穴 東南隅にある。規模は45×40cmの方形で、碗底状の最深部は20cmを測る。**周溝**、**柱穴** なし **遺物出土状態** 東南隅付近に壺、台付壺、杯、碗の各破片が22点だけある。接合例も殆どなく、唯一右袖前と貯蔵穴上面との須恵器碗がある。貯蔵穴北西の角安石は袖石の可能性もある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長65cm 最大幅50cm **袖**、**煙道** 不明

遺存状態 火床面近くまで削平されている。

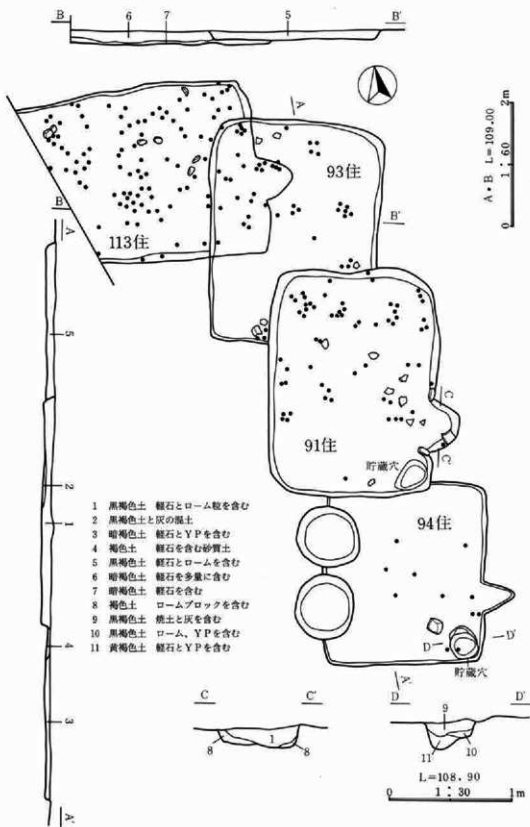
時期 平安時代 9世紀

113号住居（第56図、図版52-3、53-1）

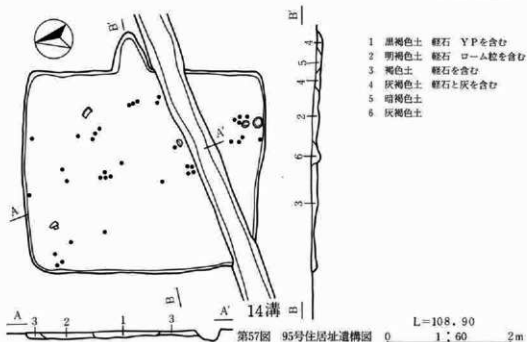
位置 3O・P-14・15グリット **主軸方位** N85°W **重複** 113-93、94-91住-51土坑 **規模** 縦3.70+ α m 横2.70m 西壁は調査区域外にある。**形状** 長方形

床面 ローム層上面を掘り下げてローム粒を含む暗褐色土を貼る。**貯蔵穴**、**周溝**、**柱穴** なし

遺物出土状態 全体に散在する。図示したうちの北西隅の頂点から約80cmの三角形の範囲は、重複する51土坑のものとして除外する。中央部のものは、埋没土中でも上層が多く、東壁寄り4片に割れ



第56図 91号・93号・94号・113号住居址遺構図



第57図 95号住居址遺構図

た須恵器壺の様子からしても流れこみの可能性がある。接合例は少なく、報告個体はない。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長90cm 焚口幅60cm

遺存状態 93住床下でもあり、火床面近くで確認された。袖石、支脚はすでになく、住居内の角安石も特定することができなかつた。焚口部に円形の掘り方をもつ。40×33cmの円形で深さ10cmを測る。

時期 平安時代 9世紀後半

95号住居（第57図、図版45-3）

位置 3K・L-10・11グリッド **主軸方位** N79°W **重複** 95住-14溝 **規模** 縦3.20m 横3.80m **形状** 方形 西壁と南壁とが少し短い。床面 耕作土から床までが浅く全体に荒れている。ローム漸移層の暗褐色土を平坦にしている。床近くまで浅間B軽石を含む褐色土が見られる。

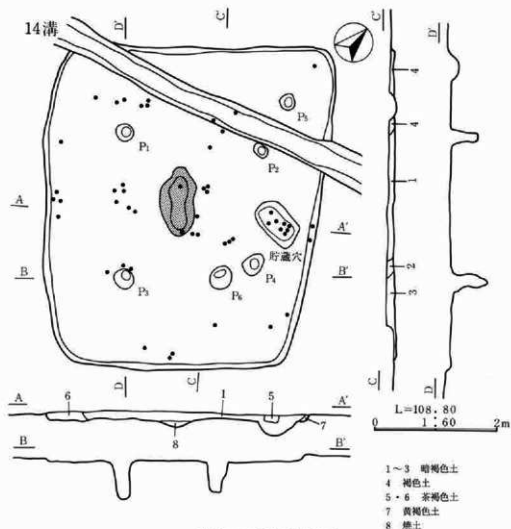
貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 これらは床面下の調査がなく不明である。

遺物出土状態 全体がほぼ床直状態である。土師器の長壺、杯、須恵器の壺、杯、碗があるが報告以外はいずれも細かな破片で接合もむずかしい。完形の杯を含む南東隅の集中は貯蔵用の利用を示すものであろうか。カマド内の遺物は壺の小破片が少量あるにすぎず、主要部が崩落し流出したか、取りのぞかれた状態と考えられる。左袖斜め前から出土した石は、被熱変色し面取り整形痕をもつことから袖石の可能性が高く、カマド崩落の状況を示す資料である。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長80cm 焚口幅55cm

遺存状態 袖石、支脚はなく、埋没土も攪乱が入ったためかブロック状に細かい。写真では掘りこみの外縁にわずかに高い馬蹄形が見られ、壁体の遺存と掘り方の存在が暗示される。

時期 平安時代 9世紀後半



第58図 96号住居址遺構図

96号住居 (第58図, 図版46-1、46-2)

位置 3M~O-8~11グリット 主軸方位 N44°W 重複 96→98-88住→14溝

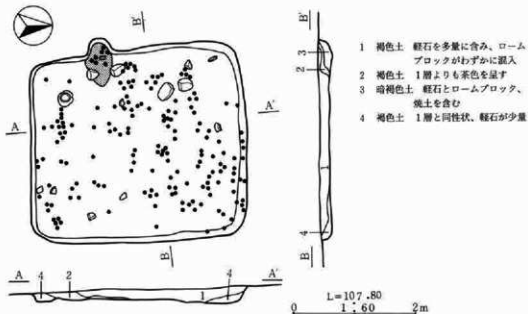
規模 縦5.10m 横4.55m 南壁が3.66mと北壁に比べて1m短い。形状 台形 隅が丸い。

床面 ローム層上面まで掘り下げた上にロームブロックを含む暗褐色土を貼っている。全体に均質で南壁が2~3cm低い。入口施設は確認されていない。貯蔵穴 P₂とP₄の間に主軸とは斜交するが楕円形の土坑がある。規模は80×48cm、舟底状の断面形で深さ18cmを測る。周溝 なし 柱穴 P₁~P₆のうちでP₁~P₄の4本が主柱穴と考えられる。P₁は30×25cm、円筒状で深さ44cm、P₂は25×20cm、円筒状で深さ18cm、P₃は31×28cm、円筒状ながら南西隅方向に傾き深さ60cm、P₄は38×29cm、円筒状で深さ15cm、P₅は24×22cm、円筒状で深さ9cm、P₆は36×22cm、円筒状で深さ49cmを測る。柱間は、P₁とP₂が220cm、P₃とP₄が200cm、P₁とP₃が225cm、P₂とP₄が180cmである。P₄がP₃との位置と深さの点で類似点があり、主柱穴の可能性もあるが内側に寄りすぎている。

遺物出土状態 図示したのは殆どが床直である。炉周辺とP₃器で少量ながら破片の集中がある。

炉 位置 主柱穴とした4本に囲まれたほぼ中央にある。規模は、110×55cmの楕円形で舟底状の断面、深さ10～12cmを測る。中央のわずかなくびれと、その両側での深さのちがいが新旧2時期の可能性も考えられる。灰土は中央部に残るが緑石はない。

時期 弥生時代中期



第59図 97号住居址遺構図

97号住居 (第59図, 図版46-3)

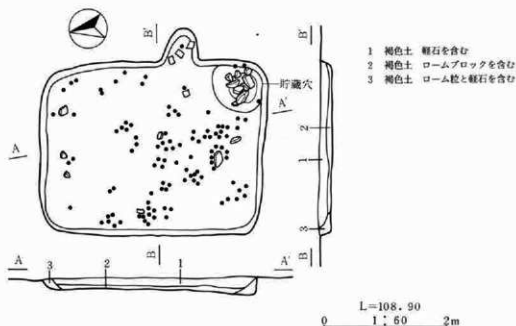
位置 3M-O-6~8グリッド **主軸方位** N91°E **重複** 119→118→116→86→97住 **規模** 縦3.05m 横3.45m **形状** 方形 **床面** 重複する116住埋没土1層の褐色土を掘りこんで平坦にしている。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 全体に散在する。壺、杯、碗、皿があるが多くは接合例のない小さな破片である。報告1のコの字壺は、焚口部手前の北東隅寄りの床面で出土した。上胴部以下を埋没前に故意に打ち欠いているが、口縁を下にして半ば床面に埋めこまれた様な状態である。その用途は、器表の変色からカマド内にあったことは確かだが欠損後に床に埋めこまれて煮沸具を仮置きした台座と考えられないか。器内面の頸部付近に磨耗帯はないが水平を意識した状態は人為的なものを感じさせる。報告3の「田」の刻字をもつ携帯用砥石は壁際に置かれたものか、北壁中央で出土している。西壁際にある4個の角安石は、カマドから流出したものと考えられる。

カマド 位置 西壁南寄り **規模** 全長70cm 最大幅45cm

遺存状態 上記の範囲で楕円形の掘り方がある。住居内に角安石を使って袖を作ったと考えられるが流出している。

時期 平安時代 10世紀第2 四半紀



第60図 99号住居址遺構図

99号住居 (第60図、図版47-1、47-2)

位置 3L・M-8~10グリッド **主軸方位** N79°W **重複** 115→112→98→88→99住 **規模** 縦2.75m 横3.55m **形状** 長方形 **床面** ローム層上面を掘りこんでロームブロックを含む暗褐色土を貼っている。112住に重複する南壁側は埋没土の褐色土を掘りこんで平坦にしている。 **貯蔵穴** 東南隅にある。規模は80×70cmの円形、椀底状の断面で深さ17cmを測る。床と同じレベルから中位までの間に角安石と砂岩9個が出土した。このうち上面の4石は列をなし同一の面にあることから、カマド側に対する縁取りか東南隅の一角を間仕切ったものとも考えられる。 **周溝、柱穴** なし

遺物出土状態 焚口部前の集中は、壺、杯、碗からなるが埋没土中位以上が多い。コの字壺、羽釜、杯、椀、黒色土器碗、灰釉碗、緑釉小破片、鉄滓、磁石がある。羽釜、灰釉皿を時期決定資料とするが緑釉、鉄滓については混入と考えられる。カマド内の壺は内壁補強材と考えられるものだが、北西約15mにある93住出土の破片と同一個体で転用と考えられる。

カマド **位置** 東壁中央 **規模** 全長75cm 最大幅60cm

遺存状態 袖石、支脚がなく、遺物も壁体の一部である壺の破片だけにすぎない。

時期 平安時代 10世紀後半

100号住居 (第61図, 図版47-3、48-1、48-2、50-1)

位置 2M・N-30~3M・N-1グリット **主軸方位** N85°W **重複** 111→109→101→82→100→83住 **規模** 縦2.74m 横3.60m 南西隅は調査区域外にある。**形状** 長方形 **床面** ローム漸移層の暗褐色土を平坦にする。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在するが図示した様に多く、コの字甕、杯、椀等の破片が約400ある。その中でも杯、椀は須恵器の個体数が多いが接合例は少ない。カマド右脇、住居の東南隅での長頸瓶、須恵器椀、灰軸耳皿6個体からなる床直での状態は、貯蔵穴に代わる使用時のものと考えられる。耳皿、椀、杯5個体が直線的に並ぶ様子は、仕切り施設を推定させ、壁際に直立する頸部以上を欠損する長頸瓶は、口縁と底部に十字を切る様に打ちかきを作り、上蓋付紐かけの保存容器と考えられる。焚口左壁際で出土した油煙付着の杯は、燈明皿と考えられる。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長80cm 最大幅60cm

遺存状態 底面に焼土、焚口部に灰を残すほかは主要部分が崩落している。遺物は住居内に比べて少なく、住居内にある石も小さくてカマドとの直接の関係はないと考えられる。

時期 平安時代 10世紀第1四半期

101号住居 (第61図, 図版47-3、48-1、50-1)

位置 2M・N-30~3M・N-1グリット **主軸方位** N72°W **重複** 111→109→101→82→100→83住 **規模** 縦1.65+αm 横3.47m 西壁側は重複する100住のために消出している。**形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げた上にロームブロックを含む暗褐色土を貼る。壁高が総じて10cm強と浅いために遺存状態は悪い。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在し、ほぼ床直と判断される。長甕、杯、須恵器甕、蓋からなる破片約60がある。接合例は殆どなく、焚口の横架石等が住居内にあることからみて、床直が多いものの使用時の状態を離れていると考えられる。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長50cm 最大幅55cm

遺存状態 埋没土はブロック状に寸断され、袖石、焚口横架石も住居内に動いている。遺物も皆無に近く、次の住居構築等に際して掘り方だけにしてこわされたと考えられる。

時期 奈良時代 8世紀

109号住居 (第61図, 図版50-1、50-2、50-3)

位置 2M・N-30~3L~N-1・2グリット **主軸方位** N70°W **重複** 111→109→101→82→100住 **規模** 縦3.30m 横3.80+αm 南壁が101住との重複で計測不可である。カマド位置からみて横は4m前後と推定される。**形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げた上にロームブロックを含む暗褐色土を貼っている。**貯蔵穴、柱穴** なし **周溝** 北壁と西壁とで確認されたが床面の状態からして東壁にもめぐっていた可能性が高い。規模は基底幅で3~12cm、深さ4cm前後を測る。北壁では蛇行気味である。中から合計9基のビットが確認された。直径が5~12cmまでの円形で少し斜め方向のものを含めて深さ6~16cmを測る。間隔は西壁で20cm前後を測り、規則的な配列を推定させ

る。用途は壁体の補助柱穴と考えられる。

遺物出土状態 東西両壁際に比較的多く、殆どが床直である。長甕、杯、須恵器甕の破片が約100ある。カマド内では、出土位置から見て壁体の補強用か、煙道接続用と推定される長甕胴部片が壁にくいこんだ状態にある。13点の碁石は、100住との重複部に近い南西隅からまとまって出土している。この場での碁石本来の使用は疑問だが、壁際に意図的に置かれたものと考えられる。

カマド 位置 東壁南寄り **規模** 全長80cm 最大幅75cm 椀底状の掘り方をもつ。

遺存状態 左袖か焚口の横架石と考えられる面取りした砂岩が残る。被熱のためにボロボロの状態である。底面から焚口前まで灰、上面に焼土がある。

時期 奈良時代 カマド内の長甕を基準資料とするが特定できない。8世紀

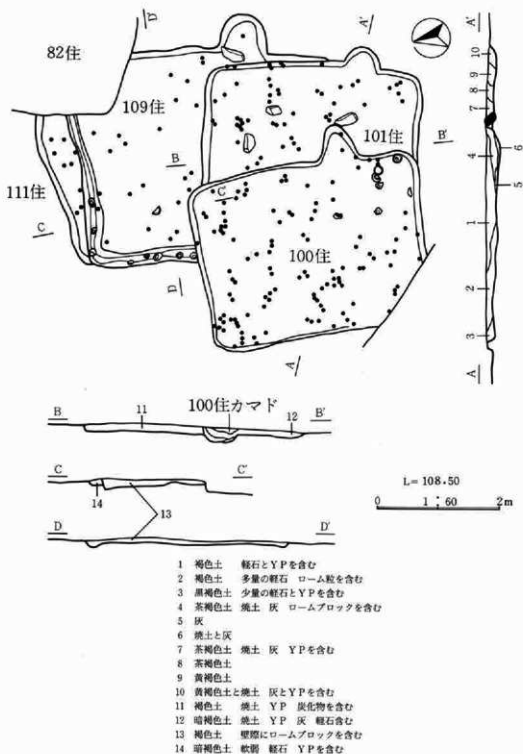
111号住居（第61図、図版50-1、50-2）

位置 3L・M-1・2グリッド **主軸方位** N75°W前後 **重複** 111→109→101→82住 **規模** 109住の北壁沿いに約60cmの幅で一部が確認されたにすぎない。規模は北西隅から240cmを測るが109住の東壁を越えないことから凡そ109住に近い数値と推定される。**形状** 長方形か **床面** ローム層の上面まで掘り下げた上にロームブロックと暗褐色土の混土を平坦にしている。109住と約5cmの段差があり、その重複で殆どが消失している。**貯蔵穴** 不明 **周溝** 平面図には記録がないが写真では109住と同規模位の壁際の落ちこみが見られる（図版50参照）。**柱穴** 不明

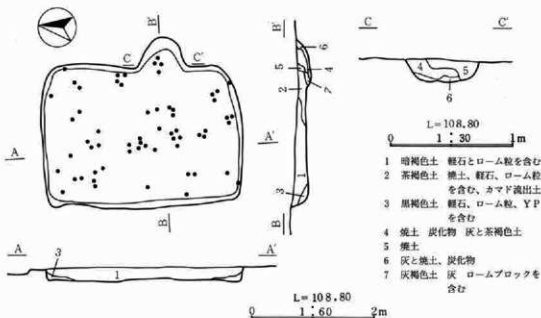
遺物出土状態 甕と杯の破片約30点が点在する。重複住居への混入が十分に考えられるが区別できなかった。

カマド 東壁に推定されるが痕跡も残していない。

時期 奈良時代 8世紀



第61図 100号・101号・109号・111号住居址遺構図



第62図 102号住居址遺構図

102号住居 (第62図, 図版48-3)

位置 3K・L-6・7グリット **主軸方位** N94°W **重複** 110→108→102住 **規模** 縦2.25m 横3.17m **形状** 長方形 **床面** ロームブロックを含んだ暗褐色土を平坦にする。108住、110住との重複部分はその埋没土の褐色土を掘りこんで平坦にしている。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし
遺物出土状態 全体に散在する。レベルは床上10cm前後、埋没土1層中のものが殆どである。破片数は約60あり、長甕、杯、須恵器の杯、椀、蓋、鉄滓がある。この中には接合個体は少なく、図示したものは無い。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長80cm 最大幅70cm

遺存状態 袖石、支脚はない。底面上には厚さ15cmで灰と焼土をかき出すことなく残す。

時期 平安時代 甕と杯の特徴からすると9世紀か。

103号住居 (第63図, 図版49-1、49-2)

位置 3O・P-3・4グリット **主軸方位** N80°W **重複** 106→105→107→104→103住
規模 縦3.90+αm 横3.40+αm 北東隅を頂点にした三角形に確認する。残りは調査区域外にある。**形状** 方形と推定する。**床面** 重複住居群の中では107住と同じく最も深い。ロームブロックを含む褐色土を貼って平坦にしている。**貯蔵穴、周溝、柱穴** なし **掘り方** 不明
遺物出土状態 全体で散在する。床直から床上10cm前後までである。コの字甕、杯、羽釜、灰釉皿の各破片があり、鉄滓や石もある。報告1の甕は、カマド内とそこから約150cm離れた破片が接合したもので、2の皿も東壁際の破片が接合する。

カマド **位置** 東壁 **規模** 全長110cm 焚口幅25cm以上 掘り方の計測値で大型である。

遺存状態 左袖に面取りした角安石の割石をたてる。底面上には厚さ10cmの灰層を残す。

時期 平安時代 10世紀第2四半紀

104号住居 (第63図, 図版49-1、49-2)

位置 3O・P-4・5グリット **主軸方位** N89°W **重複** 106→105→107→104→103住

規模 縦3.50m 横3.25+αm **形状** 方形か 南壁は103住の重複で削られ、南西隅は調査区域外にある。また、北西隅近くに1号井戸が重複している。**床面** ロームブロックを含む褐色土を平坦にする。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在し床直と考えられる。杯、灰釉碗、鉄滓がある。いずれも破片で報告1の杯は2m近く離れたものが接合し、カマド用と思われる大きな角安石と合せて遺物全体が大きく動いていると考えられる。

カマド 確認範囲に痕跡がない。103住の埋没土を見ても存在を示す確証は得られなかった。しかし、住居内に散在する角安石は壁体の可能性が高い。

時期 平安時代 10世紀

105号住居 (第63図, 図版49-1、49-2、49-3)

位置 3N・O-3・4グリット **主軸方位** N88°W **重複** 106→105→107→104→103住

規模 縦3.30+αm 横3.67m 西壁は104住の重複で不明、南壁も107住とて床面に殆ど差がなく貯蔵穴の位置から復元する。**形状** 方形と考えられる。**床面** ローム漸移層の暗褐色土を平坦にする。**貯蔵穴** 東南隅の方形土坑とする。規模は108×70cm、断面舟底状で19→21cmの深さがある。報告した3点の土器はこの上面から出土している。**周溝** 北壁から東壁にかけてL字形に確認される。規模は基底幅で10cm前後、深さ5～8cmを測る。**柱穴** なし

遺物出土状態 全体に散在し床直のものが殆どである。貯蔵穴とした東南隅に集中がある。壁際は周溝の部分が空白になり、埋没土4層とともに壁体を推定させる。遺物の量は多くないが、壺、杯、黒色碗、須恵器蓋があり、ほかに和同開珎、鉄滓、磁石がある。東南隅のものは、器形復元可能なものが多く、使用時に近いと考えられる。和同開珎は、北壁中央の周溝際から単独で出土している。

カマド **位置** 東壁の貯蔵穴と接して焼土と灰の分布がある。70×60cmの範囲で、住居内にあった燃焼部の痕跡である。

時期 奈良時代 8世紀末

106号住居 (第63図, 図版49-1、49-2)

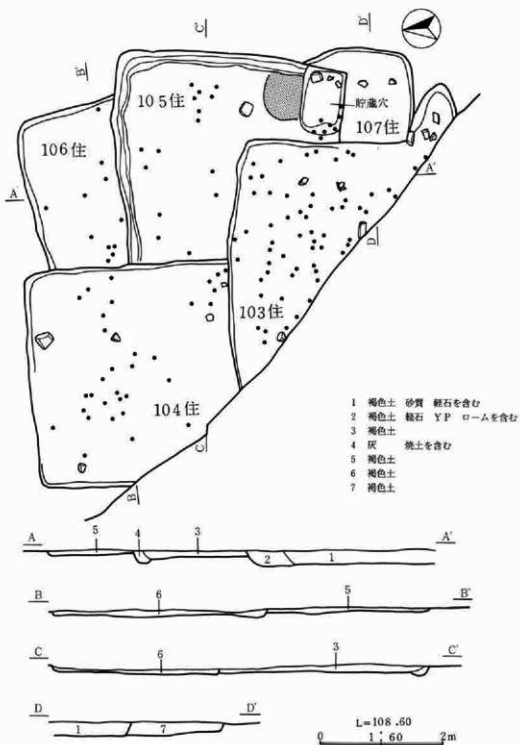
位置 3N・O-4・5グリット **主軸方位** N109°W **重複** 106→105→107→104→103住

規模 縦2.60+αm 横1.70+αm 北東隅付近を残すだけでほかは104、105住との重複で消失する。

形状 不明 **床面** ロームブロックを含む褐色土を平坦にする。床まで浅いので全体に荒れている。

貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 不明

遺物出土状態 105住寄りで少量がある。全て床直で、壺、杯の破片がある。



第63図 103号～107号住居址遺構図

カマド 確認範囲に痕跡がない。

時期 奈良時代か。遺物の上では根拠がなく重複の関係を基準とするが下限の要素である。8世紀

107号住居（第63図，図版49-1、49-2）

位置 3N・O-3グリット 主軸方位 N83°W 重複 106-105-107-104-103住

規模 縦1.50+αm 横1.10+αm 東南隅の一面だけである。形状 不明 東壁は弧状になる。

床面 ロームブロックを含む褐色土、重複する103住と土層性状、高さの点で殆ど差がない。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 不明

遺物出土状態 壁際を除いた105住の貯蔵穴寄りにまとまってある。

カマド 確認範囲に痕跡がない。

時期 平安時代 9世紀第2四半紀

110号住居（第64図，図版51-1、51-2、51-3）

位置 3K~M-5・6グリット 主軸方位 N87°W 重複 117-110-86、102住

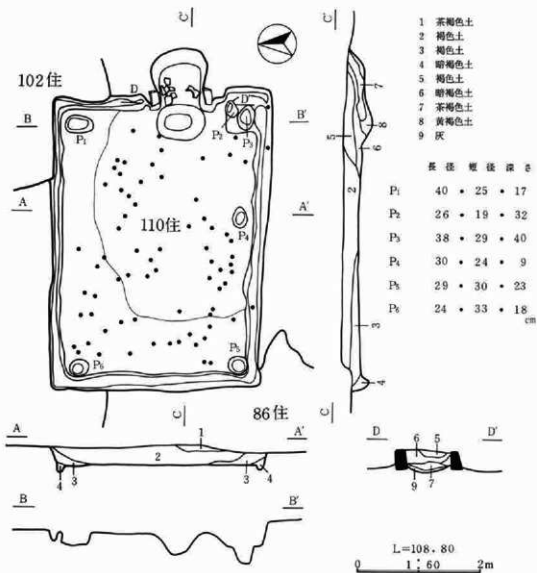
規模 縦4.60m 横3.45m 形状 長方形 床面 ローム上面まで掘り下げて平坦に踏み固めている。焚口前から中央部の一帯にかけては、非常に堅緻な状態で、北と西壁際の軟弱な様子と対称である。貯蔵穴 東南隅を始めとして6基のピットがある。貯蔵穴とするには、いずれも小型で法量の点で共通項が多いことから、むしろ柱穴と考える。周溝 全周する。規模は基底幅で5~15cm、深さ7~14cmを測る。直線的な掘り方を持ち、底面に若干の凹凸が写真から判断される。柱穴 6本のピットがある。いずれも壁際にあり、規模を同じくする点で主柱穴と考えられる。規模は、上径と深さを示したもので、深さに幅がある。特に東南隅は深く、2基が接する点に特徴がある。これを同時併存と見るのは疑問で、P₁が2基分の掘り方を持っている点からすると東壁側がP₂とP₃で時期を異にして建替えをしたと考えられる。

遺物出土状態 周溝、柱穴と重複せず、全体に散在する。堅い床面とは重複するが、北と西壁際の少なさは軟弱さと合せて場の機能のちがいを示すと考えられる。一方の南壁際の遺物は、図示したものについては埋没土3層の上層に含まれていることから、壁上を棚施設として利用したとも考えられる。

カマド 位置 東壁やや南寄り 規模 全長145cm 焚口幅55cm 長さは焚口前の灰寄せ土坑を含む。袖 両方に水成堆積シルト岩を加工して住居の壁際にたてる。石と壁とのすき間は、粘着用のおさえの粘土を充填している。

煙道 残存していない。燃焼部からは約40度の傾きをもって壁外にのびると考えられる。

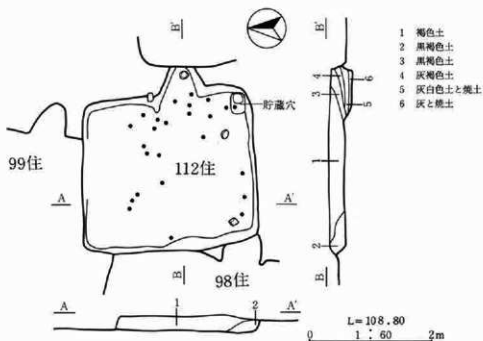
遺存状態 燃焼部に報告1と2の2個体の壺がつぶれた状態で残る。住居内全体の遺物を含めて自然埋没している様に、カマドも底面に厚く灰を残して自然崩落している。天井部は6層の可能性が高い。構造としては、壺2個が並列する型式が考えられ、右に2の丸胴壺、左に1の壺である。壺の口縁から18cm以下底部までの内外面は被熱のためか、横一線をもって赤変している。この18cmという位置は、丸胴壺の器高とほぼ同じである。焚口前の灰寄せ土



第64図 110号住居址遺構図



110住カマド全景



第65図 112号住居址遺構図

坑は、55×74cm、深さ34cmを測る。その位置と底面にたまった灰から、その用途を考えた。

時期 奈良時代 8世紀第3四半紀

112号住居 (第65図、図版52-1、52-2)

位置 3L・M-8・9グリッド 主軸方位 N90°W 重複 115→116→112→98、88→99住

規模 縦2.45m 横2.72m 形状 方形 床面 ロームブロックを含む褐色土を平坦にしている。貯蔵穴 東南隅にある。規模は34×32cmの円形、深さ29cmを測るが壁側に斜方向の掘りこみを持っている。周溝、柱穴 なし 掘り方 不明

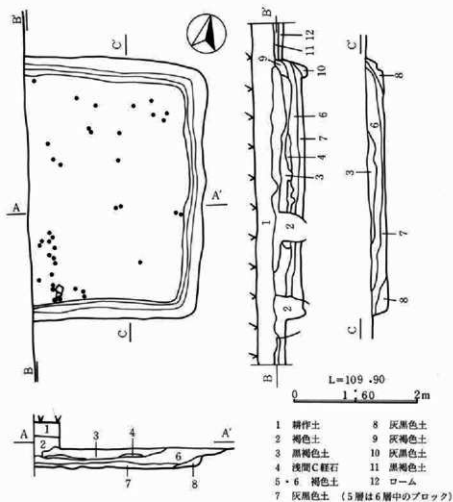
遺物出土状態 カマド内から焚口前、半径1m程の範囲と貯蔵穴上面にかけて多い。長甕、杯、須恵器蓋、平瓦の各破片が約120ある。接合例の少ない、細かな破片である。報告1の杯はカマド内から、2の杯は貯蔵穴上面から出土している。平瓦は2cm角程のもので、ほかの弥生土器や鬼高期の高杯とともに埋没過程での混入である。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長50cm 最大幅70cm

袖 壁際の地山をわずかに掘り残している。煙道 不明

遺存状態 袖石と支脚を残さず、内部に甕の個体もない。底面に焼土と灰をそのまま残し自然埋没している。

時期 平安時代 9世紀第1四半紀



第66図 114号住居址遺構図

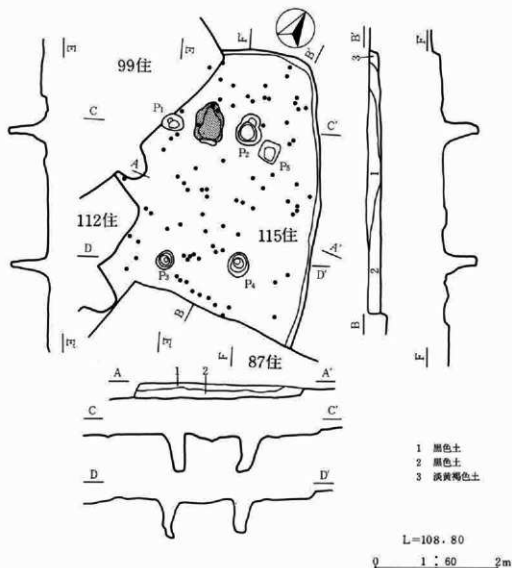
114号住居 (第66図)

位置 3 O・P-16~18グリット **主軸方位** N92°W **重複** なし **規模** 縦2.83+αm 横4.08m
 西側は調査区域外にある。**形状** 弥生後期としては後出のものであり方形の可能性が高い。また、断面Aの埋没土6層の東端が壁外に段差をもつてのびることからすると、周堤帯を残していた可能性がある。平面の記録はなく、断面と確認時の写真によるが、東壁端の外側約45cmの位置に10cm前後の段差が直線的に認められる。**埋没土** 4層が浅間C軽石の純層である。**床面** 浅間C軽石を含む黒色土中に掘りこみ面を持ち、ルーム層を約40cm掘り下げている。ルームブロックを含む褐色土をうすく貼って平坦にしている。**周溝** 全周すると思われる。規模は基底幅で4~8cm、深さ5~12cmを測る。

柱穴、掘り方 不明

遺物出土状態 全体に散在し南西側で集中する。層位では浅間C軽石で上下に大別され、北壁側には上位のものが多。南西隅は床直状態にあり、報告3の壺が含まれる。

時期 弥生時代後期 樽式



第67図 115号住居址遺構図

115号住居 (第67図, 図版53-2、53-3)

位置 3K・L-8・9グリッド 主軸方位 N30°W 重複 115-112、87-88、98-99住

規模 縦4.70m 横3.50m 南壁は87住、西壁は99住、112住が重複するために推定する。形状 長方形 東壁が弧状になる。床面 ローム層上面を掘りこんで平坦にしている。全体に堅緻である。柱穴 5本があり、P₁~P₅を主柱穴、P₃を補助とする。上面径と深さは、P₁が34×28、60cm、P₂が30×28、55cm、P₃が30×25、60cm、P₄が28×22、54cm P₅が30×28、26cmである。柱間は、南北方向が210cm、東西方向が110cmである。掘り方は円形、円筒状であるがP₁~P₄の4本は断面CとDに示した様に壁方向に少し傾くのが特徴である。

遺物出土状態 全体に散在する。壺、甕、高杯のいずれも接合例の殆どない破片である。報告4と5

の壺は炉縁にかかり、緑石の代用と考えられる。1の壺を含めて上記3点を実用とすると、 P_2 と P_3 の周囲で3の台付壺、2の小型壺、8～11の素材を含む磨製石鏃の未成品といった非実用的なものが出土している。しかし、実用的な壺、甕類はなく、先の非実用品を祭祀具とすると、生活用具は住居外に搬出されている可能性がある。また、石製品工房跡の推定は、9と10の素材削片のあり方からすると研磨と穿孔だけの限定された工程で可能性がある。

炉 位置 P_1 と P_2 の中間にある。42×40cmの隅丸方形で深さ10cm、南側に河原石の炉縁石を置いている。内部は焼けていて、焼土を残す。

時期 弥生時代後期 樽式

116号住居（第68図、図版54-1、54-2）

位置 3M・N-6～8グリット **主軸方位** N94°W **重複** 119→118→116→112、86→88、98住
規模 縦5.15m 横4.95m **形状** 方形 東西両壁で25cmの差があり台形状でもある。床面 ロームブロックを含む褐色土を平坦にする。118、119住との重複部分は埋没土の黒色土を平坦にしている。4本の柱穴を結んだ中から南壁中央部にかけて堅緻な面が見られ、入口方向を示すと考えられる。**貯蔵穴** 東南隅寄りにある。規模は80×55cmの楕円形で深さ34cmを測る。周溝 なし **柱穴** 4本がある。規模は上面径と深さが P_1 で34×31、32cm、 P_2 で31×29、36cm、 P_3 で20×25、53cm、 P_4 で29×28、20cmを測る。 P_1 と P_3 が東と西方向に少し傾いている。柱間は、 P_1 と P_2 が215cm、 P_3 と P_4 が225cm、 P_1 と P_3 が240cm、 P_2 と P_4 が260cmである。**掘り方** なし

遺物出土状態 床面の軟らかい北と西の壁際に多い。床直のものが多く、報告の杯類の様子に接合する例が見られる。長壺といった大型器種はカマド内でも少なく、杯が主体である。

カマド 位置 東壁中央 **規模** 全長110cm 焚口幅45cm

袖 住居内に燃焼部をもち、黄白色土をもって袖を作る。壁際からの長さ80cm、高さ18cmを残す。**煙道** 削平されてない。

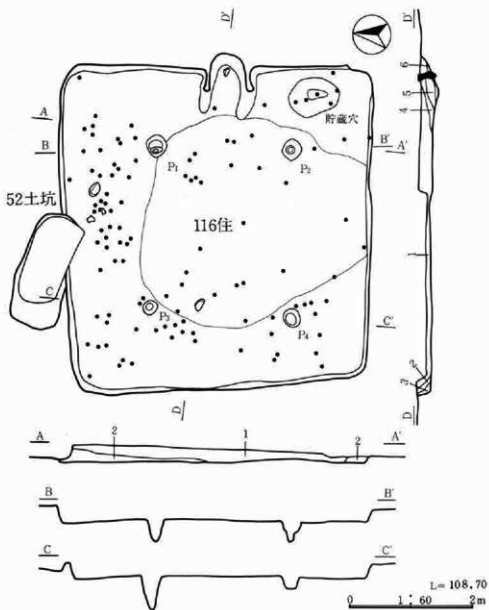
遺存状態 埋没土6層灰褐色土が天井部の可能性をもつ。角柱状に面取りした角安石の支脚が東壁の線上にある。火床面からの高さは25cmである。

時期 7世紀第4四半紀

117号住居（第69図、図版54-3）

位置 3L・M-4・5グリット **主軸方位** N32°W **重複** 117→110→85→86住 **規模** 縦4.90m 横4.78m **確認時**に床面が露呈する程浅く、四方に重複があるために推定要素が高い。**形状** 方形
床面 ローム漸移層の暗褐色土まで掘り下げて平坦にしている。炉の周囲から南壁中央にかけて堅緻な面が見られ、南壁に入口を示すと考えられる。**貯蔵穴**、周溝 なし **柱穴** 規模は上面径と深さで、 P_1 が30×27、52cm、 P_2 が25×25、60cm、 P_3 が37×29、58cm、 P_4 が36×36、64cm、 P_5 が24×28、37cmで P_1 ～ P_5 を主柱穴と考える。柱間は、 P_1 と P_2 が255cm、 P_3 と P_4 が210cm、 P_1 と P_3 が260cm、 P_2 と P_4 が250cmである。

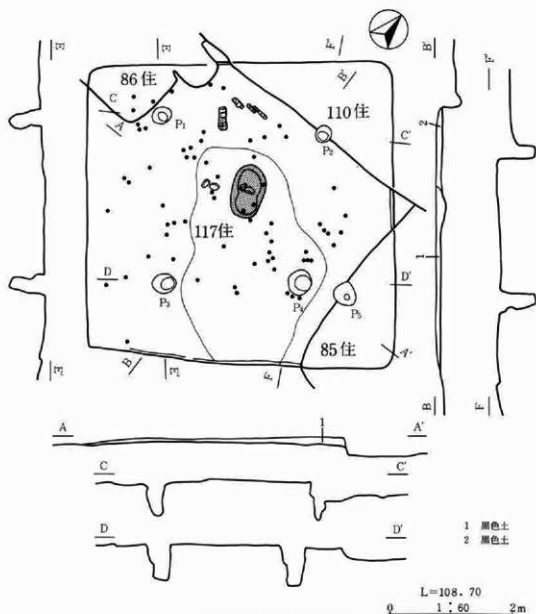
遺物出土状態 壁際を除いて全体に散在するが、住居の遺存状態からみて埋没時の様子とは考えられ



- 1 褐色土 YP C礫石 ローム粒を多く含む
 2 暗褐色土 1層よりも礫石 ロームが少ない
 3 壁の崩落土 ローム崩移土
 4 暗褐色土 礫石 YPを含む 軟弱
 5 灰褐色土 F P土石混 雑土 灰も含む
 6 雑土 下部に灰と炭化物を含む

	長	幅	深さ
P ₁	34	31	32 cm
P ₂	31	29	36
P ₃	20	25	53
P ₄	29	28	20
P ₁ —P ₂	215 cm		
P ₁ —P ₃	240		
P ₃ —P ₄	225		
P ₂ —P ₄	260		

第68図 116号住居址遺構図

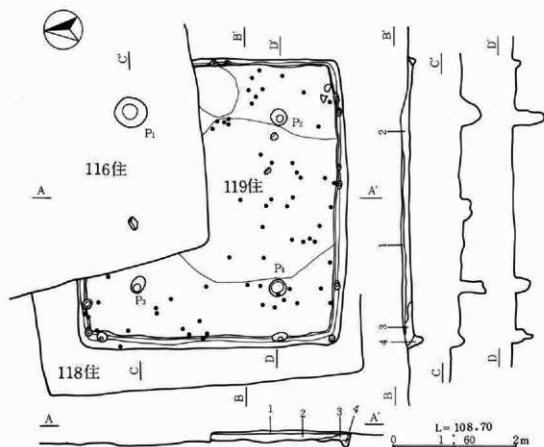


第69図 117号住居址遺構図

ない。炉の北側と西側に寸断された炭化材が残り、全体でも炭化物が多いことから焼失住居と考えられる。壺、甕、偏平片刃石斧、打製石器がある。報告の1、2、3の3個体は、重複する110住と北西方向に離れる97住埋没土中に混入していたもので、該当の型式ということで本住居に帰属させた。炭化材は詳しく記録がなく、遺物分布図を見る限り5個体がある。4点を図化したが、炉の北にある主軸方位と平行する最も大きいもので長さ36cm、最大幅14cm、厚さ不明である。

炉 位置 中央 **規模** 82×50cmの楕円形、断面碗底状で深さ7～8cm、中央に拳大の河原石2個があり、これを境とした南側に焼土が残る。

時期 弥生時代中期（竜見町式の新しい段階）



- 1 黒色土 C軽石を含む
 2 暗褐色土 軽石、ローム粒を含む
 3 黒褐色土
 4 黒褐色土 ローム粒が多い

第70図 118号・119号住居址遺構図

118号住居 (第70図)

位置 3N・O-5〜7グリッド **主軸方位** N 2°E **重複** 119-118-116-86住 **規模** 縦4.60+αm 横5.20m 確認時に床面が露呈する程浅く、86、116住の重複で東側は不明である。**形状** 方形 **床面** ローム漸移層の暗褐色土まで掘り下げて平坦にする。119住の重複部分は埋設土の暗褐色土を平坦に踏み固めている。中央部分から南壁中央部にかけて竪楸な面があり、南壁の中央に入口を示すと考えられる。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 床面がかたい中央部に散在する。古墳時代前期から後期のものが混在し、帰属を特定化することがむずかしい。報告した個体はないが、高杯、杯が本住居のものと考えられる。

カマド・炉 焼土や炭化物等の痕跡も見られず、その有無を断定できない。

時期 古墳時代中期 高杯や杯の特徴と混在する型式の量比から判断した。 5世紀後半

119号住居 (第70図, 図版55-1)

位置 3M-O-5~7グリット **主軸方位** N 3°E **重複** 119→118→116→86住 **規模** 縦4.65m 横4.25m 北東側に大きく116住が重複し、全体が118住プラン内にある。**形状** 方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げた上に暗褐色土を貼る。中央部から南壁中央にかけて堅緻な面があり、南壁中央に入口を示すと考えられる。**貯蔵穴** なし **周溝** 全周する。規模は基底幅で5cm前後、深さ1~9cmを測る。各壁で不揃いながら2基で対となる様な小孔がある。大きさは上面径10cm前後で深さ4~23cmを測る。壁際の方が多く、断面は直立している。**柱穴** P₁~P₄の主柱穴がある。規模は上面径と深さで、P₁が52×45、44cm、P₂が25×22、49cm、P₃が26×19、39cm、P₄が26×23、21cmである。柱間は、P₁とP₂が235cm、P₃とP₄が225cm、P₁とP₃、P₂とP₄が265cmである。

遺物出土状態 全体に約40片の破片が散在する。このうち半数は重複住居からの混入である。S字口緑台付甕、埴がある。報告1の埴は南東隅から出土している。

炉 確認範囲に痕跡はない。

時期 古墳時代前期 4世紀後半

120号住居 (第71図, 図版55-2、55-3、62-2)

位置 3N-O-18~20グリット **主軸方位** N82°W **重複** 153→152→120住 **規模** 縦2.58m 横3.34m **形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げて、ロームブロックを含む暗褐色土を貼っている。全体に均質で平坦である。**貯蔵穴** 東南隅にある。規模は85×55cmの楕円形、断面碗底状で深さ21~23cmである。内壁に11層を貼った可能性があること、上面に4個の角安石の割石を花卉状に配置していることから、上記の形状は掘り方で、東壁側に縁取り石組みをもっていたと考えられる。**周溝**、**柱穴**、**掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在する。羽釜、杯、碗の各破片があり、接合例は殆どない。羽釜は3個体以上があるが、報告1の破片は西壁際にまで及んでいる。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長65cm 焚口幅50cm、袖、煙道 不明

遺存状態 燃焼部から焚口前にかけて厚く灰が残る。6層は崩落した天井部と考えられる。

掲載写真は掘り方の状態で、台形の中央部に円筒状にのびると推定される煙道掘り方がある。

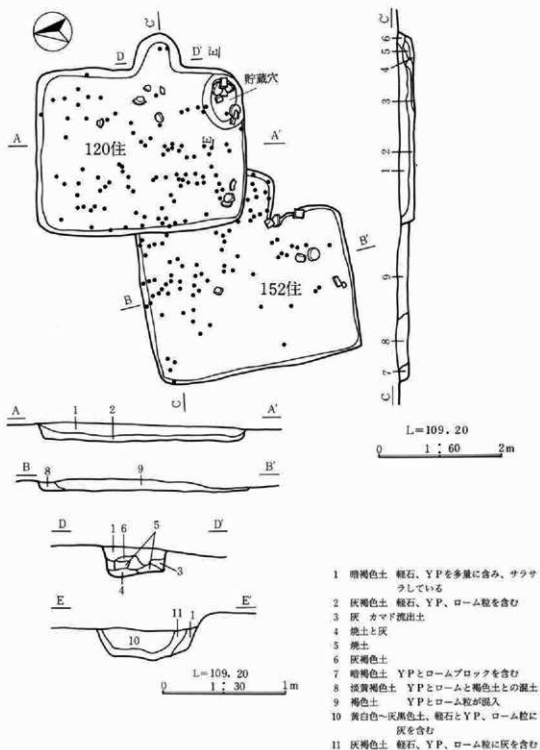
遺物は羽釜の小破片が3点出土しただけである。

時期 平安時代 10世紀第2四半期

152号住居 (第71図)

位置 3O-P-18・19グリット **主軸方位** N93°W **重複** 153→152→120住 **規模** 縦2.47m 横3.36m 北東隅が120住の重複で不明。**形状** 長方形 **床面** 全体が153住プラン内にあり、その埋没土であるローム粒を多く含んだ暗褐色土を掘り下げて平坦にしている。**貯蔵穴**、**周溝**、**柱穴**、**掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在する。コの字甕、杯、碗、須恵器甕の各破片が152点あり、接合例は少ない。報告1と2の甕の接合例によると、分布はカマド崩落に始まって放射状に広がったと考えられる。1



第71図 120号・152号住居址遺構図

のこの字壁は、カマド内で接合するもので内外面にタール状のものが付着し、カマド内での使用を示している。2の壁は、土釜状のやや厚手の特徴をもち、カマド内に分布する。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長130cm 焚口幅50cm以上

袖 住居の壁際に角安石の袖石をもつ。角安石を使い、粘土で固定する。煙道 不明

遺存状態 左袖は120住の重複で消失する。天井部は淡茶褐色土を使用するが焼土と灰の上面に崩落していた。住居内にある角安石は流出した壁体と考えられる。

時期 平安時代 10世紀第1四半紀

121号住居（第72図，図版56-1）

位置 3M・O-16→18グリット **主軸方位** N75°W **重複** 165→126→125→124→123→122→121住、140→130→131→121住 **規模** 縦2.70m 横4.35m 南西側は確認時に床面が露呈しプランは殆ど推定する。**形状** 長方形 **床面** 暗褐色土を平坦にする。重複住居と殆どレベル差がなく、堅緻な部分や面をもって分離する。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 図示した様に全体に散在するが、取上げ時の混乱もあり厳密に特定化することはむずかしい。中ではカマド周辺の遺物が混乱のないものと考えられる。報告した1～3は、この中にあり南東方向に接合例をもっている。羽釜、杯、碗の破片があり、混在する角安石はカマドの壁体と考えられる。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長110cm 焚口幅55cm 袖、煙道 不明

遺存状態 角安石は壁体の可能性が高いが崩落と左壁から入る攪乱で動いている。燃焼部内の焼土と灰も少量で埋没前にかき出されていたと考えられる。

時期 平安時代 10世紀第2四半紀

122号住居（第72図，図版56-1）

位置 3N・O-17・18グリット **主軸方位** N81°W **重複** 165→126→125→124→123→122→121住 **規模** 縦2.48m 横2.58m 壁高が殆どないために壁際での計測値である。床面 暗褐色土を平坦にするが遺存部分は重複のために少ない。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 中央部に散在する位で図示したものは124住と混乱している。須恵器、羽釜がある。

カマド 東壁南寄りに掘り方を残す。

時期 平安時代

123号住居（第72図，図版56-1）

位置 3N・O-16・17グリット **主軸方位** N98°W **重複** 165→126→125→124→123→122→121住 **規模** 縦2.98m 横3.77m 南西隅を除いて壁高がなく壁際の計測値である。**形状** 長方形 **床面** 暗褐色土を平坦にするが南西側を良好に残す位である。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 南西側で壁、羽釜の破片と磁石がある。

カマド 東壁南寄りに掘り方を残す。中央部に灰を厚く残す。

時期 平安時代

124号住居（第72図，図版56-1）

位置 3N・O-17・18グリット 主軸方位 N116°W 重複 165→126→125→124→123→122→121
 住 規模 縦2.83m 横3.42m 形状 長方形 南半分は壁高がなく推定を含む。床面 暗褐色土を
 平坦にする。122住とはレベル差がない。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 確認範囲に散在する。重複が激しいのと確認が浅いために特定化することはむずかしい。壺、羽釜、杯、碗の破片がある。

カマド 東壁中央に掘り方を残す。

時期 平安時代

125号住居（第72図，図版56-1）

位置 3N-18グリット 主軸方位 N60°W(推定) 重複 165→126→125→124→123→122→121住
 規模 縦1.90m 横1.03+ α m 北壁側だけを確認する。形状 長方形の可能性が高いが小型であ
 る。床面、貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 不明

遺物出土状態 東壁寄りで壺、杯の破片が出土しているが埋没時の流れこみと考えられる。

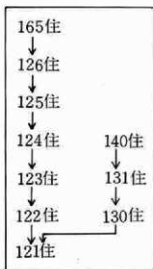
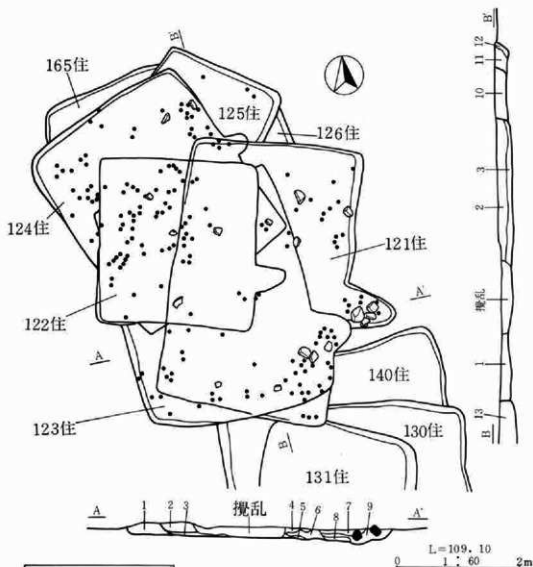
時期 平安時代

126号住居（第72図，図版56-1）

位置 3N-17・18グリット 形状、規模 121住以下7軒重複の一つで、121住と125住とはさま
 れて東壁と推定される一部が確認されたにすぎない。時期 165住とともに121住から125住まで
 とは床面の高さがちがひ、主軸方位を大きく異にし、隣接する114住、145住といった古墳時代の住居の方位
 に近似することから、奈良時代以前の可能性が高い。しかし、時期を特定できる遺物はない。

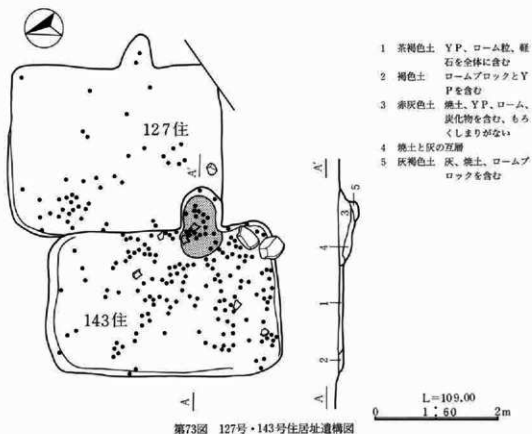
165号住居（第72図）

位置 3N・O-18グリット 主軸方位 N110°W 重複 165→126→125→124→123→122→121住
 規模 縦2.20+ α m 横0.45+ α m 形状 不明 床面 ローム漸移層まで掘り下げて暗褐色土を用
 いている。北壁際の一部が確認されただけで、上記のほかは不明である。遺物 特定できるものがない。
 時期 不確定要素が高いが重複関係では最も古く、上面の住居との床面の高さ、主軸方位のちが
 いから126住同様に奈良時代以前の可能性が高い。



- 1 黒褐色土 軽石とYPを含む
- 2 黒褐色土 C軽石とYPを多量に含む
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 灰褐色土 焼土と灰を含む
- 6 焼土、炭化物、灰の混土 (123住カマド)
- 7 茶褐色土 軽石 炭化物 焼土を含む
- 8 茶褐色土 大粒の焼土を含み、ザラザラしている
- 9 焼土、炭化物、灰の混土 (121住カマド)
- 10 暗褐色土 多量のC軽石とYPを含む
- 11 灰褐色土 軽石とYPを含む
- 12 暗褐色土
- 13 暗褐色土

第72図 121号～126号・165号住居址遺構図



第73図 127号・143号住居址遺構図

127号住居 (第73図, 図版56-1、56-2)

位置 3 K~M-15・16グリッド 主軸方位 N69°W 重複 134→129→143→127住 規模 縦2.80 m 横3.37m 形状 長方形 床面 確認時に暗褐色土が露呈している。遺物の出土位置やカマドの状態からすると、この面を床と判断できる。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 東南隅床面と西壁際に集中する。羽釜、甕、杯、碗、須恵器壺、灰釉碗、瓶、鎌がある。羽釜は4個体以上あるが接合例は少ない。鎌は東南隅の集中部から出土した。

カマド 東壁の南寄りにあるが火床面が露呈している。報告1の羽釜が出土した。

時期 平安時代、10世紀第4四半紀

143号住居 (第73図, 図版60-3)

位置 3 L・M-15・16グリッド 主軸方位 N71°W 重複 134→129→143→127住 規模 縦2.50 m 横3.73m 形状 長方形 床面 ローム層上面を掘り下げた上に暗褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 調査初期の段階には128住と143住の2軒と認識され、床面確定時に128住を欠番とし143住に取上げ遺物を一括した経過がある。図示した遺物は、取上げ時の2軒分を合成表現したものである。コの字甕、杯、碗、灰釉皿、碗、須恵器蓋、鉄滓と多様かつ多量にある。また、未報告だが須

須恵器の胴部破片P64の同一個体が127住から出土し、平面的にも動いている。南東隅の2個の角安石は、長さ40cm前後の大ぶりなものでカマド構築材を連想させるが床直からすると台石の可能性を考えたい。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長110cm 焚口幅42cm 袖、煙道 不明

遺存状態 底面に灰と焼土が残る。

時期 平安時代 10世紀第3四半紀

129号住居（第74図、図版56-1）

位置 3M・N-14~16グリット **主軸方位** N81°W **重複** 160→134→131→130→129→143→127住
規模 縦2.95m 横3.30m 確認時に床面が半ば露呈し拡大する可能性がある。**形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げて暗褐色土を平坦にする。**貯蔵穴** 東南隅にある。規模は直径90cmの円形で、断面碗底状の深さ10cmである。**周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在するが、重複部分で相互に混在している。未報告で貯蔵穴内から出土した須恵器碗の2点の破片と143住のものが接合したのは具体例の一つである。コの字甕、杯、碗、皿、須恵器甕、釘があり、3点を報告する。いずれも貯蔵穴内から出土している。

カマド 東壁南寄りに掘り方を残す。

時期 平安時代 9世紀第4四半紀

130号住居（第74図、図版56-1）

位置 3M・O-14~16グリット **主軸方位** N80°W **重複** 160→134→131→130→143→127住 **規模** 縦3.77m 横4.0m 131住と140住との重複で推定を含む。**形状** 方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げた上に暗褐色土を平坦にする。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 全体に破片が散在するが約150点と少量で接合例も殆どない。131住とは明確に分離ができず混在も十分に考えられ、重複する遺構からと推定される弥生時代、古墳時代の混入遺物が40点ある。コの字甕、杯、碗、須恵器甕がある。

カマド 東壁南寄りに掘り方を残す。全長75cm 最大幅65cmで先端寄りに焼土がある。

時期 平安時代

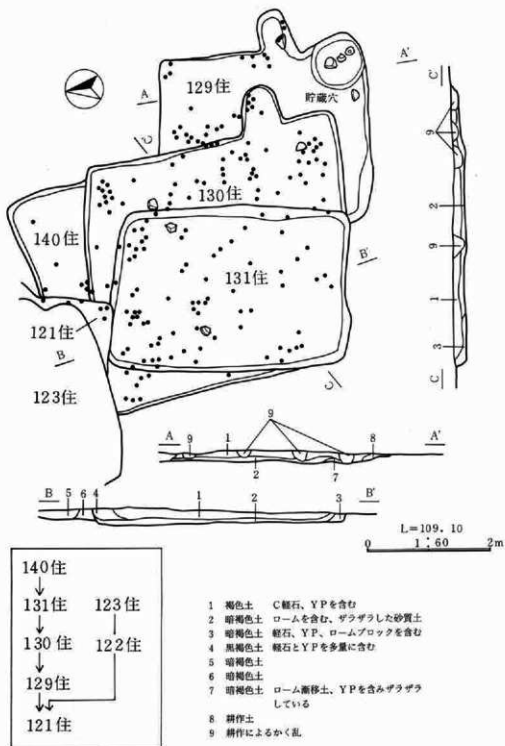
131号住居（第74図、図版56-1）

位置 3N・O-15・16グリット **主軸方位** N72°W **重複** 160→134→131→130→143→127住 **規模** 縦2.50m 横3.65m 東西両壁に推定を含む。**形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げた上に暗褐色土を平坦にする。130住、140住と段差ない。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 長甕、杯、碗、弥生土器の破片9点がある。130住との混在が考えられる。

カマド 確認範囲に痕跡もない。

時期 平安時代 長甕からは時期を特定できないが9世紀である。



第74図 129号～131号・140号住居址遺構図

140号住居 (第74図)

位置 3M・N-16グリット 主軸方位 N103°W 重複 140→131→130→123、129→143住 規模 縦3.80+αm 横1.30+αm 北東隅を確認する。形状 方形か 床面 ローム層上面まで掘り下げて暗褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 130住とほぼ全面的に重複するために分布傾向は明らかでなく、46点と少量でもある。弥生時代、古墳時代の遺物が半数、残りがコの字甕、小型台付甕脚部、杯、須恵器甕である。

時期 調査担当の所見で平安時代とするが、古墳時代の住居の主軸方位に近似することからその可能性も指摘する。

132号住居 (第75図, 図版56-3)

位置 3J・K-14・15グリット 主軸方位 N74°W 重複 162→237→132住 規模 縦2.70m 横3.47m 形状 長方形 床面 ローム層上面まで掘り下げた上に暗褐色土を平坦にする。全体に均質で中央部を中心に堅緻である。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 ローム層上面が凹凸をもっているが土坑状に掘り方をもつものはない。

遺物出土状態 全体に石を含む多量のものがある。特に焚口前は、崩落したと推定される約30個の角安石が集中する。土器は約250点あり、羽釜、杯、碗、小型甕、須恵器甕、灰釉瓶、碗、皿に分けられる。3個体以上ある羽釜とともに、3器種7個体以上ある灰釉の組成に特徴がある。報告5の須恵器大甕の破片は、143住から出土している6点の破片と同一個体の可能性が高く、破れ口上端面を粗く面取り研磨しており、砥石様の用途を推定させる転用品である。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長70cm 焚口幅40～50cm 袖、煙道 不明

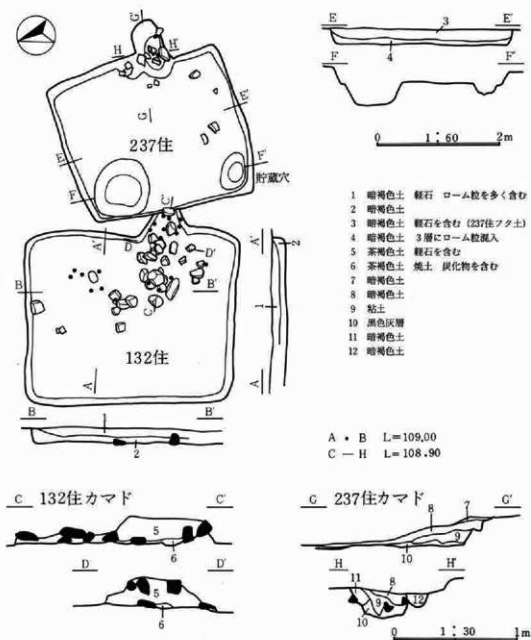
遺存状態 角安石を使用した石組みのものが外から内にかけて崩落している。石は転石のままで、焚口と壁体とで大きさをかえて組んだことが分布から推定される。237住壁際の石は煙道基部の補強材であろう。内部底面には焼土と炭化物が残り、上面で報告1の羽釜が接合不可ながら底部破片とともに出土している。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

237号住居 (第75図)

位置 3I・J-14・15グリット 主軸方位 N91°W 重複 162→155、238→237→132住 規模 縦2.50m 横2.95m 形状 方形 床面 ローム層上面まで掘り下げた上に黒褐色土とロームブロックの混土を平坦にする。焚口前に固い面が見られ、東南隅方向に続く灰の分布がある。貯蔵穴 西壁両隅に大小2基の土坑があり、南西隅をあてる。北西隅は直径90cmの円形、断面碗底状で深さ33cm、南西隅は60×38cm、深さ18cmを測る。埋没土のちがいで北西隅から南西隅へ作り替えたことも考えられる。周溝、柱穴 なし 掘り方 南壁際中央で75×68cmの円形、深さ不明の土坑1基がある。

遺物出土状態 カマド内と南壁側から約400点が出土した。床下からは殆どなく、床上に限定される。羽釜、甕、杯、碗、灰釉碗がある。羽釜は6個体以上があるが、口縁部を主としながらも接合するのは稀で壁体の補強材を含むと考えられる。

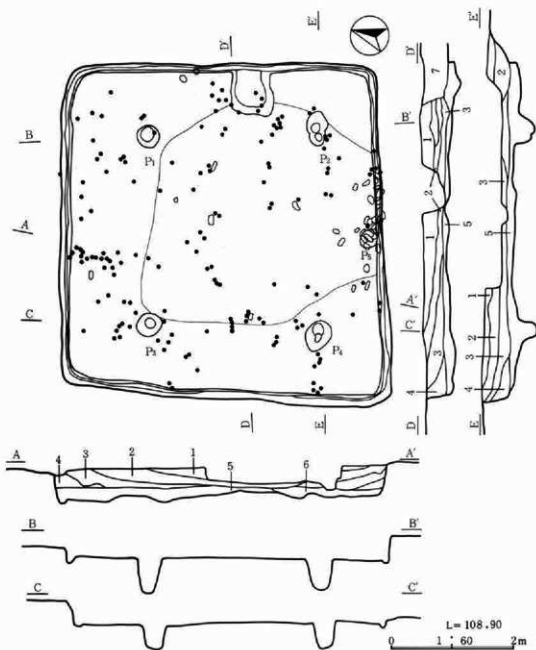


第75図 132号・237号住居址遺構図

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長100cm 焚口幅45cm

遺存状態 袖、支脚はなく、角安石の破片が数点散在する。壁体は床と同材を用いて、角安石を補強したものだらう。床面と段差のない底面には黒灰と焼土が残る。遺物は羽釜の破片だけである。

時期 平安時代 10世紀



- | | | |
|---|-------|-----------------------|
| 1 | 褐色土 | YPとローム粒を混入する |
| 2 | 褐色土 | ロームブロック 黒色粘質土を混入する |
| 3 | 暗褐色土 | ロームブロック 黒色粘質土を混入する軟弱土 |
| 4 | 淡黄褐色土 | ローム粒とブロックを含む |
| 5 | 黒褐色土 | 粘床 ロームを多量に含む |
| 6 | 黒褐色土 | 粘床 ローム、YPを多量に含む |
| 7 | 褐色土 | |

第76図 134号住居址遺構図

134号住居 (第76図, 図版57-1、57-2、57-3)

位置 3 K-M-14-16グリット **主軸方位** N93°W **重複** 160-134-129-143-127住 **規模** 縦5.40m 横5.15m **形状** 方形 南と西壁が長い。床面 ローム層上面まで掘り下げた上にロームブロックを多く含む黒褐色土を貼る。中央部から南壁中央にかけて固い部分があり、入口を示すと考えられる。**周溝** 全周する。規模は基底幅、深さともに5cm前後を測る。**柱穴** P₁~P₄が主柱穴、P₅が入口施設のものと考えられる。規模は上面径と深さで、P₁が直径35cm、深さ40cm、P₂が2基連結し53×31cmの掘り方内に深さ35cmと31cmの2基があり、P₃が36×37cm、深さ50cm、P₄がP₂と同様南北に2基連結し46×36cmの掘り方内に深さ43cmと48cmの2基がある。4本は対角線上にあり、柱間はP₁とP₃、P₂とP₄が270cm、P₁とP₃、P₂とP₄が300cmを測る。P₂とP₁は建替えの可能性がある。P₃は30×36cm、深さ25cmを測る。1本だけで直立状態にある。**掘り方** 土状状のものはないが4本の柱穴までの壁際が一段深くさげられている。貯蔵穴は断面図だけでほかに記録がない。

遺物出土状態 全体に散在するが焚口付近を除いて一様にレベルが高い。長甕、小型甕、杯、須恵器甕、瓶があり、破片数は約300点である。瓶の2点の破片は、127住、143住出土のものと同一体で127住からの流入である。41点の河原石は、P₃の脇で31点が集中し残りが散在する。31点は、一定の法量幅の中にある棒状河原石で、菰編み石と呼ばれるものだが入口と推定される壁際にあり、P₃に半ば重複してあることは入口施設の構造材の一部かP₃の根固め材と推定される。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長80cm 焚口幅40cm

袖 住居内に馬蹄形にめぐらす。**煙道** 不明

遺存状態 楕円形の浅い掘り方内に焼土と灰の分布を残すだけで上面は重複のために確認できなかった。

時期 7世紀第3四半紀

135号住居 (第77図, 図版58-1)

位置 3 N-O-26-27グリット **主軸方位** N64°W **重複** 137-136-135住 **規模** 縦3.30m 横2.45m **形状** 長方形 **床面** 136住埋没土を掘り下げ、その灰黒色土を平坦にしている。**貯蔵穴**、**周溝**、**柱穴**、**掘り方** なし

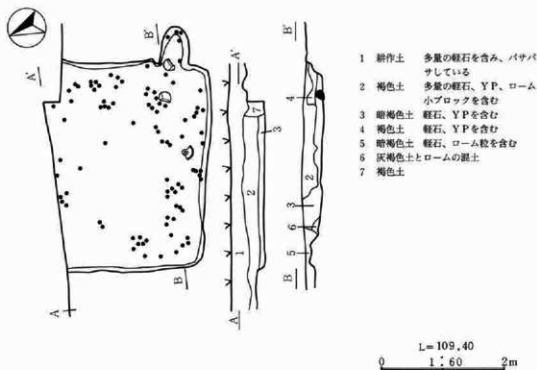
遺物出土状態 北西隅付近を除いて南壁から焚口にかけて帯状に集中する。床直のものは少なくて殆どが床上10~30cmの層中にある。破片数は約170点で136住、137住からの混入が42点あり、ほかが羽釜、土釜、碗、杯である。羽釜と土釜はカマド内に出土位置をもち、接合例は少ないが並置式の使用方法も考えられる。

カマド **位置** 東壁南隅寄り **規模** 全長80cm 焚口幅32cm

袖 壁体自身はロームブロック等を多く含んだ灰褐色土を馬蹄形にめぐらす。袖石は焚口手前にある角安石に可能性がある。

遺存状態 壁体を馬蹄形に残すが袖石や支脚はなく、天井部も崩落流出している。焼土や灰は少量が残る。

時期 平安時代 11世紀第2四半紀



第77図 135号住居址遺構図

136号住居 (第78図, 図版58-1、58-2)

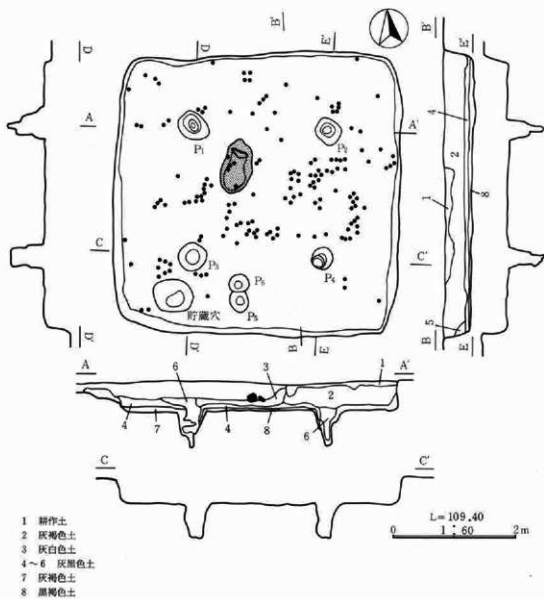
位置 3N・O-25・26グリッド 主軸方位 N82°W 重複 137→136→135住 規模 縦4.50m 横4.55m 形状 方形 床面 ローム層上面まで掘り下げた上に黒褐色土を厚く8cm程貼床している。同層中には浅間C軽石、YP、ロームブロックが多量に含まれ、固くしまっている。

貯蔵穴 南西隅にある。規模は62×48cmの隅丸方形、深さ42cmを測る。柱穴 P₁~P₄が主柱穴、P₅~P₆が入口施設のものである。規模は上面径と深さで、P₁が52×41、58cm、P₂が43×35、58cm、P₃が41×45、54cm、P₄が35×33、56cm、P₅が23×30、40cm、P₆が直径30、28cmである。P₁~P₄は対角線上にあり、柱間はP₁とP₂が213cmのほかは205cmである。P₅とP₆は連結した掘り方内に、深さを異にして直立している。P₁~P₄は埋土がかたくつき固められており、柱は抜き取られたか。

遺物出土状態 壁際が少なく、P₁~P₄に囲まれた中に多く、炉で2分され、貯蔵穴付近の3ヶ所に集中が見られる。床直は少なく、出土レベルは床上10cmまでと20cmを越すものとに分けられ、この中間に浅間C軽石を多く含む灰褐色土がある。破片は約300点あり、250点程は西側の137住からの流入でしかも灰褐色土の上層にある弥生時代後期のものである。残りはS字口縁台付甕、壺、埴がある。報告4の片岩は磨製石鏃の素材であるが掘り方出土である。

炉 位置 P₁とP₂に寄った中央北にある。規模 床がわずかにくぼみ焼土が少量ある。

時期 古墳時代前期 4世紀後半



第78圖 136号住居址遺構圖



第79図 137号住居址遺構図

137号住居（第79図，図版58-1）

位置 3O・P-26・27グリッド **主軸方位** N85°W **重複** 137→136→135住 **規模** 縦、横4.0+αm **北と西**は調査区域外、東は135、136住が重複 **形状** 不明 **床面** ローム層上面まで掘り下げて褐色土を平坦にしている。確認が浅く全体の状態は不安定である。**貯蔵穴、周溝、柱穴** なし
遺物出土状態 全体に散在し殆どが床直である。135、136住寄りに多いこと、136住埋没土中にも多く見られることから分布の中心が東南方向にあったと考えられる。破片数は157点で壺、甕、台付壺、高杯がある。高杯は3個体以上あるがいずれも内外面に赤色塗彩されている。

炉 確認範囲内では痕跡がない。

時期 弥生時代後期 樽式

138号住居（第80図，図版59-1、59-2、59-3、61-3）

位置 3M・N-19・20グリッド **主軸方位** N75°W **重複** 150→149→138住 **規模** 縦2.21m 横2.83m **形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げ暗褐色土を平坦にする。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし
遺物出土状態 北西隅付近で少ないほかは全体に散在する。羽釜、杯、椀、灰釉皿、鎌、刀子、砥石

がある。壁際に器形を残す報告3～11の碗や皿があるものの大型器種については、カマドが良好な状態で残るものの個体数が少ない。羽釜はカマドにかけた状態と推定される。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長60cm 焚口幅28cm

袖 住居の壁際に安山岩と角安石を貼付する。その上には砂岩の切石を横架して焚口とする。砂岩は長さ36cmで幅16cm、厚さ17cm前後に面取りしている。煙道 削平されている。

遺存状態 焚口部の石と支脚を残し、底面には支脚の高さとほぼ同じ厚さ10cm程の灰がある。羽釜は支脚の右側にくずれていたものである。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

149号住居（第80図、図版61-3、62-1）

位置 3L～N-18・19グリット **主軸方位** N85°W **重複** 150→149→138住 **規模** 縦3.32m 横2.65m 北西隅と東壁側全体は重複のために推定する。**形状** 長方形 **床面** ローム漸移層の暗褐色土中まで掘り下げて平坦にする。**貯蔵穴** 東南隅にある。規模は直径62cmの円形、断面碗底状で深さ14cmを測る。上面ではコの字甕、杯2個体が出土した。

遺物出土状態 貯蔵穴と中央部に多い。中央部のもは床上5cm前後高いレベルにある。破片数は約150点あり、コの字甕、杯、碗、須恵器壺、土鍾、砥石、釘がある。砥石は2点あり、報告3が南壁際の安山岩製置砥、4が中央部にある流紋岩製の携帯用のものである。貯蔵穴脇からは2点の鉄滓小塊が出土しているが混入の可能性が高い。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長83cm 焚口幅45cm

遺存状態 上面は削平されていて掘り方に近い。底面いっばいに厚さ14cmの灰が残る。

時期 平安時代 9世紀第3四半紀

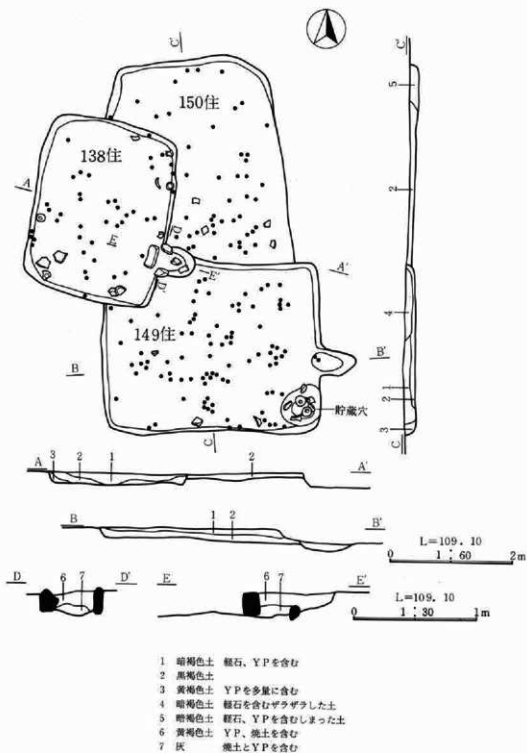
150号住居（第80図、図版61-3、62-1）

位置 3L・M-19・20グリット **主軸方位** N96°W **重複** 150→149→138住 **規模** 縦2.70m 横3.30+αm 北壁両隅付近を除いて149、138住との重複のために推定する。**形状** 長方形 **床面** ローム漸移層の暗褐色土を平坦にしている。138、149住とは2～5cmの段差があり、中でも不安定な状態にある。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

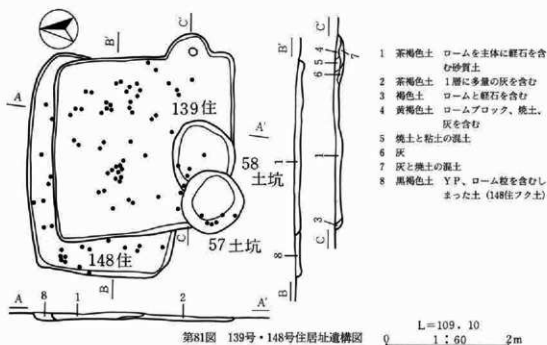
遺物出土状態 全体に散在する。破片数は82点あるが接合例は少ない。弥生土器、S字口縁台付甕、コの字甕、杯、碗、皿と報告した緑色片岩の剥片がある。剥片は弥生時代の磨製石籬の素材で、弥生土器、S字口縁台付甕ともに混入と考えられる。

カマド 確認範囲に痕跡がない。

時期 平安時代 9世紀第3四半紀の149住以前であるが前半代と考えられる。



第80図 138号・149号・150号住居址遺構図



第81図 139号・148号住居址遺構図

139号住居 (第81図, 図版58-3)

位置 3K~M-17・18グリッド 主軸方位 N88°W 重複 148→139住→58→57土坑 規模 縦2.78m 横2.76m 壁際の計測値だが拡大する可能性がある。形状 方形 床面 ローム層上面まで掘り下げて褐色土を平坦にする。148住とは段差もなく分別するのはむずかしい。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 全体に散在する中で東壁側から中央部にかけて多い。破片数は90点で、重複する遺構等からの弥生時代～古墳時代のものが混入する。羽釜、甕、杯、椀、蓋がある。接合例はなく、カマド内の椀を時期決定資料としたが報告していない。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長75cm 焚口幅約50cm

遺存状態 壁から20cm離れて灰の分布があり、壁際に焼土がある。焚口は壁際少し手前と考えられ、灰はかき出した位置と推定される。

時期 平安時代 10世紀

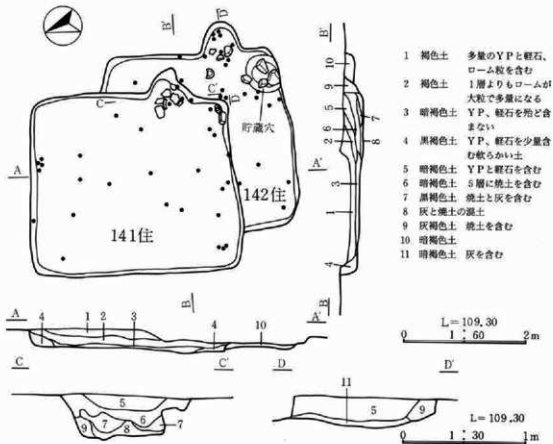
148号住居 (第81図, 図版58-3)

位置 3K~M-17・18グリッド 主軸方位 N85°W 重複 148→139住 規模 縦3.37m 横2.30m 形状 長方形 南北両壁は弧状をなす。床面 ローム層上面まで掘り下げて褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 不明

遺物出土状態 コの字壺、羽釜、杯、灰釉椀の破片が19点ある。少量で接合例も殆どない遺存状態であるために時期判定の資料とするが、報告個体はない。

カマド 東壁に推定するが確認範囲内に痕跡はない。

時期 平安時代 10世紀



141号住居 (第82図, 図版60-1、60-2)

位置 3K-M-20→22グリッド 主軸方位 N70°W 重複 164→142→141住 規模 縦2.85m 横3.30 形状 長方形 床面 ローム層上面まで掘り下げた上に暗褐色土を平坦にする。焚口前が一段深くなり、かき出しの灰がうすく分布する。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内に羽釜が残るほかは、全体にまばらである。東南隅は土坑状のものがなく石の脇に伏せた椀があり、棚板に伏せて置いたことも考えられる。ほかに杯、椀、須恵器壺がある。カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長、幅とも60cm 遺存状態 袖石、支脚ともにない。報告1の羽釜は上胴部までが図示しているが、接合できなかった底部破片があり、ほぼ中央にかけたものと考えられる。

時期 平安時代 10世紀第3四半紀

142号住居 (第82図, 図版60-2)

位置 3K-L-20・21グリッド 主軸方位 N71°W 重複 164→142→141住 規模 縦2.87m 横2.90m 北西隅は141住が重複するために推定する。形状 方形 床面 ローム漸移層の暗褐色土を平坦にする。貯蔵穴 東南隅にある。規模 上面径で60×53cmの隅丸方形、断面碗底状で深さ15cmを測る。外縁は角安石で縁取られていた。1石は内側にずり落ちていたが、3石は床よりも数cm頭を出す

状態で埋めこまれていた。内部から遺物はなく、周縁に破片が散在する。周溝、柱穴 なし

遺物出土状態 カマド内でつぶれた杯、碗2個体と台付壺がある。ほかは壺、杯の破片が少量ある位で、大型器種は接合不可の破片だけである。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長50cm 焚口幅55cm

遺存状態 焚口に被熱で割れた砂岩の破片2点が杯と重なってある。部材の可能性が高い。先端部にある台付壺の口縁部は煙道基部での補強材であろう。底面の灰はこの台付壺前後で途切れている。

時期 平安時代 10世紀前半

144号住居 (第83図、図版61-1)

位置 3 N~P-23~25グリット **主軸方位** N 0°W **重複** 3区12、144-145→3区9住 **規模** 縦3.70m 横4.60m 西壁側は調査区域外にあり南壁側は145住との重複で床面近くまでが露呈し大きくなる可能性がある。**形状** 長方形 各壁が少し弧状である。**床面** ローム層上面まで掘り下げた上に暗褐色土をうすくならして貼付している。全体に均質で炉とP₁、P₂の周辺にかたさが見られる。**貯蔵穴、周溝、掘り方** なし **柱穴** P₁~P₃の3本が主柱穴で調査区域外に残る1本が推定され、4本主柱穴と考えられる。規模は上面径と深さで、P₁が17×30、40cm、P₂が26×27、47cm、P₃が18×24、45cmを測る。推定1本を含む4本は対角線上にあり、柱間はP₁とP₂が150cm、P₂とP₃が210cmである。P₃が中央寄りにあり柱間が狭くなるか。

炉 P₁とP₂の柱間にある。円形の掘り方をもつ地床炉で、規模は60×66cm、断面皿状の深さ7~10cmである。炉内の南側に棒状河原石をおいている。焼土と炭化物が見られた。

遺物出土状態 炉の周囲、特に東南側で集中した状態が見られる。壺、甕、台付壺、丹彩の高杯の破片がある。報告1~5の土器は炉内と周囲から出土したもので、1と2は接合例は少ないが炉体土器の一部である。6点の礫器は敲打痕、条痕をもっている。

時期 弥生時代後期 樽式

147号住居 (第83図)

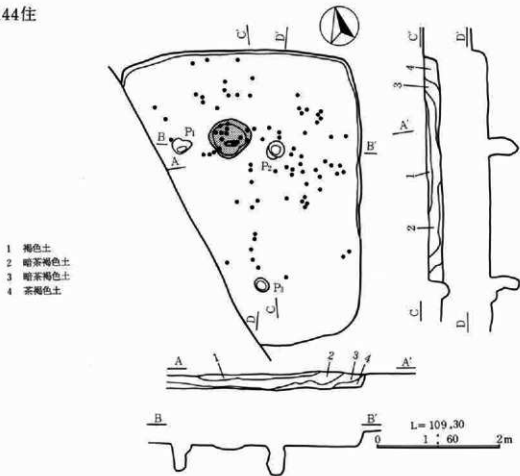
位置 3 L・M-12~14グリット **主軸方位** N91°W **重複** 160→151→147→89住 **規模** 縦3.45m 横3.06m **形状** 方形 **床面** ローム漸移層の暗褐色土を平坦にする。北東側は重複のために床面が露呈し全体に不安定な状態にある。

貯蔵穴、周溝、柱穴 なし **掘り方** 不明

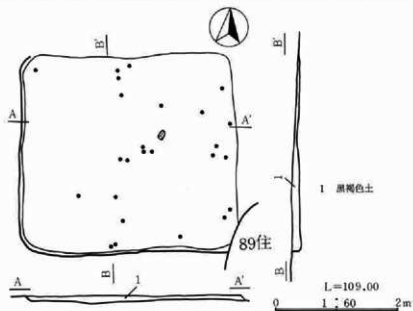
遺物出土状態 北東側は確認時に床が露呈する程で、遺物もまばらに残る。甕、丹彩の高杯の破片32点がある。床面の状態からして遺物分布も不十分で、重複住居へ流出が激しい。接合例もない。

時期 弥生時代後期 樽式

144住



147住



第83図 144号・147号住居址遺構図

145号住居（第84図、図版61-2）

位置 3N-P-21~24グリット **主軸方位** N13°W **重複** 3区12、144→3区10→145→146→3区9住 **規模** 縦5.55+αm 横6.90m 西壁側は調査区域外にある。**形状** 方形 南壁中央の貯蔵穴の位置が30cm程張り出す。**貯蔵穴** 南壁中央にある。規模は73×90cmの方形 断面方台形で深さ60cmを測る。周溝 全周すると考えられる。規模は基底幅、深さとも7~11cmを測る。底面には多少の凹凸があるが小孔と断定できない。貯蔵穴東脇で直線状にのびる帯状の凹痕があり、貯蔵穴設置に伴う南壁拡張以前のプランと考えられる。旧プランは東南隅から貯蔵穴中央部を東西に横断した位置と推定される。**床面** ローム層上面まで掘り下げて平坦にしている。4本主柱穴を結んだ内側一帯にかたさが見られる。**柱穴** P₁~P₄が主柱穴である。規模は上面径と深さで、P₁が15×18、47cm、P₂が21×36、55cm、P₃が19×20、62cm、P₄が21×28、59cmを測る。柱間は P₁とP₂が340cm、P₃とP₄が320cm、P₁とP₃が330cm、P₂とP₄が335cmである。各柱穴は、いずれも円筒形、P₂とP₄が大型で南壁の拡張と合わせて建替えが推定される。**掘り方** なし

遺物出土状態 全体に散在するがP₃を中心とした南西側に稀薄な傾向がある。器形を残すもの、つぶれて接合するものが12個体あり、住居内での配置を推定させる。北東隅近くで紡錘車と桃の果核を含む杯3点、南東側で高杯と甌、杯2点、貯蔵穴南に杯、P₃脇に甌2点、中央部付近に杯と小型甌である。壁際の隅寄りに集中する傾向と住居中央部付近の稀薄さが好対称である。4点の棒状河原石のうち2点は組合せを必要とする敲打具と判断した。分布の中ではカマドと貯蔵穴の内部からの出土は皆無で甌2個体の少数例の意味と結びつくことかと判断される。

カマド **位置** 北壁中央 **規模** 全長105cm 焚口幅約40cm 燃焼部は住居内に壁外に煙道がある。

袖 左袖が残る。黄白色土を使い長さ40cmが残る。**煙道** ローム層を掘りこみ先端は直立する。底面近くに灰があり焼土がブロック状にある。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 ニツ岳 FA の堆積は見られない。 6世紀前半

146号住居（位置は全体図に示す）

位置 3P-20・21グリット **主軸方位** N85°W **重複** 145→146住 **規模** 縦0.95+αm 横4.10m 東壁を確認しただけで残りは調査区域外にある。**形状** 方形と考えられる。**床面** ローム新移層の褐色土中に掘りこみ面をもつ。ローム層を約20cm掘り下げて平坦にする。壁高45cmを残す。

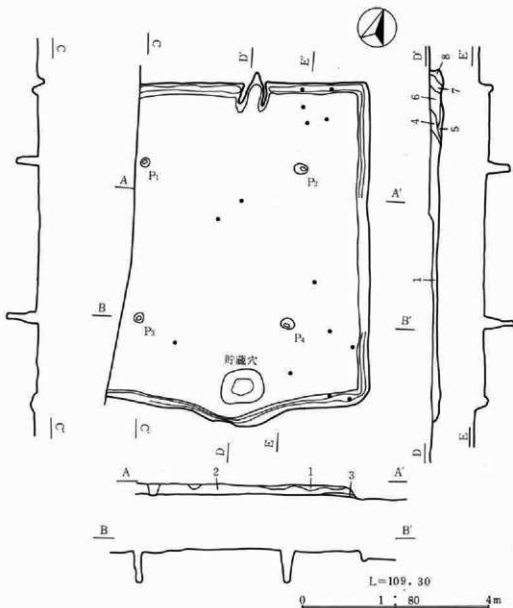
貯蔵穴、柱穴 不明 **周溝** なし

遺物出土状態 混入遺物を除くと長甌、高杯がある。いずれも細かな破片で28点程あるが接合しない。遺構の時期を明らかにする遺物はない。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 焚口部を残して確認された。全長95+αcm 焚口幅約45cm

遺存状態 壁体は黄褐色土を馬蹄形にめぐらしている。袖部は殆どが住居内にあり、基底幅で25cm前後、高さ20cmを測る。内部は、壁際から20cmの位置にシルト質の切石の支脚が杯を頂部に伏せた状態である。底面には支脚の前後に灰が、その上面に焼土が厚く残る。

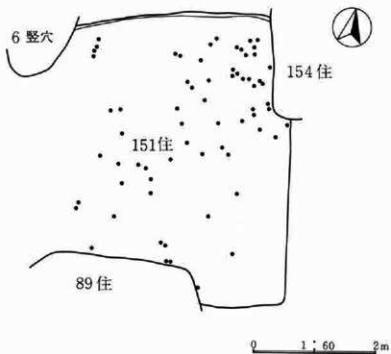
時期 古墳時代後期 6世紀



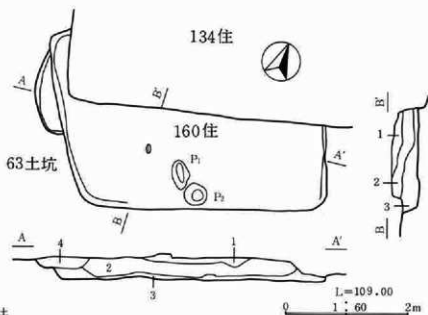
- 1 暗灰色土 B軽石を含むザラザラした土
- 2 灰黒色土 C軽石 YPを含むしまった土
- 3 灰褐色土 YPを多く含むザラザラした土
- 4 暗褐色土 C軽石 YP粒子 ロームの小ブロックを含むしまった土
- 5 灰白色土
- 6 灰褐色土 C軽石 焼土粒子を含む
- 7 灰褐色土 C軽石 YP 焼土粒子と灰を含む
- 8 灰褐色土 C軽石及び焼土粒子を含むザラザラした土

第84図 145号住居址遺構図

151住



160住



- 1 赤褐色土
- 2 黒色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗茶褐色土

第85図 151号・160号住居址遺構図

151号住居 (第85図)

位置 3 J~L-12~14グリット 主軸方位 N85°W 重複 162→155→151→147→89住 規模 縦4.0+αm 横4.62m 西壁側は89、147住等との重複で不明。形状 方形 床面 ローム漸移層の暗褐色土を平坦にする。全体に均質であるが特にかたい部分は見られない。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 不明 柱穴は掘り方調査がないので当初からないとは断定できない。

遺物出土状態 重複を除いた範囲に散在する。甕(赤色塗彩を含む)、小型甕、高杯の破片が72点あるが接合例のない小さなものである。

炉 確認されていない。

時期 弥生時代後期 樽式

160号住居 (第85図)

位置 3 L・M-13・14グリット 主軸方位 N113°W 重複 160→151→147→134住→6 堅穴 規模 縦4.15m 横2.95m 西隅を残した北壁の大部分は134住の重複で推定する。形状 長方形 床面 ローム層上面まで掘り下げて平坦にする。全体に均質で良好である。貯蔵穴、周溝 なし 柱穴 P₁とP₂は入口施設の可能性がある。P₁は47×26cmの長楕円形で深さ32cm、P₂は32×35cmの円形で深さ17cmを測る。

遺物出土状態 埋没土2層中、床上15cm前後のものが多い。甕、台付甕、丹彩のある高杯の破片120点余りと石器2点がある。

時期 弥生時代後期 樽式

153号住居 (第86図、図版62-2、62-3)

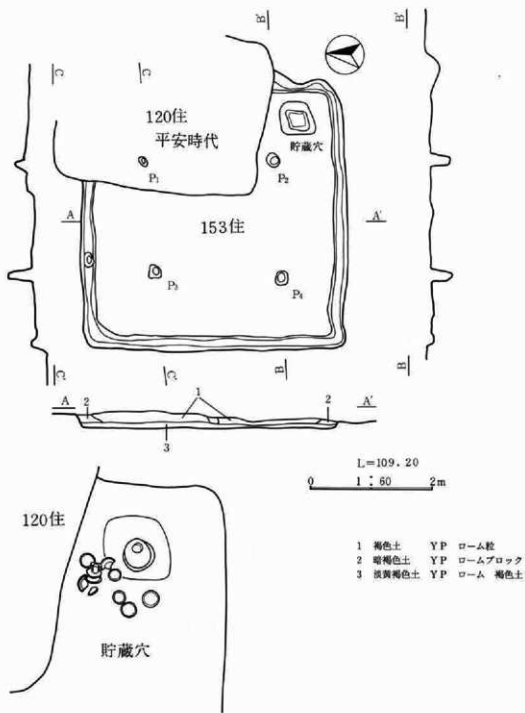
位置 3 N~P-18~20グリット 主軸方位 N94°W 重複 153→152→120住 規模 縦4.23m 横4.24m 北東隅は120住の重複のために推定する。形状 方形 床面 ローム漸移層の暗褐色土まで掘り下げた上にロームブロックを含む同性状の土を貼る。壁際が2~3cm高く、中央部が低い状態にある。貯蔵穴 東南隅にある。規模は上面で51×53cmの方形、断面碗底状で深さ43cmを測る。周縁約20cm幅で3cm程低い。周溝 全周すると考えられる。規模は基底幅で8~10cm、断面方台形で深さ5~7cmを測る。底面には図化していないが不定間隔の小孔らしい凹痕が写真から観察される。柱穴 P₁~P₄が主柱穴である。規模は上面径と深さで、P₁が25×21、37cm、P₂が18×10、22cm、P₃が20×20、34cm、P₄が23×17、30cmを測る。4本は対角線上にあり、柱間はP₁とP₂、P₃とP₄が205cm、P₁とP₃が175cm、P₂とP₄が185cmと規則的である。柱痕は底面径からすると10cm前後である。掘り方 不明

遺物出土状態 北西隅寄りの壁際と貯蔵穴周囲に集中がある。前者は接合例が殆どない破片ばかりであるのに対して、後者は使用位置を示す完形個体で構成される。その組成は甕1、杯8、罌1の10点である。甕は貯蔵穴の底面から24cm浮いて伏せた状態にあり、上蓋に仮置きしたものが埋没に伴い崩落したと考えられる。杯、罌はいずれも口縁を上にした状態で、2個体以上重ねたものと1個体だけの二者があり、厳密には位置を異にする。

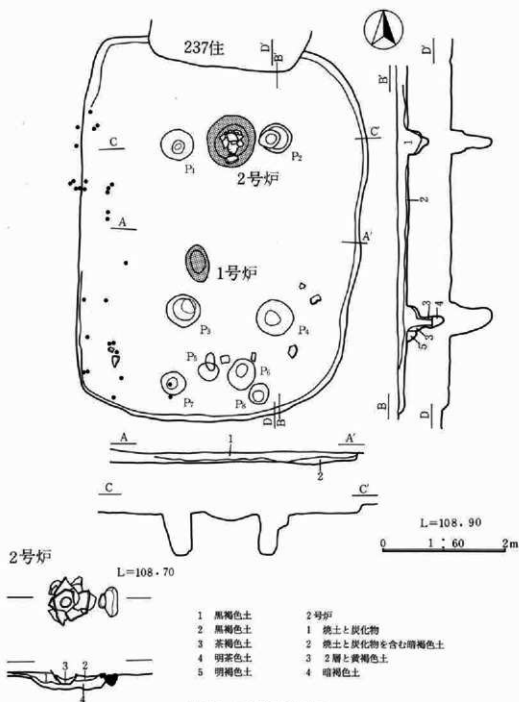
カマド 東壁南寄りの貯蔵穴寄りの位置に掘り方を残す。壁線上に燃焼部をもつ構造で90×60cmの檜

円形の掘り方である。住居内にわずかな粘土があり袖と推定される。

時期 古墳時代後期 鬼高II式 6世紀後半



第86図 153号住居址遺構図



第87図 155号住居址遺構図

155号住居 (第87図)

位置 3 I~K-12~14グリット 主軸方位 N 2°W 重複 162-155-151-237住 規模 縦4.45m 横6.05m 北壁中央は237住重複のために推定をする。床面 ローム層上面まで掘り下げた上にロームブロックを含む明褐色土を平坦にする。全体に均質、かたく良好である。貯蔵穴、周溝 なし 柱穴 P₁~P₄が主柱穴、P₅~P₈は南壁中央での入口施設である。規模は上面径と深さで、P₁が52×42、

68cm、 P_2 が50×48、67cm、 P_3 が52×51、61cm、 P_4 が59×58、67cmを測る。 P_1 を除き2重の掘り方をもち、底面内径は16～20cmだが P_4 の断面では6～8cmの柱径と推定される。柱間は、 P_1 と P_2 、 P_2 と P_4 が140cm前後、対する南北方向が260cm前後である。同じく、 P_3 は P_6 と対をなすもので32×34、41cm、 P_4 が41×48、49cmで、 P_5 は約50度の傾きをもっている。 P_7 は P_8 と対のもので、39×37、37cm、 P_8 が28×32、26cmを測る。柱間は P_5 と P_6 が芯々で45cm、 P_7 と P_8 が140cmである。 P_5 ～ P_8 の構造は階段状のものと推定されるが、仮に柱穴の50度の傾斜からは壁高80cm前後で接地面が復元される。

遺物出土状態 2号炉内と南壁寄りに少量ある。炉内は図示した様に炉体として使用されたもので同一個体の甕を下胴部でうちかいて転用したものである。口縁～中胴部にかけては花卉状にめぐらし炉体として安定をはかっている。その脇には緑石との間に凹石があり、炉縁辺での道具とも考えられるがススの付着の多さからすると支脚の可能性も高い。

炉 P_1 と P_2 の間と P_5 の北側に新旧2基がある。炉体土器、焼土と炭化物の遺存量からすると1号から2号への順である。しかし、ほかの2基もつ住居例と同様だが必ず中央部寄りのものが小型で機能差も考えられる。

時期 弥生時代後期 樽式

154号住居

第3次調査で本線敷用地3K-12～14グリットで確認した住居の南西隅をさすが、第6次調査の東側敷用地での155住の調査の結果、その一部であることが判明したので欠番扱いとした。記録、写真、遺物に対する標記は調査時の名称を残したままであるが、土器破片20点は155住の検討資料に含めた。

156号住居 (第88図、図版63-1)

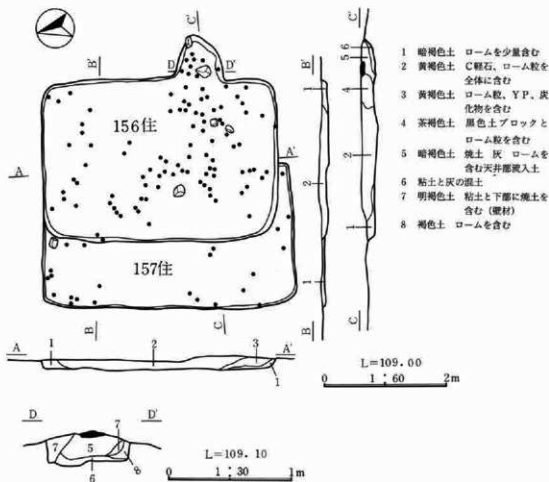
位置 3J～L-17～19グリット **主軸方位** N70°W **重複** 157→148→156住 **規模** 縦2.57m 横3.75m **形状** 長方形 **床面** ローム漸移層の暗褐色土まで掘り下げて平坦にする。東南隅が50cm四方の範囲で2～4cm高い。**貯蔵穴** 床面を掘りこんだものはないが東南隅の高い面が相当の施設か。**周溝、柱穴** なし **掘り方** 貼床の可能性ある。

遺物出土状態 カマド内から中央部にかけて多い。羽釜3個体以上、杯、椀、須恵器甕、灰釉椀、瓶の破片が約160点ある。須恵器大甕のNa168の破片(未報告)は143住を始めとした10世紀後半代の複数の住居に分散するもので、転用を含めて埋没前の分有の可能性もある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長85cm 焚口幅70cm

遺存状態 燃焼部左先端と支脚用の角安石が残る。天井部や両袖の状態は観察できないが、全体の底面上には厚さ8cm前後の黒炭が残る。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀



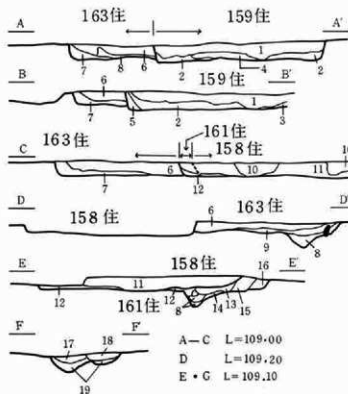
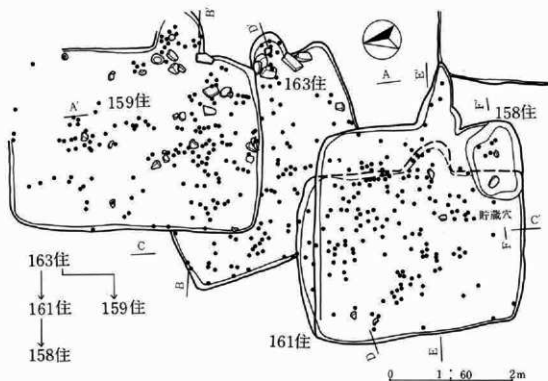
第88図 156号・157号住居址遺構図

157号住居 (第88図)

位置 3 L・M-17~19グリッド 主軸方位 N73°W 重複 161→158→157→148→156住 規模 縦2.20±εm 横4.05m カマドを含む東壁側は156住の重複のために推定する。形状 長方形 床面 暗褐色土を平坦にする。全体に均質である。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし 掘り方 不明
 遺物出土状態 羽釜、短頸瓶、須恵器壺、蓋、灰軸椀の各破片が42点ある。壁際の床直にあるが接合例はなく、報告個体もない。

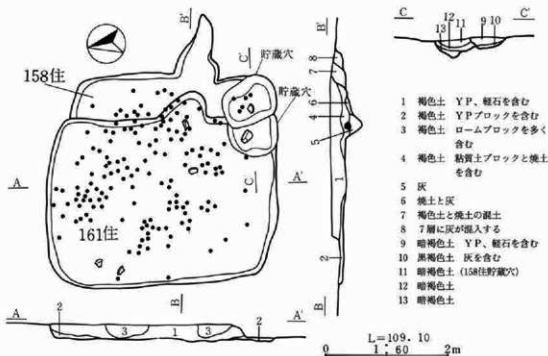
カマド 東壁と推定されるが156住の重複で消失している。

時期 平安時代 10世紀前半か



- | | |
|--------------|---------------------|
| 1 淡褐色土 | 2 黒褐色土 |
| 3 灰 | 4 黄褐色土 |
| 5 黄褐色土 | |
| 6 褐色土 | YP、礫石、C礫石を含むザラザラした土 |
| 7 暗褐色土 | 少量のローム粒、礫石を含む |
| 8 灰 | |
| 9 暗褐色土 | 粘質土と焼土を含む |
| 10 褐色土 | ロームブロック多い |
| 11 褐色土 | YP C礫石を含む |
| 12 褐色土 | YPブロックを含む |
| 13 褐色土 | 粘質土と焼土を含む |
| 14 焼土 | |
| 15 褐色土と焼土の混土 | |
| 16 褐色土と焼土の混土 | |
| 17 暗褐色土 | (158住貯蔵穴) |
| 18 黒褐色土 | (161住貯蔵穴) |
| 19 黒褐色土 | |

第89図 158号・159号・161号・163号住居址遺構図



第90図 158号・161号住居址遺構図

158号住居 (第89図、第90図)

位置 3 K・L-19・20グリット 主軸方位 N80°W 重複 164-163-161-158-157住 規模 縦 3.28m 横 3.30m 形状 方形 床面 南半分はローム漸移層の暗褐色土まで掘り下げ、北半分は重複する164住の埋没土上面を平坦にしている。161住との床面段差はない。貯蔵穴 東南隅で161住のものと同様の。規模は約60cmの方形で断面碗底状、深さ15cmを測る。底面に灰がある。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 中央部に破片の集中がある。コの字壺、羽釜、杯、碗、内黒碗、須恵器壺、蓋、灰軸碗の破片約500点と鉄器がある。壺の個体数が多いが重複する161住との混在は十分に考えられる。

カマド 東壁南寄り掘り方状態を確認した。断面からは埋没土16層を161住カマド痕跡と判断され、貯蔵穴同様に同一プラン内で重複している。焚口前に灰かき出し用の直径20cm強のピットがあり、かき出しを何度か繰り返しての使用状態が見られる。

時期 平安時代 10世紀第3四半紀

159号住居 (第89図、第91図、図版63-2、63-3、64-2)

位置 3 J・K-20・21グリット 主軸方位 N69°W 重複 164-163-159住 規模 縦2.85m 横 4.03m 形状 長方形 床面 暗褐色土を平坦にする。全体に均質で良好である。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内と南半分に多い。土器に混在する16点の石と報告3の羽釜、5、6の碗の接合状態からすると、カマドの崩落に伴う状況と考えられる。壁際に報告した個体が多く、中央部のも

の比べて遺存状態が良好である。報告1の四耳壺はカマド左壁から出土したが被熱のために変色しており、壁体の可能性がある。9の墨書土器は南西壁際で位置が高く、9世紀前半代でもあることから混入と考えられる。甕、羽釜、杯、椀、四耳壺、灰釉椀、皿の破片が約400点あり、刀子、鏝、鉄滓の各1点がある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長80cm 焚口幅50cm

袖 住居の壁際に面取りした角安石を対に置く。左袖は据えた穴が残る。

遺存状態 袖石のほかに2点の角安石の支脚がある。2点間は約20cm、火床面からの高さ約15cmを測る。構造は2連式で焚口を始めとして壁体まで石を組んだものと考えられる。

時期 平安時代 11世紀前半

161号住居 (第89図、第90図)

位置 3K・L-19・20グリッド 158住プランと北壁を除いて全面的に重複する。**主軸方位** N80°W
重複 164→163→161→158→157住 **規模** 縦3.28m 横3.70m 北壁の一部を除いて断面等から推定をする。**床面** 158住と同様である。**貯蔵穴** 東南隅にある。規模は方約60cmの方形で椀底状の断面形、深さ28cmを測る。**周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 北壁際で甕、杯、椀の破片が10点程出土した。貯蔵穴内からは158住構築時に廃棄された角安石がある。

カマド 158住カマド掘り方と重複して痕跡が東壁中央で確認された。

時期 平安時代 158住に近い

162号住居 (位置は全体図に示す)

位置 3J・K-13・14グリッド 調査時の全体図に位置の記録があるが、個別遺構図等の記録類は一切なく、詳細不明の住居である。全体図からは南西隅を中心とした2m程の範囲が記録されている。**主軸方位**はN80°W前後で古墳時代前期頃の傾向に近い。重複は162→155→132住と記録がある。遺物は甕、塗彩土器と記録されている。**時期** 弥生時代中期

163号住居 (第89図、第91図、図版64-2)

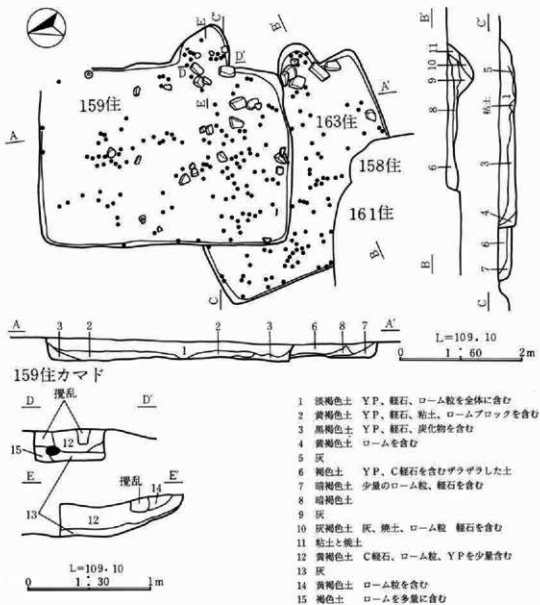
位置 3J・K-19・20グリッド **主軸方位** N93°W **重複** 164→163→161→158、159住 **規模** 縦2.95m 横3.35m 北東隅は159住、南西隅は158、161住が重複するために推定する。**形状** 長方形 **床面** 暗褐色土を平坦にする。**貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 重複部分を除いて散在する。カマド内で使用されたコの字甕を除いては床直が殆どない。コの字甕、台付甕、杯、椀、壺、砥石の破片が約100点あり、うち40点は混入した弥生時代後期のものである。カマド内の甕の表面には、厚さ1mm弱の炭化物が下部のみ付着している。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長50cm 焚口幅40cm

袖 住居の壁際に面取りした角安石をたてる。右袖で長さ34cm、幅と厚さ20cm前後である。

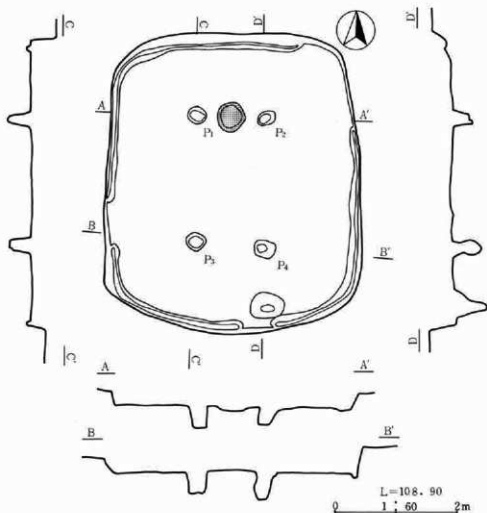
遺存状態 袖石と支脚を残す。焚口部は石組みと推定されるが、左壁北東方向から住居内に



第91図 159号・163号住居址遺構図

むけて崩落している。焚口前には灰のかき寄せ穴がある。上面で54×46cmの楕円形、断面がロート状の深さ22cmのもので粘質土と焼土で埋まる。支脚は角安石で火床面からの高さ15cmを測る。

時期 平安時代 9世紀第2四半紀



第92図 164号住居址遺構図

164号住居 (第92図, 図版64-1)

位置 3 J~L-19~21グリット 主軸方位 N 2°W 重複 164→163→161→158, 159, 142住 規模 縦4.10m 横4.70m 形状 隅丸長方形 床面 ローム層上面まで掘り下げて平坦にしている。全体に均質である。周溝 ほぼ全周している。基底幅で3~7cm、深さ1~8cmを測る。柱穴 P₁~P₄、4本が主柱穴である。規模は上面径と深さでP₁が29×23、35cm、P₂が29×23、28cm、P₃が32×27、33cm、P₄が34×26、45cmを測る。柱間は東西方向が110cm、南北方向が210cmである。P₃はP₂とP₄の延長線上にあり、貯蔵穴と入口施設の2つの用途が考えられる。ここでは入口とするが、上面では53×40cmの方形、深さ50cmとP₁~P₃の中では最も大型の掘り方をもつ。また、記録図にはないが、写真によると周溝底面と同じレベルのものが周縁をめぐるのが見られる。

遺物出土状態 全体に散在するがP₃西側が空白になる。壺、甕、台付甕、高杯、手づくね甕の破片が約400点あり、礫器が5点出土している。土器の多くは、接合例の少なさ、出土レベルの高さの2点で

混入と考える。報告4の礎は、中央部を東西に横断して10点が接合する稀な例である。5点の礎器は砥石4、敲打具1の組成をもち、20の敲打具は下端面に赤色顔料が付着しており注目される。

炉 位置 P_1 と P_2 の間にある。規模 42×47cmの円形、断面皿状で深さ7cmを測る。

時期 弥生時代後期 樽式

166号住居（第93図、図版65-1）

位置 4 O・P-27~29グリット 主軸方位 N96°W 重複 4区4→166→4区5→167住 規模 縦4.30m 横4.32m 形状 方形 床面 ローム層上面まで掘り下げた上に暗褐色土を平坦にしている。全体に均質で中央部がかたくじまっている。新旧2時期の貯蔵穴からすると、床のはりかえが考えられたが確定できない。貯蔵穴 東壁両隅に新旧2基ある。北東隅の1号が床下にあり南東隅の2号へと推移する。規模は上面径と深さで、1号が52×46cmの方形、断面椀底状で深さ33cm、2号が60×52cmの円形、断面袋状で深さ40cmを測る。底面から礎の底部が出土している。周溝 全周する。規模は基底幅、深さともに8cm前後で、全体にわたって不定間隔の凹痕が見られた。柱穴 対角線上にある P_1 ~ P_4 が主柱穴である。規模は上面径と深さで、 P_1 が28×32、44cm、 P_2 が37×32、44cm、 P_3 が29×33、55cm、 P_4 が30×36、50cmを測る。いずれも円筒状の掘り方で底径は15cm前後と推定される。柱間は P_1 と P_2 、 P_3 と P_4 が2m、 P_1 と P_3 、 P_2 と P_4 が2.20mである。掘り方 土坑として区別されるものはないが、壁際に一様に低い中で西側に鱗状の小さな凹痕が連続し特徴である。

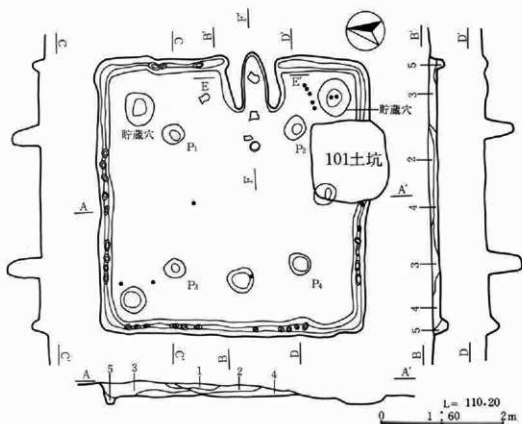
遺物出土状態 カマド周囲に散在する。63点の破片があり、長壺、丸胴壺、小型壺、壺下胴部を転用した甗、高杯、杯、土師器の隼に分類される。カマドと貯蔵穴周辺のものを除いて接合個体が少ないこと、杯、椀類の個体数が少ないことの2点が特徴である。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長96cm 焚口幅38cm 燃焼部全体を壁内側にもつ。

袖 床材と同質の暗褐色土を馬蹄形にめぐらす。

遺存状態 壁寄りに丸胴壺の上胴部を正位にすえた支脚が残る。焚口に灰が分布する。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

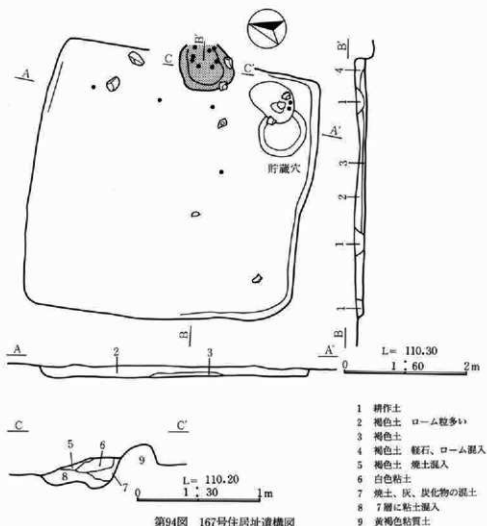


- 1 C軽石を含む褐色土
- 2 C軽石を少量含む灰色土
- 3 C軽石 焼土 炭化物 ローム粒を多量に含む褐色土
- 4 3層よりもロームブロックが多い褐色土
- 5 多量の炭化物と焼土 ローム 軽石を含む褐色土

カマド

- 1 粘土質の茶褐色土
- 2 焼土粒 炭化物 ローム粒を含む褐色土
- 3 焼土ブロックを含む黄褐色土
- 4 焼土 炭化物 灰を多量に含む褐色土

第93図 166号住居址遺構図



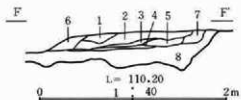
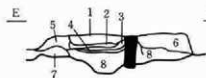
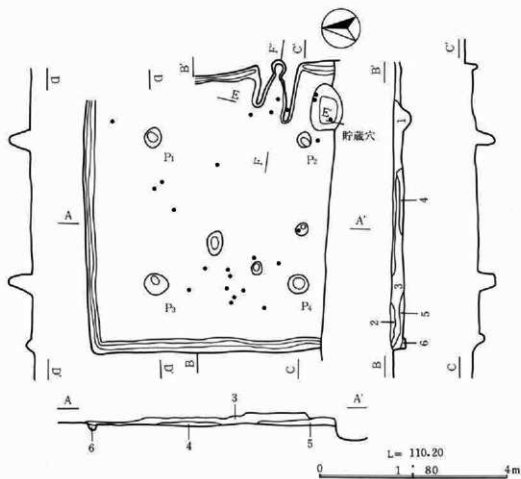
167号住居 (第94図)

位置 4N~P-26・27グリッド **主軸方位** N104°W **重複** 4区4→166、168→4区5→167住
規模 縦4.0m 横5.25m 北壁側は一部を残して確認が深いために消失し推定する。**形状** 長方形
床面 166、168住の上面に灰色がかかった土で貼床をしている。ガチガチでかたい面だが北西隅を頂に
 左右約3mの範囲は耕作のために消失していた。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面は74×70cmの円形、底面
 平坦で深さ16cmを測る。**周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 貯蔵穴、中央西寄りに多い。約200点の破片があり、コの字甕、台付甕、杯、椀、灰釉
 椀に分類される。

カマド 東壁中央に粘土にはさまれた焼土が残る。上面の殆どを削平され、北東隅に集中する角安石
 の一群からすると埋没以前に破壊されていた可能性もある。袖と壁体は流出した状態から黄
 白色粘土を使用したと推定され、角安石は補強材であろう。遺物の出土はない。

時期 平安時代 9世紀第3四半紀



- 1 C軽石を含む褐色土
- 2 C軽石を含む灰色土
- 3 C軽石 焼土 炭化物 ロームを多く含む褐色土
- 4 3層よりもロームの多い褐色土
- 5 ロームブロックを含む暗褐色土
- 6 褐色土とロームの混土

カマド

- 1 褐色土 焼土 C軽石を含む
- 2 暗褐色土 焼土ブロックを含む
- 3 灰褐色土 焼土 C軽石を含む
- 4 灰
- 5 灰褐色土 焼土 C軽石を含む
- 6 黒色土とYP (袖部)
- 7 暗褐色土 灰褐色土
- 8 焼土、炭化物、灰を含む褐色土

第95図 168号住居址遺構図

168号住居 (第95図, 図版65-2)

位置 4N~P-25~27グリッド **主軸方位** N91°W **重複** 170~168~4区5~167住~17溝 **規模** 縦5.90m 横6.0m 南壁全体は17溝重複で消失し推定する。**形状** 方形 カマド付近が20cm程張出している。床面 暗褐色土とロームの混土、全体に均質でたたくしまっている。P₁周辺はローム層下の青灰色土が盛り上がって不安定である。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面では92×66cmの長方形、断面舟底状で深さ48cmを測る。周溝 全周する。基底幅で8cm前後、深さ6cm前後を測り、底面は凹底が連続する。**柱穴** 対角線上にP₁~P₄の主柱穴がある。規模は上面径と深さで、P₁が38×36、40cm、P₂が32×30、46cm、P₃が42×52、48cm、P₄が36×42、34cmを測る。柱間は東西方向が3m、南北方向が3.20mで規則的である。P₂内からは袖石らしい面取りした砂岩1点が出土している。**掘り方** 南壁中央部付近が1×2m程の土坑状にあり、北西隅側が166住でも見られた小さな凹底が多い。

遺物出土状態 南西隅寄りで滑石製模造品9点がまとまって出土した。白玉6、剣形2、管玉1の内訳で、白玉は直径約60cmの範囲にあり間隔から輪にした状態とも考えられる。土器は杯、碗、支脚に転用された小型甕、高杯の脚がある。

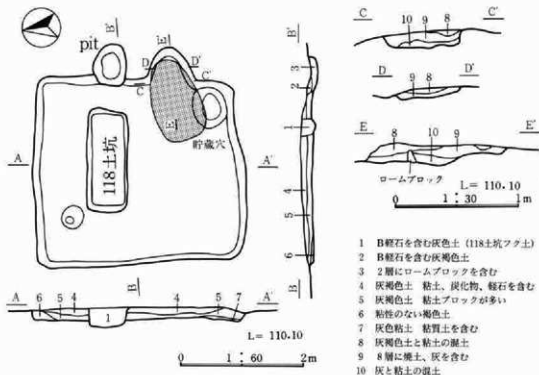
カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長130cm 焚口幅40cm 燃焼部は住居内にある。

袖 粘性にとぼしい灰褐色土を馬蹄形にめぐらし、先端に面取りした砂岩をたてる。

煙道 壁線上で円筒形の掘り方がある。直径約30cmで袋状になることから直立に近い煙突か。

遺存状態 小型甕転用の支脚、右袖石を残し、焚口前一带に灰と焼土が分布する。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半



第96図 169号住居址遺構図

169号住居（第96図，図版65—3）

位置 4Q・R-23→25グリット **主軸方位** N81°W **重複** 170→169住→118土坑 **規模** 縦2.90m 横3.40m **形状** 方形 **床面** 灰褐色粘質土による貼床、中央部が2～3cm高い。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面での規模は61×52cmの楕円形、断面碗底状で深さ18cm、底面に粘土が貼ってあり、下からロームと灰、灰、炭化物の順で埋められていた。**周溝**、**掘り方** なし **柱穴** カマド左脇の壁外に1基、118土坑脇に1基がある。土坑脇のものが住居に伴う可能性が高いが、壁外のは浅間B経石を埋設土に含み新しい。

遺物出土状態 破片64点がまばらにある。3個体以上の羽釜、杯、碗、灰釉碗、須恵器甕、弥生土器に分類される。灰釉碗の高台にはタール状のものが付着し燈明の用途が考えられる。

カマド 東壁南寄りに掘り方が残る。50×60cmの範囲で、壁際には袖痕跡の高まりが舌状に残る。貯蔵穴上面を含めて焚口付近には広く炭化物と灰が流出していた。

時期 平安時代 11世紀

170号住居（第97図，図版66—1）

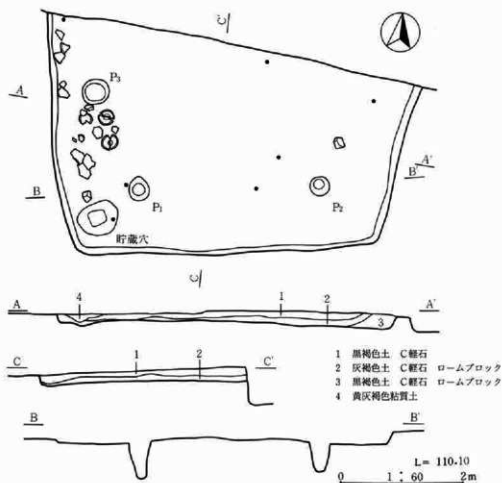
位置 4O～Q-24・25グリット **主軸方位** N95°W **重複** 170→168→169住→17溝 **規模** 縦5.90m 横3.70+αm **東壁**と北側は推定を含む。**形状** 方形 **床面** 黄灰褐色土の貼床。**貯蔵穴** 南西隅にある。上面での規模は64×51cmの方形、断面碗底状で深さ54cmを測る。**周溝** なし **柱穴** 対角線上と推定される2本がある。上面径と深さは、P₁が30×36、47cm、P₂が29×28、49cm、柱間が290cmを測る。P₃は14cmと浅く、遺物分布とも重複するため柱穴以外の用途が考えられる。**掘り方** P₂のある東側が全体に約30cm、碗底状に掘られている。埋設土は不整合である。

遺物出土状態 西壁際に帯状の完形を主とした集中がある。長甕1、杯3、高杯3の組成で貯蔵煮沸、盛り分け、供献の三器種を描えている。西をむいて正面観とすると、手前の高杯2個体は意図的に脚部をかき、対として伏せた状態にある。右上は高杯に杯を重ねている。左上の甕は直立する。中央の杯2個体は口縁を上にした状態にある。これらは供膳の形態と考えられ、住居内の一面を占めている。右上の高杯周囲に炭が多く見られ、P₃の用途と関係する火を用いた祭祀の場が推定される。

カマド 確認範囲に灰、焼土等がなく、4区5住に見る北カマドの可能性がある。



170号住居址

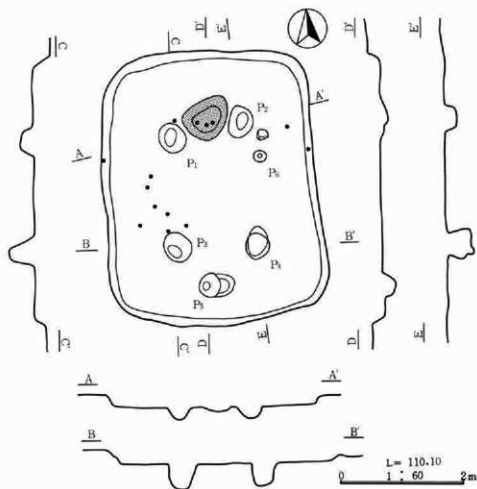


第97図 170号住居址遺構図

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

171号住居 (第98図, 図版66-2)

位置 4O・P-22・23グリッド 主軸方位 N 2°E 重複 171→4区9住→106、107土坑 規模 縦3.40m 横4.40m 形状 隅丸長方形 床面 中央部床下に直径約3mの摺鉢状の風倒木痕があり、全体を浅間C軽石とローム粒を含む暗褐色土で貼床している。全体に均質で柱穴を結んだ内側にかたさが見られた。周溝 なし 柱穴 P₁~P₄の4本が主柱穴、P₅が入口施設である。規模は上面径と深さで、P₁が44×43、19cm、P₂が37×48、17cm、P₃が44×46、31cm、P₄が36×40、39cm P₅が36×36、25cmを測る。P₅は18×17、9cmで補助と考えられる。P₅は東側に2重の掘り方を持ち、底面を異にする。柱間は、P₁とP₂が110cm、P₃とP₄が120cm P₁とP₃が180cm、P₂とP₄が190cmである。貯蔵穴 なし 掘り方 風倒木痕の埋没土と区別できず不明である。

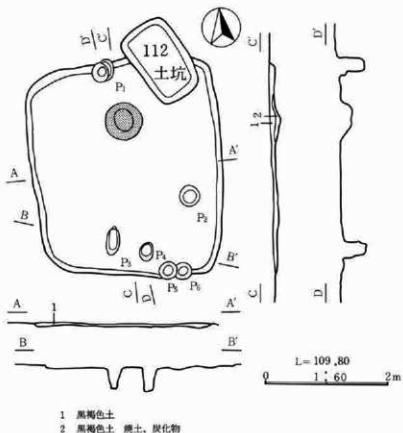


第98図 171号住居址遺構図

遺物出土状態 86点の破片が壺、甕、台付壺、高杯、碗に分類され、敲石、台石、礫器、有孔磨製石鏃、混入と思われる黒曜石製有茎石鏃1点がある。土器の各個体数は3～4で接合復元されるものは少ない。高杯は彩色が殆どである。彩色は壺、甕類にも見られるが表裏全体の例といずれか一方の場合がある。報告9の敲石は敲打面にベンガラが付着し、その精製工具の可能性がある。台石はすり面を部分的にもち、ベンガラの痕跡はないものの複数の機能を合せもつ万能具であろう。

炉 P₁とP₂の間にある。直径65cmの皿状の掘り方に焼土が残る。

時期 弥生時代後期 樽式



第99図 172号住居址遺構図

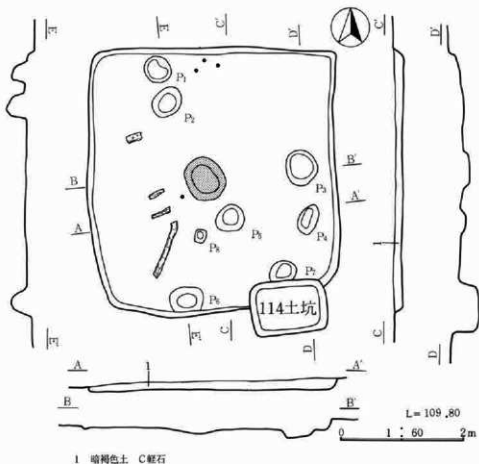
172号住居 (第99図)

位置 4O・P-18~21グリッド 主軸方位 N 4°E 重複 172→4区14住→112土坑 規模 縦3.04m 横3.40m 形状 隅丸方形 床面 暗褐色土をうすく貼る。確認が深く状態は悪い。貯蔵穴、周溝、掘り方 なし 柱穴 P₁~P₆まである。P₃とP₄が入口施設である。残る4本のうち、P₂を除いて住居を切る。規模は上面径と深さで、P₂が31×32、35cm、P₃が21×42、35cm、P₄が20×27、37cmを測る。P₅とP₆は外傾した掘り方で良好な状態のP₅で約60度である。

遺物出土状態 25点の破片があり、壺、甕、高杯に分類される。個体数は少なく、破片でも接合しない小さなものが殆どである。P₅と壁の間で報告1の壺の手づくね土器が出土している。

炉 中央北寄りにある。直径約60cmの皿状の掘り方で、底面が焼けていた。焼土が南側で床面から4~5cm浮いて分布する。

時期 弥生時代後期 樽式



第100図 173号住居址遺構図

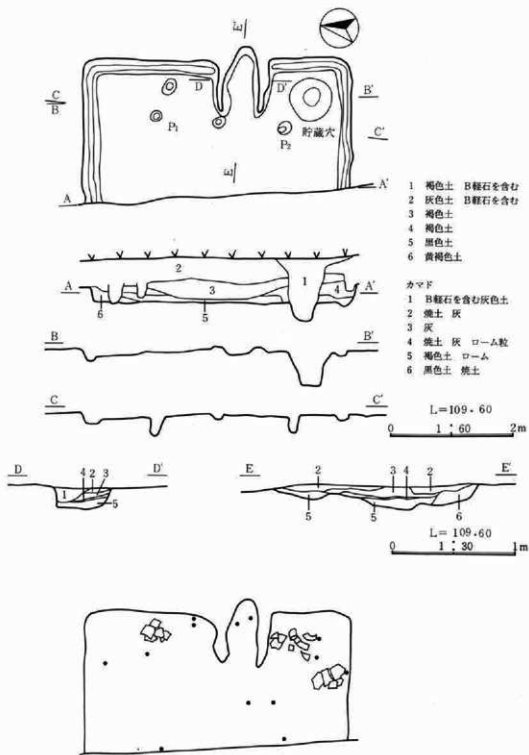
173号住居 (第100図, 図版66-3)

位置 4N~O-15~17グリット 主軸方位 N 4°W 重複 119、120土坑→173住→114土坑 規模 縦3.96m 横4.14m 形状 隅丸方形 床面 ローム粒を少量含む暗灰褐色土の貼床。床直から約10cmの間層をもって中央部に浅間C軽石がレンズ状に堆積する。床上には図示した炭化材が残り焼失住居と考えられる。貯蔵穴、周溝 なし 柱穴 P₁~P₈がある。P₁とP₇が住居より古く、P₂とP₈が新しいので検討から除外する。規模は上面径と深さで、P₁が48×55、12cm、P₂が29×52、8cm、P₃が52×40、20cm、P₇が40×30、8cmを測る。位置と形状からP₃とP₁に入口施設の可能性が有る。掘り方 凹痕が不連続にある程度で土坑状のものはない。

遺物出土状態 破片が35点あり、甕、台付甕、高杯に分類される。報告1の甕は北壁際中央、2は炉の南脇で出土した。ほかに被熱でくずれた同形の甕がある。2も表面は被熱で剝落している。台付甕の脚部が2個体あるものの壺や大型の甕がない。

炉 ほぼ中央にある。62×68cmの円形でくぼみ、焼土と炭化物を残す。

時期 弥生時代後期 樽式



第101図 174号住居址遺構図

174号住居 (第101図)

位置 4P・Q-14・15グリッド **主軸方位** N101°W **重複** 177→174住 **規模** 縦2.10+αm 横4.24m 西半分は調査区域外にある。**形状** 方形 **床面** ロームブロックを含む暗褐色土を平坦にする。全体に均質で良好である。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面で直径65cmの円形、断面碗底状で深さ52cmを測る。**周溝** 全周すると考えられる。基底幅で7cm前後、深さ3～8cmを測る。**柱穴** P₁とP₂が対角線上の主柱穴である。規模は上面径と深さで P₁が18×16、24cm、P₂が18×20、27cm、柱間2mを測る。

遺物出土状態 カマド両脇の壁際での組成がある。貯蔵穴北側で報告1と未報告の丸胴甕、貯蔵穴内では北壁にたてかけた2の甕、P₁の東側で2と4の小型甕と甕である。ほかには壺、杯等の破片が約400点ある。左袖脇から広葉樹材の炭化した杭が出土した。壁体用と考えられる。

カマド **位置** 東壁中央 **規模** 全長115cm 焚口幅40cm 上面は削平されている。

袖 褐色粘質土を馬蹄形にめぐらす。

遺存状態 焼土と灰を厚く、ブロック状に残す。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

175号住居 (位置は全体図に示す)

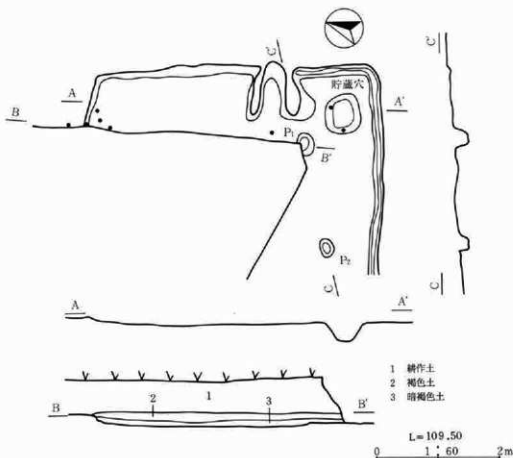
位置 4O・P-10・11グリッド **主軸方位** N90°W **重複** 175住→22溝 **規模** 縦4.30+αm 横2.95m 東側に22溝が重複、全体の遺存状態も悪いために推定を含む。**形状** 長方形 **床面** 暗褐色土を平坦にする。北西側を残して耕作痕や浅間B軽石を含む混合土のかく乱があつて状態は悪い。**貯蔵穴**、**周溝** 不明 **柱穴** 掘り方で186住同様の2本柱と推定される柱穴がある。

遺物出土状態 77点の破片がある。かく乱等で弥生時代～古墳時代後期まで混在する。うち44点が弥生時代後期の樽式土器で甕、甕等がある。

時期 弥生時代後期 樽式



4区掘り方全景



第102図 176号住居址遺構図

176号住居 (第102図)

位置 4P~R-12・13グリッド 軸方位 N109°W 重複 177-176住 規模 縦3.26+αm 横4.72m II地区とIII地区の境界上にあり、北西側は調査区域外である。形状 方形 床面 ロームと暗褐色土の混土、西側は地形勾配で消失する。貯蔵穴 東南隅にある。上面で62×55cmの方形、断面碗状で深さ22cmを測る。周溝 カマド右脇から南壁に残る。基底幅で5cm前後、深さ2~4cmである。柱穴 2本ある。規模は上面径と深さで、P₁が34×27、23cm、P₂が24×20、12cmを測る。P₂は位置が不適当である。

遺物出土状態 81点の破片が出土した。弥生時代や平安時代の混入が66点あり、残りが甕、杯、須恵器甕、蓋に分類される。

カマド 東壁南寄りにあるが殆ど原形をつかめない。図示したものは痕跡からの復元である。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

177号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4O・P-12~14グリット 遺構確認時に床面が削平されていて、4本の柱穴と炉の掘り方が露呈していた。そのために平面形と規模、主軸方位が不明である。**重複** 177→4区16→174→176住 **柱穴** 4本ある。規模は上面径と深さで、北西のP₁が43×48、60cm、北東のP₂が42×46、68cm、南西のP₃が51×45、50cm、南東のP₄は直径35cm、深さ60、70cmの2基が重複する。柱間は東西方向が180cm、南北方向が220cmである。

遺物出土状態 破片が数点ある。

炉 中央北寄りに78×96cmの楕円形の掘り方がある。底面が焼けていた。

時期 弥生時代後期 樽式

178号住居 (位置は全体図に示す 図版67-1)

位置 4Q・R-22・23グリット **主軸方位** N 3°E **重複** なし **規模** 縦3.36m 横2.80m **床面** ロームと黒褐色土の混土、あまりかたくない。**貯蔵穴** 北東隅 上面で47×45cmの方形、断面碗状で深さ30cmを測る。**周溝** なし **柱穴** P₁~P₃の3本がある。北西隅のP₁は37×46cmの楕円形、深さ28cm 南西隅のP₂は13×22cmの楕円形、深さ27cm、南東隅のP₃は30×35cmの円形、深さ18cmを測る。P₄は断面図より推定する。**掘り方** ローム層上面まで掘りこむが明確な形状のものはない。

遺物出土状態 83点の破片がある。混入の弥生時代と平安時代を除くと、有段口縁の壺、甕、高杯、杯がある。

カマド **位置** 北壁中央 **規模** 全長65cm 焚口幅25cm

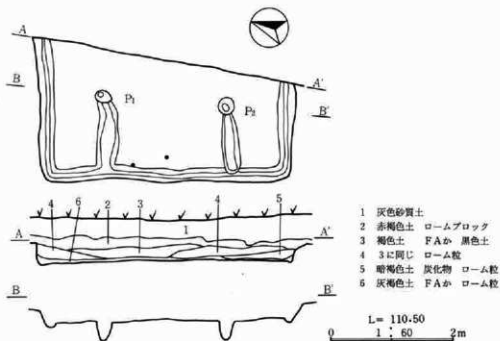
袖 淡黄褐色粘質土を馬蹄形にめぐらす。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

179号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4H-30・31グリット 西壁側を20~60cm幅で確認しただけである。**主軸方位** N110°W前後 **重複** 180→179住 **規模** 縦0.57+αm 横3.50m **形状** 方形と推定される。**床面** 暗褐色土を平坦にする。そのほかの施設については確認されていない。**遺物** 破片が約60点あり、弥生時代を除いて古墳時代後期の有段口縁壺、甕、甗、高杯、碗、長頸甗がある。碗を除き接合個体はない。

時期 古墳時代後期 住居の形態と埋没土の様子を判断理由とする。6世紀



第103図 180号住居址遺構図

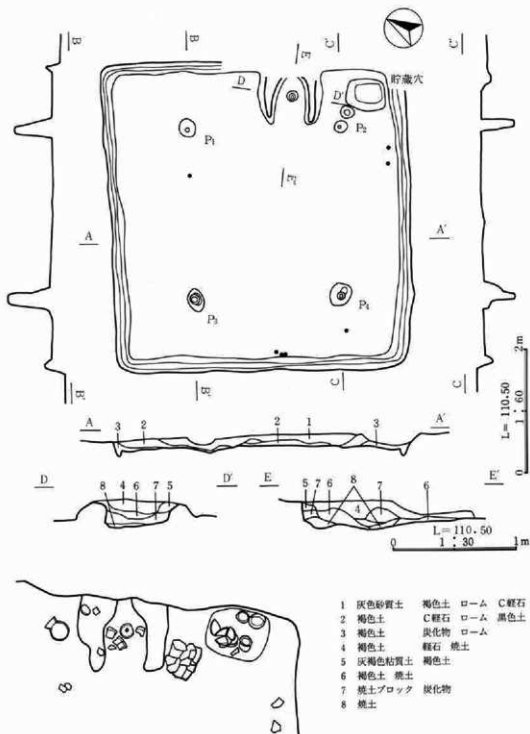
180号住居 (第103図)

位置 4H・I-30・31グリット 主軸方位 N107°W 重複 181→180→179住 規模 縦2.25+αm 横4.08m 東半分は調査区域外にある。床面 ローム粒を含む暗褐色土を平坦にする。周溝 全周すると思われる。規模は基底幅で7～8cm、深さ4～8cmを測る。間仕切り溝は、周溝とほぼ同様な形状である。柱穴 対角線上にあると推定される2本がある。規模は上面径と深さで、P₁が20×25、36cm、P₂が26×24、23cmで、柱間2mを測る。掘り方 北西隅に縄文時代の146土坑がある。遺物 礎の破片2点がある。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 埋没土3層中にニツ岳FAがブロックである。6世紀前半



180号住居全景



第104図 181号住居址遺構図

181号住居 (第104図, 図版67-2、67-3)

位置 4 I・J-29・30グリット **主軸方位** N118°W **重複** 145土坑→181→180→179住 **規模** 縦4.84m 横4.76m **床面** 貼床 **ローム**、青灰色土 YPと暗褐色土の混土。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面で50×66cmの方形、断面碗底状で深さ45cm、埋没土中に灰、炭化物を含む。上面の際で杯、碗、高杯6個体がある。**周溝** 全周する。規模は基底幅で10cm前後、深さ6～10cmを測る。**柱穴** 対角線上でP₁～P₄の4本がある。上面径と深さで、P₁が26×26、71cm、P₂が18×22、43cm、P₃が36×26、60cm、P₄が2基あって44×35、52cmを測る。柱径は10～15cmと推定され、柱間は東西方向が265cm、南北方向が240cmである。

遺物出土状態 カマド両脇と貯蔵穴上面でまともに出て出土した。遺存状態は、殆どが接合、復元されたもので埋没時に完存か使用可能であったと判断される。残る範囲からは、転用甕や埴だけである。カマドの両脇は報告1と2の壺、内部は支脚に代用している5の甕があり、組成では長壺形を欠いている。貯蔵穴上面の縁辺では、広口壺1、小型壺2、高杯1、杯4の組成でいずれも口縁を上にした正位の状態出土した。

カマド **位置** 東壁中央 **規模** 全長80cm 焚口幅45cm 煙道部を180住重複のために消失している。
袖 灰白色粘質土を馬蹄形にめぐらす。高さ15cmで残存する。

遺存状態 甕を伏せて支脚とする。底面には下から焼土、灰、炭化物が残り、その上面には天井部材である灰褐色粘質土と褐色土の混土がレンズ状にある。

時期 古墳時代中期 和泉式 5世紀後半

182号住居 (第105図, 図版68-1)

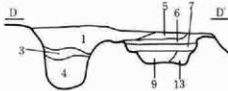
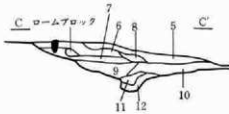
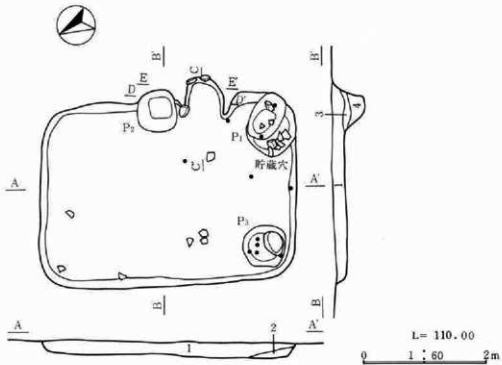
位置 4 H～J-7～9グリット **主軸方位** N61°W **重複** 31溝→147土坑→182住 **規模** 縦2.90m 横4.06m **形状** 長方形 **床面** 暗褐色土を平坦にする。中央部床下にある147土坑の上から焚口にかけてはロームの貼床である。**貯蔵穴** P₁～P₃の3基に可能性がある。古い方から1号～3号とした。1号は56×62cmの方形、底面が22cmの段差をもち床下で確認された。2号は64×60cmの方形深さ56cm、貼床の下に純灰層がある。カマド灰の処理穴とも考えられる。3号は31溝と誤認して掘りすぎている。100×76cmが最大値の楕円形、断面皿状の深さ18cmである。**周溝**、**柱穴**、**掘り方** なし

遺物出土状態 弥生時代～平安時代の破片111点がある。住居に伴うのは92点で壺、羽釜、碗、灰粘土に分類される。羽釜が3個体以上あり、P₃から出土した碗に判読不可の墨書土器の破片がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長70cm 焚口幅52cm

遺存状態 壁際に粘質土をはって先端に角安石をたてる。内壁にも角安石の割石をはる。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀



第105図

- 1 褐色土 C軽石、ローム粒を多く含む
- 2 1層にYPを含む
- 3 褐色土 1層に白褐色粘質土が混入(貼床面か)
- 4 灰
- 5 褐色土 C軽石、焼土、淡褐色粘質土が混入
- 6 褐色土 5層に炭化物が混入
- 7 褐色土 多量の焼土と灰、炭化物、粘土が混入
- 8 淡褐色粘質土ブロック
- 9 暗褐色土 焼土が多量に混入
- 10 褐色土 8層と灰を含む
- 11 ロームと褐色土の混土
- 12 層褐色土とロームブロックの混土
- 13 暗褐色土 YPを含む

L=109.90
0 1:30 1m

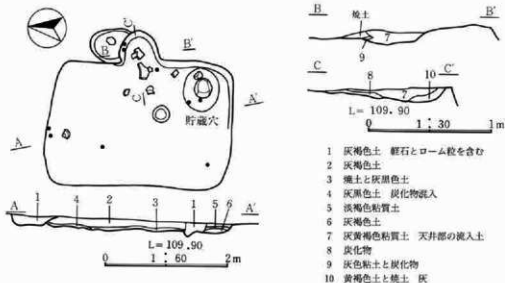
第105図 182号住居址遺構図

183号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4H・I-1~3H・I-34グリッド 主軸方位 N102°W 重複 なし 規模 縦1.80+αm 横3.06m 東壁側は調査区域外にある。形状 方形 床面 ローム層上面を掘り下げてローム粒を含む暗褐色土をうすく貼る。貯蔵穴 東南隅にあり半分だけ調査する。直径60cm前後の円形、断面円筒状で深さ20cmを測る。周溝、柱穴、掘り方 なし カマド 不明

遺物 84点の破片がある。弥生時代後期のものが18点混入する。残りは須恵器甕、置きカマド、判読不可の墨書土器の破片がある。

時期 平安時代



第106図 184号住居址遺構図

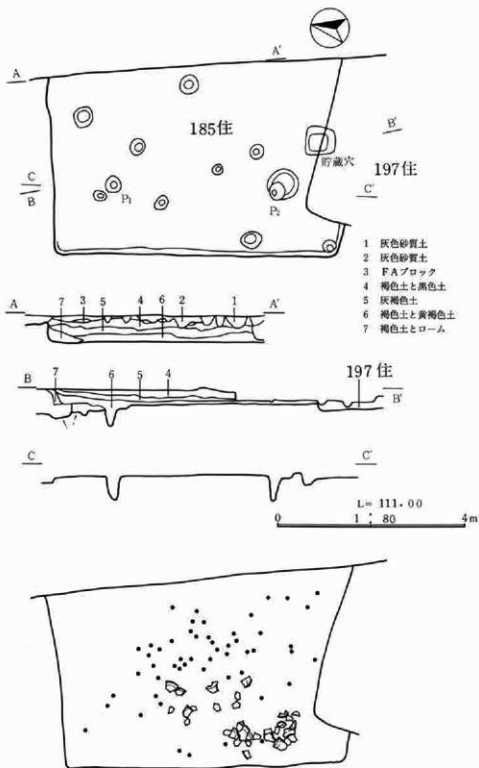
184号住居 (第106図, 図版68-2)

位置 4I-11・12グリッド 主軸方位 N91°W 重複 186→185→197→184住 規模 縦1.98m 横2.96m 形状 方形 床面 赤褐色土と黒色土、ロームブロックの混土、中央部がかたく、上面に暗灰色粘質土がのる。貯蔵穴 東南隅にある。上面で68×52cmの掘り方をもち、中央に偏平で丸い角安石がある。表面の観察記録はないが作業台の可能性もある。周溝 なし 柱穴 焚口前のものは直径24cmの円形、断面円筒状で深さ7cmを測る。カマド左脇のものは136土坑であるが下部に炭があり、182住同様の付属施設とも考えられる。

遺物出土状態 古墳時代後期~平安時代の破片が約500点ある。羽釜、台付甕、杯、椀、須恵器大甕、灰釉瓶、敲打具、銅滓同一個体3点に分類される。羽釜は2個体以上がありカマド内からまとまっている。銅滓は型枠を示すらしいU字形の溝を側面にもち、鋳こぼれた滓と考えられる。遺構との結びつきが断定できないが丸石や灰の入った土坑の存在から工房の可能性もある。

カマド 東壁中央に掘り方が残る。上面の殆どを削平されている。

時期 平安時代 10世紀前半



第107図 185号住居址遺構図

185号住居 (107図, 図版68-3)

位置 4H~J-11~13グリット **主軸方位** N100°W **重複** 186→185→197→184→190住 **規模** 縦4.16+αm 横6.20m 東側は調査区域外にある。**形状** 方形と推定される。**床面** ローム層上面まで掘り下げた上に黄褐色土を平坦にする。中央部がかたい。**貯蔵穴** 南壁中央部にある。上面で60×68cmの方形、深さ26cmを測る。**周溝** なし **柱穴** P₁とP₂を対角線上にある支柱穴とする。残る9本は、床面での確認で可能性をもつが深さが16~46cmと一定しない。上面径と深さで、P₁が直径34、47cm、P₂が36×31、54cm、P₁とP₂の柱間が340cmを測る。

遺物出土状態 中央部とP₂の西側に集中している。中央部のもは約200×250cmの円形の内て床面から5cm程浮いている。報告5の丸胴甕、7の壺、6の小型甕、10の高杯、12の杯、13、14の手づくね土器、15の土製勾玉、16~18の有孔円板がある。5の甕、7の壺や10の高杯は40~80cmの距離をもって主に南北方向に接合し、手づくねや勾玉、円板といった祭祀供献具の周囲に投棄したとも考えられる。一方の西側のものは、1~5の丸胴甕、8、9、11の高杯、19の敲石があり、丸胴甕と高杯の組成と押しつぶれた状態からはまとまりを推定させる。

カマド **位置** 北壁に推定される。A断面の7層は壁際の崩落土と推定されるが、天井部らしいロームを最上面にして焼土、炭と灰が続き、壁際に灰黒色粘質土がうすく堆積している。

時期 古墳時代中期 和泉式 確認面の最上層に二ツ岳FAが最大厚15cmで堆積する。5世紀後半。

186号住居 (第108図, 図版69-1)

位置 4H~J-13・14グリット **主軸方位** N83°W **重複** 186→191→185住 **規模** 縦4.90+αm 横3.12m 東側は調査区域外にある。**形状** 隅丸長方形 **床面** 灰黄褐色土、灰黒色土が厚さ2~4cmで床面直上にある。**貯蔵穴**、**周溝** なし **柱穴** 長軸に2本がある。上面径と深さは、P₁が50×48、50cm、P₂が57×62、55cm、柱間が95cmである。柱痕は15cm前後か。**掘り方** ローム層上面で手のひら大の凹痕が全体にある。

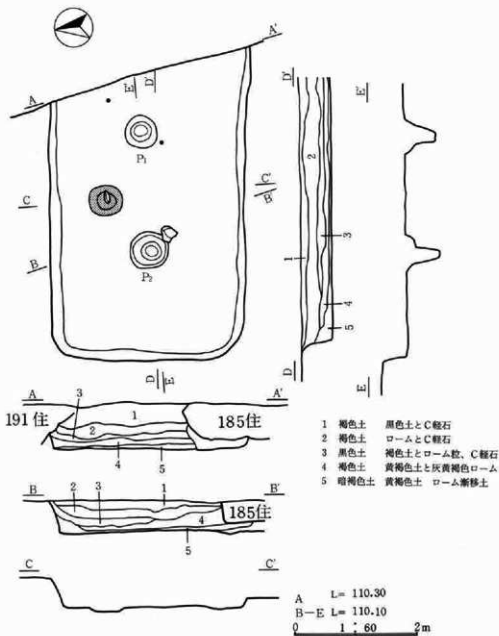
遺物出土状態 破片が約600点あり、壺、甕、台付甕、高杯、ミニチュア土器に分類される。個体数は多いが接合復元されるものは殆どない。

炉 P₁とP₂の間、北壁寄りにある。48×51cmの円形の掘り方をもち、灰と炭がわずかに残っていた。

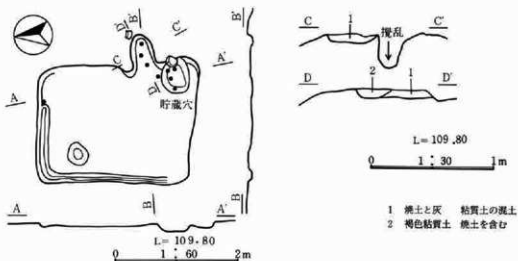
時期 弥生時代後期 樽式



186号住居 掘り方全景北から



第108図 186号住居址遺構図



第109図 187号住居遺構図

187号住居 (第109図, 図版69-2)

位置 4 J-5・6グリット 主軸方位 N85°W 重複 214→187住 規模 縦1.80m 横2.48m

形状 方形 床面 黒色土とロームブロック、鉄分沈着の褐色土の混入を平坦にする。貯蔵穴 東南隅 上面で56×52cmの楕円形、深さ10cmの椀底状である。周溝 北壁から西壁にめぐる。基底幅4～8cm、深さ3～5cmである。柱穴 なし

遺物 61点の破片がある。弥生時代の壺、甕、古墳時代の杯、高杯の混入のほかに、羽釜、甕、杯、碗、蓋がある。出土位置を特定できるものはなく、殆どが2cm角大である。

カマド 東壁に削平されて痕跡だけが残る。貯蔵穴脇から袖石らしい角安石が出土している。

時期 平安時代

188号住居 (第110図, 図版69-3)

位置 4 I~K-8・9グリット 主軸方位 N73°W 重複 197→198→4区21→188住 規模 縦2.94m 横3.72m 形状 隅丸長方形 床面 灰褐色土を平坦にする。貯蔵穴 東南隅にある。上面で78×52cm、深さ17cmを測る。周溝 南壁が不明瞭だが全周すると考えられる。基底幅が4～6cm、深さ1～7cmである。東壁と西壁で重複する柱穴との関係は不明である。

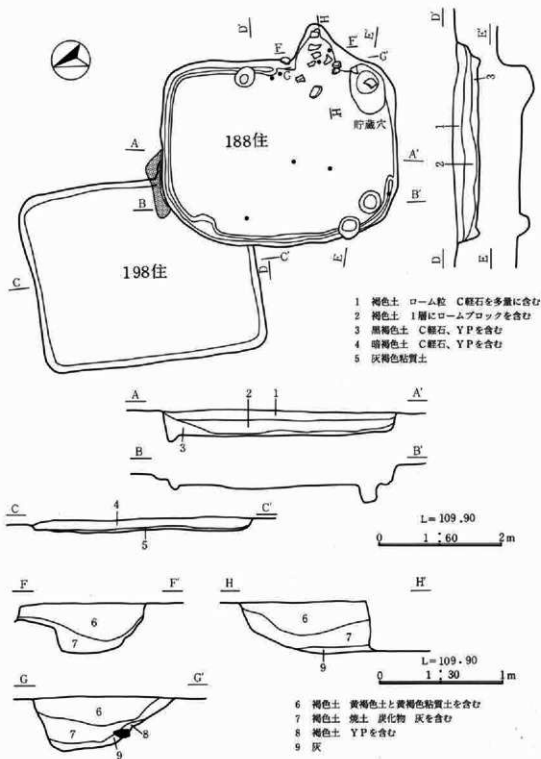
遺物出土状態 カマド内で2個体以上の羽釜、左袖脇で鉄鉢、北西隅寄りで緑釉が出土している。4の勾玉は197住からの混入である。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長75cm 焚口幅50cm

袖 住居の壁際に角安石を使って焚口部を作るが殆ど崩落している。

遺存状態 袖石、支脚はなく、焼土と灰も少ない。

時期 平安時代 10世紀



第110図 188号・198号住居址遺構図

198号住居 (第110図)

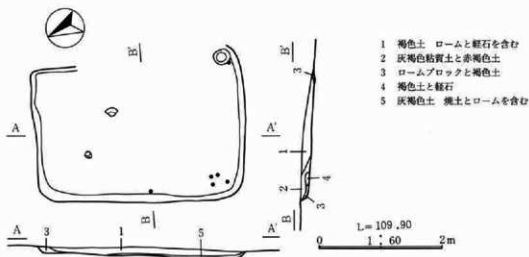
位置 4 J・K-9・10グリット 主軸方位 N79°W 重複 4区18→199→197→198→4区21→188

住 規模 縦2.88m 横3.52m 形状 長方形 床面 ローム粒と浅間C軽石を含む暗褐色土を平坦にする。全体にかたくしまる。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし

遺物出土状態 破片が約160点ある。約100点は弥生時代、古墳時代の混入で、残りが壺、杯、碗である。

カマド 東壁南寄りの188住壁際に焼土と粘土痕がある。重複のために削平されている。

時期 平安時代 9世紀第3四半紀



第111図 189号住居址遺構図

189号住居 (第111図)

位置 4 H・I-6・7グリット 主軸方位 N65°W 重複 214→189住 規模 縦2.40m 横3.30

m 形状 長方形 床面 ロームブロックを含む暗褐色土、中央部がかたい。貯蔵穴 東南隅に推定されるが重複する214住の埋没土との区別ができなかった。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 破片が105点ある。コの字壺、碗、灰釉碗、蓋、礫器などがある。

カマド 東壁南寄りに焼土や灰からなる痕跡がある。

時期 平安時代 10世紀第3四半紀

190号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4 H・I-11グリット 西壁から約50cm幅の範囲のほかは調査区域外にある。規模は南北で3.80m、長方形と推定される。床面 ローム粒、YP、C軽石を含む褐色土の貼床、直上に粘質の灰褐色土がのっている。重複 185→197→190住である。

時期 平安時代

191号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4H・I-14・15グリット 190住同様の調査区域東境界線上の住居である。西壁から約50cm幅の範囲が確認された。**規模** 南北で2.50mを測る。**床面** YP 上に灰黄褐色土を用いて平坦にしている。全体にかたい。**周溝** 全周すると考えられる。基底面で7~8cm、深くない、弧状にめぐる。**遺物** なし **時期** 古墳時代中期 5世紀後半 **重複** 186→191住

192号住居 (位置は全体図に示す)

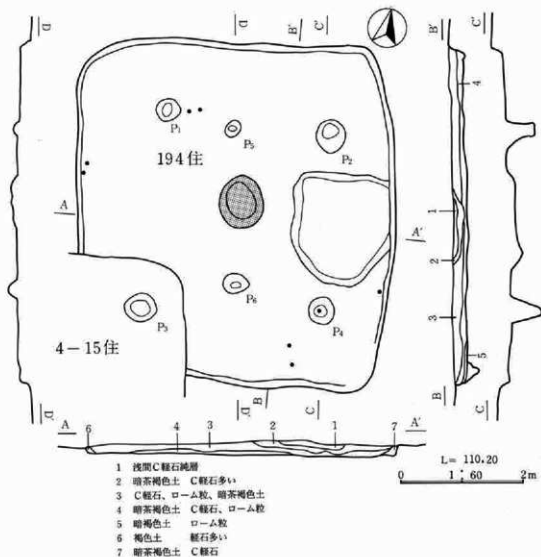
位置 4H・I-15~17グリット 190住同様の調査区域東境界線上の住居である。南西隅を頂点とした三角形に、頂点まで1.28m 南北5.70mの範囲を確認した。**床面** ロームブロックを含んだ黒褐色土を平坦にする。**周溝** なし **柱穴** 南西の1本が確認された。直径20cmの円形で深さ42cmを測る。壁と柱穴の位置関係からすると南北方向の長方形の住居と推定される。**重複** 192→193住
遺物 壺、甕、器台の破片が16点ある。
時期 弥生時代後期 樽式

193号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4H・I-17・18グリット **主軸方位** N20°E **重複** 194→192→193住 **規模** 南西隅を頂点とした三角形を確認する。南壁2.30+ α m 西壁3.20+ α m 190住同様の調査区域東境界線上にある。**床面** ロームブロックを含む黒褐色土を平坦にする。**周溝** なし **柱穴** 2本が確認された。ともに直径30cm前後の円形で、北側が主柱穴、南側が入口施設である。主柱穴は深さ48cm、北へ少し傾く。入口のものは深さ43cmで直立している。土層断面によると、柱穴埋没土はローム粒の量で縦方向に二分されて柱痕を示すと考えられる。特徴は、埋没土の暗褐色土の上面が床から10~12cmくぼんだ状態をもつことである。くぼみは縦に二分される一方にのみ見られ、床直上の埋没土が全体に堆積した時には柱が抜き取られてない状態が推定できる。弥生時代後期の住居が接近しているが、1号方形周溝墓の前部前面という位置も関係して、墓築造に際して事前に撤去されたことも考えられる。
遺物 甕の破片15点がある。
時期 弥生時代後期 樽式

194号住居 (第112図、図版70-1)

位置 4I・J-18・19グリット **主軸方位** N13°W **重複** 194→193→4区15住→1方周 **規模** 縦5.06m 横5.40m 南西隅は4区15住の重複のために推定する。**形状** 方形 **床面** ローム粒を含む暗褐色土を平坦にする。東壁中央に縦1.56m 横最大1.86mの方形の浅い掘りこみがある。埋没土は黒褐色土、底面は凹凸をもち甕の破片が数点出土した。全体の中で軟弱箇所だったので掘り方との誤認の可能性もあるが、掘り方でもわずかな段差が見られる。入口関連施設の可能性もあるが用途は不明である。**貯蔵穴**、**周溝** なし **柱穴** 4本組の主柱穴 P_1 ~ P_4 と主軸方向の補助柱穴 P_5 と P_6 がある。**規模**は上面径と深さで、 P_1 が36×34、54cm、 P_2 が46×52、49cm、 P_3 が43×41、69cm、 P_4 が39×44、46cm、柱間 P_1 と P_2 が260cm、 P_3 と P_4 が280cm、 P_1 と P_3 が305cm、 P_2 と P_4 が280cmを測る。 P_5 は24×29、5cm、



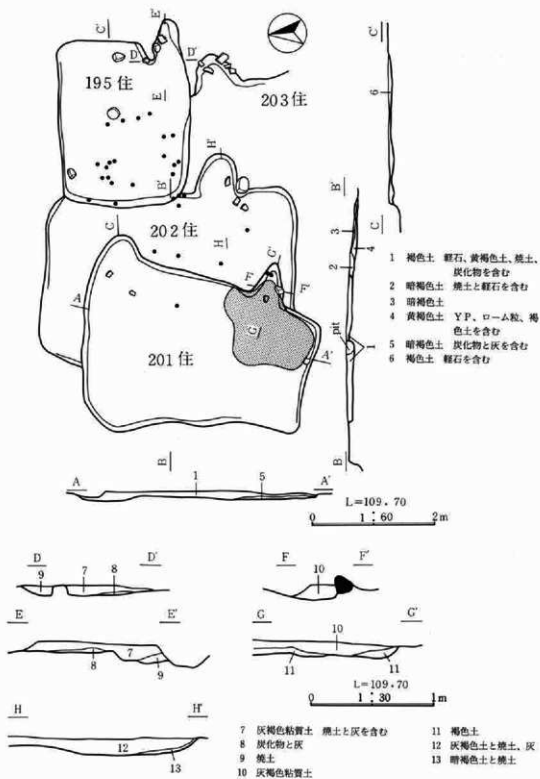
第112図 194号住居址遺構図

P₆が38×30、15cm、柱間245cmを測る。

遺物出土状態 壺、甕、高杯、石斧、石匙がある。甕は5個体以上がある。壁際に遺物が残るが量は少ない。報告1の壺はP₆の埋没土中にあり、柱の抜き取り後に崩落したと考えられる。石斧は、着柄痕と刃部の使用痕から縦斧と考えられ、西壁際中央から出土した。

炉 住居中央にある。68×82cmの楕円形の掘り方をもち、深さ7cmを測る。

時期 弥生時代中期後半 竜見町式 確認面最上層に浅間C軽石の純層がある。



第113図 195号・201～203号住居址遺構図

195号住居（第113図，図版70-2）

位置 4H・I-4・5グリット 主軸方位 N89°W 重複 214→202→201→195住 規模 縦2.64m 横2.04m 確認時に床面が露呈していた。形状 長方形 床面 ローム粒を含む暗褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 破片が76点あり、弥生時代の壺、甕16点を除くと羽釜、甕、椀、台石がある。カマド内からは羽釜があり、報告1の臺下胴部は住居中央部床面に伏せてあった。上半部欠損後の煮沸用への転用と考えられ、表面にはススが帯状に付着していた。台石は線条痕と砥面をもち、カマド脇に置かれた万能具と推定される。

カマド 東南隅に掘り方を残す。左袖を残す。角安石の割石があり、袖か壁体への使用が考えられる。

時期 平安時代 重複する202住を10世紀代とすると11世紀前半か。

201号住居（第113図，図版71-3、72-1）

位置 4J-4・5グリット 主軸方位 N70°W 重複 214→219→202-4区31→201→195住 規模 縦2.70m 横3.60m 形状 長方形 北東隅が突出し全体に歪んでいる。床面 焼土と灰色土を含む暗褐色土を平坦にする。中央北側の方約1mの範囲では特にロームブロックが多く少し高い。また、焚口前には灰と炭がカマドから流出する。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド内で羽釜破片がある位で全体にまばらである。羽釜は3個体以上あり、杯、椀、須恵器甕、弥生土器、携帯用砥石、用途不明鉄器がある。

カマド 東壁南寄りに痕跡で確認された。右壁に面取りした角安石をおいている。焼土は埋没土1層中に混入し、灰と炭が焚口前に広く流出していることから埋没前に自然崩落していたことも考えられる。

時期 平安時代

202号住居（第113図，図版72-1）

位置 4I・J-4・5グリット 主軸方位 N86°W 重複 214→219→202-4区31→201→195住 規模 縦2.82m 横3.94m 東壁北半分は195住、西壁は北西隅を残して201住が重複し推定する。

形状 長方形 床面 灰色土と焼土を含む暗褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし

遺物出土状態 カマド周囲にまばらにある。破片数は48点あり、混入した弥生時代16、古墳時代12を除くとコの字甕、羽釜、瓶、杯、椀、灰釉椀、刀子に分類される。報告1と2の杯はカマド前から、3の刀子は北西隅から約2mの中央部床面に縦にくいこんで出土した。

カマド 東壁南寄りで痕跡が確認された。全長60cm、焚口幅約50cmで右壁際に角安石の転石を袖石としておいている。焼土が少量残るだけで使用時の痕跡にとぼしい。

時期 平安時代 10世紀前半

203号住居（第113図）

位置 4I-4グリット 東壁にあるカマドの掘り方だけが確認された。主軸方位 東壁からすると

N100°W前後にある。重複 219→203→202→201→195住 床面以下の施設は不明。

遺物 カマドの壁体と内部から碗の口縁部破片が4点出土している。報告遺物はない。

カマド 東壁にある。掘り方の煙道基部付近に角安石の転石を主とした石組みをもつ。石は15～20cm前後の大きさを縦方向、斜めにさしこんだ状態にある。

時期 平安時代

204号住居

219住と同一のものとして欠番扱いにする。確認の早い時期からカマド部分が注意され、204住として調査記録された。カマドから流出した灰層が219住として区別した床面に広がること、掘り方調査で袖の基部を確認したことこの2点から判断した。

205号住居 (第155図)

位置 3J-28グリット 3区を横断する道路に接してカマド付近だけが確認された。重複 206→205→3区15住 3区16住を含めた4軒の関係は道路側の断面で確認した。カマドは東壁にあり、左壁側だけが全長計測可能で125cmを測る。掘り方では、左袖の先端でわずかに屈曲が見られるが住居の北東隅に相当するかは判断できない。遺物は壺の破片で18点出土している。

時期 平安時代

206号住居 (第155図)

位置 3J-28グリット 205住の北側で東壁の一部が確認されただけである。205住と同一住居の可能性もあるが断面と部分的ながら埋没土のちがいがから、別の住居と判断した。規模は3区15住以北に広がらないことから205住側へカマドを含めた主要部があると推定される。壁は確認高で約25cmあり、しっかりした掘り方である。床は暗褐色土を平坦にしている。遺物はない。

時期 不明 主軸方位からすると奈良時代以前で、3区4住(6C後半)以前の可能性もある。

207号住居 (位置は全体図に示す)

位置 3H・I-27・28グリット 3区を横断する道路に面して北西隅の一部だけが確認された。重複 3区3溝→207住 規模 北西隅から1.20m前後が確認されたが隅丸の形状が推定される。床面 ロームブロックを含む暗褐色土を貼っている。遺物はない。

時期 不明 3区3溝(古墳後期)を切っている。

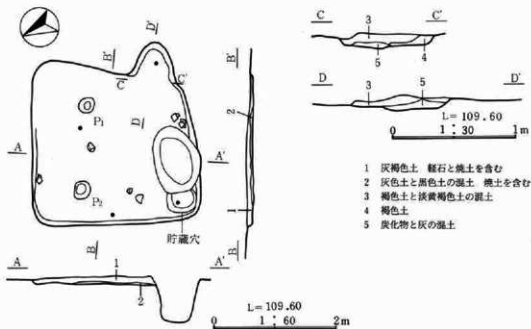
208号住居 (位置は全体図に示す)

位置 3H・I-27～29グリット 主軸方位 N95°W 重複 208住→3区1、3溝 規模 縦2.0+αm 横5.50m 中央部から東は調査区域外にある。形状 方形 床面 ローム層上面まで掘り下げた上にロームブロックを含んだ暗褐色土を平坦にする。全体に均質である。周溝 なし 柱穴 対角線上にある2本を確認する。上面径と深さは、P₁が28×26、18cm、P₂が32×26、16cm、柱間が186cmを

測る。

遺物出土状態 重複する3区1溝、2溝を含めた約3千点の破片がある。その殆どは3cm角大のもので接合例が殆どない。弥生時代の壺、甕、古墳時代の甕、杯、平安時代の杯、碗、須恵器の甕、蓋がある。この中で住居の時期を特定化できるものはないが手づくね土器1点を報告した。

時期 古墳時代後期 住居の主軸方位、形状、床面の状態から判断する。6世紀



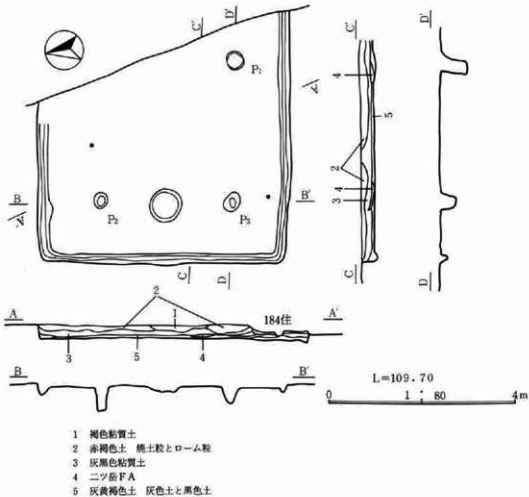
第114図 196号住居址遺構図

196号住居 (第114図, 図版70-3)

位置 4H・I-5・6グリッド **主軸方位** N63°W **重複** 214→196住 **規模** 縦2.38m 横2.60m **形状** 方形 **床面** ローム粒を含む暗褐色土を平坦にする。貯蔵穴 南西隅で住居を切る新しい土坑と重複する。規模は上面で直径42cmの円形、深さ8cmの断面皿形である。灰軸碗の破片が出土した。新しい土坑は上面で104×72cmの楕円形、断面円筒状で深さ50cmを測る。周溝、掘り方 なし **柱穴** P₁、P₂の2本がある。上面径と深さで、P₁が23×24、10cm、P₂が28×26、9cm 柱間130cmを測る。**遺物出土状態** 破片が約135点あり、混入の弥生時代、古墳時代のものが35点含まれる。残りは羽釜、甕、杯、碗、灰軸碗、皿がある。羽釜、甕はいずれも破片で接合しない。灰軸は4個体以上あり、壁際の床直にある。

カマド 東南隅に上部の殆どを削平された掘り方が残る。焚口付近に粘土が流出していた。

時期 平安時代 11世紀前半

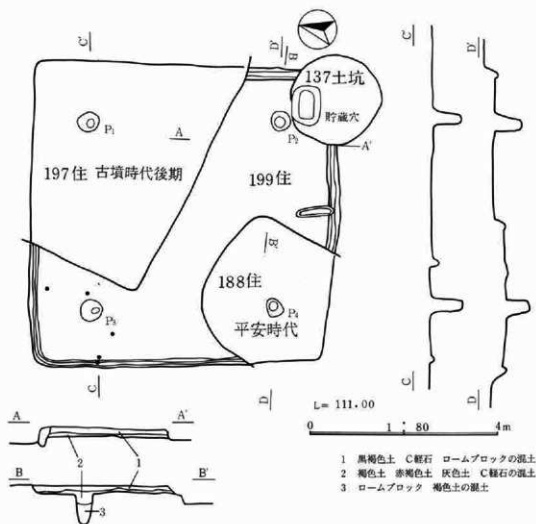


第115図 197号住居址遺構図

197号住居 (第115図, 図版71-1)

位置 4 H~J-9~11グリッド 主軸方位 N81°W 重複 185-199-197-190-198-184住
規模 縦5.30+αm 横5.40m 東壁側は調査区域外にある。床面 ロームブロックを含む灰褐色土を平坦にする。全体に均質で中央部がかたい。貯蔵穴 不明 周溝 全周すると考えられる。基底幅で6~8cm、深さ5~15cmである。柱穴 4本主柱穴と考えられる。上面径と深さで P₁が33×35、57cm、P₂が33×28、49cm、P₃が40×32、71cm 柱間はP₂とP₃が280cm P₁とP₃が290cmを測る。掘り方ローム層上面の全体に手のひら大の凹痕が連続する。

遺物出土状態 破片が約560点ある。混入の弥生時代後期の壺、甕、高杯約150点、平安時代の碗2点を除くと、古墳時代後期の甕、杯、高杯が約400点である。これらは殆ど接合例のない細かなもので、出土の状態やその傾向を示していない。これらのほかに32点の棒状の河原石がある。敲打痕、条痕、擦痕、砥面など複数の使用痕を合せもつ例が大半で、菰石と一括するのは疑問である。類例の97住で



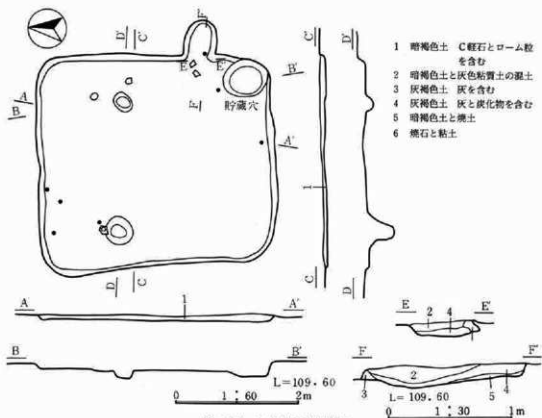
第116図 199号住居址遺構図

は周溝際に並び入口施設を推定させたが、本例は東南隅に22点が円形に集中している。ほかに土製勾玉と結晶片質岩の剥片各1点がある。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 FA 埋没した畦状遺構の29溝を切っている。6世紀前半

199号住居 (第116図)

位置 4H~K-9・10グリッド 主軸方位 N106°W 重複 4区18→199→197→198→188住 規模 縦6.26m 横6.54m 北東隅に197住、南西隅に188住、東南隅に137土坑が重複している。形状 方形 床面 ロームブロックを含む灰黄褐色土を平坦にする。貯蔵穴 東南隅にある。上面は82×64cmの長方形、深さ62cmを測る。周溝 全周すると考えられる。基底幅は6cm前後、深さ3~7cmである。南壁中央の掘り方では、長さ110cmの間仕切りと推定される小溝がある。柱穴 対角線上にP₁~P₄の4本がある。上面径と深さは、P₁が39×46、72cm、P₂が39×41、62cm、P₃が43×47、69cm、P₄が38×36、



第117図 200号住居址遺構図

69cm、柱間は P_1 と P_2 が4m、 P_3 と P_4 が380cm、 P_1 と P_3 、 P_2 と P_4 が390cmを測る。掘り方 ローム層上面に手のひら大の凹痕が連続する。

遺物出土状態 破片が約360点ある。約300点は弥生時代後期樽式の壺、甕、台付甕、高杯である。住居に伴うものでは甕、杯、椀、高杯がある。個体数は多いものの接合しない。197住同様に、土器の殆どは埋没開始以前に破片を残して住居外に持ち出されたと考えられる。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 埋没土上層にFA埋没の29溝がある。6世紀前半

200号住居 (第117図, 図版71-2)

位置 4 I・J-2・3グリッド **主軸方位** N91°W **重複** 218→4区28→219→200住 **規模** 縦3.33m 横3.80m **形状** 方形 **床面** ローム粒、焼土、灰色土を含む暗褐色土、中央部が高い。貯蔵穴 東南隅にある。上面で59×72cmの楕円形、深さ10cmである。周溝、掘り方 なし **柱穴** 2本を図示したが北西側のものは219住のものである。北東寄りには18×30cmの円形だが12cmと浅い。中から219住の滑石製模造品の剣形1点が出土している。

遺物 羽釜、椀、杯、釘がある。

カマド 東壁南寄りに掘り方を残す。

時期 平安時代 11世紀前半



- 1 茶褐色土 軽石 ロームを多量に含む
- 2 茶褐色土 1層よりも軽石が少ない
- 3 暗褐色土 軽石よりもロームブロックが多い
- 4 赤褐色土 暗黄褐色土を含む
- 1～3は人為埋没 4は自然埋没

第118図 209号住居址遺構図

209号住居 (第118図, 図版72-2)

位置 4F-L-19-22グリット 1号方形周溝基の前下方下にある。埋没土の状態からすると基の築造のために埋め戻されたものである。**主軸方位** N75°E **重複** 228-209住-1方周 **規模** 縦5.08+ α m 横4.33m 西壁は1方周で消失している。東壁と柱穴の位置からすると縦5.60m前後と推定される。**形状** 隅丸長方形 **床面** 暗褐色土とロームブロックの混土を貼床にする。全体に均質でかたくしまっている。**周溝** 全周すると考えられる。基底幅は8~12cm 深さ6~12cmで一定している。南壁東寄りに入口と間仕切りを兼ねたL字形の溝がある。一方の端部は壁の内部にまでくいこんでいる。**入口施設** 南壁東寄りにある。間仕切り溝での区画は芯々で約1mあり、壁上端から約50cmの位置で屈曲している。壁際から約30cmの位置に26×20、深さ56cmのP₅がある。位置ではP₆、P₇と対にあり、棟方向を二分する上屋関係とも考えられる。P₆は20×16、35cm、P₇は15×27、50cmである。**柱穴** 対角線上に主柱穴P₁~P₄の4本がある。上面径と深さで、P₁が18×19、68cm、P₂が17×20、53cm、P₃が34×40、二重の掘り方で72cm、P₄が41×46、二重の掘り方で55cmを測る。P₁とP₂は1方周の掘り方内での確認である。柱間はP₁とP₂が190cm、P₃とP₄が200cm、P₁とP₃、P₂とP₄が320cmである。

埋没土 南北方向の断面A、Bの2本を図示したが、ロームブロックの多少と色調で区別される褐色土が中央部にむかってレンズ状、互層状態で見られ、壁際から始まり中央部にむけて造墓に伴って人為的に埋没した結果と判断した。**掘り方** 貼床を除去すると中央部で不整形の土坑状のものが確認された。**貯蔵穴** 北東隅にある。上面で73×88cm、断面碗状の深さ72cmである。

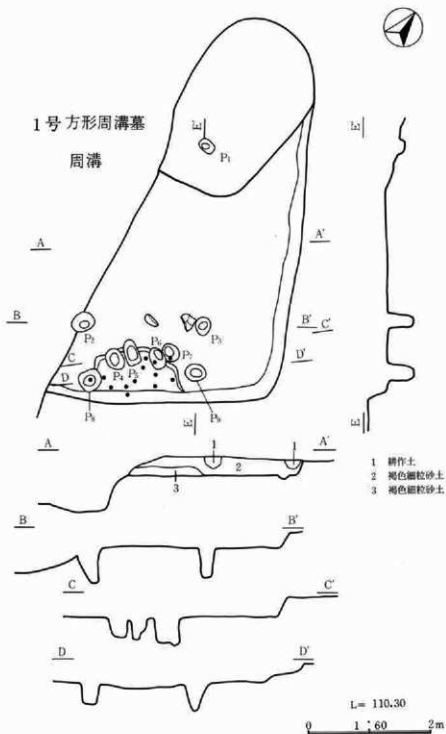
遺物出土状態 掘り方を含めて破片約30点がある。遺存の状態と器種、個体数からすると埋没前に主要なものは屋外に持ち出されたと考えられる。弥生時代後期樽式の甕、台付甕の破片と古式土師器の有段口縁壺、小型甕、甕、台付甕、高杯、器台、蓋付小壺、碟器、砥面をもつ台石がある。弥生土器と土師器は掘り方でも混在しており、前者は重複する228住からの混入と考えられる。

炉 地床炉が2基ある。1号は上面で53×60cmの円形、厚さ2~3cmの焼土が良好に残る。2号は52×62cmの円形、焼土は見られず、炭化物が集中しているだけであった。2基は併存したと考えられ、焼土と炭化物の有無は炉の機能のちがいととも考えられる。

時期 古墳時代前期 4世紀中頃

210号住居 (第119図, 図版72-3)

位置 4I・J-23-25グリット **主軸方位** N33°W **重複** 210住-1方周 **規模** 縦4.20+ α m 横5.15+ α m 北壁側と西壁側は1方周に削平されている。**形状** 長方形 **床面** ローム層上面を平坦に掘り下げた上に、炭と灰を多く含む褐色土、厚さ1~2cmとロームブロックを多く含む褐色土の互層からなる貼床をしている。全体に均質でかたい。南壁中央部が軟らかく3~4cm低い。**貯蔵穴** 削平部に推定する。**周溝** 東南隅に凹みが見られる。**柱穴** 対角線上の主柱穴P₁~P₃の3本と2本組を基本とする入口施設のP₄~P₆の6本がある。上面径と深さで、P₁が24×18、33cm、P₂が40×24、56cm、P₃が22×26、48cm、柱間はP₁とP₃が280cm、P₂とP₃が180cmを測る。入口施設は、P₄が28×37、32cm、P₅が31×37、44cm、P₆が35×34、31cm、P₇が32×36、41cm、P₈が26×36、31cm、P₉が22×36、41cmを測る。P₄とP₇からP₈とP₉へと建替えている。柱間はP₄とP₇が165cm、P₈~P₉が各70cmである。



第119図 210号住居址遺構図

遺物出土状態 南壁から約1mの帯状の範囲、床直で半ば集中し、北側からは殆どない。壺、甕、高杯がある。報告1の壺はP₃の脇でつぶれていた。

炉 確認範囲がなく、中央北側に推定される。

時期 弥生時代後期 樽式

211号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4H・J-27・28グリット 1号方形周溝墓の北側周溝内で痕跡が確認された。

形状、規模、主軸方位 不明 **柱穴** 柱間350cmで2本ある。西のP₁は22×26cm、深さ21cm、東のP₂は25×28cm、深さ32cmを測る。炉の位置からすると北辺の柱穴と判断される。

炉 直径30cmの範囲が焼けている。地床炉である。

遺物 なし

時期 弥生時代後期 1方周より古い。

212号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4J・K-26・27グリット 1号方形周溝墓の北側周溝内で痕跡が確認された。

主軸方位 N100°W **重複** 155土坑→212住→1方周 **規模** 縦2.0+αm 横3.65+αm 北東隅だけである。

形状 方形か **床面** ローム層を踏み固める。 **柱穴** 東壁から1mの位置に南北2本がある。北のP₁は32×28cm、深さ52cm、南のP₂は痕跡で42×35cm、深さ34cm、柱間180cmを測る。

遺物 縄文時代後期の鉢の把手部分1点が出土する。

炉 中央部に地床炉2基が並列する。直径30cmの掘り方をもち、北側のものが礫石2石を残す。

時期 弥生時代後期

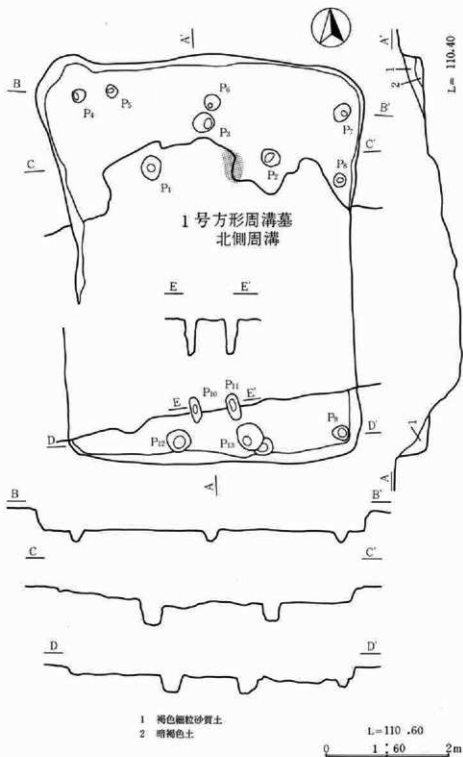
213号住居 (第120図)

位置 4F~H-26~28グリット **主軸方位** N4°E **重複** 213住→1方周 **規模** 縦5.18m 横6.30m 中央部に1方周の周溝が横断する。 **形状** 長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げて平坦にする。一部にロームと褐色土の混土を貼る。 **周溝** 図示していないが壁際に断続的にある。幅10cm前後で浅い。 **柱穴** 主柱穴P₁~P₃、壁際柱穴P₄~P₉、入口施設P₁₀~P₁₃がある。規模は上面径と深さが、P₁で26×29、58cm、P₂で30×26、59cm、P₃で34×30、29cm、P₄で20×19、24cm P₅で18×17、20cm、P₆で22×24、24cm、P₇で37×24、32cm、P₈で20×21、36cm、P₉で24×19、27cm、P₁₀で14×36、49cm、P₁₁で14×40、49cm、P₁₂で36×35、38cm、P₁₃で43×37、62cmである。柱間は、P₁とP₂が185cm、壁際は55~215cm、入口はP₁₀とP₁₁が460cm、P₁₂とP₁₃が105cmを測る。

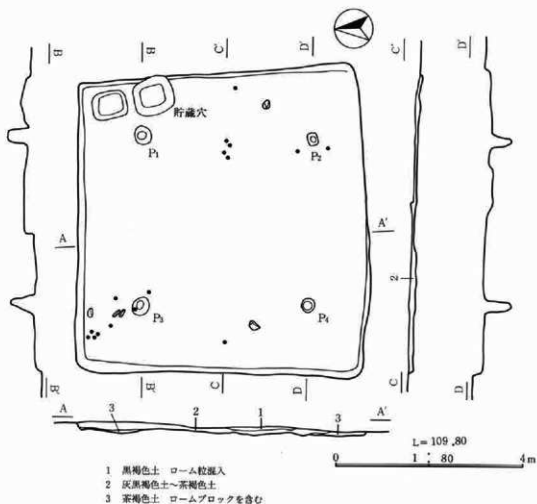
遺物 南壁で甕と台付甕の破片数点と報告の砂岩製携帯礫石2点がある。北壁際中央で台石らしいものがたてかけていた様に出土した。

炉 P₂西脇で地床炉の痕跡がある。北西隅の床上1~2cmで焼土と灰のうすい分布がある。

時期 弥生時代後期 樽式



第120図 213号住居址遺構図

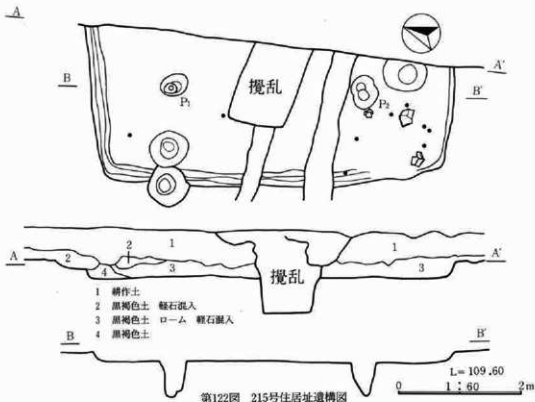


第121図 214号住居址遺構図

214号住居 (第121図, 図版73-1)

位置 4H~J-4~7グリッド **主軸方位** N88°W **重複** 214→202→189→182、196、187、195、201住 **規模** 縦6.20m 横6.40m **形状** 方形 **床面** ロームブロックを含む灰黒褐色土、平安時代の住居群が重複するために遺存状態が悪い。**貯蔵穴** 掘り方を合せて3基が推定され、北東隅の2基を図示した。上面径と深さで1号が57×75、19cm、2号が78×85、22cm、3号が54×76、33cmを測る。**柱穴** 対角線上に主柱穴P₁~P₄の4本がある。上面径と深さは、P₁が38×35、40cm、P₂が25×19、48cm、P₃が36×35、54cm、P₄が27×28、55cm、柱間はP₁とP₂が365cm、P₃とP₄が360cm、P₁とP₃が360cm、P₂とP₄が350cmを測る。**掘り方** ローム層上面に手のひら大の凹痕が連続する。中央部付近に方形土坑と長さ約1mの間仕切り状の溝が不揃いにある。

遺物出土状態 床面10cm上付近で多くの住居と重複するために、床直を除いて特定化できるものは少ない。土器は壺、杯、高杯の破片が約40点ある。いずれも接合は稀で報告個体もない。石が報告を



第122図 215号住居址遺構図

めて5点ある。2点は東西同一線上、壁際から約1mの対の位置にあり、30cm前後で厚みがあることや床にくいこんだ状態から礎石様のものと考えられる。北西隅の3点は棒状の河原石で、2点が報告1と2の敲打具と砥石である。滑石製剣形模造品は、この一群中にある。

カマド 東壁の北東隅寄りに痕跡ありと記述されるが詳細は不明である。

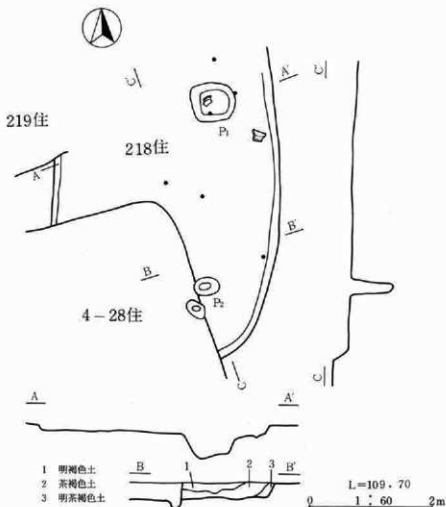
時期 古墳時代後期 6世紀初頭

215号住居 (第122図, 図版73-2)

位置 3H・I-31~33グリット **主軸方位** N112°W **重複** 220→215→221住-32, 33溝 **規模** 縦2.42±αm 横5.78m 東側は調査区域外にある。**形状** 方形 **床面** P₂の東側はローム層を平坦にするが残る全体はロームブロックと暗褐色土の混土を貼床している。**周溝** 掘り方で北壁から西壁中央部付近まで痕跡がある。基底幅で10cm前後、深さ4~6cmを測る。**柱穴** 対角線上にある主柱穴P₁とP₂の2本が確認された。上面と深さは、P₁で18×20、56cm、P₂で30×38、52cm、柱間305cmを測る。ともに同規模の2基が重複し、東から西へ中心を10~15cm移して建替えしたと考えられる。長方形の掘り方も特徴である。**掘り方** 重複する220住柱穴のほかに長方形土坑2基がある。柱穴の間にあるものは90×176cm、深さ10cm、南壁のものは52×71cm、深さ36cmを測る。

遺物出土状態 南西隅近くで報告1の丸銅鏝と2の鉢が出土している。ほかに椀、土製勾玉、丸石がある。

カマド 東壁側と考えられるが南壁中央の壁外に接して馬蹄形状に盛り上がった焼土がある。



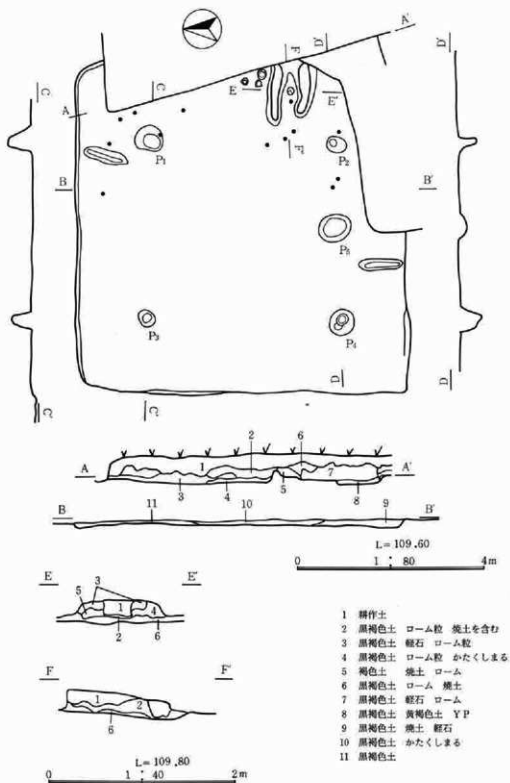
第123図 218号住居址遺構図

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

218号住居 (第123図)

位置 4 I・J-1~3グリット **主軸方位** N10°E **重複** 218→4区28→219→200住 **規模** 縦3.60m 横4.80+αm 北側は219住、南西隅は4区28住の重複のために消失している。横は柱穴の位置からすると5m前後と推定される。**形状** 隅丸長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げた上にロームブロックと暗褐色土の混土を貼床する。**周溝** なし **柱穴** 長軸上でP₁、P₂の2本がある。中心軸を外れるが4本の可能性は掘り方の点で少ない。上面径と深さは、P₁が36×26、68cm、P₂が68×58、37cmを測る。P₂は2基が重複し、西から東へ移る。柱間は290cmである。**掘り方** ローム層上面まで掘り下げ、手のひら大の凹痕が多く見られる。

遺物出土状態 P₂周辺で床上8~22cm浮いて出土し、P₂の西側掘り方上部で丸胴甕の破片がある。報



第124図 219号住居址遺構図

告のうち、1、2と4は219住、216住からの混入と考えられ、5と6の磨製石鏃未成品と剥片、3の礫器が共存する。磨製石鏃の工房跡とは確定できない。

時期 弥生時代後期 樽式

216号住居（位置は全体図に示す）

位置 4H-2グリット 219住の東壁に重複し三角形に確認されただけで殆どは調査区域外にある。

形状、主軸方位 不明 重複 218→216→219住 **床面** 暗褐色土を平坦にする。**遺物** 報告した磁石がある。

時期 不明

217号住居

4H-4グリットで214住に重複する住居の一つとして調査し、195住、213住との埋没土の差が認められたが、掘り方調査の結果195住と同一のものと判断されたので欠番扱いとする。

219号住居（第124図、図版73-3）

位置 4H-K-1～4グリット **主軸方位** N90°W 重複 218→219→195、200～203住 **規模** 縦、横7.10m 東壁は北東隅を除いて調査区域外にある。**形状** 方形 **床面** ローム粒と暗褐色土との混土の貼床である。**柱穴** 対角線上に支柱穴 P_1 ～ P_4 の4本がある。上面径と深さは、 P_1 が32×33、40cm、 P_2 が56×58、48cm、 P_3 が56×52、44cm、 P_4 が31×43、38cm、柱間は P_1 と P_2 が370cm、 P_3 と P_4 が375cm、 P_1 と P_3 が410cm、 P_2 と P_4 が380cmを測る。 P_3 は中心を約20cmずらして2基が重複している。 P_3 は58×68cmの円形、深さ13cmで、補助用と考えられる。**掘り方** ローム層上面に手のひら大の凹痕が多く見られ、 P_1 と P_4 と P_3 の間に約60cmの間仕切り溝が確認された。

遺物出土状態 長甕、丸胴甕、高杯、杯、滑石製剣形模造品、同剥片がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長150cm 焚口幅36cm 煙道先端は調査区域外にある。

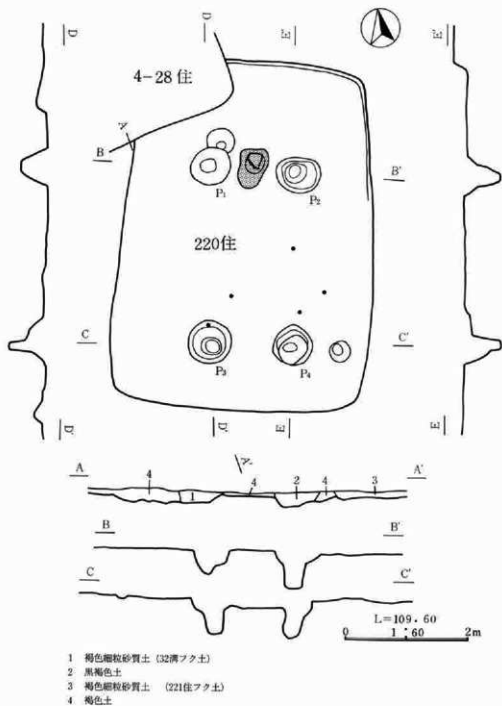
袖 黄白色、灰白色粘土を馬蹄形にめぐらす。

遺存状態 報告5の高杯を伏せて支脚とする。カマド全体は住居内にあると考えられ、支脚の外側35cmで細くくびれて煙道との境とする。

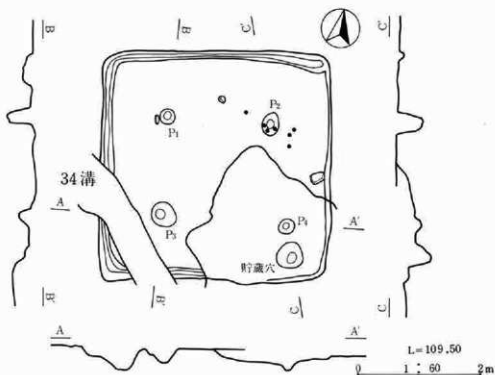
時期 古墳時代後期 鬼高Ⅱ式 6世紀後半

220号住居（第125図、図版73-2）

位置 3I・J-31～33グリット **主軸方位** N11°E 重複 220→4区28→215→221住 **規模** 縦4.0m 横5.30m 東壁は215、221住の重複で消失する。**形状** 長方形 **床面** ロームと暗褐色土の混土を平坦にする。**貯蔵穴、周溝** なし **柱穴** 支柱穴 P_1 ～ P_4 の4本がある。上面径と深さは、 P_1 が直径60、62cm、 P_2 が68×64、56cm、 P_3 が70×56、58cm、 P_4 が62×59、40cmで、柱間は P_1 と P_2 が130cm、 P_3 と P_4 が140cm、 P_1 と P_3 が170cm、 P_2 と P_4 が180cmである。いずれも二重の掘り方で中段以下が直径30cm程になる。



第125図 220号住居址遺構図



第126図 221号住居址遺構図

遺物出土状態 南壁寄りで壺、甕、石鍾用の石器が出土している。

時期 弥生時代後期 樽式

221号住居 (第126図, 図版74-1)

位置 3 I・J-30~32グリッド **軸方位** N95°W **重複** 220→215→221住 **規模** 縦3.62m 横3.59m **形状** 方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げてロームと褐色土の混土を貼床する。周溝全周すると考えられるが東壁は不明瞭で図示しなかった。基底幅は10cm前後、深さ5cm前後である。
貯蔵穴 東南隅にある。規模は上面で42×38cmの方形、深さ32cmである。**柱穴** 対角線上に支柱穴P₁~P₄の4本がある。上面径と深さは、P₁が36×30、40cm、P₂が24×31、40cm、P₃が22×24、42cm、P₄が33×36、36cm、柱間はP₁とP₂が164cm、P₃とP₄が160cm、P₁とP₃が160cm、P₂とP₄が200cmである。P₁の上面はうすく灰層が覆っていた。

遺物出土状態 破片が約150点ある。接合例のないものが多く、分布も散在している。長甕、杯、碗、凹石、緑色片岩製の石鍾様の石器がある。

カマド 東壁中央部に推定する。P₁とP₂の間にうすく灰層が分布し、崩落したカマドからの流失と考えられる。掘り方調査でも痕跡を断定できなかった。

時期 古墳時代後期 鬼高Ⅱ式 6世紀後半

222号住居（位置は全体図に示す）

位置 4 J-4・5グリット 214住と4区31住との約1.5mの間に東南隅が確認される。**形状、主軸方位** 重複する4区31住や201住等と同様に考えられる。**規模** 縦1.50+am 横3.0+am **遺物** 長壺、杯、碗の破片が11点あるだけで、混入の可能性もあり特定できない。

時期 平安時代

223号住居（第127図）

位置 3 I・J-24・25グリット **主軸方位** N75°W **重複** 227→226→223住 **規模** 縦2.85m 横2.12+am 北壁側は3区を横断する道路敷内であって未調査である。**形状** 方形 **床面** ローム粒と浅間C軽石を少量含んだ暗褐色土の貼床。**貯蔵穴** 南西隅にある。上面で64×76cm、断面碗底状の深さ23cmである。**周溝、柱穴** なし **掘り方** 中央部に102×94cmの円形、断面碗状で深さ28cmの土坑がある。底面で粘土塊が出土した。

遺物出土状態 カマド内で羽釜、杯、貯蔵穴内で釘の小片がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長110cm、焚口幅35cm

遺存状態 壁体と袖は流失し基部を残す。貼床と同質の土で袖を作る。左壁に角安石の割石を貼付し、粘土を補強する。煙道側に焼土塊が多く見られる。焚口前に28×34cm、深さ26cmの灰のかき出し穴がある。

時期 平安時代 11世紀第2四半紀

225号住居（位置は全体図に示す）

位置 4 F・G-21・22グリット 1号方形周溝墓後方に切られ、その東南部隅の盛地面下にある。北西隅の2.16×1.52mの範囲が確認されただけで、形状、主軸方位、規模は不明である。**床面** ロームブロックを含む暗褐色土を平坦にする。全体に堅緻である。埋没土の上面、床面から約20cm上位に浅間C軽石を多く含んだ黒褐色土が厚さ約20cmで堆積する。**周溝、柱穴** なし

遺物出土状態 破片は72点がある。壺、壺、台付壺に分類される。接合例はないが床直近くでつぶれた状態にある。1方周前部部の東くびれ部付近で同時期の土器が多量に出土しているが、本跡から流出したものと考えられる。

時期 弥生時代後期 樽式

226号住居（第127図）

位置 3 I-24・25グリット 223住と227住との間、幅約60cmの範囲が確認されただけである。**主軸方位** N69°W **重複** 227→226→223住 **規模** 223住、227住とは同一方位で西から東へ移動しながら重複している。規模もほぼ同一と考えられ、3m四方と推定される。**床面** ロームを主体とする暗褐色土の混土を約3cmの厚さで貼床している。**周溝、柱穴** なし **掘り方** 223住と同一面のために区別ができず、形状の確定もできなかった。227住のカマド、貯蔵穴との区別はむずかしいが、西壁際で直径約30cmのピット2基がある。北側のものは貼床から深さ72cmある。

遺物 杯、碗の小破片が12点ある。

時期 平安時代

227号住居 (第127図)

位置 3 J-24・25グリット **主軸方位** N73°W **重複** 227→226、239→223住 **規模** 縦1.97+ α m 横1.80+ α m 南壁は239住、東壁は226住の重複で消失し、北側は3区を横断する道路敷で未調査である。**形状** 方形か **床面** 掘り方をもたず、ローム上面を平坦にしている。重複とその後の耕作で遺存状態は悪い。**周溝、柱穴** なし **掘り方** 確認中央部に68×52cmの円形、断面ロート状の深さ56cmの土坑がある。

遺物 弥生時代後期～平安時代のものまで混在する。平安時代では羽釜、甕の破片が20点程ある。

時期 平安時代

228号住居 (位置は全体図に示す)

位置 4 I・J-22・23グリット 1号方形周溝墓の後方部にあるが、重複する209住とともに墓の築造でその殆どを消失している。**主軸方位** N122°W **重複** 228→209住→1方周 **規模** 縦4.46+ α m 横1.08+ α m **形状** 隅丸長方形か **床面** ローム層上部を掘り下げてロームブロックと暗褐色土の混土を厚く貼床している。全体に均質でかたくしまっている。**柱穴** P₁とP₂の2本がある。ともに直径30cmの円形、断面円筒状で深さP₁が46cm、P₂が20cmを測る。P₁に主柱穴の可能性はある。

遺物 壺と甕の破片19点がある。1方周の前方部西くびれ部に流出している。

時期 弥生時代後期 樽式

239号住居 (第127図)

位置 3 J・K-23・24グリット **主軸方位** N65°W **重複** 3区8→227→239住→3区2溝 **規模** 縦2.12m 横3.06m **形状** 長方形 **床面** 掘り方をもたず、ロームの上層まで掘りこんだ上にロームブロックと暗褐色土の混土を貼床する。全体に均質で堅緻である。**周溝** 全周すると考えられる。基底幅は8cm前後で、深さ5cm前後で一定している。**貯蔵穴、柱穴、掘り方** なし

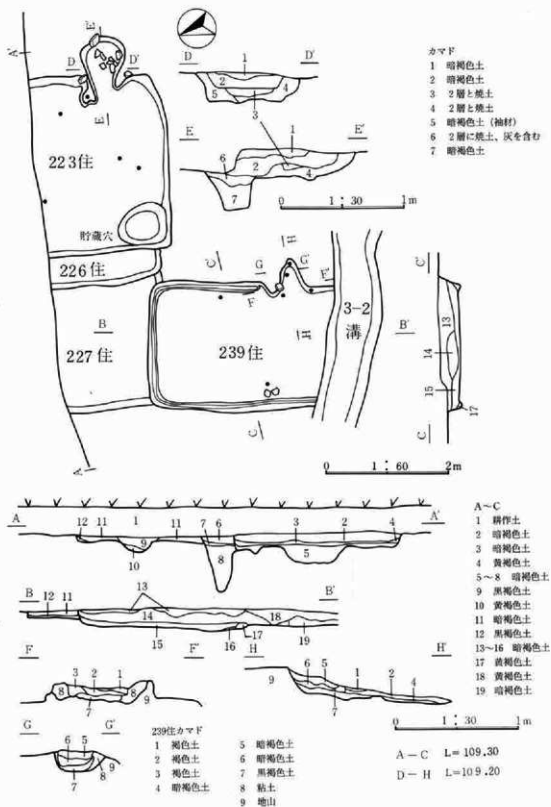
遺物出土状態 カマド内に集中がある。破片は約300点あるが、弥生時代と古墳時代のものが半数以上混入している。カマド内では羽釜、碗があり、ほかに須恵器甕、灰袖碗がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長55cm 焚口幅45cm

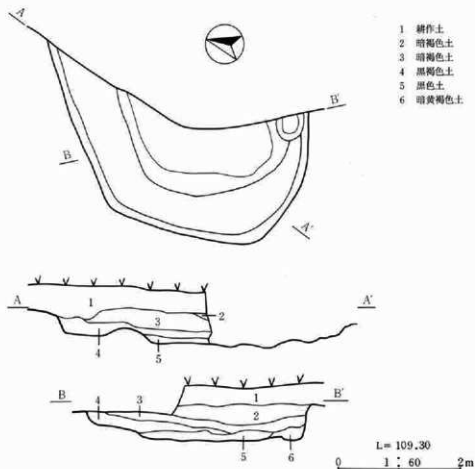
袖 掘り残したロームに暗褐色と黒褐色の粘質土を厚さ約5cmで互層に積む。左袖口に角安石の割石を貼付している。

遺存状態 壁外から内部にむかって崩落流出している。焼土や灰は少ない。

時期 平安時代 10世紀第4四半紀



第127図 223号・226号・227号・239号住居址遺構図



第128図 224号住居址遺構図

224号住居 (第128図)

位置 3H・I-21~23グリット **主軸方位** N121°W **重複** なし **規模** 縦3.90+αm 横3.55m
 東側は調査区域外にある。中央部は一段低くなり、周囲がベット状になる。中央部は横2.20mである。
形状 不整形 西壁は弧状になる。床面 中央部と周囲で約20cmの段差をもつ。ともに暗褐色土を床とするが、中央部は踏み固められた様にかたい。周囲は幅約60cmでめぐるが、中央部程のかたさが見られない。**柱穴** 南壁に浅いピットがある。**遺物** 小片が数点ある。
時期 弥生時代後期 樽式 埋没土中に浅間C軽石や焼土、炭といった特徴的なものが殆ど見られず生活痕跡もとぼしい。住居としては検討を要する。

229号住居（第129図，図版74-2）

位置 3H・I-9～11グリット **主軸方位** N108°W **重複** 229住→160土坑 **規模** 縦3.21+αm 横5.76m 東側半分は調査区域外である。**形状** 長方形 **床面** 掘り方をもたず、掘り下げたローム層上面を平坦にしている。部分的にローム粒と黒褐色土の混土をうすくはっている。南西隅近くに床面から約4cm浮いて炭化材の痕跡が残存していた。焼失住居の可能性がある。**周溝** なし **柱穴** 対角線上に主柱穴のP₁とP₂がある。上面径と深さは、P₁が46×36、32cm、P₂が41×29、43cm、柱間230cmを測る。

遺物出土状態 床上から10cm前後浮いて炉周囲、P₁の周囲、南壁中央部付近の3ヶ所に集中する。焼失住居の可能性があるためか、器種との個体数が豊富で接合例の多い押しつぶされた状態である。組成では壺、甕が主で敲打痕や砥面をもった礫器、頁岩系の剥片がある。分布では、炉脇の報告5の甕の様に立ったままで使用時を推定させるものもあるが、そのほかの多くが炭化材と同一のレベルにあることからすると、焼失に係わる一括投棄の可能性も考えられる。剥片は8点あり、報告20、21の片岩系以外の素材であることから打製石器の存在が暗示される。

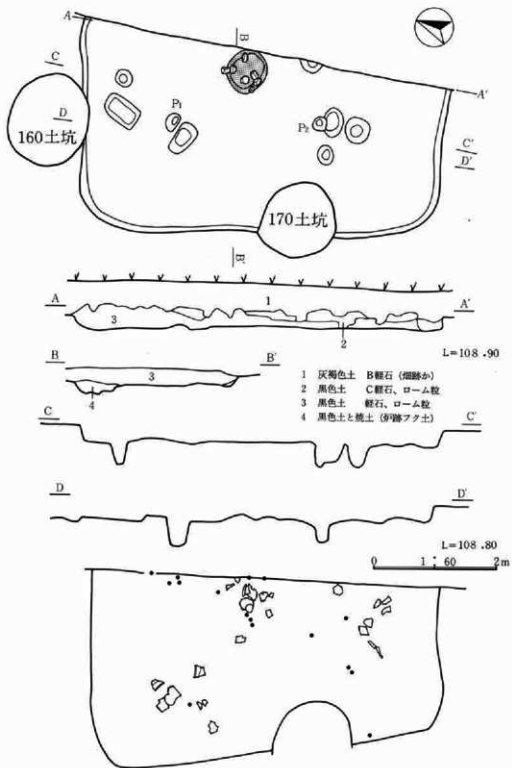
炉 **位置** ほぼ中央にある。**規模** 直径約80cmの断面浅い碗状の掘り方、円礫を配した地床炉である。

遺存状態 掘り方全体に焼土と炭を含んだ褐色土がある。

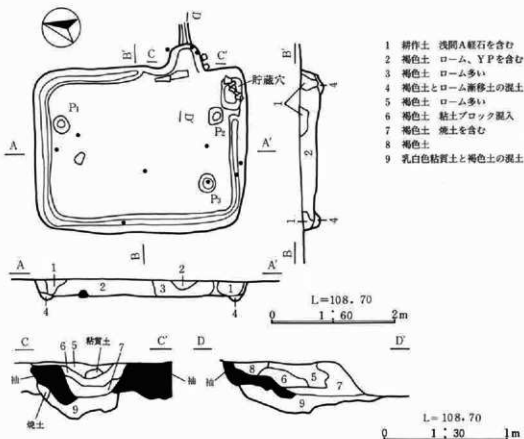
時期 弥生時代中期後半 竜見町式



229住の炉址



第129図 229号住居址遺構図



第130図 231号住居址遺構図

231号住居 (第130図, 図版75-2)

位置 3H・I-5~7グリット **主軸方位** N102°W **重複** なし **規模** 縦2.60m 横3.40m
床面 掘り方がなくローム層上面まで掘り下げて平坦に踏みかためている。**周溝** カマド付近を除いて全周する。基底幅で8cm前後、掘り方で3cm前後と一定している。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面と深さは50×32cmの長方形 北側床面にわずかに高まりが見られ、断面方台形の深さ38cmを測る。柱穴掘り方を異にする3本がある。上面径と深さは、P₁で28×24、15cm、P₂で26×23、20cm、P₃で29×27、21cm、柱間P₁とP₂が150cmを測る。長い煙道位置からすると、P₁とP₂を棟持ちの主柱穴と見て、東壁側の軒先を西壁までの長さで推定もできる。とすると四辺の壁外に奥行きのある方4mを越す方形プランが推定でき、周囲に同時期の住居がない理由の説明も推測できる。

遺物出土状態 壺、羽釜、椀、緑釉椀小片、釘2点、刀子、鉄滓混入の滑石製剣形模造品がある。個体数と破片数は少なく、刀子、釘といった特殊遺物を除いて、本来の組成がない。

カマド 位置 東壁南寄り **規模** 全長80cm以上 焚口幅40cm 煙道の先端は東にのびている。

構造 燃焼部全体は130×80cmの方台形の大型の掘り方をもつ。壁体には乳白色粘質土を厚さ約15cmで貼りめぐらし、壁際に袖石、焚口から奥20cmに支脚を設けている。壁体の内側には補強用として土器片を貼付した形跡がある。壁体は何度か崩落とともに更新されたらしく火

床面下に敷きこまれている。煙道へは約15度勾配で接続する。煙道全体は不明だが確認長40cmあり、更に東へ続く。上幅16cm、断面U字状で壁体同様に乳白色粘質土で筒形に補強されている。天井部は崩落し、焼土と灰も少なく、使用した羽釜等は外したと考えられる。

時期 平安時代 10世紀第2四半紀

232号住居 (第131図, 図版75-3)

位置 3H~J-3~5グリット 主軸方位 N21°W 重複 236→232住 規模 縦4.56+ α m 横4.74m 東南隅が調査区域外にある。形状 方形 北側が狭い。床面 ローム層の上に黒色土をうすく貼床しているが全体に軟弱で、中央部に良好な状態が見られた。これは壁際の掘り方が一様に高いことから、全体の構造的なものと理解される。周溝、貯蔵穴 なし 柱穴 対角線上を基本とするP₁~P₄の主柱穴4本がある。上面径と規模は、P₁が46×44、41cm、P₂が41×53、46cm、P₃が35×42、48cm、P₄が37×36、43cm、柱間がP₁とP₂170cm、P₃とP₄230cm、P₁とP₃280cm、P₂とP₄260cmを測る。

遺物出土状態 破片が約40点ある。壺、甕、高杯、磁石、剥片がある。

炉 位置 中央 規模 直径約60cmの円形、断面皿状の地床炉である。南側に割石2個の縁石をもつ。

遺存状態 内部に焼土は殆どない。縁石は安山岩系、同一個体の割石である。

時期 弥生時代中期後半 竜見町式

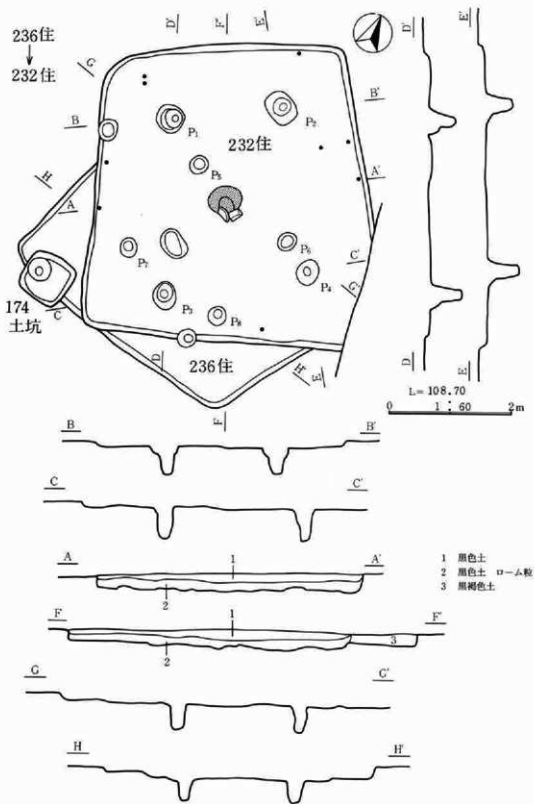
236号住居 (第131図)

位置 3H~J-3・4グリット 主軸方位 N18°E 重複 236→232住→174土坑 規模 縦4.62m 横2.08m+ α m 北側半分は232住重複のために消失している。形状 方台形 北壁側が広い。床面 ローム粒を含む黒色土を平坦にする。周溝 なし 柱穴 対角線上に主柱穴P₁~P₈がある。上面径と深さは、P₅が25×22、51cm、P₆が23×24、51cm、P₇が直径25、41cm、P₈が25×23、46cmである。柱間は、P₅とP₆が245cm、P₇とP₈が175cm、P₅とP₇が170cm、P₆とP₈が155cmである。

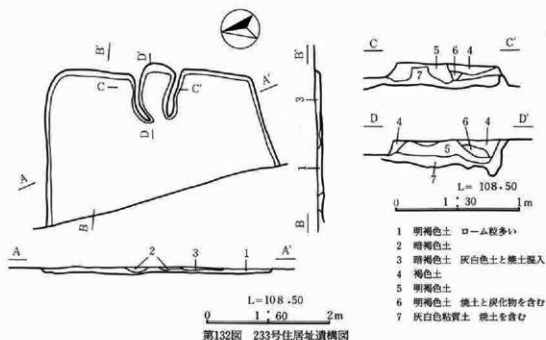
遺物 破片が20点ある。232住との接合例があるので2軒での取り上げ時の混在が考えられる。壺と甕があり、遺物の上からは232住と同時期である。

炉 位置 中央にある。232住の炉の南西20cmで、上面を削平された地床炉がある。底面が赤く焼けた位で焼土層はない。

時期 弥生時代中期後半 竜見町式



第131図 232号・236号住居址遺構図



233号住居 (第132図)

位置 2J-30~3J-1グリット 主軸方位 N83°W 重複 なし 規模 縦2.40+αm 横3.25m 第6次の側道敷用地の調査で確認されたもので、西側は第3次調査時に確認されていない。形状長方形と推定される。南北両壁は平行しない。床面 ローム層上面まで掘り下げた上にロームと黒褐色土の混土をうすく貼床する。比較的かたく良好である。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物 壺、杯の細かな破片が少量ある。報告資料はない。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長95cm 焚口幅55cm 住居内に燃焼部があり、煙道は削平する。

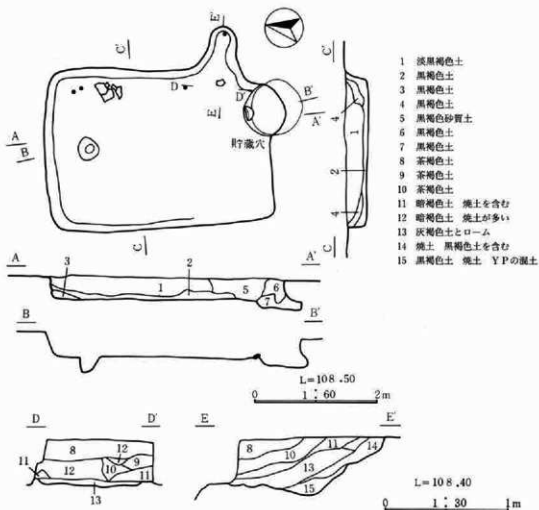
袖 灰白色粘質土と褐色土の混土を馬蹄形にめぐらす。左袖は弧状で焚口が狭くなる。

遺存状態 上面の殆どを削平されている。7層を基盤にして全体が構築され、粘質土で内壁を補強している。奥壁は約50度の勾配で直立する状態にあるが、5層下部が一段深く円形になることから、ここを燃焼部の土器かけ口と見ることができる。円形の大きさは、上面で直径約40cmを測る。

時期 平安時代

234号住居 (第133図)

位置 2J・K-28~30グリット 主軸方位 N97°W 重複 なし 規模 縦2.57m 横3.46m 南西隅付近は推定する。形状 長方形 床面 ロームブロックとYPを含む黒褐色土を厚さ約10cmで貼床する。貯蔵穴 東南隅に張り出す。床面から約15~20cm下がる円形袋状のもので、底径約80cm、奥の高さ約15cmを測る。天井部は南壁線にあり、崩落せずに残存していた。北側の床面との境に石が1個あり、埋没土の5層と貯蔵穴内の6・7層とを区別する位置にも相当することから、内側に石で



第133図 234号住居址遺構図

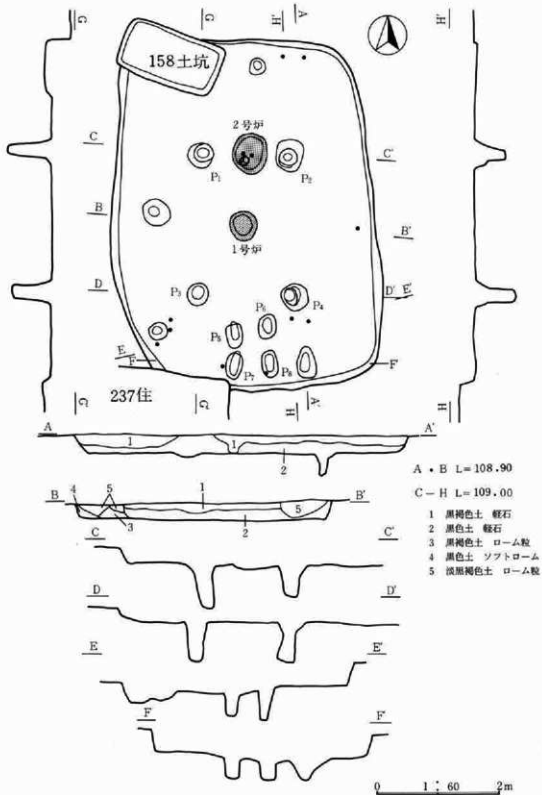
おさえる様な蓋状のものが推定できる。周溝 なし 柱穴 北壁寄りの中央に上面径約25cm、深さ42cmのものがある。底面は掘り方のロームに達して径20cm弱である。床との接地部には2層中でも特にローム粒の多いのが確認され、根固め痕と見られる。掘り方 ローム層上面を中央部が深い舟底状に掘りこんでいる。

遺物出土状態 北東隅近くで報告1の長壺が出土している。2の滑石製剣形模造品は混入である。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長75cm 焚口幅約40cm 全体が壁外にある。

構造 床から続く掘り方を基盤とし、ロームブロックを含む灰褐色土を壁体として厚く貼付する。焼土は煙道側に多く、掘り方への混入からすると火床面の何度かの更新が考えられる。現状は袖石、支脚の有無は掘り方にもなく不明で、天井部は全て崩落していた。遺物は殆どなく、報告1を残して住居外へ持ち出されていたのが埋没前の状況と推定される。

時期 7世紀第3四半紀



第134図 238号住居址遺構図

238号住居 (第134図)

位置 3H-J-15・16グリット 主軸方位 N 3°W 重複 238→237→235住→158土坑 規模 縦4.22m 横5.32m 南西隅は237住、北西隅は235住の重複のために推定する。形状 隅丸長方形 床面 ロームと褐色土の混土を平坦にする。全体に均質でかたくしまる。貯蔵穴、周溝 なし 柱穴 対角線方向のP₁~P₄が主柱穴、南壁中央のP₅~P₆が入口施設、そのほかは用途不明である。上面径と深さは、P₁が41×38、70cm、P₂が45×49、52cm、P₃が34×35、62cm、P₄が44×42、62cm、P₅が25×37、62cm、P₆が29×37、58cm、P₇が25×37、68cm、P₈が25×42、70cmを測る。P₁~P₄が円形の掘り方、P₅~P₆が長方形、斜位の掘り方である。柱間は、P₁とP₂140cm、P₃とP₄150cm、P₁とP₅、P₂とP₆220cm、P₅~P₆は50cmの間隔である。

遺物出土状態 壁際に多く残る。南壁では、入口施設をはさんで報告1、2の壺、甕、5の甕があり、使用位置と考えられる。2号炉内からは8、10、9の敲石、凹石、砥面をもつ礫器が礫石の代用としてある。凹石の用途に発火具も考えられるが、9には赤色顔料がすりこんだ状態で付着しており、複数の用途を推測させる。磨製石鏃と板状剥片は、南北両壁の対角線の位置にあり、直ちに工房の跡を裏付けるものではない。

炉 中央部に2基ある。焼土と炭の残り方に差がなく、併存したと考えられる。1号が直径46、深さ6cm、2号が55×64、深さ7cmである。規模と礫石有無の差は、用途上の差を示している。

時期 弥生時代後期 樽式

240号住居 (第135図)

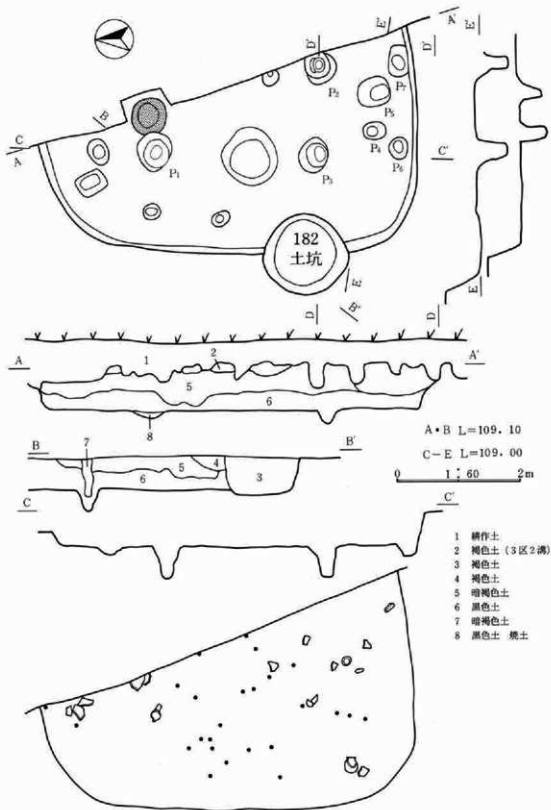
位置 3H-I-17~20グリット 主軸方位 N 6°E 重複 240住→3区2溝→182土坑 規模 縦3.60+αm 横6.06m 東側は調査区域外にある。床面 掘りこんだローム層上に、ロームブロックを含んだ黒色土を厚さ約10cmの貼床とする。全体に均質でかたくしまっている。周溝、貯蔵穴 なし 柱穴 対角線上にあるP₁~P₃が主柱穴、P₄~P₇が入口施設である。上面径と深さは、P₁が56×54、52cm、P₂が56×46、52cm、P₃が49×50、56cm、P₄が28×36、43cm、P₅が43×51、37cm、P₆が32×26、17cm、P₇が46×30、柱間がP₁とP₂260cm、P₂とP₃140cm、P₄とP₅60cm、P₆とP₇140cmである。

遺物出土状態 甕、注口土器、高杯、土製勾玉、磨製石斧、敲石、石鏢、磨製石鏃の素材剥片がある。甕は破片が多いが、大小10個体以上があり組成の中心を占める。分布は壁際になく中央部に点在する。炉の周囲では、報告1の甕、11の注口土器、13の高杯、23の石鏢が集中し、北側に甕、土製勾玉があり分布の中心である。P₅脇では報告2の甕と5の壺があり、21の磨製石斧は入口脇に立てかけたことも推定される南壁中央部から出土している。磨製石鏃の素材剥片は、埋没土の一括の中にあり出土位置を特定できないが工房の存在を暗示する資料である。

炉 位置 北側柱間にある。規模 直径約50cm、断面皿状の掘り方をもち、乳白色粘土を貼付する。

遺存状態 報告1の甕は上面でつぶれた状態にある。焼土の量は少なく、底面の焼け方も同様であった。焼土に代わって炭の量が多い。

時期 弥生時代後期 樽式



第135图 240号住居址遺構图

241号住居 (第136図)

位置 2H・I-19・20グリット **主軸方位** N108°W **重複** 241→247住→7溝→2区畠跡 **規模** 縦1.98+αm 横3.82m 東側半分は調査区域外にあり、北東側に247住が重複する。**形状** 方形と推定される。**床面** 浅間C軽石下の黒色土まで掘り下げた上にFP土石流の混土を貼床する。平坦だが全体に軟らかい。西壁の中央南寄りに土盛り階段状の入口施設がある。主に黄色粘土を用いて踏みかためている。上面で長さ約1m、幅22～32cm、段差は床が7cm、確認面から40cmである。階段施設とすると旧地表面と少なくとも40cm以上の段差があり、基礎の一部か別に棚状施設とも考えられる。**周溝、柱穴、掘り方** なし **貯蔵穴、カマド** 不明

遺物出土状態 報告のものは殆ど床直で、全体でも埋没土中のものは殆どないのが特徴である。南西隅一帯で報告7、8、9の台石や石錘、10、11の刀子といった道具類が出土し、土器とは分布を異にする状況がある。土器組成が不揃いで個体数が少ないのは、未調査の東壁側での出土を暗示するものであろう。

時期 7世紀第4四半紀

247号住居 (第136図)

位置 2H・I-21・22グリット **主軸方位** N82°W **重複** 241→247住→7溝→2区畠跡 **規模** 縦1.30+αm 横2.56m 東側半分は調査区域外にある。**形状** 方形と推定される。南北両壁は平行せず方台形の可能性もある。**床面** 241住同様、浅間C軽石下の黒色土まで掘り下げた上にうすく貼床をしている。**周溝、柱穴、掘り方** なし **貯蔵穴、カマド** 不明

遺物出土状態 報告の鉄鍔以外には殆ど土器がない。南東隅の床近くで有段口縁壺の破片があったが台地上からの混入とみて除外した。

時期 奈良時代 重複遺構の上限と下限からすると8世紀である。

242号住居 (第136図)

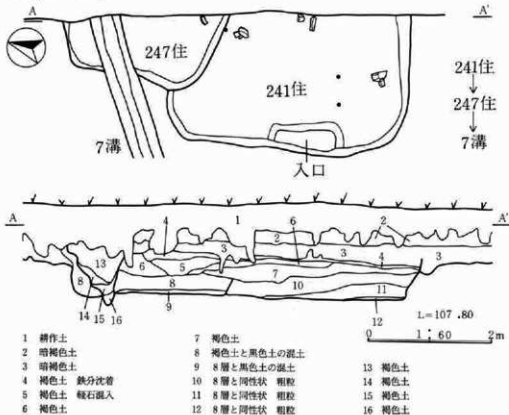
位置 2I・J-14・15グリット **主軸方位** N106°W **重複** なし **規模** 縦2.46m 横2.33m **床面** FA 水田面まで掘り下げた上にFP土石流に伴う茶褐色土を平坦にしている。全体に均質で良好である。**埋没土** 人為埋没と考えられる。壁高は約45cmあるが、上記の茶褐色土と黒色土、灰白色土を主とする混土層で埋没している。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面径は67×50cmの楕円形、隅のピットを除いた深さは26cmである。**周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 人為埋没を裏付けるかの様に埋没土中からの出土物はなく、床面上でも焚口前を除いて皆無に等しい。報告の長甕、丸胴甕、杯の6個体のほかには、破片も個体数も少ない。焚口前での使用が考えられるが、長甕は袖の補強材の可能性もある。

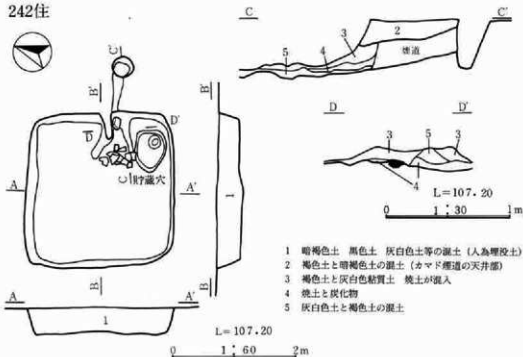
カマド **位置** 東壁中央 **規模** 全長130cm、焚口幅35cm 全長は壁外の煙道を含む。

構造 住居内に燃焼部、煙道はトンネル式で壁外にのぼし、その先端は直立する。壁体は灰白粘土を用い角安石で補強する。焚口には長甕を鳥居状に横架する。

241住 247住



242住



第136図 241号・242号・247号住居址遺構図

時期 7世紀第4四半紀

243号住居 (第137図)

位置 2 I・J-10~12グリット 主軸方位 N98°W 重複 3井戸→246→243、245住 規模 縦2.83m 横3.43m 形状 長方形 床面 FP土石流に伴う茶褐色土を平坦にしている。246、245住と段差なく、区別がむづかしい。埋没土 242住同様の茶褐色土、灰白色土、黒色土等の混土が見られる。混合の度合いで細分したが人為埋没の可能性がある。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし
遺物出土状態 崩落流出したカマドの周囲と北西隅寄りに杯がある。いずれも床直である。焚口前の角安石は壁体の補強用のものが流出している。組成では杯類のみで、煮沸具である長甕等は埋没土中にも殆どなく、こわされたと考えられるカマドの状態に関係したものである。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長190cm 焚口幅45cm トンネル状の煙道をもつ。

構造 壁に灰白色粘土を貼付して燃焼部を作る。壁体は角安石の転石を列にして芯材としている。煙道は上幅約20cm、壁外に約18度の勾配でのびる。先端は242住同様の直立する煙突になると考えられる。

時期 奈良時代 8世紀第1四半紀

244号住居 (位置は全体図に示す)

位置 2 H・I-9・10グリット 主軸方位 N104°W 重複 244住→7掘立 規模 縦2.06+αm 横3.04m 東側半分は調査区域外にある。形状 長方形と推定される。床面 FP土石流を掘りこんで茶褐色土を平坦にする。周溝、柱穴、掘り方 なし 貯蔵穴、カマド 不明
遺物出土状態 長甕、小型甕、杯の破片が36点ある。報告資料はないが、殆どが床面からの出土である。接合例はない。

時期 7世紀前半

245号住居 (第137図)

位置 2 I・J-13・14グリット 主軸方位 N94°W 重複 3井戸→246→243、245住 規模 縦2.94+αm 横2.94m 西壁は第3次調査による本線敷用地内にあるが確認していない。形状 長方形 床面 243、246住と同じくFP土石流を掘り下げて茶褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

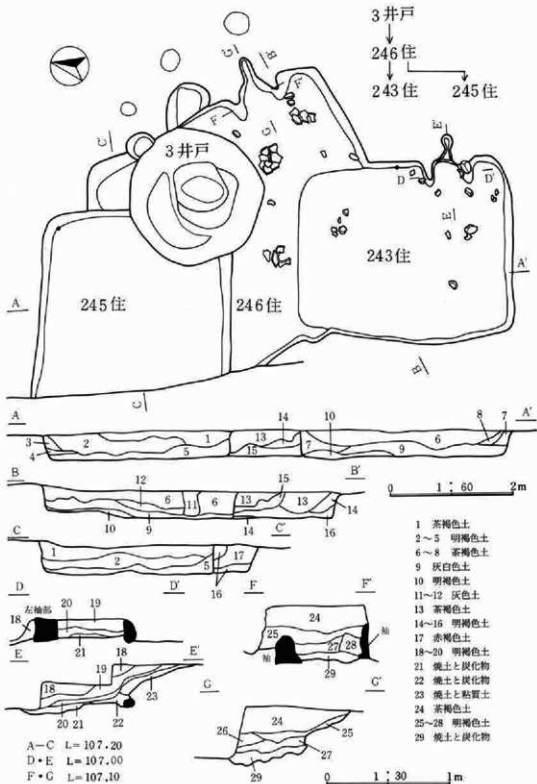
遺物 埋没土、床面上、ともに殆ど出土していない。

カマド 3井戸の重複で削平されてない。

時期 奈良時代 遺物はないが、243、246住の埋没土との差を認めたい。平面形状では縦に長く横長型の243、246住とは異なる。縦長の類例からすると8世紀後半と考えられる。

246号住居 (第137図、図版101-2)

位置 2 I・J-11~13グリット 主軸方位 N130°W 重複 3井戸→246→243、245住 規模 縦3.95m 横4.24m 形状 方形 床面 FP土石流を掘り下げて茶褐色土を平坦にしている。243、245



第137図 243号・245号・246号住居址遺構図

住と段差、明瞭なちがいはない。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし 西壁の中央に屈曲する箇所があり、東壁でも北東隅に別の遺構を暗示する箇所がある。床面や埋没土でのちがいが認められないことから、重複としても同一形状の中での建替えとしておきたい。

遺物出土状態 組成は長甕、丸胴甕、小型甕、杯がある。報告1と2の丸胴甕は、住居の中央部付近でつぶれた状態にある。3～6の甕類は、カマド崩落土に混在して焚口右側で出土した。3と4の長甕は袖材が焚口に鳥居状に横架したと考えられる。凹石は右袖口で出土している。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長190cm 焚口幅約50cm、壁外の煙道を含む。

構造 壁際に灰白色土を貼付して方台形の燃焼部を作る。床面からわずかに低く火床面を設け、壁外へは約12°の勾配でトンネル状の煙道部がのびる。煙道は上幅約15cmで、先端が直立する。壁際からの長さは中心部で約120cmを測る。

時期 7世紀第4四半紀

248号住居 (第138図、図版76-1、76-2)

位置 1H・I-25グリット 主軸方位 N75°W 重複 257→248住→39溝→206土坑 規模 縦3.96m 横3.16m **形状** 長方形 **床面** FP 土石流を掘り下げて平坦にし、東側は257住埋没土を踏みかためている。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 東壁と南壁中央に集中している。東壁はカマド内と壁際とに分けられるが、主に平瓦と20cm前後の大きさの角安石とからなりカマド用材と考えられる。南壁のものは、報告した4、5の皿のほかには接合できず未報告になったが羽釜がある。西壁際中央の角安石は、長さ25cm、上幅15cmの大きさで東壁のものと形状を異にし、単独での用途が考えられる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長120cm 焚口幅50cm 焚口から両壁に平瓦を用いている。

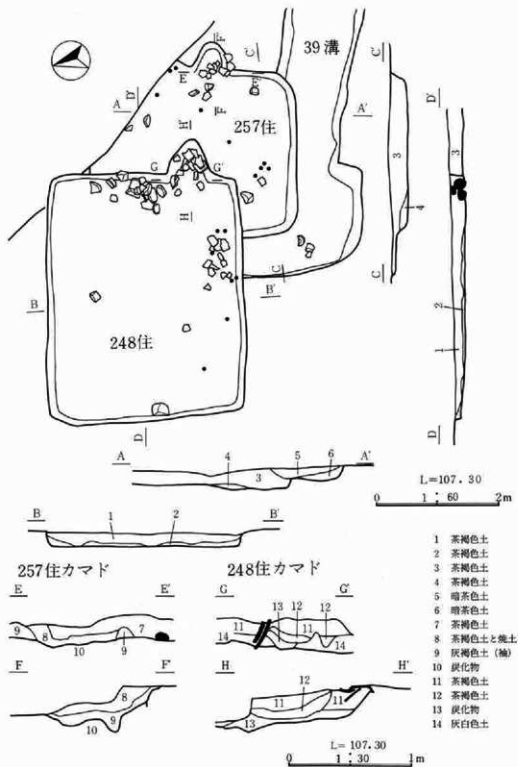
構造 両袖と壁体の内側には使用済みの平瓦4枚以上を転用して貼付している。燃焼部は方台形に作られ、さらに壁外に煙道部がつくと推定される。左脇の壁際に並らぶ角安石の具体的な用途は不明だが、平瓦と混在していることからカマド用材と考えられる。支脚は、内部から出土した唯一の土器、報告5の皿が考えられる。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

257号住居 (第138図、図版77-3)

位置 1H・I-25グリット 主軸方位 N74°W 重複 257→248住→39溝→206土坑 規模 縦2.64m 横3.28m 北東隅が調査区域外にある。**形状** 長方形 **床面** FP 土石流を掘り下げて、そのまま平坦にしている。248住と殆ど段差ない。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 焚口前でカマド内部から流出したものと、南西隅、北東隅に散在するものがある。焚口前は報告1の羽釜として接合されたが、ほかにも口縁部だけが4個体あり、壁体の補強材と混在している。同様な用途であろう須恵器甕の胴部破片は、8・9住掘り方出土中に同一個体があり、住居構築に際して転用されたものであろう。報告2の高台椀は、焚口前から出土したもので内面にうすくウルシが付着している。その様子からは、貯蔵容器ではなく作業用の取り皿の用途が考えられる。



第138図 248号・257号住居址遺構図

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長90cm 焚口幅約40cm

遺存状態 掘り方を残して天井部、袖は崩落流出している。袖には角安石を貼付、壁には羽釜等で補強したと考えられる。

時期 平安時代 10世紀第2四半紀

249号住居（位置は全体図に示す）

位置 1H・I-17~19グリッド **主軸方位** N84°W **重複** 256→249→250住 **規模** 縦2.20+αm 横4.50m 東側は調査区域外にある。**形状** 長方形と推定される。床面 FP土石流を掘り下げて平坦にする。埋没土はFP土石流を供給源とする褐色土で炭粒や灰を含む。特に壁際の三角堆土中に径5~10mm大の軽石が多く含まれている。**貯蔵穴、柱穴、掘り方** なし

遺物 須恵器壺、杯、碗、蓋、灰釉碗の破片が約80点ある。壺を除いては磨滅したものが多く、混入と考えられる。羽釜の個体はない。

時期 平安時代 9世紀末~10世紀

250号住居（第139図、図版76-3）

位置 1I・J-17~19グリッド **主軸方位** N63°W **重複** 256→249→250住 **規模** 縦3.42m 横2.88m **形状** 長方形 北西隅に間口50cm、奥行40cmの張出部をもつ。南壁の東南隅と中央部に半円状の土坑が2基重複するが張出部か否か、前後関係については明らかにできなかった。**床面** FP土石流を掘りこんで灰褐色土を厚さ約10cmにわたって貼床している。**貯蔵穴** 東南隅と右袖前に並列して2基の円形土坑がある。2基とも直径約30cmで、深さ20cmと24cmである。右袖前のは灰かき出し穴の可能性があり、東南隅を貯蔵穴と考える。**周溝、柱穴、掘り方** なし

遺物出土状態 カマド内外と北壁際にある位で住居中央からは殆どない。羽釜、高台碗、碗、杯、皿、灰釉皿、緑釉段皿、磁石、釘がある。緑釉段皿は埋没土の1層中において流れこみと考えられるが、そのほかは遺存状態も良好で当時の組成である。南壁西寄りの床面には、角安石の割石4点を組み合わせたものがある。平坦面を意識していることから、何かの基礎か台の可能性もある。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長120cm 焚口幅約60cm

構造 掘り方は間口、奥行きともに約1mの方形、その中央部に間口、奥行き約25cmの煙道部がついている。壁体は白桃色粘質土を厚く貼付し、焚口部に角安石の転石を組んでいる。火床面中央には角安石の支脚があり、前後には焼土、炭、灰が厚く残る。支脚の高さは約16cmで、灰等の厚さはこの高さに相当する。支脚脇で報告3の碗が出土した。羽釜等の出土はないが自然崩落したものと考えられる。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

251号住居（第140図）

位置 1H・I-13・14グリッド **主軸方位** N65°W **重複** 259→251住 **規模** 縦1.40+αm 横2.47+αm 南西隅が確認されただけで東側は調査区域外にある。**形状** 方形か **床面** FP土石流を

掘り下げて平坦にする。南壁際を除いて床下土坑に対する貼床である。貯蔵穴 不明 周溝、柱穴 なし 掘り方 カマド北側に不整形の土坑があく。

遺物出土状態 カマド内外から羽釜、皿、須恵器製の破片が約60点ある。

カマド 位置 南西隅 規模 全長60cm 焚口幅40cm

遺存状態 天井部と袖は流出している。袖は削り出しの地山に痕跡を残す。焚口部にある扁平な丸い河原石には片面にスガが付着し、支脚の可能性がある。焼土は石よりも奥にうすく残る。報告した羽釜と皿は、この中から出土している。

時期 平安時代 11世紀前半

252号住居 (第141図)

位置 1H・I-15・16グリット 主軸方位 N68°W 重複 252→256→249→250住→1溝 規模 縦1.20±0.01m 横3.70m 東側は調査区域外にある。形状 方形か 床面 FP土石流を掘り下げて平坦にする。中央部で角安石を混在して炭化物がまばらにある。周溝、柱穴、貯蔵穴 不明

遺物出土状態 中央部での角安石はカマド用材と考えられる。杯、蓋、短頸壺の破片が46点ある。

カマド 南西隅にある。壁外に30cm掘りこみ、わずかに焼土と炭粒が見られただけの使用痕にとぼしいものである。

時期 平安時代

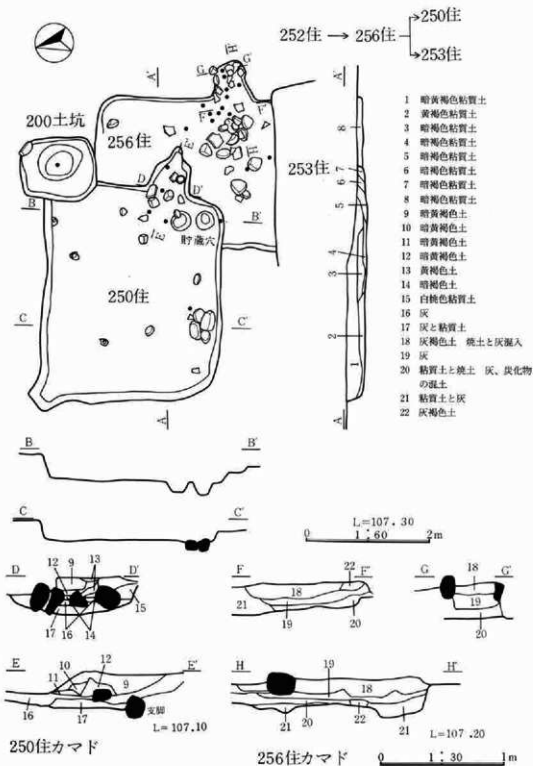
253号住居 (第141図、図版77-1、77-2)

位置 1I・J-15・16グリット 主軸方位 N73°W 重複 252→256→250→253住→38溝 規模 縦3.36m 横3.02m 形状 長方形 西壁に間口104cm、奥行52cmの張出部がつく。南壁の貯蔵穴も半分が壁外にある。床面 FP土石流を掘り下げて平坦にしている。全体に均質でかたくしまっている。張出部は内部と同一の床面で埋没土でもちがいはない。貯蔵穴 南壁カマド寄りにある。半分が壁外にかかる。上面径は42×62cmの楕円形、深さ18cmの椀底状で南勾配の底面の様子からすると袋状になって天井部のあった可能性がある。周溝、柱穴 なし 掘り方 床下に約10cm掘り下げて灰褐色と白桃色の粘質土、灰色砂質土の混土がある。

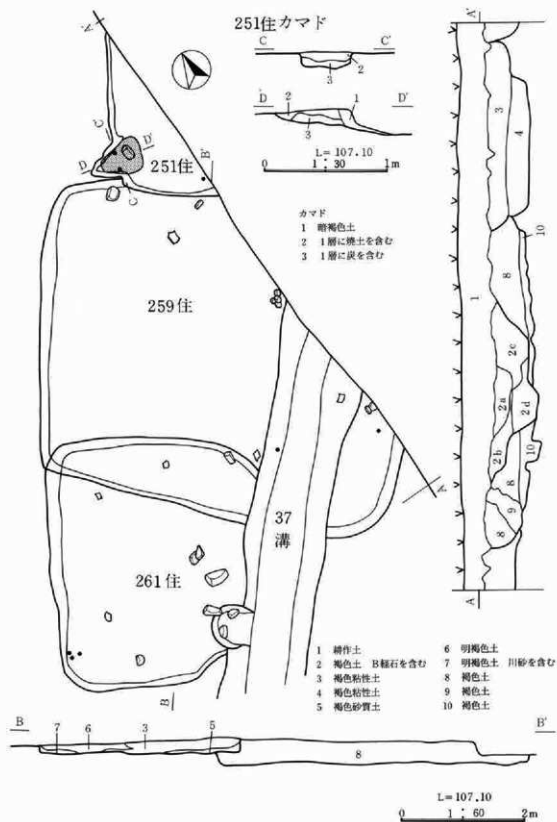
遺物出土状態 カマドの崩落土に混在して焚口付近に集中が見られるほかは、少量の破片が散在する。報告1～3の土釜と羽釜は、この崩落土にあったが2と3がカマドにかけられたもので組合せて使用されたと考えられる。5と6の杯は、掘り方の出土でもあり256住からの混入と考えられる。西壁寄りの床面中央には長さ52cm、幅24cmの平坦面をもつ安山岩質の石がすえられていた。使用痕の観察をしていないが、その形状と大きさから作業台と考えられる。

カマド 位置 東南隅 規模 全長95cm 焚口幅約40cm 煙道が灰分布からするとさらに壁外に続く。

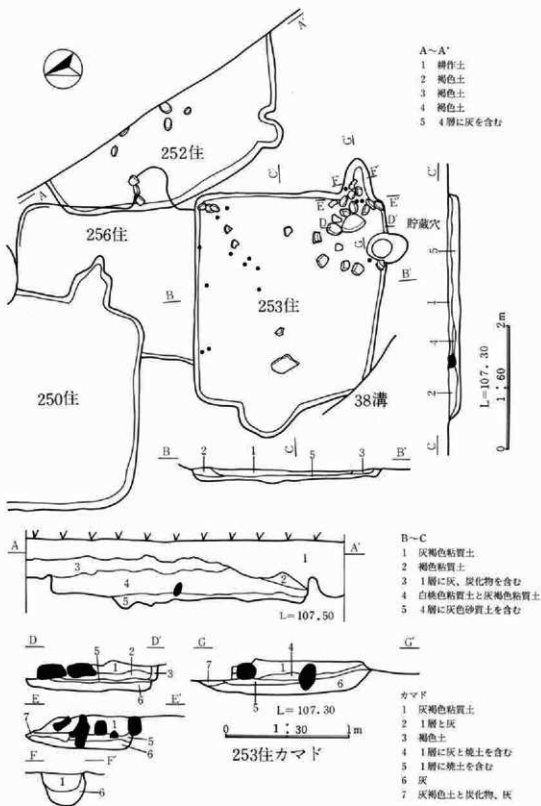
構造 壁際に左右2対の角安石を袖石としてたて、大ぶりの角安石を横架して焚口とする。角安石の支脚は壁を結んだ線上にあり高さ18cmを測る。左右の壁体は角安石を芯材にしている。煙道は約5°の勾配で壁外にのびる。舟底状の掘り方をもち、灰褐色土と白桃色粘質土の



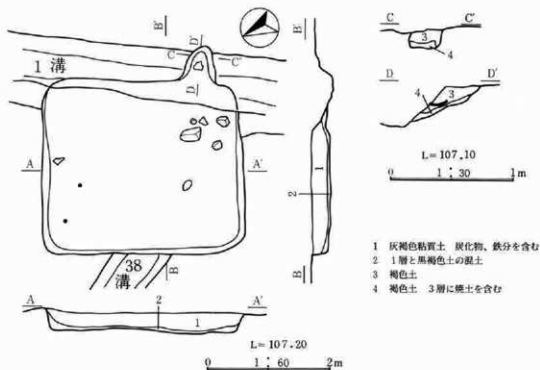
第139図 250号・256号住居址遺構図



第140図 251号・259号・261号住居址遺構図



第141図 252号・253号住居址遺構図



第142図 254号住居址遺構図

混土を充填し、角安石を固定している。灰層が全体に残り、住居内にむかって崩落している。

時期 平安時代 11世紀第2四半紀

254号住居 (第142図)

位置 1 I・J-13~15グリッド 軸方位 N66°W 重複 38溝→254住→1溝 規模 縦2.73m 横3.20m 東壁は1溝の重複で推定要素が高い。形状 長方形 床面 FP 土石流を掘り下げた上に白褐色粘質土と黒褐色土の混土を厚さ約10cmで貼床する。ほぼ平坦でかたくしまる。貯蔵穴 不明 周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 1溝側に長壺、杯、碗、須恵器壺の破片があり、焚口付近出土の羽釜と土釜を報告する。平瓦は、カマド用材の一部と推定される。焚口付近は崩落した角安石5点が散在し、中には長さが32cm、幅22cm、厚さ15cmに面取りした切石も含んでいる。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 長さ70cm以上 幅不明 焚口付近を1溝が切る。

時期 平安時代 11世紀

255号住居 (位置は全体図に示す)

位置 1 H・I-19・20グリッド 調査区際で南西隅が確認された。軸方位 N80°W前後 重複 255住→198土坑 規模 縦0.96+αm 横2.26+αm 形状 長方形か 床面 FP 土石流を掘り下げた直上に白褐色粘質土と褐色土の混土をうすく貼床する。貯蔵穴、周溝、柱穴、カマド 不明 遺物出土状態 杯、碗、皿の破片18点がある。いずれも接合せず磨滅した小片で流れこみの可能性も

ある。確認した北隅で長さ約25cmの角安石の転石が壁際にある。

時期 平安時代 直接の時期決定資料はないが10世紀後半以降と考えられる。

256号住居 (第139図)

位置 1 I・J-16・17グリット 主軸方位 N72°W 重複 252→256→250→253住 規模 縦2.42 m 横2.83m 南壁と西壁の殆どは250住、253住の重複のために推定する。形状 長方形 床面 FP 土石流を掘り下げた直上に暗褐色土をうすく貼床する。貯蔵穴 不明 253住重複部分の東南隅に可能性がある。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマドの崩落土と混在して焚口前一带まで帯状に集中する。混在の角安石は焚口構造材と壁体の一部であるが土器と一括して、カマド用のものである。これらを除くと住居内にはわずかに甕や杯の破片が散在するだけである。報告1～8は全てカマド内外の一括であるが、1と2がカマド内にかげられ、5は壁体である。これら壁に混在して未報告の須恵器甕の胴部破片が約30点ある。現存のものでは殆ど接合せず、煙道寄りに折り重なる様に集中することから壁体の補強材と考えたい。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長80cm 焚口幅約40cm 煙道は削平されている。

構造 角安石の転石を用いた石組みカマド。全体が壁外にあり、壁際から左右対に石を貼付して燃焼部と焚口を作る。一部の石は面取りしてある。さらに破損した甕等が補強用に貼付されている。右壁の石の残り方や住居内への分布の様子からすると、故意に破壊したものと考えられる。

時期 平安時代 9世紀第4四半紀

258号住居 (位置は全体図に示す、図版78-1)

位置 1 I・J-11・12グリット 主軸方位 N60°W 重複 261→259→258住→37溝 規模 縦2.42+αm 横3.18m 東壁は37溝重複で切られ、プラン全体は261住内にある。形状 長方形 床面 FP 土石流の上層まで掘り下げて褐色砂質土を平坦にする。埋没土は基本的に軽石を含む褐色土の単一層だが、南半部上層では南西からの流入方向をもつ川砂と炭を含むレンズ堆積が見られる。重複する261住壁体の崩落流入土とも考えられる。貯蔵穴、カマド 不明 周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 甕、杯、椀、須恵器甕、磁石、角安石の台石がある。破片数は約200点あるが、中には鬼高式後半の甕、杯、高杯が約30点含まれている。報告1の椀は南西隅で出土した。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

259号住居 (第140図、図版78-2)

位置 1 H~J-11~13グリット 主軸方位 N54°W 重複 202土坑→261→259→258住→37溝 規模 縦5.92m 横4.96m 北東側は調査区域外である。形状 長方形 床面 FP 土石流中位まで掘り下げた直上に褐色砂質土を貼付する。全体に均質で中央部にかたさが見られた。貯蔵穴、カマド 不明 周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 長甕、杯、須恵器甕等の破片が約500点ある。この殆どは3~5cm角の接合できない小片である。個体は杯と椀類に主体がある。土器の組成は不揃いで、カマドが未調査部分に推定される

とはいえ、接合例の少なさからしても持ち出されたものと考えられる。一方の磁石や多孔石は、壁際で出土し使用位置を示している。報告6と7の白玉と滑石製の有孔円板は重複する202土坑の杯に入った供献品があり、埋没時の混入と考えられる。

時期 7世紀第3四半紀

260号住居（位置は全体図に示す）

位置 1H・I-8～10グリット 西壁側だけを確認した。主軸方位 N70°W 重複 260住→40溝
規模 縦2.10+ α m 横3.36m 東側は調査区域外である。形状 方形か 床面 FP土石流上層まで掘り下げて褐色土をうすく貼る。貯蔵穴、カマド、柱穴 不明 周溝、掘り方 なし

遺物 杯、碗、須恵器甕の破片が約80点ある。いずれも小片で接合例は殆どない。

時期 平安時代

261号住居（第140図，図版78-2）

位置 1I~K-11・12グリット 主軸方位 N75°W 重複 261→259→258住→37溝 規模 縦3.38+ α m 横3.42+ α m 北壁は259住重複で、東壁は37溝の重複で削平される。形状 長方形 床面 FP土石流を掘り下げて褐色砂質土をうすくはる。直上に258住が重複するために荒れている。貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 南壁寄りから報告の杯と長甕破片少量が出土している。

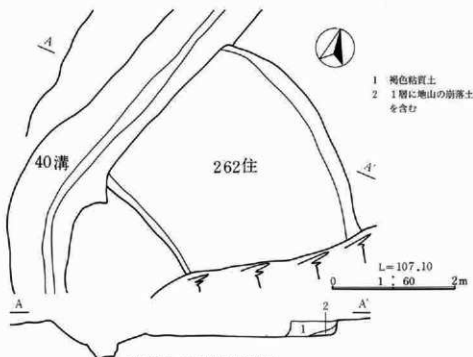
カマド 位置 東壁南寄りで37溝に上面を削平され、掘り方状態で確認された。規模 全長60cm以上 焚口幅約30cm 煙道は削平されている。掘り方は楕円形、両袖口に角安石の転石を対でたてている。袖石の周囲にわずかに炭化物が残る。

時期 7世紀後半



1区全景

1区全景（東側道）



第143図 262号住居址遺構図

262号住居 (第143図, 図版78-3)

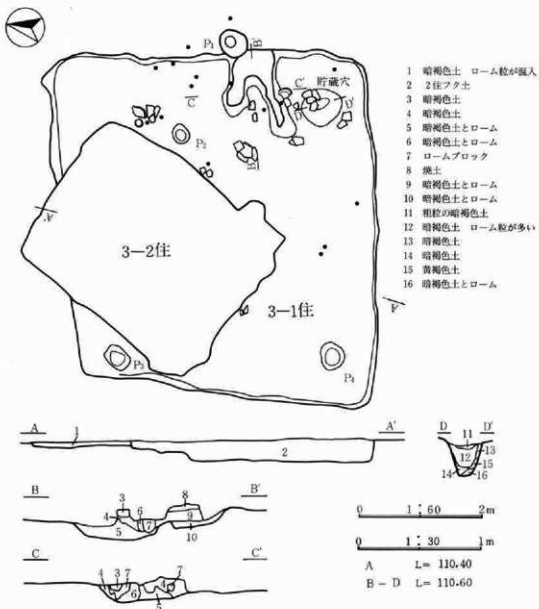
位置 1 I~J-6・7グリット 調査区域最南端の住居である。**主軸方位** N55°W **重複** 262住→40溝 **確認状況** 中世の40溝を調査中、南壁にわずかな落ちこみがみられたので拡張しプランを確定する。調査区の40溝以南は、旧地形でも南の井野川にむかって上り勾配になることから、耕作とその後の新幹線建設工事による攪乱が激しく、住居としても上面の殆どを削平されていた。遺物はもちろん、焼土、炭化物も埋設土中に少なく、住居として要素にとぼしい。規模 縦3.50+αm 横3.10m 東西両端は40溝で切られ、一方は攪乱されている。**形状** 不整長方形 北壁が弧状になる。床面 FP土 石流をわずかに掘り下げ褐色粘質土を平坦にする。全体に荒れているが、南への下り勾配、一部に段差をもつことがわかる。**周溝、柱穴** なし

遺物 杯、碗の小片が少量ある。埋設土への混入の可能性がある。

時期 平安時代 掘り方、床の性状から判断する。

3区1号住居 (第144図, 図版79-1、79-2、84-3)

位置 3 K~M-29~31グリット **主軸方位** N99°W **重複** 3区6→1→2住 **規模** 縦5.52m 横5.05m 北西隅は6住との重複で推定する。**形状** 方形 床面 ローム層を掘り下げて踏みしめているが凹凸が激しく、ロームブロックがゴロゴロしている状態である。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面は56×66cmの円形、断面方台形で深さ58cmを測る。**周溝** なし **柱穴** 4本あるが規模、配置の点で不揃いである。上面径と深さは P₁が38×44、5cm、P₂が33×28、30cm、P₃が40×36、50cm、P₄が42×40、10cmである。このうちP₂とP₄が主柱穴の可能性があり、P₃は6住入口施設と考えられる。

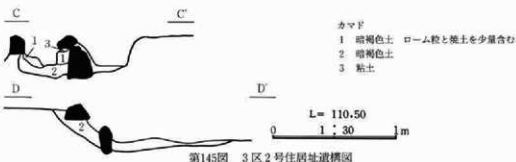
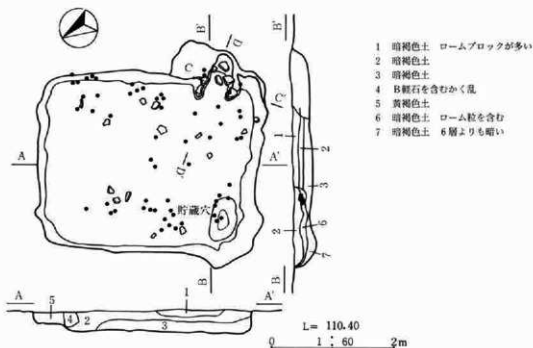


第144図 3区1号住居址遺構図

遺物出土状態 カマド周辺から中央部にかけて集中する。カマド周囲からは報告2の甕、1の甔、6の甔、7と8の杯がある。甕や甔はカマドの崩落に伴い流出したと考えられるが、甕は上胴部だけしかないことからカマド脇での甕の置き台とも考えられる。6の甔は口径21.5cmという超大型で、貯蔵穴左脇で正位に置かれていた。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長約140cm 焚口幅約40cm 壁から約80cm内側に火床面の中心部がある。上面を攪乱されているために、粘土と焼土の塊状で遺存状態は非常に悪い。

時期 古墳時代後期 6世紀



第145図 3区2号住居址遺構図

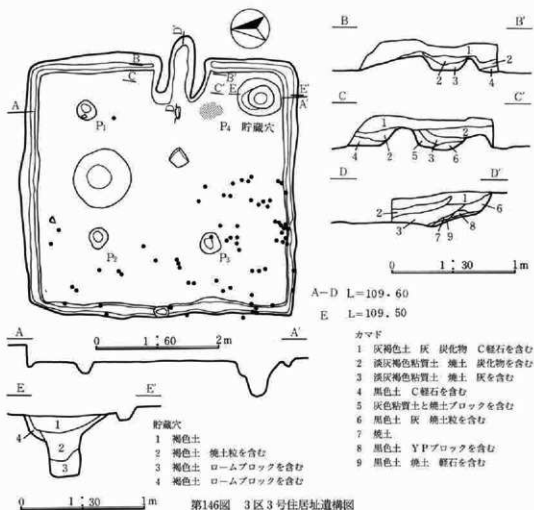
3区2号住居 (第145図, 図版79-1、79-3、80-1、84-3)

位置 3 K~M-30・31グリッド **主軸方位** N56°W **重複** 3区6→1→2住 **規模** 縦2.60m 横3.20m **形状** 長方形 **床面** YP上層まで掘り下げて、ロームブロックと黒色土の混土を平坦にしている。**貯蔵穴** 南西隅にある。上面で65×40cmの長方形、深さ20cmを測る。南西隅の壁面が約40°の勾配になり約20cm張出している。**周溝、柱穴** なし

遺物出土状態 北西隅を除いて全体に散在する。報告1~5の碗類はカマド周囲から出土したが、3と5は古い1号カマド内からである。壺類は2号カマドに口縁部を残すだけで殆どなく、組成の中では欠落している。未報告だが東壁際中央で鉄滓2点がある。6、7は1号カマドの石組み材である。

カマド **位置** 東南隅に新旧2基がある。1号が古い。**規模** 1号全長70cm 焚口幅35cm 2号全長約60cm 焚口幅約35cm 2基とも同様な規模である。

構造 2号 角安石の転石を用いた石組みカマド。両壁は、焚口に長さ20cmをこす角柱状のものをすえ、壁までの間を長さ15cm前後のものを小口積みにする。良好な右壁で3段分、高



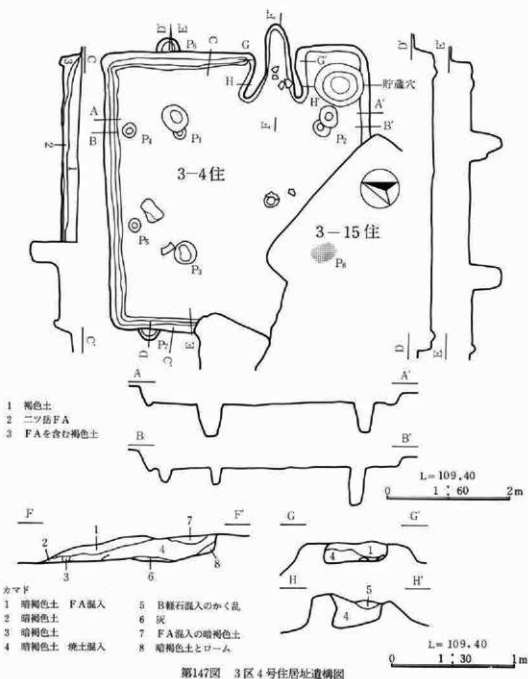
さ約30cmである。石のすき間は粘土が充填され、全体を暗褐色土が覆う。焚口と煙道基部には、袖石程のものが横架されている。燃焼部は焚口よりも広い室状になる。支脚は唯一の安山岩をすえている。高さ18cmを測り、煙道基部の横架石とは10cm弱のすき間である。煙道は、約30°の勾配で壁外にのびる。

1号、2号同様、角安石を主とした石組みカマドであるが、2号への改築で大半が転用されたらしく掘り方の痕跡だけである。

時期 平安時代 10世紀

3区3号住居 (第146図, 図版84-3、94-1)

位置 3J・K-33・34~4J・K-1グリッド 全体が4区28住内にある。主軸方位 N88°W 重複 4区28-3区3住 規模 縦4.02m 横4.36m 形状 方形 床面 YP上層まで掘り下げてロームブロックと黒色土の混土を平坦にする。貯蔵穴 東南隅にある。上面は60×70cmの円形、断面碗底状で深さ約50cmである。周溝 全周する。基底幅で8cm前後、深さ5cm前後である。柱穴 対角



線上にP₁~P₃の主柱穴3本がある。上面径と深さは、P₁が直径30、18cm、P₂が直径約30、40cm、P₃が直径30、45cmである。柱間はP₁とP₂が205cm、P₂とP₃が180cmである。南東隅は不明である。

遺物出土状態 南北二分して調査が実施されたため、取上げ基準が異なり分布上のちがいを見せているが住居本来のものではない。破片は約500点あり、弥生土器100点を除くと長壺、杯、高杯がある。殆どが接合例のない小片である。焚口の正面の平らな石は安山岩系のもので作業台と考えられる。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長110cm 焚口幅45cm

構造 壁際から長さ約70cmにわたって灰色粘質土を貼付して壁体を作る。壁際前後が火床の中心で床から少しくぼむ。煙道へは約15°勾配で鋭き先端が煙突状になると考えられる。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

3区4号住居(第147図, 図版80-2、80-3、84-3)

位置 3J・K-28・29グリット **主軸方位** N107°W **重複** 206→3区4住→3区3溝→3区15住
規模 縦4.43m 横4.22m 南西隅は3区3溝、15住さらに古い土坑状のものが重複し削平されている。**形状** 方形 **床面** YP層上面まで掘り下げた上にロームと褐色土の混土をうすく貼る。埋没土2層が二ツ岳FAである。床面上にうすい間層を1枚もつ。**貯蔵穴** 東南隅にある。直径約70cmの円形、深さ53cmである。**周溝** 北と西壁にある。基底幅7~8cm、深さ5cm前後である。**柱穴** 対角線上にP₁~P₃の支柱穴3本がある。掘り方からは建替えが推定される。上面径と深さは、P₁が直径40、51cm、P₂が直径30、50cm P₃が直径35、52cmである。柱間は、P₁とP₂が240cm、P₁とP₃が210cmである。別に北壁寄りP₄、P₅がある。ともに直径約20cm、深さ20cm前後で、P₄はP₁とP₂に重複する深さ約20cmのものと南北線上に並らぶ。補助柱穴としておく。同様にP₆、P₇は壁にかかり、床面までの深さで外傾する。

遺物出土状態 FA下では住居中央から報告1の壺が床にすえられてあった。カマド内では壺の小破片がある。P₃の南で3区3住と同様な長さ40cmをこす平らな石がある。西側での調査所見では、FAの層中や上面で土器の破片があったとされている。同様な例は4区14住でも認められる。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長120cm 焚口幅約50cm 壁際付近が浅くくぼみ灰が残る。火床の中心と考えられる。煙道は奥壁の様子からすると直立する煙突状のものか。

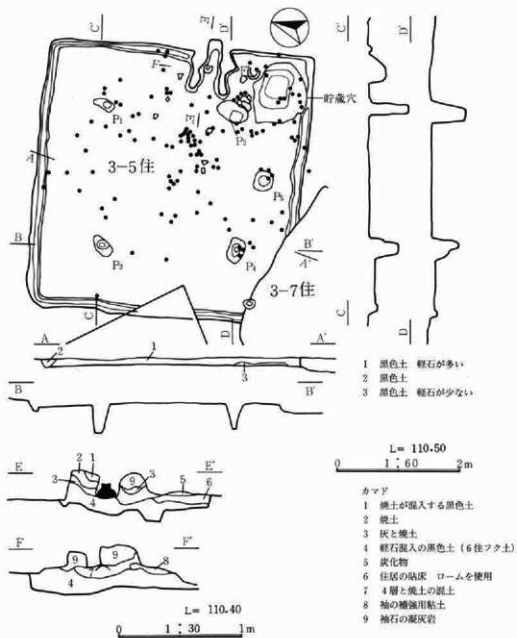
時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

3区5号住居(第148図, 図版81-1、81-2、84-3)

位置 3L・M-31~33グリット **主軸方位** N103°W **重複** 3区6→5→7住 **規模** 縦、横3.90m 南西隅は7住の重複で削平される。**形状** 方形 **床面** 西半分はローム層を、東は6住埋没土を掘り下げて平坦にしている。全体に均質でかたくしまる。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面は60×55cmの方形、断面方台形の深さ45cmを測る。埋没土上位に直径約25cmの白色粘土塊がある。**周溝** 東南隅が不明になるが全周する。基底幅で10cm前後、深さ6cm前後である。**柱穴** 対角線上に支柱穴P₁~P₄の4本と南壁中央寄りにP₅がある。P₁~P₄の上面径は18~22cmで深さが、P₁が35cm、P₂が58cm、P₃が46cm、P₄が40cmである。柱間は、P₁とP₂が210cm、P₃とP₄が215cm、P₁とP₃が220cm、P₂とP₄が215cmである。P₅は6住の南西支柱穴としたが、5住の棟持ち柱の可能性もあるので図示した。上面で32×28cm、深さ42cmで直立する。

遺物出土状態 カマド、貯蔵穴の周囲に集中する。カマドと貯蔵穴との間で報告1と2の壺と甔がたてかけた状態にあり、煮沸具の置き場である。高杯は支脚への転用品、3点の砥石からは鉄器の存在が暗示される。

カマド **位置** 東壁やや南寄り **規模** 全長90cm 焚口幅35cm



第148図 3区5号住居址遺構図

構造 焚口部に凝灰岩切石を鳥居状にたてる。壁体はC軽石を含む黒色土を馬蹄形にめぐらす。支脚の高杯は伏せて粘土で固定されている。火床からの高さは約10cmで筒状にうちかいている。脚の高さには炭化物、煙道に焼土まじりの灰が分布する。

時期 古墳時代後期 鬼高Ⅱ式 6世紀後半

3区6号住居(第149図, 図版84-3)

位置 3K~M-31~33グリッド **主軸方位** N14°E **重複** 3区2土坑→3区6→4区28→3区1→3区5→3区2、3区7住→1溝 **規模** 縦5.40m 横7.10m **形状** 隅丸長方形 **床面** ローム層上位まで掘り下げた上にロームブロックと黒色土の混土を貼床にする。**貯蔵穴** なし **周溝** 西壁から北壁に痕跡が残る。基底幅10cm前後で浅い。**柱穴** 対角線上に主柱穴 P_1 ~ P_4 の4本と南壁入口施設の P_5 ~ P_7 の3本がある。上面径と深さは、 P_1 が45×30、43cm P_2 が32×40、42cm、 P_3 が21×18、42cm、 P_4 が22×21、43cm、 P_5 が16×26、36cm、 P_6 が18×36、33cm、 P_7 が20×28、28cmを測る。柱間は、 P_1 と P_2 が130cm、 P_3 と P_4 が145cm、 P_1 と P_3 が220cm、 P_2 と P_4 が210cm、 P_5 と P_6 が40cmである。掘り方は、 P_1 ~ P_4 が円形、 P_5 と P_6 は長楕円形で、柱痕は10cm大と推定される。

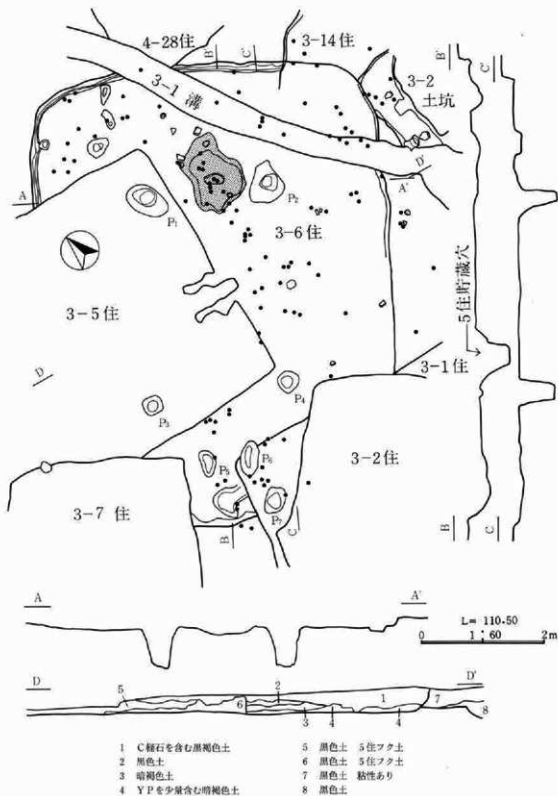
遺物出土状態 全体に散在するが、破片約400点のうち半数近くは5住を始めとする古墳時代後期以降のもので、記録時点も含めて混在が十分に考えられる。残る破片からは壺、甕、高杯の組成がわかるが、遺存状態は悪い。

炉 **位置** P_1 と P_2 の間にある。上面で80×120cmの楕円形でYP上面まで浅く掘りこんでいる。中央部に河原石の緑石を置いて南北に二分している。緑石の西脇にYPを掘りこんでロームを充填したピットがあく。底面に焼土が少量残る。

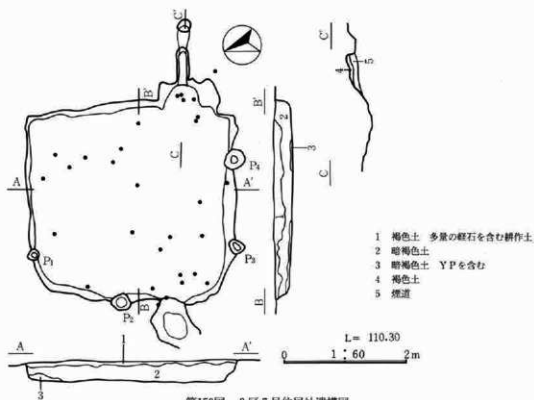
時期 弥生時代後期 樽式



第1次調査の3区1住~6住にかけての北からの全景



第149図 3区6号住居址遺構図



第150図 3区7号住居址遺構図

3区7号住居 (第150図、図版81-3、82-1、84-3)

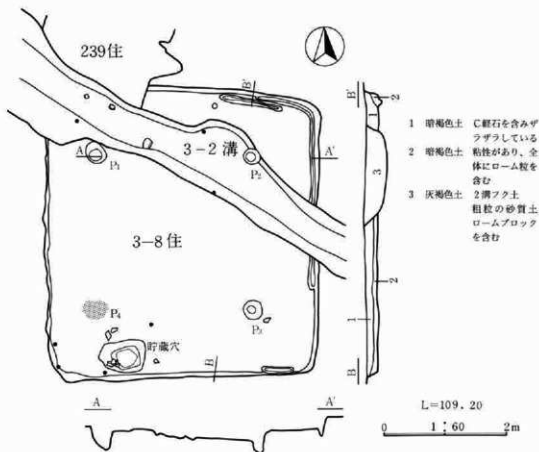
位置 3M・N-30~32グリッド **主軸方位** N74°W **重複** 3区6→5→7住 **規模** 縦2.90m 横3.05m **形状** 方形 **床面** ローム層をYP近くまで掘り下げた上に暗褐色土を貼床する。全体に均質で遺存状態は良好である。**周溝** なし **柱穴** 壁にかかってP₁~P₄の4本がある。P₁とP₃の位置、南壁の2本の様子から住居に伴うと考えられる。上面径は直径24~35cmで、床面からの深さはP₁が14cm、P₂が16cm、P₃とP₄は壁中段にかかり床面に達していない。柱間はP₁とP₃が325cm、P₃とP₄が140cmである。

遺物出土状態 全体に散在し、特定の傾向は見られない。

カマド **位置** 東壁南隅寄り **規模** 全長140cm 焚口幅約50cm

構造 全体が壁外にある。壁外に間口1m、奥行50cmの方形の掘り方をもち、その中央部に上幅約15cmの煙道が長さ90cm続き、先端が直立する。天井部や焚口は全て崩落しているが、掘り方の南寄りに対して袖石が残る。石は安山岩と角安石の割石で焚口だけの使用である。掘り方の南に寄せていることから作りかえが推定される。

時期 平安時代 9世紀末~10世紀初頭



第151図 3区8号住居址遺構図

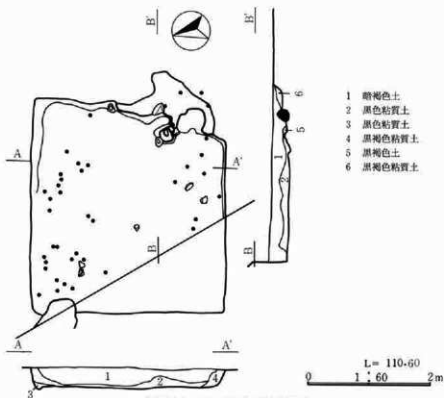
3区8号住居 (第151図, 図版82-2、82-3)

位置 3 I・J-22~24グリッド **主軸方位** N10°E **重複** 3区8→239住→3区2溝 **規模** 縦4.35m 横4.60m 北西隅は239住、2溝重複のために不明である。**形状** 方形 **床面** 褐色土とYPとの混土を踏みしめた状態である。**周溝** 北、東、南の各壁を断続的にめぐる。基底幅、深さともに10cm前後である。**貯蔵穴** 南西隅寄りにある。上面は70×50cmの長方形、深さ38cmである。縁辺が少し高く、上端は段差のあるひと回り大きい掘り方で、上蓋を推定させる。**柱穴** 対角線上にP₁~P₃の主柱穴3本がある。上面径と深さは、P₁が34×42、30cm、P₂が27×24、35cm、P₃が直径28、36cm、柱間がP₁とP₂250cm、P₂とP₃240cmである。南西隅は有無を断言できず、該期の例からすると4本主柱穴が一般的である。

遺物出土状態 貯蔵穴上面にS字口縁台付壺が目をはひく程度で壁際に破片が散在する。報告の刀子や釘らしいものは2溝か239住からの混入の可能性がある。

炉 掘り方をもったものは確認されていない。未報告だがA断面と南40cmに平行する断面図中には、ほぼ中央部に焼土塊があり、炉の痕跡とも考えられる。

時期 古墳時代前期 石田川式



第152図 3区9号住居址遺構図

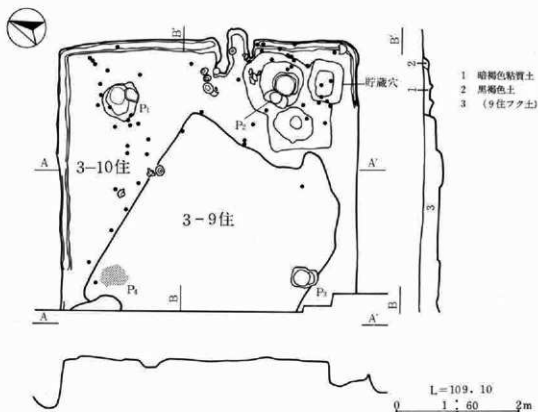
3区9号住居 (第152図, 図版83-1、83-2)

位置 3N・O-21~23グリッド **軸方位** N72°W **重複** 3区12→3区10→145→3区9住 **規模** 縦3.42m 横3.04m 南西隅は推定線で表現したが第1次と第4次調査の間で未確認となった。**形状** 長方形 **床面** 黒色粘質土、褐色土、ロームブロックの混土を貼床する。中央部はかたい。貯蔵穴、周溝、柱穴 なし

遺物出土状態 全体に散在するが、いずれも接合例の少ないものである。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 間口120cm、奥行70cmの範囲に粘質土が攪乱を受けた状態にある。壁際に砂岩切石を対で粘土で固定して焚口を作る。壁外半径45cmの範囲に少量の焼土と灰が分布し、中心部と推定された。中央部の右袖は崩落しているが、その両側には大きくロームを盛り上げて壁体の補強をしている。

時期 平安時代 11世紀前後、第1次の調査時に北西隅にカマドが重複していた。西側を対象とした第4次の調査では確認面のちがいがから未確認となっている。可能性としてロームに達する位の深さで9住よりも新しいと推定される。



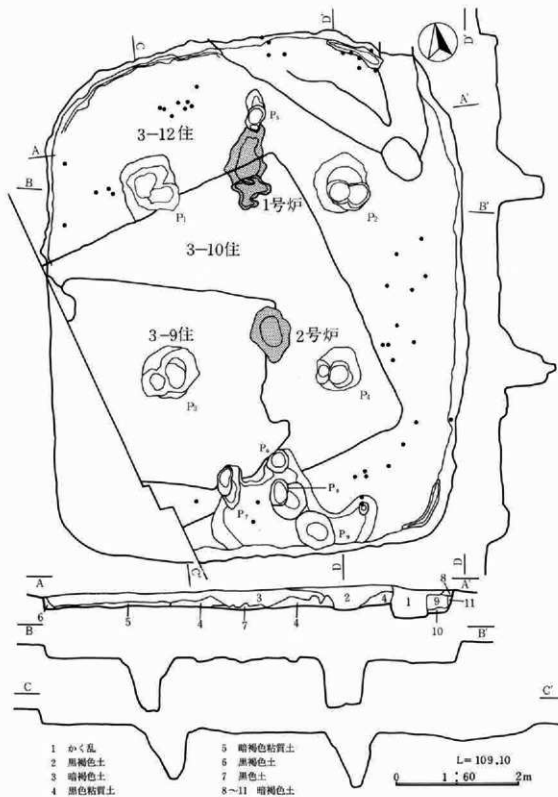
第153図 3区10号住居址遺構図

3区10号住居 (第153図, 図版83-1、83-3)

位置 3M-O-21~23グリッド **主軸方位** N108°W **重複** 3区12→3区10→145→3区9住
規模 縦4.27+αm 横4.78m 西壁は145住、9住の重複で削平される。**形状** 方形 **床面** カマドの周辺を除いて、重複と擾乱を受けたために状態が悪い。ローム粒を含む黒褐色土を平坦にする。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面で66×53cmの長方形、深さ約40cmを測る。東南隅で図示した3基のうち、カマド寄りものは12住の東南隅の柱穴で、西側のものは用途不明である。**周溝** 全周したと考えられる。基底幅、深さともに10cm前後である。**柱穴** 対角線上に主柱穴P₁~P₃の3本がある。北西隅は9住隅に推定されるが確定できない。P₁とP₃は2基重複し建替えと考える。上面径と深さは直径20~30cm前後で、深さがP₁65、P₂63、P₃65cmである。柱間はP₁とP₂が250cm、P₂とP₃が290cmである。**遺物出土状態** カマド周囲に完形に近いものがある。壺類を除くと、杯、椀、高杯に3個体前後があり、特徴を示す。壺類が少ないのはカマドが崩落していたことと関連するが、支脚には3の高杯が転用され、粘土で固定されていた。

カマド **位置** 東壁中央 **規模** 全長75cm 焚口幅約40cm 壁の線の上に高杯の支脚を残すが完全に崩落していた。乳灰色粘土を壁体とする。

時期 古墳時代中期 和泉式 5世紀後半



第154図 3区12号住居址遺構図

3区11号住居（本報告では欠番とする）

位置 3区8住と12住との間に推定される。平面形状を始めとして全ての記録が調査当時からのものと判断して欠番扱いとする。唯一、8住と3溝の全景写真中に3溝にかかる隅丸長方形らしい痕跡が見られた。12住の記録中には、その東壁に重複するとある。

3区12号住居（第154図、図版83-1）

位置 3L-O-21~24グリット 主軸方位 N 7 E 重複 3区12→3区10→145→3区9住 規模 縦6.40m 横8.0m 全体に重複が激しく南西隅は未確認である。形状 隅丸長方形 床面 YPを多量に含むロームを主体に黒色土と黒褐色土が多く混じる。全体に凹凸が激しく、かたくしまっている。貯蔵穴 不明 周溝 部分的に残る。柱穴 対角線上に主柱穴 P_1 ~ P_4 の4本と棟持ち柱穴 P_5 と P_6 、入口施設の P_7 ~ P_8 がある。 P_1 ~ P_6 は新旧2基が重複し、調査時の所見では P_1 ~ P_4 は規模の大小から細い方を補助としているが、 P_5 と P_6 にも重複のあることから建替えと考える。上面径と深さは、 P_1 が43×30、56cmと46×29、85cm、 P_2 が25×23、52cm、30×22、48cm、 P_3 が28×30、84cm、35×46、59cm、 P_4 が15×26、64cm、直径26、60cm、 P_5 が13×30、55cm、20×45、60cm、 P_6 が18×28、57cm、直径36、47cm、 P_7 が36×46、55cmである。柱間は主柱穴の東西方向が210と180cm、南北方向が190~210cmである。入口は約60cmである。

遺物出土状態 記録からは柱穴を除いて壁際や南壁入口の掘り方土坑に多いことが指摘できるが、床面差がなく3軒以上が重複することもあって混在が激しい。入口の掘り方からは報告1、4、6、7、11を始めとして多量の土器片が出土し、建替えに伴う埋納と考えられる。壺、甕といった大型個体という傾向が指摘できる。2点の凹石は砥石の用途を兼ねるが P_4 埋没土中から出土し、入口掘り方と同様に建替えに伴う道具類の廃棄と考えられる。以上からすると、建替え以前のものが主体で本来の組成を欠いていると考えられる。

炉 中央部と北柱間の2基ある。1号は45×60cmの楕円形で緑石をもつ。焼土塊、黒灰、炭化物を残す。2号は50×70cmの楕円形、緑石はなく粘土と焼土、灰がある。

時期 弥生時代後期 樽式

3区13号住居（本報告では欠番とする）

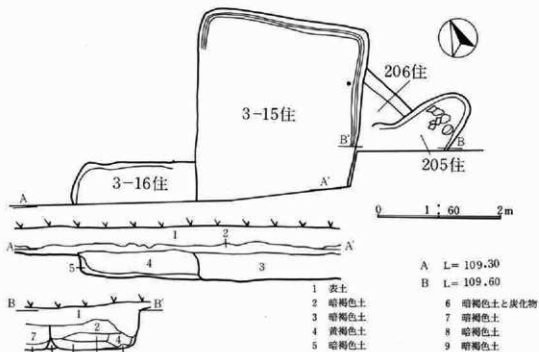
位置 3K-32・33グリット 3区6住北東と4区28住との間で約1.5m四方が確認されただけである。東側の第6次調査では続きの部分が確認できず、遺構の重複が激しい箇所でもあり住居か否か断定できなかった。重複 不整形、番号のない土坑→13住→14住、6住→4区28住→3区2溝

時期 弥生時代後期 樽式

3区14号住居（本報告では欠番とする）

位置 3K-33グリット 3区6住と4区28住との間で125×60cmの三角形に確認された。13住同様の経過で東側で確認されず、現状では溝状の遺構とした方が適当である。重複 14住→4区28住

時期、性格 不明



第155図 3区15号・3区16号・205号・206号住居址遺構図

3区15号住居 (第155図)

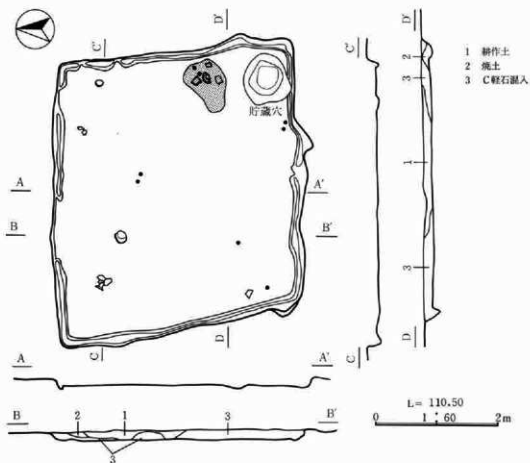
位置 3 J・K-27・28グリット **主軸方位** N58°W **重複** 206、3区4住→3区3溝→3区16→3区15住 **規模** 縦2.73m 横1.91+αm 南側は3区を横断する道路敷用地のために未調査である。
形状 長方形 **床面** C軽石を含む灰褐色粘質土を厚さ約10cmに貼床する。全体に均質である。貯蔵穴、カマド、柱穴 不明 **周溝** 全周すると考えられる。基底幅、深さ5～8cm前後で一定している。
時期 平安時代 遺物は破片のために判読できない墨書土器と鉄製U字形の鋤先が出土、9世紀か。

3区16号住居 (第155図)

位置 3 K・L-28グリット **主軸方位** N58°W **重複** 15住と同様 **規模** 縦1.86+αm 横0.62+αm 北西隅が確認されただけで殆どは3区を横断する道路敷用地内にあり、未調査である。**形状** 方形か **床面** 15住同様の褐色土を平坦にしている。主要な施設は確認されていない。
時期 平安時代 隣接する該期の住居に見られる主軸方位の類似から判断する。

3区17号住居 (位置は全体図に示す)

位置 3 M・N-29・30グリット **主軸方位** N73°W **重複** 3区3溝→17住→2溝 **規模** 縦1.50+αm 横1.05+αm 調査区の南西隅にかかり住居の北西隅付近だけが確認された。**形状** 不明 **床面** 凹凸があり荒れている。隅寄りの壁から30cmの位置で柱穴1本がある。上面は40×34cmの円形、深さ40cmでしっかりした掘り方である。
時期 平安時代 杯、碗の破片が少量出土している。



第156図 4区2号住居址遺構図

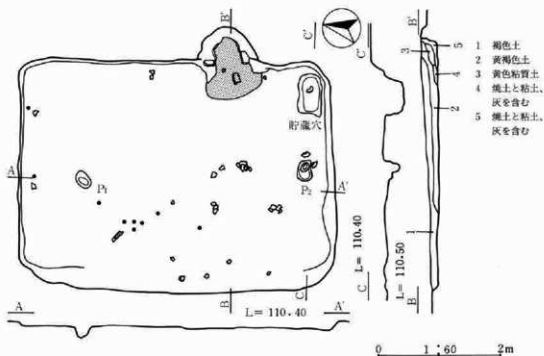
4区2号住居 (第156図, 図版85-1)

位置 4K・L-29~31グリッド **主軸方位** N92°W **重複** なし **規模** 縦4.48m 横3.96m **形状** 不整形 南西隅が鈍角になり南壁が短い。**床面** YP層上面まで掘り下げて黒色土とロームブロックの混土で貼床をする。焚口前が特にかたい。**貯蔵穴** 東南隅にある。直径約75cmの略円形、上面は二段の掘り方となり深さ65cmである。**周溝** 全周する。基底幅で8cm前後、深さ5cm前後、底面に凹痕が見られる。**柱穴** 床面までの調査では確認していない。

遺物出土状態 床面上10~15cmまで攪乱があり量は少ない。北西隅寄りで報告2と5の杯と高杯、北東隅で3の杯が点在する。カマド内には1の甕と6の高杯脚部がある。この2点は使用状態を示し、高杯は杯部を故意にかいて支脚に転用、表面にタール状の付着物がある。全体では約100点の破片があり、小型の器種が多く甕は少ない。紡錘車は南西隅から北東約1.1mの床上で出土している。報告以外には丸胴形で単孔の甕がある。

カマド **位置** 東壁中央、全体が攪乱をうけて焼土と粘土の分布がある。支脚の位置からすると全体が住居内にあると考えられる。

時期 古墳時代中期 和泉式 5世紀後半



第157図 4区3号住居址遺構図

4区3号住居 (第157図、図版85-2)

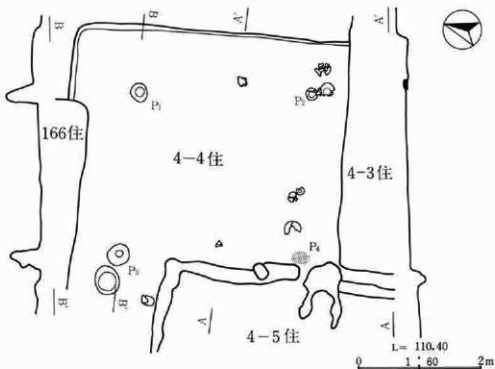
位置 4 L・M-28・29グリッド **主軸方位** N95°W **重複** 4区4-5-3住 **規模** 縦3.67m 横4.98m **形状** 長方形 **床面** ロームと褐色土の混土を貼床する。貯蔵穴 東南隅にある。上面で63×37cmの長方形、深さ40cmである。周溝 なし **柱穴** 中央長軸線上に主柱穴2本がある。上面と深さは、北が18×27、18cm、南が32×22、16cm、柱間355cmを測る。

遺物出土状態 全体に散在する。コノ字甕、杯、碗、内黒碗、蓋、灰釉碗、羽口破片の組成がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長90cm 焚口幅約42cm

構造 住居の壁際に地山を掘り残して凝灰岩の切石を貼付する。壁体は黄色粘土を馬蹄形にめぐらす。奥壁は直立に近く、壁際には灰と焼土の三角堆積が見られる。

時期 平安時代 9世紀第3四半紀



第158図 4区4号住居址遺構図

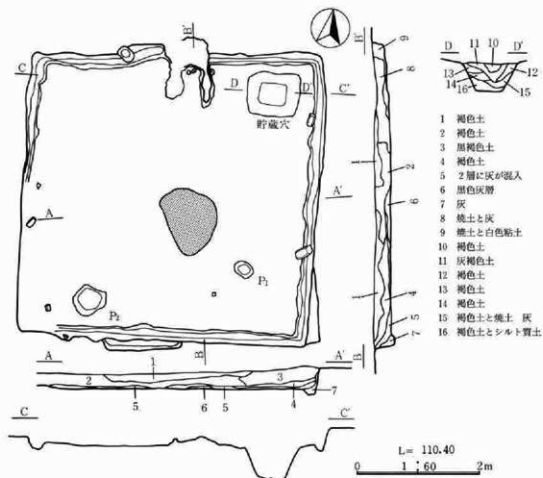
4区4号住居（第158図，図版85-3）

位置 4M-O-27~29グリッド **主軸方位** N100°W **重複** 4区4→166→4区5→4区3→167住 **規模** 縦4.43+αm 横4.50+αm 柱穴位置からすると方4.50mと推定される。**形状** 方形 **床面** ローム上層まで掘り下げて褐色土をうすく貼る。全体に均質である。**貯蔵穴、カマド** 不明 **周溝** なし **柱穴** ほぼ対角線上にP₁~P₃の3本がある。上面径と深さは、P₁が25×29、44cm、P₂が36×30、45cm、P₃が17×25、45cm、柱間はP₁とP₂が260cm、P₂とP₃が225cmである。全体に西寄りであるが主柱穴と判断し規模の復元資料ともした。

遺物出土状態 東壁側で報告の各個体がある。北東側の高杯3個体は、完形の2個体を床に伏せ、杯部だけのものを正位におく。同様にP₃寄りでは報告の甕が伏せられ、6と7の杯が正位で並列する。確定できないが、いずれも壁際からは離れた位置にあり、共通する「伏せた状態」から供膳の祭具と考えたい。報告以外には丸胴壺、椀、杯の破片が約50点あるだけで個体数も少ない。組成としても不揃いで、報告の個体は「選らばれた器」であろうか。北壁中央の板状の石は作業用の台石か。

カマド 東壁側に推定するが痕跡がない。

時期 古墳時代中期 和泉式 5世紀後半



第159図 4区5号住居址遺構図

4区5号住居 (第159図)

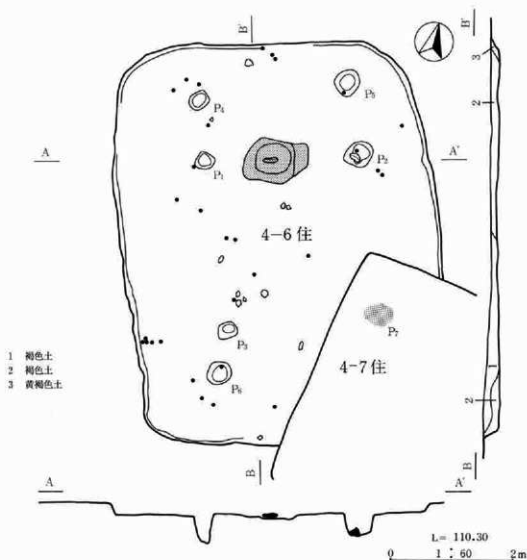
位置 4M-O-26~28グリット **主軸方位** N187°W **重複** 4区4→168→4区5→167、4区3
住 規模 縦4.60m 横4.78m 西壁に間口125cm、幅15cmの張出部がある。**形状** 方形 **床面** ローム層の上層まで掘り下げて褐色土を平坦にする。床上全体にわたって厚さ3cm前後の灰が分布し、その上面に焼土塊が点在する。**貯蔵穴** 北東隅にある。上面で85×68cmの長方形、深さ48cmを測る。**周溝** 全周する。基底幅5~12cm、深さ5cm前後である。**柱穴** P₁が対角線上の主柱穴である。上面35×27cm、深さ22cmを測る。南西のものは浅くて外にずれる。

遺物出土状態 全体に散在する。カマド周囲に多いが接合例のない破片である。東壁にある2点の石は、凝灰岩質砂岩の切石で熱を受けていた。壁にたてかけたもので、袖石の可能性がある。

カマド 位置 北壁中央 左側は2住南西隅がこわしていた。**規模** 全長約120cm 焚口幅40cm

遺存状態 左側が攪乱されている。壁体は白色粘土を馬蹄形にめぐらす。

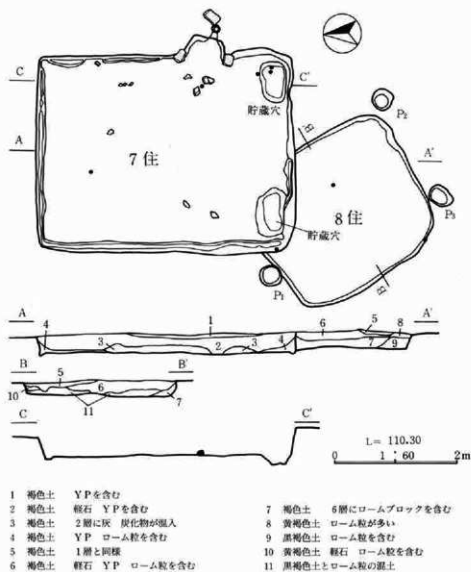
時期 古墳時代後期 鬼高II式 焼失住居と考えられる。6世紀後半



第160図 4区6号住居址遺構図

4区6号住居 (第160図, 図版84-1, 86-1)

位置 4L~N-23~26グリッド 主軸方位 N22°W 重複 4区6-8-7住 規模 縦5.12m 横6.34m 東南側は7住が重複するために推定する。形状 隅丸長方形 床面 ローム層の上面まで掘り下げた上にローム粒を多く含んだ褐色土を平坦にする。貯蔵穴、周溝 なし 柱穴 対角線上を基本として支柱穴P₁~P₃の組とP₄~P₆の組とがある。南東隅は7住床下にあるが掘り方の調査がないために記録がない。上面径と深さは、P₁が35×32、50cm、P₂が56×44、37cm、P₃が直径26、42cm、P₄が直径26、26cm、P₅が43×45、不明、P₆が38×32、28cmである。柱間は、P₁とP₂が250cm、P₁とP₃が280cm、P₄とP₅が240cm、P₄とP₆が430cmである。P₅内底面には、割った平坦面を上にした20cm大の石があり、内側に寄せつけていたが礎石か根固め石、いずれかの可能性がある。



第161図 4区7号・8号住居址遺構図

遺物出土状態 全体に散在するが壁沿いが比較的少ない。破片が主体で壺、台付壺、高杯がある。壺は底部が5個体以上あるが器形のわかるものは少ない。

炉 位置 P_1 と P_2 の間、中央北にある。上面で 77×72 cm、浅い皿状の断面で中央に方柱状の河原石をおく。石の北側が一段深く焼土の量が多い。

時期 弥生時代後期 樽式

4区7号住居(第161図、図版84-1、86-1、86-2)

位置 4L・M-22~24グリット **主軸方位** N83°W **重複** 4区6住→1方周墓→4区8→4区7住 **規模** 縦2.93m 横3.87m **形状** 長方形 **床面** ロームブロックを含む褐色土を平坦にする。焚口周辺は灰がうすく分布する。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面で 65×43 cmの不整長方形、深さ23cmである。南西隅は8住のものである。**周溝** 全周する。基底幅10cm前後、深さ6cm前後を測る。**柱穴** なし **遺物出土状態** 約200点の破片が全体に散在する。東壁側に羽釜の破片が多い。

カマド 位置 東壁南寄り **規模** 全長70cm 焚口幅60cm

構造 住居の壁際に凝灰岩の切石をたてて焚口を作る。壁体は白色粘土を主とした褐色土を馬蹄形にめぐらしている。焚口から約50cmの位置に直径15cmの煙出しの穴がある。穴に接して用途不明の凝灰岩切石1点がある。

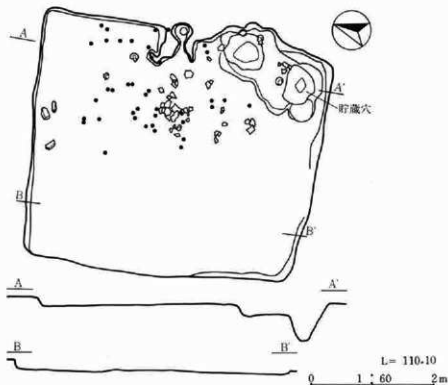
時期 平安時代 10世紀第3四半紀

4区8号住居(第161図、図版84-1、86-1)

位置 4L・M-22・23グリット **主軸方位** N113°W **重複** 4区6→8→7住 **規模** 縦2.35m 横2.59m 北東隅は7住の重複で推定する。 P_1 ~ P_3 を主柱穴とすると壁外にプランが拡大する。**形状** 隅丸方形 **床面** 黒色土にローム粒、YPを含む。不明瞭で軟弱である。**貯蔵穴** 7住南西隅にある土坑を相当させる。規模は上面で 72×46 cm、深さ60cmである。**周溝** なし **柱穴** 壁外に3本がある。上面径と深さは、 P_1 が直径34、40cm、 P_2 が 39×25 、42cm、 P_3 が直径32、32cm、柱間は P_1 と P_2 が300cm、 P_2 と P_3 が170cmである。

遺物出土状態 埋没土上部に破片数点ある。**カマド** なし

時期 平安時代



第162図 4区9号住居址遺構図

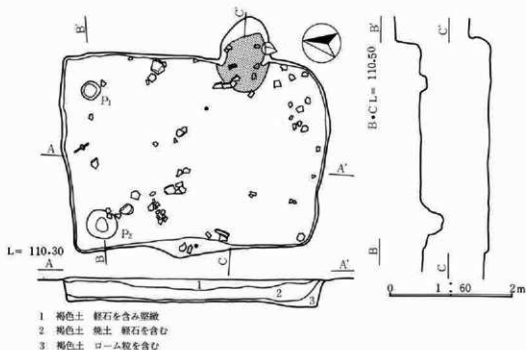
4区9号住居 (第162図, 図版86-3)

位置 4N・O-21~23グリッド **主軸方位** N99°W **重複** 171→4区9住→171土坑 **規模** 縦3.94m 横4.66m **形状** 長方形 **床面** YPの上層まで掘り下げてロームブロックと黒色土の混土を貼っている。南壁中央付近では約50×70cmの不整形の範囲に厚さ約2cmの白色粘土を貼ったのが見られたが用途は不明である。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面で55×50cmの不整形、深さ35cmである。西側に一段高い粘土帯がある。カマド脇のものは性格不明である。**周溝、柱穴** なし

遺物出土状態 調査が東西に分けられて第1次と第5次で実施されたので、取り上げが一律でなく東半分集中しているが、ほぼ全体に散在する傾向がある。分布は、壁際におかれたものとカマドから崩落したものとがある。東壁には報告3の甕、5の高杯、10の杯、北壁には12と14の敲石がある。焚口前には2の長甕がつぶれ、中央部南で1の甕が同様にある。4の高杯は支脚への転用であり、8の杯が脇にある。

カマド **位置** 東壁中央 **規模** 全長70cm 焚口幅35cm 全体に崩落し、煙道は耕作で攪乱されている。壁体は白色粘土を使用する。支脚は住居の壁を結んだ線上にあり、伏せた高杯を粘土で固定した上に杯をかぶせている。

時期 古墳時代後期 鬼高II式 6世紀後半



第163図 4区10号住居址遺構図

4区10号住居 (第163図, 図版84-2, 87-1, 87-2)

位置 4 L・M-19・20グリット **主軸方位** N95°W **重複** 4区14, 11→10住 **規模** 縦2.95m 横4.28m **形状** 長方形 **床面** 11住と14住との重複部分は各埋没土を平坦にしている。大半はローム層上層まで掘り下げて同様に踏みしめている。**貯蔵穴**、**周溝** なし **柱穴** 北壁隅寄りに2本ある。東は直径30cm、深さ14cm、西は46×48cm、深さ38cm、柱間210cmである。

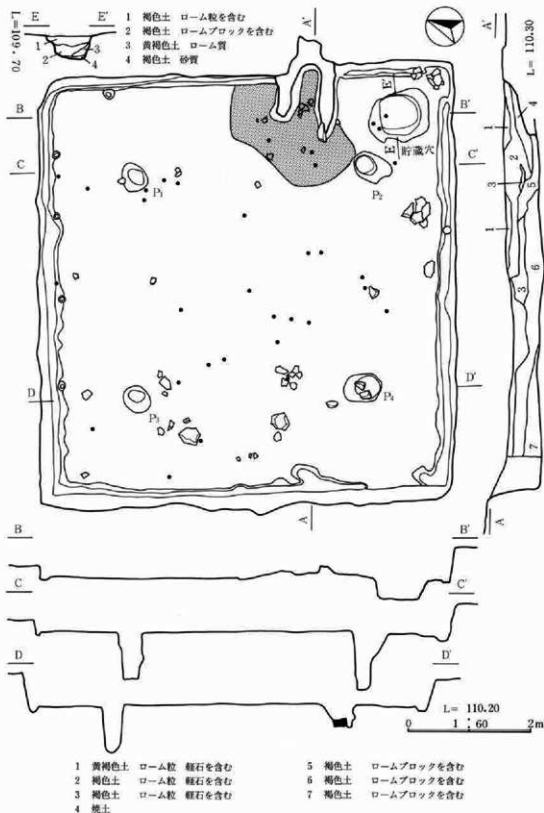
遺物出土状態 全体に散在する。焚口周辺で羽釜、北壁中央で鉄製紡錘車、西壁際中央で未報告の須恵器壺胴部の大形破片と携帯砥石が各々出土している。北西寄りの石は床にすえられ、東壁カマド北側のものは袖石の可能性がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長75cm 焚口幅55cm 壁体には粘土をめぐらし、焚口に凝灰岩質の砂岩を使用する。天井部等は完全に崩落流出し、焚口前にうすく灰が分布する。

時期 平安時代 11世紀第1四半紀

4区11号住居 (第164図, 図版84-2, 87-1, 87-3)

位置 4 L-O-17→19グリット **主軸方位** N107°W **重複** 4区14, 11→10住 **規模** 縦6.82m 横6.66m **形状** 方形 **床面** YP層上面まで掘り下げた上に黒色土とYP、シルト質の混土をうすく貼る。全体に均質でかたくしまる。**貯蔵穴** 東南隅にある。上端で80×95cmの方形、深さ約17cmである。**周溝** 全周する。基底幅10~20cm、深さ8~10cmである。**柱穴** 対角線上にP₁~P₄の主柱穴4本がある。上面径と深さは、P₁が30×27、74cm、P₂が37×28、90cm、P₃が30×27、78cm、P₄が29×40、38cm、柱間は南北方向が300cm、東西方向が280cmである。P₁は一段浅いが底面内側に焼けた凝灰岩が



第164図 4区11号住居址遺構図

あり根固めと考えられる。

遺物出土状態 全体に散在する中で壁際につぶれた状態のものと、焚口に崩落したものとがある。報告1と2の壺は東南隅とP₂寄りにあり、カマドから取りはずした状態と考えられる。高杯2点はカマドの支脚で原位置にある。3の丸底壺はカマドからの崩落で焚口に四散していた。椀2点は、2.55～3.15mの接合距離をもっている。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長170cm 焚口幅35cm 天井部は崩落していたが両袖や煙出しの穴が残る。**構造** 燃焼部全体は住居内にあり、粘土を使用している。焚口には凝灰岩質の砂岩を使用する。火床は約3°、奥壁は約70°の勾配をもち、壁から約20cmの位置に煙出し穴がある。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

4区12号住居 (第165図、図版88-1)

位置 4J~L-14~16グリッド **主軸方位** N12°W **重複** なし **規模** 縦5.70m 横7.30m **形状** 隅丸長方形 **床面** YP層まで掘り下げてYP、ロームブロック、暗褐色土の混土を平坦にする。全体に均質でかたい。**貯蔵穴、周溝** なし **柱穴** 対角線上の主柱穴P₁~P₄の4本組と長軸上の棟持ち柱穴P₅とP₆がある。上面径と深さは、P₁が42×47、60cm、P₂が30×28、51cm、P₃が37×23、44cm、P₄が37×28、60cm、P₅が35×48、65cm、P₆が46×48、16cmである。柱間は東西方向230cm、南北方向340cmである。P₂とP₄の調査所見では上段の大型円形の掘り方内に方形の柱痕らしいものとされている。上段の大型円形の掘り方は類例が4区6住、19住でもある。

遺物出土状態 全体に散在し破片のものが圧倒的に多い。破片数は約300点ある。報告の壺類はP₅北側に多いが、2は1号炉内から出土し、4はP₅周囲とP₆南脇のものが接合した。石器類はP₄から南西隅に集中していた。磨製石鏃はP₅の東南1.20mで単独に出土した。

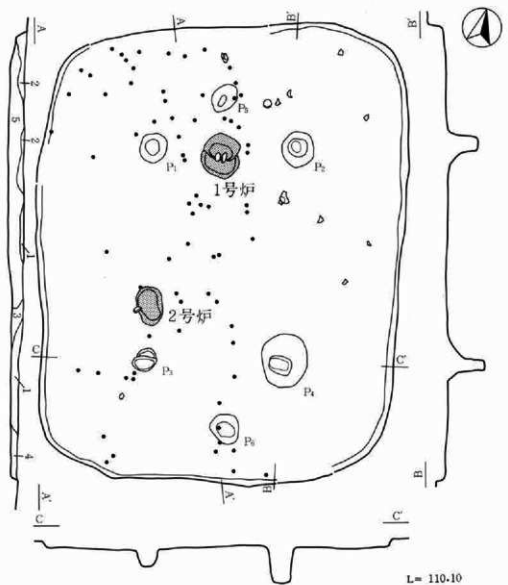
炉 P₁とP₂の間、P₄北側の2基がある。ともに地床炉で併存と考えられる。1号は重複した掘り方をもつが北側のもので上面が60×48cm、浅い皿状で南側に2本の河原石を平行しておき、焼土とともに壺上半部がつぶれて出土した。2号は41×62cm、西側の縁石を境にして南北二分される様でもあるが確定できない。

時期 弥生時代後期 樽式

4区13号住居

位置 調査時の所見では、14住埋没土下位にある二ツ岳FA上面に貼床状の部分が認められ、うすい炭化物と土器破片の分布が見られたことから住居の番号をつけている。その後の周辺遺跡の調査では、北にある群馬町井出村東遺跡(同遺跡調査会 1983)から、FA上面から土器破片の出土した住居が5例(17、19、27、121、135)報告されており、特に性格を明示していないがFA降下直後の自然流入と考え、同一住居として資料化している。本例も同様と判断し、資料の記録上、番号を変更せずそのままし本報告からは欠番扱いとした。

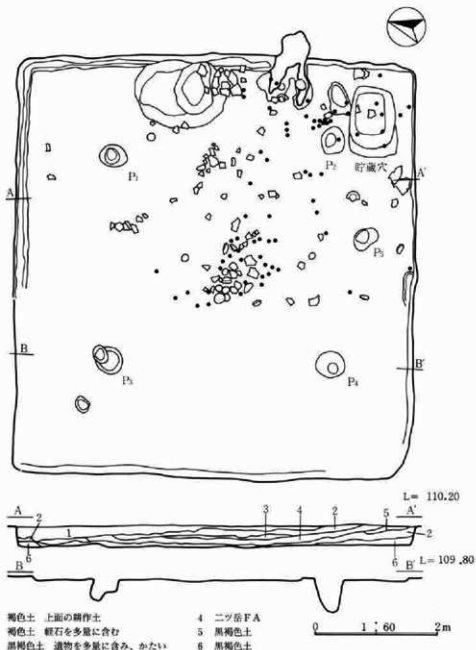
遺物 表土からの遺物を含むために羽釜1点と弥生時代後期の壺、台付壺、高杯約60点が混在して、



- 1 灰褐色土 B粒石が混入、砂質で全体に黒色を呈す
- 2 1層に黄褐色土のブロックが混入、上面の耕作土か
- 3 黄褐色土 2層に近いがロームが多い
- 4 褐色土
- 5 3層にYP、粒石が混入

第165図 4区12号住居址遺構図

鬼高I式の長胴壺、小型壺、丸胴壺、高杯、杯、椀の破片がある。小型壺には接合し器形を残すものがあるが未報告とした。



第166図 4区14号住居址遺構図

4区14号住居 (第166図, 図版84-2、87-1、88-2、88-3、89-1)

位置 4M~P-19~21グリッド 主軸方位 N106°W 重複 172住、127土坑→4区14、11-10住
 -19溝 規模 縦6.75m 横6.44m 形状 方形 床面 YP層下まで掘り下げてロームブロック
 と黒色土の混土を貼床する。全体に均質でかたい。南壁の貯蔵穴西では、南北約100cm、東西約
 150cmの範囲で壁際から2~5cm高い面がある。上面は青灰色の砂層が分布し、ほかと区別されていた。
 入口施設の可能性がある。埋没土 4層がニツ岳FAである。住居内を広く覆い、厚さ約10cmである。

中央部では土器の直上にあるが、壁際には2枚の三角堆土をもつ。貯蔵穴 東南隅にある。上面は110×70cmの長方形で深さ約45cmである。中からは土器破片と炭化物が出土した。周溝 全周すると考えられる。良好な部分で基底幅6cm、深さ12cmである。南壁中央部が推定入口との関係のため不明瞭になる。柱穴 対角線上にP₁～P₄の主柱穴4本と入口施設らしいP₅がある。上面径と深さは、P₁が20×19、54cm、P₂が33×27、61cm、P₃が24×16、27cm、P₄が31×36、40cm、P₅が37×26、30cmである。柱間は、P₁とP₂280cm、P₃とP₄300cm、P₁とP₂250cm、P₃とP₄285cmである。掘り方 カマド左側で100×140cm、深さ約60cmの土坑がある。遺物はなく、貼床下にある。

遺物出土状態 FA 下の一括である。西側は調査年次と取り上げ基準のちがいから図示されていないが、分布の中心は住居中央部とカマド周辺にある。北壁沿いは殆どなく、空間利用を暗示するものだろう。中央部の一帯は完形の杯約15個体と甕があり、本遺跡での壁際に杯類が多出する傾向からすると例外的存在で、全てではないが合せ口にしたものがあることから廃屋時に集積したものと考えられる。カマド周辺には、東南隅に報告2の甕、6と7の大小二形態の甕、左隣に1の長胴甕がある。組成は長胴甕、小型甕、甕、杯、碗があり個体数も十分にあるが、高杯が異様に少なく、遺存状態が悪い。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長95cm 焚口幅30cm 天井部、焚口は崩落している。

構造 燃焼部全体は住居内にある。壁体は白色粘土を馬蹄形にめぐらし右奥に伏せた長甕が芯材である。支脚は奥壁から約50cmの位置にある。報告5の小型甕を伏せている。支脚の周囲には塊状の焼土がある。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

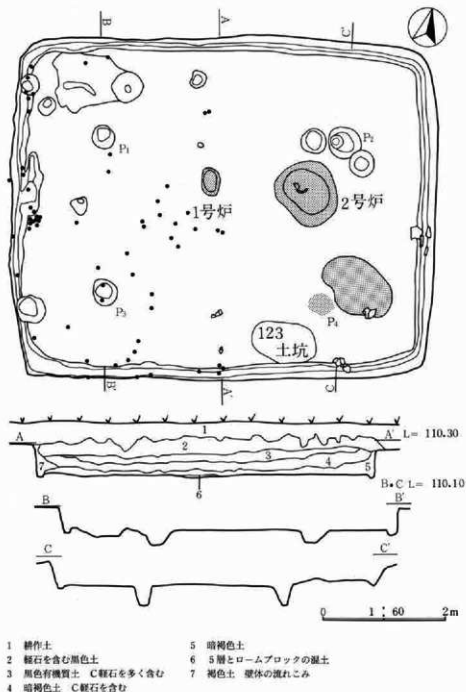
4区15号住居(第167図, 図版84-2、89-2)

位置 4J～M-17・18グリッド 主軸方位 N106°W 重複 194→4区15住→132土坑 規模 縦6.80m 横5.42m 形状 長方形 床面 YP層の上層まで掘り下げた上にYPとロームブロックを含む黒色土を平坦にする。貯蔵穴 不明 周溝 全周する。基底幅で5～15cm、深さ5～10cmである。柱穴 P₁～P₄を主柱穴、P₅～P₇を壁際補助柱穴、P₈を棟持ちと考える。上面径と深さは、P₁が直径20、40cm、P₂が攪乱で不明、P₃が直径35、26cm、P₄が直径40、24cm、P₅が37×20、14cm、P₆が直径30、16cm、P₇が直径42、9cm、P₈が25×20、26cmである。柱間は東西方向370cm、南北方向250cmである。

遺物出土状態 破片が約100点あり、有段口緑壺、台付甕、埴、器台に分類される。いずれも床直状態で、報告したものは壁際に残されたか炉体のものである。住居中央部は接合例が殆どない小破片が少量あるだけで、廃棄前に主要個体は屋外に持ち出されたと考えられる。

炉 中央と中央東寄りに2基の地床炉がある。1号は約20×40cmの楕円形、厚さ2～3cmの焼土が残る。2号は95×105cmの円形で浅い皿状の中央部に報告3の甕が埋めこまれていた。焼土はこの東側に限られることから、炉体土器と考えられる。用途を異にした同時併存と考えられる。

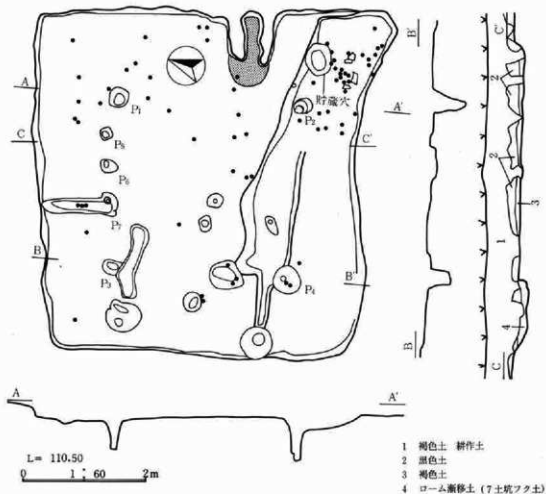
時期 古墳時代前期初頭 4世紀中頃



第167図 4区15号住居址遺構図

4区16号住居 (第168図, 図版89-3)

位置 4 N~P-13~15グリッド 主軸方位 N108°W 重複 177住→4区7土坑→4区16住 規模 縦5.42m 横5.12m 形状 方形 床面 ローム層中まで掘り下げて褐色土とロームの混土を平



第168図 4区16号住居址遺構図

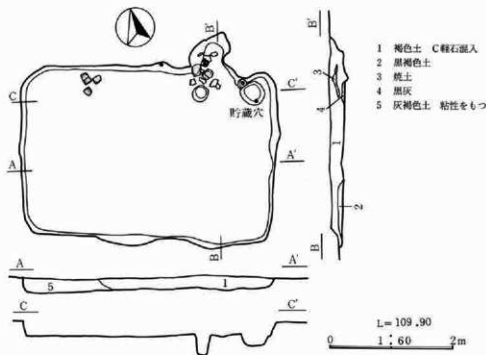
坦にする。7土坑と重複部分は埋没土を削平して平坦にしている。**貯蔵穴** 柱穴よりも大型の円形を基調としたものが3箇所あるが確定できない。東南隅の上端で50×40cm、深さ40cmのものが可能性がある。周溝 なし **柱穴** 対角線上にP₁～P₄の主柱穴4本がある。上面径と深さは、P₁が34×30、46cm、P₂が21×24、68cm、P₃が25×30、45cm、P₄が46×43、50cm、柱間はP₁とP₂が285cm、P₃とP₄が275cm、P₁とP₃が265cm、P₂とP₄が270cmである。残るP₅～P₉は間仕切り用のもので直径21～36cm、深さP₅12cm、P₆6cm、P₇16cm、P₈6cm、P₉8cmで、主柱穴とのちがいを示す。P₇は溝と連結している。

遺物出土状態 東壁寄りを中心として分布する。弥生時代後期から古墳時代後期までのものが混在し、7土坑のものと思われる弥生時代のものが約140点ある。鎌はP₁南脇で出土した。

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長85cm 焚口幅30cm 左壁に攪乱をうける。

構造 全体は住居内にある。壁体は灰白色粘土を馬蹄形にめぐらして作る。煙道だけが壁外にのびる。天井部等は崩落し、焚口周囲にかけて灰と炭化物が流出する。

時期 古墳時代中期 和泉式 5世紀後半



第169図 4区17号住居址遺構図

4区17号住居 (第169図, 図版90-1)

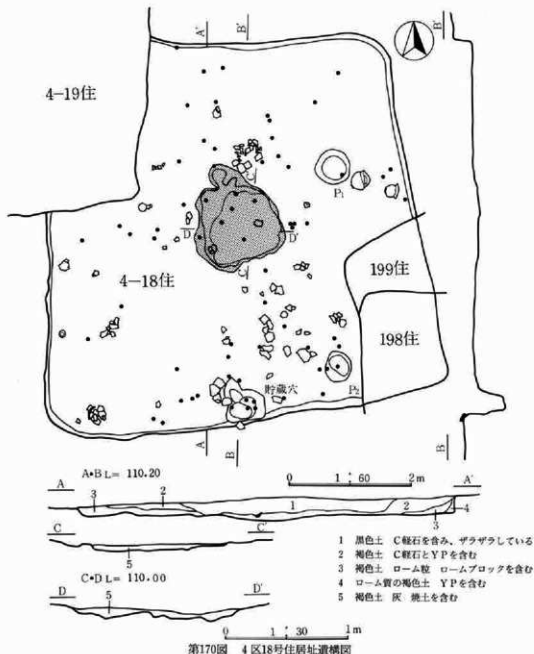
位置 4 L~N-11・12グリッド **主軸方位** N84°W **重複** 4区19→18→17住 **規模** 縦2.55m 横3.95m **形状** 長方形 **床面** 北半部を除き、かたくしまっている。褐色土をしめている。カマド周辺では炭化物層がうすく見られる。**貯蔵穴** 東南隅にある。上端で直径約45cmの円形で深さ15cmである。周溝、柱穴 なし 柱穴はカマド正面の住居中央で円形のわずかなくぼみがあったが図示していない。中軸線上に2本主柱穴も考えられる。

遺物出土状態 カマド周辺から羽釜2個体以上、高台碗、碗が出土している。報告のものは、カマドで使用したものか、補強用としたものである。

カマド **位置** 東壁南隅寄り **規模** 全長70cm 焚口幅約40cm 右袖側がくずれている。

構造 住居の壁際に角安石の転石を貼付し焚口を作る。B断面にある焼土と黒灰の位置からすると、火床の中心は壁を結んだ線上にあり、支脚をもつと考えられる。左袖石前の円形ピットは34cmの深さからすると類例のある灰かき出し穴と考えられる。

時期 平安時代 11世紀前半



4区18号住居 (第170図, 図版90-1、90-2、90-3、91-1)

位置 4 J~L-10~12グリッド **軸方位** N 6°W **重複** 4区19→4区18-199→198住 **規模** 縦6.35m 横6.15m **北西隅と東南隅**は重複のために推定する。**形状** 隅丸方台形 **床面** ローム層中まで掘り下げた上にローム粒を含んだ黒褐色土を平坦にする。南壁部周辺は軟かく、北半部はかたくしまっている。**貯蔵穴** 南壁中央部のものに可能性がある。周溝 なし **柱穴** P₁とP₂の可能性はあるが、いずれも10cm弱と浅く規則性がない。

遺物出土状態 北東隅一带を除いて全体に散在し、壁際につぶれた状態の報告個体がある。壁際や炉

の脇での状態からすると、全体が原位置にあり各々が使用時に近いと判断される。その中で南壁中央部は報告3、6、7、10、11があつて道具類の置き場の様である。特に3と底部を穿孔し甕に転用した7は入れ子になっていて、6と合せて何かに立てかけていた状態である。2は炉体土器で被熱による表面の磨耗が著しく、恒常的な使用と考えられる。3も同様であるが、2とは甕を併用すること、容量や入れ子での器高のちがひなどで用途差を示すものであろうか。器高の点では、3と7を合せたものが8の台付甕と近似値で、炉で使用する煮沸具としては3つの形態が考えられる。

炉 中央部に直径約1.5mの浅い掘り方があり、東寄りで焼土が多い。緑石の有無は不明である。

時期 弥生時代後期 樽式

4区19号住居（第171図、図版90-1、90-2）

位置 4J-L-12~14グリット **主軸方位** N 2°E **重複** 4区19-18-17住 **規模** 縦5.58m 横6.70m **形状** 隅丸長方形 **床面** ローム層中まで掘り下げている。全体に平坦でよく踏みしめられている。貯蔵穴、周溝 なし **柱穴** 対角線上にあるP₁~P₄の支柱穴4本と長軸線上の補助柱穴P₅、P₆の2本、入口施設のP₇がある。上面径と深さは、P₁が30×31、43cm、P₂が50×64、45cm、P₃が28×28、60cm、P₄が30×25、45cm、P₅が30×29、40cm、P₆が29×28、34cm、P₇が26×32、61cmである。柱間は、東西方向が220cm、南北方向が270cm、P₅とP₆は460cmである。入口施設は、南壁中央にある。床からは東西約2m、南北約50cmの範囲が15~20cm椀底状に低くなり、掘り方の痕跡と見られる。P₇は長方形の掘り方をもち、外傾している。

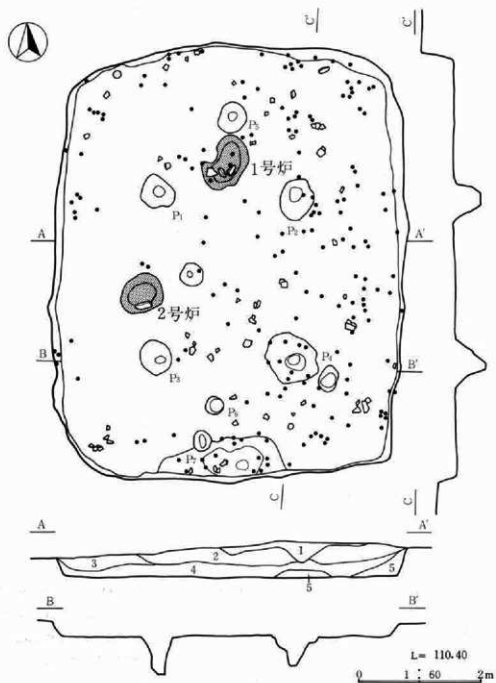
遺物出土状態 平面では東半分は圧倒的に多いが、埋没土層と合せて垂直分布では4層中に入るものが主体となる。床直に近いものは北壁沿いのものや東南側に見られ、上位レベルのものと区別される。組成の中では大型の甕類が少なく、高杯の多さやミニチュア土器、磨製石鏃等の石製品の存在に特徴がある。ミニチュアは台付甕、甕、高杯を模倣したもので高杯を除いて報告7~10の高杯と一緒にP₅周囲に散在する。石製品は剝片を含む未製品が出土し、13の砥石を工具にあてると工房の可能性もある。分布上は南西隅にその場が推定される。

炉 中央北と中央西に地床炉が2基ある。1号は50×58cmの不整形で浅い掘りこみの中に三角形に緑石を残す。2号は直径約40cmの円形で南側に緑石がある。同時併存だが1号が中心と考えられる。

時期 弥生時代後期 樽式

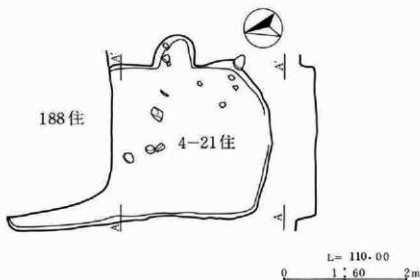
4区20号住居

位置 4K-19-20グリット **第5・6次調査**で調査した209住の南西隅である。資料の記録は当時のままとし、本報告では209住と合せて検討し欠番扱いとした。当時の記録カードには、重複関係が20住→No1土坑→1号方形周溝墓の順であること、No1土坑は掘削した土が20住の床面上にあったこと、浅間C軽石の堆積が埋没土中に見られないことが記入されている。床面の状態、周溝の状態と規模は209住に類似する。遺物は弥生時代後期 樽式の壺、甕、高杯の破片が12点ある。



- 1 褐色土 C軽石を含み、かたくしまる
- 2 暗褐色土 C軽石を含む
- 3 暗褐色土 C軽石 YPを含む
- 4 褐色土 C軽石 YPを含む
- 5 褐色土 YP ロームブロックを含む

第171図 4区19号住居址遺構図



第172図 4区21号住居址遺構図

4区21号住居 (第172図)

位置 4J・K-7~9グリット **主軸方位** N75°W **重複** 199→4区21→188住 **規模** 縦2.46m 横3.94m **北壁**は西隅を残して188住の重複で推定する。**形状** 長方形 **床面** ローム層中まで掘り下げて褐色土を平坦にする。**貯蔵穴**、**周溝**、**柱穴** なし

遺物出土状態 弥生時代後期～平安時代のもが混在する。分布の中心は焚口部周辺にある羽釜2個体以上、椀4個体以上、灰釉椀2個体以上、鉄洋、棒状の鉄器がある。中央部にある4点の角安石はカマドの崩落物と考えられる。

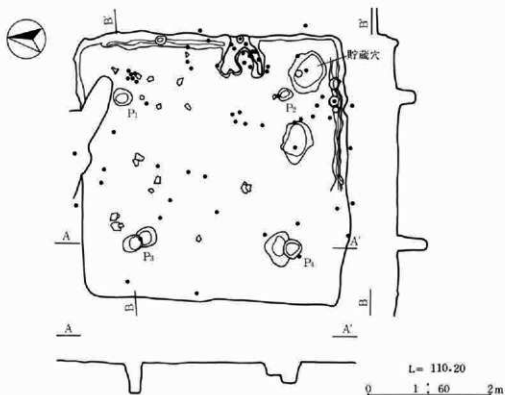
カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長60cm 焚口幅55cm 全体が削平されて崩落している。

時期 平安時代 10世紀後半

4区22号住居 (第173図、図版91-2、91-3)

位置 4K~M-7~9グリット **主軸方位** N93°W **重複** なし **規模** 縦4.25m 横4.23m **形状** 方形 **床面** ローム層中まで掘り下げてロームと黒色土の混土を貼床する。焚口前から中央部一帯が堅緻で良好な状態にある。**貯蔵穴** 東南隅にある。上端面で63×55cmの楕円形で深さ37cmである。**周溝** 東壁と南壁にある。基底幅で7cm前後、深さ5cm前後で小孔が確認されている。**柱穴** 対角線上にP₁~P₄の主柱穴4本がある。上面径と深さは、P₁が26×30、29cm、P₂が21×18、28cm、P₃は2基あり新しい方が30×25、47cm、P₄も2基あり同様に28×27、33cmを測る。柱間は、P₁とP₂が260cm、P₃とP₄が250cm、P₁とP₃が230cm、P₂とP₄が245cmである。

遺物出土状態 西半分は床近くまでが削平されていて明らかではないが、東半部の様子が全体に及ぶものと考えられる。組成は、丸胴壺2個体以上、高杯6個体以上、椀、甎がある。分布はカマドを除くと、貯蔵穴際とP₁とP₃の周囲に偏在する。器種別の偏在傾向はなく、高杯を例にとっても先述の各所に分散している。脚部欠損の高杯2例は、接合例のないことから杯に転用している。



第173図 4区22号住居址遺構図

カマド 位置 東壁南寄り 規模 全長65cm 焚口幅35cm 煙道は直立するか削平されている。

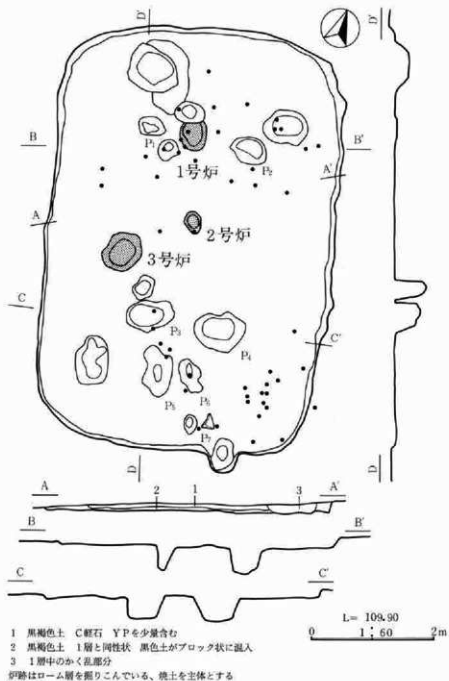
構造 煙道を除き全てが住居内にあり、周溝も途切れている。壁体は白色粘土を馬蹄形にめぐらす。中央部に底部を調整した高杯を伏せて粘土で固定して支脚とする。

時期 古墳時代中期後半 和泉式 5世紀後半

4区23号住居 (第174図, 図版92-1)

位置 4M・L-5〜7グリッド **主軸方位** N14°W **重複** なし **規模** 縦4.72m 横6.72m **形状** 隅丸長方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げて直接踏みしめている。**貯蔵穴** 不明 **周溝** なし **柱穴** 対角線上にあるP₁〜P₄の4本が主柱穴、南壁寄りにあるP₅〜P₇が入口施設である。上面径と深さは、P₁が42×28、46cm、P₂が62×43、42cm、P₃が78×50、33cm、P₄が80×53、37cm、P₅が42×68、43cm、P₆が32×56、48cm、P₇が20×30、44cmである。柱間は、東西方向が約170cm、南北方向が約300cmである。P₅とP₆は芯径で50cmである。

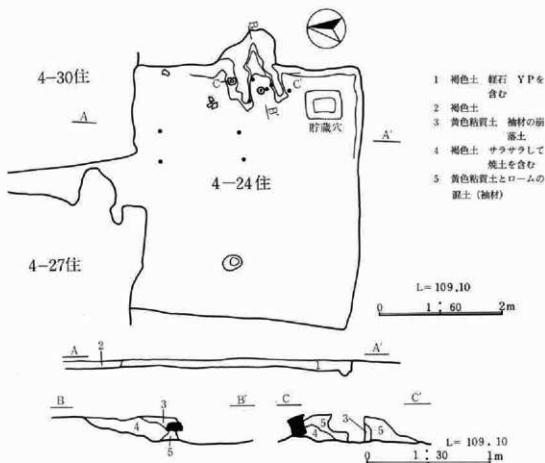
遺物出土状態 壺、甕、台付甕、高杯の破片が約300点ある。床面からと器形がわかるものは少ない。石器類は砥石、石皿、未報告の剥片、用途不明の石がある。屋内の床にすえて使用するものが主で、主要な生産用具が欠落している。5の砥石はP₂脇にすえられた状態にあり、凹穴と筋状の砥面までもち、正に伊脇で重宝する万能具と推定される。



第174図 4区23号住居址遺構図

炉 中央部、中央の北と西の3基の地床炉がある。1号は直径約40cm、深さ5～7cm、2号は直径約20cm、深さ5cm、3号は50×70cm、深さ12cmを測る。いずれも掘り方の上面中央部にうすく焼土を残すだけで緑石はない。

時期 弥生時代後期 樽式



第175図 4区24号住居址遺構図

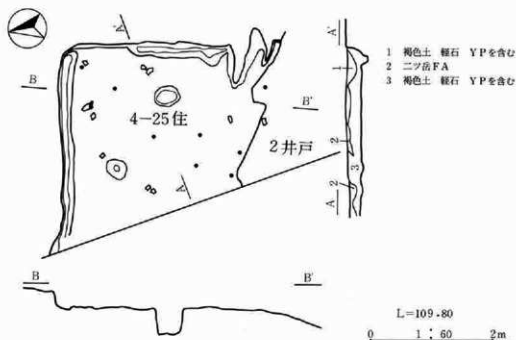
4区24号住居 (第175図)

位置 4L~N-2~4グリッド **主軸方位** N93°W **重複** 4区29-26→24-30-31-27住 **規模** 縦4.13m 横3.84+αm **北壁側**に27住、30住等があり、南西隅側は床面近くまで削平されている。**形状** 方形 **床面** ローム層上面まで掘り下げてロームブロック、YP と褐色土の混土を貼る。かたさはさほどなく、しまっている程度である。**貯蔵穴** 東南隅にある。上端で46×58の長方形、断面は方台形で深さ約55cmである。**周溝** 平面図への記録はないが、A断面の南壁部分に基底幅8cm、深さ10cmの溝がある。**柱穴** 西壁中央部付近に24×28、深さ39cmのピットがあるが確定できない。

遺物出土状態 カマド周辺で長甕、丸胴甕、杯、碗、高杯の破片が少量ある。報告1の長甕は左袖にたてかけ、2の杯は支脚に転用していた。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長140cm 焚口幅約40cm **構造** 燃焼部は住居内にあり、灰白色粘土を馬蹄形にめぐらして作る。支脚は粘土を柱状にし甕の底部をかぶせた上に、さらに報告2の杯をふせる。壁際から約40cmの位置にあり高さ14cmある。

時期 古墳時代後期 鬼高1式 6世紀前半



第176図 4区25号住居址遺構図

4区25号住居 (第176図, 図版92-2)

位置 4N・O-2~4グリッド **主軸方位** N77°W **重複** 11、12土坑→4区25住→2井戸 **規模** 縦3.23+αm 横3.50+αm **南壁**は2井戸で掘り方まで削平され、西側は第5次調査で確認面のちがいで確定できず、本報告では第1次の調査枠をそのまま図示した。**形状** 方形か **埋没土** 埋没土2層がニツ岳FAである。かたくしまった灰黄色土層。**床面** ローム層まで掘り下げた上にYPと褐色土の混土を貼る。**周溝** 全周すると考えられる。基底幅約10cm、深さ8~10cmである。**柱穴** 2本ある。径30cm程の上端、深さ40cmである。

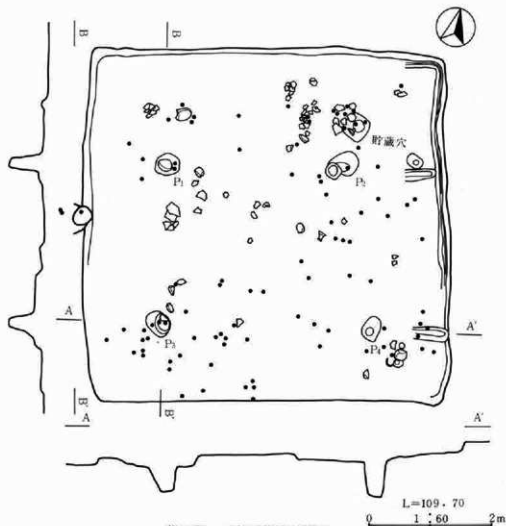
遺物出土状態 全体に破片が散在する。長壺、杯、椀、高杯のいずれも小破片が約150点ある。壺が主体で丸胴タイプを含む5個体以上がある。FA下とすると4区14住に比較して間層が厚く、遺物の組成、個体数、破片を主とした遺存状態の各点で対称的である。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長約120cm 焚口幅約40cm **右袖**が削られている。**構造** 住居の壁位置で燃焼部と煙道部を分けるもので、壁体には粘土をめぐらす。

時期 古墳時代後期 鬼高I式 6世紀前半

4区26号住居 (第177図, 図版92-3、93-1)

位置 4K~M-4~6グリッド **主軸方位** N105°W **重複** 4区29-26-24-30-31-27住 **規模** 縦5.48m 横5.70m **形状** 方形 YP、ロームブロックと黒色土の混土を貼る。かたくしまっている。**貯蔵穴** 北東隅とP₂との間にある。方約40cmの方形、深さ約42cm、上面で小型壺、高杯が出土する。**周溝** 東壁から北壁の一部にめぐる。基底幅5cm前後、深さ2~5cmである。東壁寄りではP₂とP₁と



第177図 4区26号住居址遺構図

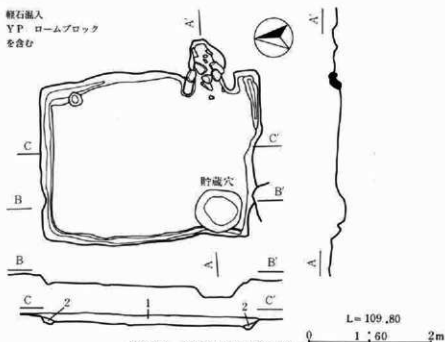
を結ぶ間仕切り溝がある。周溝を合せて全体に及んでいたと推定される。柱穴 対角線上に $P_1 \sim P_4$ の主柱穴4本がある。上面径と深さは、 P_1 が 37×35 、 57cm 、 P_2 が 25×23 、 48cm 、 P_3 が 42×35 、 54cm 、 P_4 が 27×37 、 51cm である。柱間は P_1 と P_2 が 265cm 、 P_3 と P_4 が 330cm 、 P_1 と P_3 が 255cm 、 P_2 と P_4 が 265cm 、 P_1 と P_4 との間が広く、掘り方では各壁に「ハ」の字状に斜交する。

遺物出土状態 壁際を除いて全体に散在する。器形を残すものが多く、柱穴や貯蔵穴の周囲に集中が見られる。特に貯蔵穴の周囲では、甕、小型甕、高杯2があり、 P_4 脇で正位に置く杯4個体の集中と対称的である。礫器は報告した砥石、敲石のほか、報告16と同形状の石が P_3 脇で2点、南壁中央で3点がある。報告17の滑石原石を素材とすると、その出土位置である北西隅の石の周辺で工房の存在を推定させることもできる。

カマド 東壁南寄りに周溝が切れる箇所があり痕跡はないが推定される。

時期 古墳時代中期後半 和泉式 5世紀後半

- 1 褐色土 軽石混入
2 褐色土 YP ロームブロック
を含む



第178図 4区27号住居址遺構図

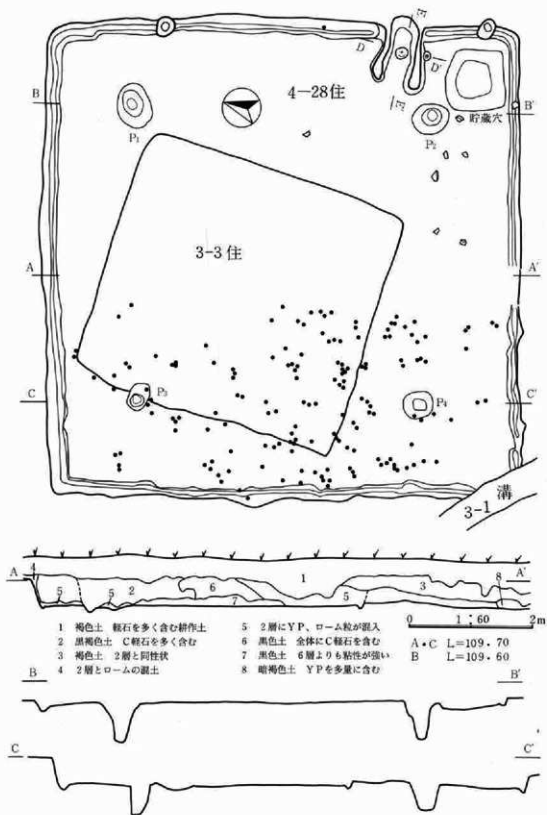
4区27号住居 (第178図, 図版92-3、93-2、93-3)

位置 4 L・M-3～5グリッド **主軸方位** N97°W **重複** 4区29-26→24-27住 **規模** 縦2.65m 横3.48m **形状** 長方形 **床面** 褐色土とYPの混土を平坦にする。焚口前は少し低くてかたくしまる。**周溝** カマド部分を除き全周する。基底幅で10cm、深さ5cm前後である。**貯蔵穴** 南西隅にある。ほぼ円形で上面径で75×55cm、椀底状の断面で深さ約20cmである。調査時の所見では、住居内と同一の埋没土ながら断定をさけているが、本遺跡地内では類例を多くあげられることもあり該当させた。**柱穴** なし

遺物出土状態 カマド内を除き、接合例の少ない破片が全体に散在する。約100点があり、うち40点は混入した弥生時代のものである。組成は土釜、高台椀、皿があるだけで限られたものといえる。報告した土製勾玉も該期のものではなく、重複する古墳時代の住居からの混入である。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長95cm 焚口幅45cm **構造** 焚口を住居内に、燃焼部と煙道部は壁外にある。壁体は角安石の転石を左右対の位置でたてて芯とし、灰色粘土を貼付し馬蹄形に作る。石は焚口だけに凝灰岩質の切石らしいものを鳥居状に用いている。支脚は壁を結んだ線上に角安石の転石をたてるが抜かれて焚口側に倒れていた。遺物は報告1の土釜1個体だけが支脚よりも奥で破片になって散在していた。出土した状態からすると壁体の補強材か煙道の一部として使用された可能性もある。

時期 平安時代 11世紀前半



第179図 4区28号住居址遺構図(1)



4区28号住居 (第179図、第180図、図版84-3、94-1、94-2、94-3)

位置 3 I~L-33・34~4 I~L-1・2グリット **主軸方位** N115°W **重複** 3区6、220、218-4区28→3区3-200住 **規模** 縦7.26m 横7.32m **形状** 方形 **床面** YP 上層まで掘り下げた上にロームブロックと黒色土の混土を平坦に貼る。北西寄りに3区3住全体が重複している。**貯蔵穴** 東南隅にある。上面で95×90cmの方形 深さ50cmである。**周溝** 基底幅10cm、深さ5cm前後でカマド部分を除いて全周する。**柱穴** 対角線上にP₁~P₄の主柱穴4本がある。上面径と深さは、P₁が52×68、53cm、P₂が56×44、62cm、P₃が53×42、67cm、P₄が44×38、42cmである。柱間は、P₁とP₂が460cm、P₃とP₄が430cm、P₁とP₃が440cm、P₂とP₄が430cmである。

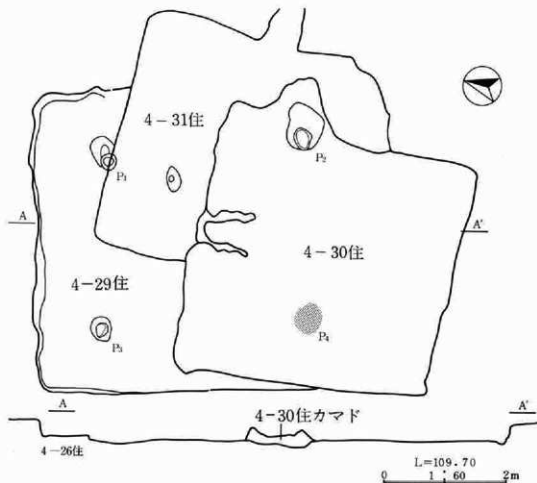
遺物出土状態 第1次と第5次で東西に二分して調査したために一様でないが、西側の状況が全体に及ぶと考えられる。破片数が多い割には接合例と主要器種の要類が少なく、2点の蓋から口径16cm前後のものが暗示されるが組成の中では大きく欠落している。4点の石製品は出土位置が特定できなかったりして本住居に伴う疑問である。2点の磨製石鏃は重複する218住に伴う可能性がある。

カマド **位置** 東壁南寄り **規模** 全長110cm 焚口幅35cm **構造** 煙道を除いて住居内にあり、掘り方でもあらかじめ周溝を設けていない。壁体は芯を持たず灰白色粘土を馬蹄形に盛り上げている。燃焼部と煙道とは壁の段差を利用して勾配をつけ、境としている。燃焼部の壁から約40cmの位置に、灰白色粘土を芯とした上に杯部だけの高杯を伏せて支脚としている。高さ約15cmである。火床面は床とほぼ同じで奥壁寄りがわずかにくぼむ。支脚の周囲に焼土が多い。

時期 古墳時代中期後半 和泉式 5世紀後半

4区29号住居 (第181図、図版92-3)

位置 4 K~M-4・5グリット **主軸方位** N17°W **重複** 4区29→26→24→30→31→27住 **規模** 縦4.78m 横5.78m 南側半分以上は30住と31住が重複するために柱穴の配置から推定する。南壁は31住東南隅の段差とP₁とP₂の配置をあてて計測した。**形状** 長方形 **床面** YP 層の上層近くまで掘り下げた上にロームブロックと黒色土の混土を部分的に貼床する。かたくしまっている。南半分は重複する30住と31住のために確定がわずかしい。**貯蔵穴、周溝** なし **柱穴** 対角線上にP₁~P₃の主柱穴3本がある。南西隅は30住プラン内に複数あったが確定できなかった。4本主柱穴である可能性が高い。上面径と深さは、P₁が28×26、39cm、P₂が40×32、57cm、P₃が36×28、41cmである。P₁については同規模のものと重複している。柱間は、P₁とP₂が320cm、P₁とP₃が270cmである。



第181図 4区29号住居址遺構図

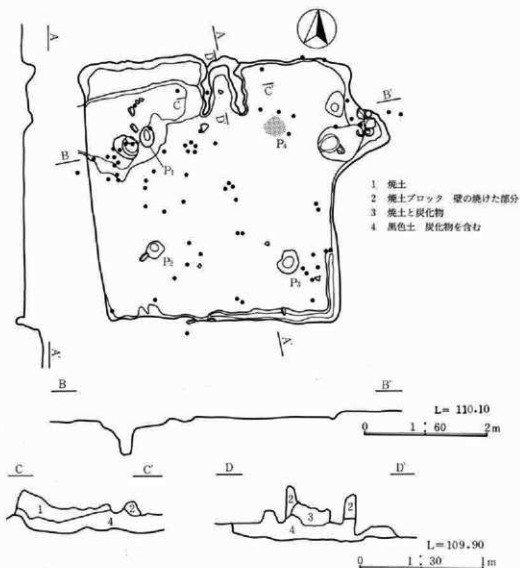
遺物出土状態 分布に関する記録がなく取り上げ遺物が殆どない。北半分は上面にある26住に、南半分は30住、31住に混在していると考えられる。26住には埋没土の1層中に本住居からと推定される弥生時代後期樽式の甕や甕等の破片が約150点も含まれている。

炉位置 ほぼ中央部と推定する。平面での記録はないが、26住の東西の横断面に30住カマド掘り方の下面にレンズ状の焼土を主とした土層がある。

時期 弥生時代後期 樽式

4区30号住居 (第182図, 図版92-3)

位置 4K・L-3～5グリッド **主軸方位** N17W **重複** 4区29-26→24→30-31→27住 **規模** 縦3.80m 横4.20m **形状** 方台形 東壁北寄りに間口、奥行とも約1mの三角形の張出部があるが29住P₂と重複し、その柱穴掘り方が29住の一部を掘りすぎた可能性がある。床面 カマドはYP層の上層まで掘り方が違っているが、床面本来については記録がなく詳細不明である。29住床面とは殆ど段差がない。貯蔵穴 不明 **周溝** 東南隅を中心としてL字形にある。全体にめぐるか不明である。

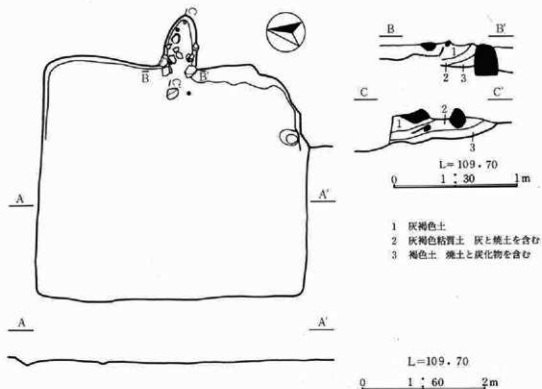


第182図 4区30号住居址遺構図

基底幅8cm、深さ4cm前後である。柱穴 対角線上にある P_1 ～ P_3 の3本を主柱穴とした。北東隅は重複が激しく確認していないが4本主柱穴と考えられる。上面径と深さは、 P_1 が 25×33 、 27cm 、 P_2 が 30×28 、 32cm 、 P_3 が 33×35 、 16cm である。柱間は、 P_1 と P_2 が 180cm 、 P_2 と P_3 が 350cm である。

遺物出土状態 図示したものは重複する29住、31住との混在が十分考えられる。中でも張出部とした箇所とカマド西側の溝状に一段低い部分は、26住の図と重複している。記録では、接合例が殆どない破片が約100点あるだけで検討資料としても除外し、報告個体がない。唯一、カマド内で長壺と杯の破片が合せて12点記録されている。

カマド 位置 北壁中央 規模 全長120cm以上 焚口幅約40cm 構造 煙道を除いた全体が住居内にある。壁体は凝灰岩の切石を左右にたてて芯とし灰白色粘土を貼っている。両側の住居の壁際まで切石を並べるのは本遺跡の中では唯一の例である。左壁で3石、右壁で4石があり、



第183図 4区31号住居址遺構図

焚口の切石は長さ約50cm、幅24cmで右袖口側に崩落していた。

時期 古墳時代後期 鬼高Ⅱ式 6世紀後半

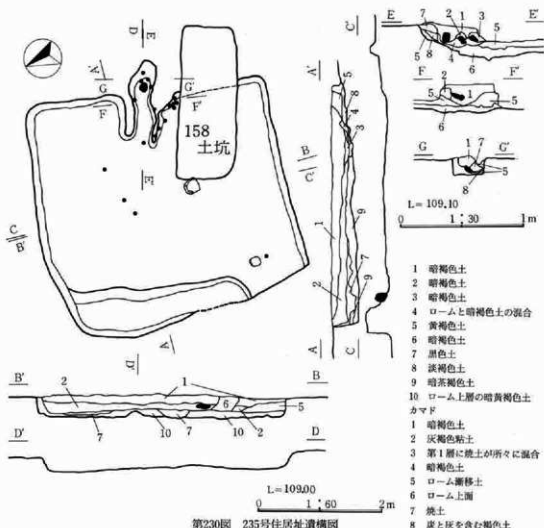
4区31号住居（第183図，図版71-3、72-1、92-3）

位置 4J～L-4・5グリッド 主軸方位 N90°W 重複 4区29-26→24→30→31→27住 規模 縦3.90m 横4.20m 形状 方台形 床面 ローム層の上面まで掘り下げて黒色土ブロックとロームブロックの混土を平坦にする。貯蔵穴、周溝 なし 柱穴 南壁際で23×33cm、深さ26cmのピット1基あるが確定できない。

遺物出土状態 30住との重複部分は混在している。カマドの内外から羽釜、杯、碗が出土している。

カマド 位置 東壁中央 規模 全長約1m 焚口幅35cm 構造 全体が住居外にある。壁体は楕円形の掘り方の中に石をめぐるしている。石は長軸で20cm前後の転石が主体で、焚口が凝灰岩の切石、内部は角安石を対に置いている。報告1と2の羽釜のうち、2は主に左壁に貼付されていたもので、1がかけられていたと推定される。

時期 平安時代 10世紀第4四半紀



第230図 235号住居遺構図

235号住居 (第230図)

位置 3 I~K-16~18グリット 主軸方位 N83°W 重複 238→235住→158土坑 規模 縦3.76m 横3.92m 南西隅は第3次と第6次の調査境界上にあつて調査していない。形状 方形 床面西壁に幅約50cmの一段高い面をもつ。段差は約10cm、ともにローム粒を含んだ暗褐色土の貼床を施しているが掘り方で、下段面がローム漸移層を基盤とするのに対して上段面は褐色のサラサラした土を基盤とし、ちがいを見せている。周溝、柱穴、掘り方 なし

遺物出土状態 カマド周辺で羽釜、椀、台石と思われる偏平な河原石がある。土器の個体数は少なく、カマド関連のものが残されていただけである。

カマド 位置 東壁中央寄り 規模 全長135cm 焚口幅25cm 壁外に支脚があり全体に長い。

構造 掘り方のローム漸移層の上に灰褐色粘土を貼付して壁体とする。右袖は、芯材として割石が使用され、長い袖の補強がされている。支脚は壁外にあり、この外側に焼土と炭が厚く残る。

時期 平安時代 11世紀前後

住居一覽表

第1表 熊野堂遺跡II地区住居跡一覧表

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
1	方形	325×310	N-90°-E	無	無	西壁南寄り		平安 11世紀	
2	長方形	295×385	N-108°-E	無	無	南西隅	無	平安 11世紀	17→2住
3	長方形	335×390	N-72°-W		無	東壁南寄り	無	平安 9世紀第4	3→4住
4	長方形	290×415	N-105°-E	無	無	南西隅	無	平安 11世紀第2	3→4住
5	方形	380×390	N-85°-W	無	無	東南隅	無	平安	10→5住→無名土坑
6A	方形	425×465	N-26°-E	無	無			平安	6C→6A→6B住
6B	長方形 か	×470	N-75°-W	無		東壁南寄り	東南隅	平安 11世紀	6C→6A→6B住
6C	長方形	495×576	N-140°-W	無	3	東壁南寄り	南西隅	7世紀	6C→12→6A→7、 6B住
7	不整形 方形	340×315	N-76°-W			東壁南寄り		平安 11世紀前半	6C→12→6A→7、 6B住
8	長方形	480×680	N-85°-W	無	4	東壁中央北 寄り	南東隅 2基	平安 10世紀第1	10→2溝→8・9住 三彩小壺出土
9						東壁中央南 寄り			8住と同一住居とする
10	長方形	423×305	N-76°-W	無		東壁中央南 寄り	北西隅か	7世紀第4	10→8・9→5住
11	方形	320×352	N-90°-W	有 全周	無	東壁中央南 寄り	南東隅	奈良 8世紀第2	
12	方形か	×345	N-77°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9～10世紀	12→6B、7住
13	長方形	270×385	N-75°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀	21→13住
14	方形か	×335	N-69°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀	19→14住
15	方形	395×320	N-78°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀前半	30→23→15住
16	方形	315×330	N-73°-W	無		東壁中央南 寄り		平安 9末～10初	17→16住

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炬・かまど	貯蔵穴	時期	備考
17	方形	324×360	N-68°-W	無	無	東壁中央	東南隅	平安 10世紀	17-16住
18	方形か							平安	北東隅から約2mの範囲を確認
19	方形か	×340	N-66°-W	無	無	東壁中央北寄り	無	平安 9~10世紀	19-14住
20	方形か	×335	N-71°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀	37・38・30・20住
21	長方形	265×368	N-78°-W	無	無	東南隅	無	平安 11世紀	55-52-25-21-13住
22	長方形	275×385	N-60°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀前半	39-34A・B-22住
23	長方形	×340	N-59°-W			東壁南寄り	カマド右下か	平安 11世紀第2	30-23-15住
24	方形	215×215	N-125°-W	無	無	東壁中央	無	平安 9~10世紀	
25	長方形	345×420	N-82°-W	無	無	東壁南寄り	北東隅	平安 10世紀第4	55-52-25-21-13住
26	長方形	295×355	N-89°-W	有 全周	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀前半	56-53-44-26住
27	方形	325×315	N-79°-W	無	無	無	無	平安 11世紀第1	55-48-41-27住
28		北東隅のみ		有			無	平安	全体図で位置だけを報告
29	方形	285×240	N-93°-W	無	無	無	無	平安 9世紀第3	57-50-46-36、35-29住
30	隅丸 長方形	×375	N-89°-W	無	無	東南隅	無	平安 11世紀	30-20、23-15住
31	方形か	235×255	N-53°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀後半	33-32-31住
32		南壁の一部						平安	33-32-31住
33	長方形	320×490	N-81°-W	無	無	東南隅	南西隅 円形	平安 10世紀	33-32-31住
34A	方形か	290×	N-80°-W	無	無		無	平安 11世紀第1	39-34A・B-22、15住
34B									34A住居と同一住居

第2章 検出された遺構

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
35	方形	270×280	N-83°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀第4	57-46→35、36→29住
36	方形	255×230	N-92°-W	無	無	無	無	平安	57-50→46→36→29住
37	長方形	315×425	N-85°-W			無		平安 10世紀前半	54-37・38→20、23→15住
38									37住と同一住居
39				無	無	東壁南寄り 痕跡あり	無	平安	54→39→34A・B住
40	方形か							平安	58-53→44→40住
41	長方形	260×	N-76°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀第4	55-48→41→27住
42	長方形	265×380	N-110°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅の窪みか	奈良 8世紀第2	
43	長方形	255×305	N-76°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀	60-47→59、43→49住
44	方形か	×320	N-116°-W	無	無		無	平安 10世紀か	58、56→53→44→26、40住
45	方形か	×265 東壁側確認	N-75°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀中頃	57→51→45住
46	長方形	255×350	N-68°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀後半	57→50→46→35、36→29住
47	長方形	300×450	N-80°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀後半	60-47→59、43→49住
48	長方形	395×455	N-66°-W	無	無		無	平安	55-48→41→26、27住
49	長方形	345×445	N-80°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀前半	60→59→49住 金銅製の金具出土
50	長方形 か	425×	N-92°-W	無	無	無	無	平安 9世紀第2	57→50→36、35→29住
51			N-75°-W 東壁側確認			東壁中央		平安 9世紀中頃	57→51→45住
52	長方形	250×385	N-81°-W	無	無	東壁南寄り	南西隅	平安 10世紀	52→25住
53	長方形 か		N-71°-W	無	無		東南隅	平安 10世紀か	56→53→44→26、40住

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	坪・かまど	貯蔵穴	時期	備考
54								平安	54→39→38→25→23 21→15→13住
55		北東隅のみ	N-95°-W	無	無		無	平安 10世紀第2	55→25→48→41住
56	長方形か	310×	N-86°-W	無	無		無	平安 10世紀初頭	56→53→44→26住
57	長方形	650×463	N-97°-W	有 全周か	4	東壁中央	南東隅 北東隅	7世紀第4	61→57→63→50→51→ 45住
58			N-95°-W	無	無	東壁	無	奈良 8世紀後半	58→53→44→26、40住
59	方形	290×300	N-77°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀前半	60→61→47→59、43→ 49住
60	方形か	340× 東壁側確認	N-76°-W	無	無	東壁	無	7世紀中頃	60→61→59、43→49住
61	方形か	325×	N-96°-W	無	無			7世紀第3	61→57→63→50→51→ 45住
62									57住と同一住居とし欠 番にする
63	方形か	325×	N-101°-W	無	無	無	無	奈良 8世紀	60→61→57→63→47→ 59住
64	方形	265×300	N-90°-W	無	4	東壁南寄り	東南隅 橋円形	平安 10世紀第1	66→65→64住
65	長方形	255×375	N-91°-W	有 全周	無	無		平安 10世紀	66→65→64住
66	長方形	325×380	N-78°-W			東壁南寄り		平安 10世紀第1	66→65→64住
67	方形	520×525	N-122°-W	有 全周	4	東壁ほぼ中央	無	7世紀第2	67住→4溝
68	隅丸 方形	×455	N-104°-W			東壁南寄り		7世紀後半	68→79住→7竪穴
69	長方形	305×415	N-118°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀前半	
70	方形	255×305	N-79°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅 円形	平安 10世紀前半	76→70住
71	方形	330×390	N-101°-W	有	無	東壁南寄り	無	奈良 8世紀第3	77→71住
72	長方形	365×385	N-80°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅 円形	平安 10世紀第2	

第2章 検出された遺構

No	形状	奥横	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
73	長方形	255×360	N-81°-W	有 全周	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀前半	74-73住、規模は周溝 基部で計測
74	長方形	280×390	N-92°-W	無	無	無	無	平安 9世紀第2	74-73住
75	方形	460×505	N-101°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅外	7世紀末	
76	方形	560×390	N-90°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅 槽円形	平安 9世紀後半	76-70住
77	方形か	365×	N-105°-W	無	無	東壁南寄り	無	奈良 8世紀第2	77-71-78住
78	方形か	カマドのみ						平安 9世紀前半	77-71-78住
79	方形か	×438	N-102°-W	無		東壁南寄り	東南隅か	奈良 8世紀第1	68-79住-7壁穴
80	隅丸 長方形	300×440	N-103°-W	無	無	東壁南寄り	無	奈良 8世紀第1	80住-6、7溝
81	長方形	430×620	N-87°-W		無	東壁南寄り	東南隅	平安 9世紀後半	
82	方形	445×425	N-88°-W	有 全周	無	東壁中央	無	奈良 8世紀	111-109-101-82- 100-83住
83	長方形か		N-90°-W	無	無	東壁南寄り か	無	平安 10世紀第2	82住に同様
84	方形	290×340	N-93°-W	有 全周	無	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀前半	観出土
85	方形	390×340	N-85°-W	無	無	東壁南寄り	無	奈良 8世紀中頃	117-85、110-86住
86	長方形	345×415	N-81°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀前半	117-119-118-116- 110-86住
87	長方形	360×290	N-106°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅 方形	平安 9世紀前半	115-87住 銅滓出土
88	長方形	250×375	N-99°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀前半	96-116-90-98、88 住-52土坑
89	長方形	245×375	N-84°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安	151-147-89住
90	長方形	225×355	N-81°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀第4	
91	長方形	270×350	N-78°-W		無	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀前半	113-93、94-91住

No	形状	規模	方位	周溝	柱穴	伊・かまど	貯蔵穴	時期	備考
92						東壁		平安 9世紀か	カマドのみ残存
93	長方形	283×350	N-76°-W	無	無		無	平安 9世紀第3	91住に同様
94	方形	250×285	N-79°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅	平安 9世紀	91住に同様
95	方形	320×380	N-79°-W			東壁中央		平安 9世紀後半	95住-14溝
96	台形	510×455	N-44°-W	無	4	中央	東壁寄り	弥生中期	96-98-88住-14溝
97	方形	305×345	N-91°-E	無	無	西壁南寄り	無	平安 10世紀第2	119-118-116-86-97住
98	方形か	×250	N-74°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀第1	116-112-98-88住
99	長方形	275×355	N-79°-W	無	無	東壁中央	東南隅	平安 10世紀後半	115-112-98-88-99住
100	長方形	274×360	N-85°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀第1	82住に同様
101	長方形	×347	N-72°-W	無	無	東壁南寄り	無	奈良 8世紀	82住に同様
102	長方形	225×317	N-94°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀か	110-108-87、102住
103	方形か		N-80°-W	無	無	東壁	無	平安 10世紀第2	106-105-104-103住
104	方形か	350×	N-89°-W	無	無		無	平安 10世紀	103住に同様
105	方形か	×367	N-88°-W	有	無	東壁	東南隅	奈良 8世紀末	103住に同様 和銅開珥出土
106			N-109°-W					奈良 8世紀	106-105-104-103住
107			N-83°-W	無	無		無	平安 9世紀第2	106-105-107-103住
108	方形	360×408	N-100°-W	無		東壁中央	無	奈良 8世紀第4	108-87、102-230住
109	長方形	330×	N-70°-W	有	無	東壁南寄り	無	奈良 8世紀	111-109-101-82-100-83住
110	長方形	460×345	N-87°-W	有 全周	6	東壁やや南 寄り		奈良 8世紀第3	117-110-86、102住

第2章 検出された遺構

No	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
111	長方形か	北壁のみ						奈良 8世紀	109住に同様
112	方形	245×272	N-90°-W	無	無	東壁中央	東南隅	平安 9世紀第1	115→116→112→87→ 98, 88→99住
113	長方形	×270	N-85°-W	無	無	東壁中央	無	平安 9世紀後半	113→93, 94→91住→51 土坑
114	方形か	×408 東側以	N-92°-W	有 全周				弥生後期	
115	長方形	470×350	N-30°-W		4	中央ほぼ北 寄り		弥生後期	115→112, 87→99住
116	方形	515×495	N-94°-W	無	4	東壁中央	東南隅		119→118→116→112, 86→88, 98住
117	方形	490×476	N-32°-W	無	4	中央	無	弥生中期	117→110→85→86住 焼失住居か
118	方形	×520	N-2°-E	無	無		無	古墳中期 5世紀後半	96→119→118→116→ 86住
119	方形	465×425	N-3°-E	有 全周	4	無	無	古墳前期 4世紀後半	118住に同様
120	長方形	258×334	N-82°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀第2	153→152→120住
121	長方形	270×435	N-75°-W	無	無	東壁中央	無	平安 10世紀第2	121→126, 165住の中で 最も新しい
122	方形	248×258	N-81°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安	123→122→121住
123	長方形	298×377	N-98°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安	123→122→121住
124	長方形	283×342	N-116°-W	無	無	東壁中央	無	平安	126→125→124→123→ 122→121住
125	長方形か	190×	N-60°-W					平安	124住に同様
126		東壁一部確 認							124住に同様
127	長方形	280×337	N-69°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀第4	134→129→143→127住
128									欠番
129	長方形	295×330	N-81°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅	平安 9世紀第4	160→134→131→130→ 129→143→127住

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
130	方形	377×400	N-80°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安	129住に同様
131	長方形	250×365	N-72°-W	無	無	無	無	平安 9世紀	129住に同様
132	長方形	270×347	N-74°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀第1	237→132住
133									欠番
134	方形	540×515	N-93°-W	有 全周	4	東壁南寄り		7世紀第3	160→134→129→143→ 127住
135	長方形	330×245	N-64°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀第2	137→136→135住
136	方形	450×455	N-82°-W	無	4	ほぼ中央	南西隅	古墳前期 4世紀後半	135住に同様
137			N-85°-W	無	無		無	弥生後期	135住に同様
138	長方形	221×283	N-75°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀第1	150→149→138住
139	方形	278×276	N-88°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀	148→139住→58→57土 坑
140	方形か		N-103°-W	無	無		無	平安	140→131→130→123、 129→143住
141	長方形	285×330	N-70°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀第3	164→142→141住
142	方形	287×290	N-71°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀前半	141住に同様
143	長方形	250×373	N-71°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀第3	134→129→143→127住
144	長方形	370×460	N-0°-W	無	3 (4)	中央北寄り	無	弥生後期	3区12、14→3区10→ 145→3区9住
145	方形	×690	N-13°-W	有 全周	4	北壁中央	南壁中央	古墳後期 6世紀前半	144住に同様
146	方形か	×410	N-85°-W	無		東壁南寄り		古墳後期 6世紀	145→146住
147	方形	345×306	N-91°-W	無	無		無	弥生後期	160→151→147→89住
148	長方形	337×230	N-85°-W					平安 10世紀	148→139住

第2章 検出された遺構

No	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
149	長方形	332×265	N-85°-W			東壁南寄り	東南隅	平安 9世紀第3	150→149→138住
150	長方形	270×	N-96°-W	無	無		無	平安 9世紀前半	149住に同じ
151	方形	×462	N-85°-W	無	無		無	弥生後期	162→155→151→147→ 89住
152	長方形	247×336	N-93°-W	無	無	東壁中央	無	平安 10世紀第1	153→152→120住
153	方形	423×424	N-94°-W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	古墳後期 6世紀後半	153→152→120住
154									155住の一部と判明し 欠番とする
155	隅丸 長方形	445×605	N-2°-W	無	4	中央北と中 央の2基	無	弥生後期	162→155→151→237住
156	長方形	257×375	N-70°-W	無	無	東壁南寄り		平安 11世紀第1	157→148→156住
157	長方形	×405	N-73°-W	無	無		無	平安 10世紀前半	161→158→157→148→ 156住
158	方形	328×330	N-80°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀第3	164→163→161→158→ 157住
159	長方形	285×403	N-69°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀前半	164→163→159住
160	長方形	415×295	N-113°-W	無			無	弥生後期	160→151→147→134→ 6 壘穴
161	長方形	328×370	N-80°-W	無	無	東壁中央	東南隅	平安	164→163→161→158→ 157住
162								弥生中期	162→155→132住
163	長方形	295×335	N-93°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀第2	164→163→161→158、 159住
164	隅丸 長方形	410×470	N-2°-W	有 全周	4	中央北寄り		弥生後期	164→163→161→158、 159、142住
165			N-110°-W						165→126→125→124→ 123→122住
166	方形	430×432	N-96°-W	有 全周	4	東壁中央	東南隅と北 東隅の2基	古墳後期 6世紀前半	4区4→166→4区5 →167住
167	長方形	400×525	N-104°-W	無	無	東壁中央	東南隅	平安 9世紀第3	4区4→166、168→ 4区5→167住

No	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
168	方形	590×600	N-91°-W	有全周	4	東壁南寄り	東南隅	古墳後期 6世紀前半	170→168→4区5→167住→17溝
169	方形	290×340	N-81°-W	無		東壁南寄り	東南隅	平安 11世紀	170→169住→118土坑
170	方形	590×	N-95°-W	無	2		南西隅	古墳後期 6世紀前半	170→168→169住→17溝
171	隅丸長方形	340×440	N-2°-E	無	4	北の柱間	無	弥生後期	171→4区9住→106、107土坑
172	隅丸方形	304×340	N-4°-E	無	2	中央北寄り	無	弥生後期	172→4区14住→112土坑
173	隅丸方形	396×414	N-4°-W	無	2	中央	無	弥生後期	119、120土坑→173住→114土坑
174	方形	×424 片確認	N-101°-W	有全周か	2	東壁中央	東南隅	古墳後期 6世紀前半	177→174住
175	長方形	×295	N-90°-W		(2)			弥生後期	175住→22溝
176	方形	×472 片確認	N-109°-W	有	(2)	東壁南寄り	東南隅	古墳後期 6世紀前半	177→176住
177	方形か				4	中央北寄り		弥生後期	177→4区16→174、176住
178	方形	336×280	N-3°-E	無	4	北壁中央	北東隅	古墳後期 6世紀前半	
179	方形か	×350 西壁のみ						古墳後期 6世紀	180→179住
180	方形	×408 片確認	N-107°-W	有全周か	2			古墳後期 6世紀前半	181→180→179住
181	方形	484×476	N-118°-W	有全周	4	東壁中央	東南隅	古墳中期 5世紀後半	145土坑→181→180→179住
182	長方形	290×406	N-61°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅	平安 11世紀第1	31溝→147土坑→182住
183	方形	×306 西側片	N-102°-W	無	無		東南隅	平安	
184	方形	198×296	N-91°-W	無		東壁中央	東南隅	平安 10世紀前半	186→185→197→184住
185	方形か	×620 西側片	N-100°-W	無	2	北壁に推定	南壁中央	古墳中期 5世紀後半	186→185→197→184→190住
186	隅丸長方形	×312	N-83°-W	無	2	中央北寄り	無	弥生後期	186→191→185住

第2章 検出された遺構

No	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
187	方形	180×248	N-85°-W	有	無	東壁南寄り	東南隅	平安	214→187住
188	隅丸 長方形	294×372	N-73°-W	有 全周か		東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀	197→198→4区21→ 188住
189	長方形	240×330	N-65°-W	無	無	東壁南寄り		平安 10世紀第3	214→189住
190	長方形 か	×380 西辺のみ						平安	185→197→190住
191		×250 西辺のみ		有 全周か				古墳中期 5世紀後半	186→191住
192		西辺のみ		無	1			弥生後期	192→193住
193		南西隅のみ	N-20°-E	無	1			弥生後期	194→192→193住
194	方形	506×540	N-13°-W	無	4	ほぼ中央	無	弥生中期	194→193→4区15住→ 1方周
195	長方形	264×204	N-89°-W	無	無	東南隅	無	平安 11世紀前半	214→202→201→195住
196	方形	238×260	N-63°-W	無	2	東壁南寄り	南西隅	平安 11世紀前半	214→196住
197	方形	×540	N-81°-W	有 全周か	3 (4)			古墳後期 6世紀前半	185→199→197→190→ 198→184住
198	長方形	288×352	N-79°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 9世紀第3	199→197→198→4区 21→188住
199	方形	626×654	N-106°-W	有 全周か	4		東南隅	古墳後期 6世紀前半	4区18→199→197→ 198→188住
200	方形	333×380	N-91°-W	無		東壁南寄り	東南隅	平安 11世紀前半	218→4区28→219→ 200住
201	長方形	270×360	N-70°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安	219→202→4区31→ 201→185住
202	長方形	282×394	N-86°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀前半	201住と同様
203			N-100°-W			東壁		平安	カマドのみ確認 219→203→202住
204									219住と同一住居のた めに欠番とする
205		カマドのみ				東壁		平安	206→205→3区15住

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
206		東壁のみ							206→205→3区15住
207		北西隅のみ							3区3溝→207住
208	方形	×550 西辺側のみ	N-95°-W	無	2			古墳後期 6世紀	208住→3区1、3溝
209	隅丸 長方形	×433	N-75°-E	有 全周か	4	中央部 中央北	北東隅	古墳前期 4世紀中頃	228→209住→1方周
210	長方形		N-33°-W	有	3			弥生後期	210住→1方周
211					2	焼土あり		弥生後期	211住→1方周
212	方形か	北東隅のみ	N-100°-W		2	中央部2基		弥生後期	155土坑→212住→1方周
213	長方形	518×630	N-4°-E	有	3	中央北		弥生後期	213住→1方周
214	方形	620×640	N-88°-W	無	4		東北隅	古墳後期 6世紀初頭	214→202→189→182、 196、187、195、201住
215	方形	×578	N-112°-W	有	2			古墳後期 6世紀前半	220→215→221住→32、 33溝
216		南辺の一部							218→216→219住
217									195住と同一住居のため に欠番とする
218	隅丸 長方形	360×	N-10°-E	無	2			弥生後期	218→4区28→219→ 200住
219	方形	710×710	N-90°-W	無	4	東壁南寄り		古墳後期 6世紀後半	218→219→195、200～ 203住
220	長方形	400×530	N-11°-E	無	4	中央北柱間	無	弥生後期	220→4区28→215→ 221住
221	方形	362×359	N-95°-W	有 全周か	4	東壁中央か	東南隅	古墳後期 6世紀後半	220→215→221住
222		東南隅のみ						平安	
223	方形	285×	N-75°-W	無	無	東壁南寄り	西南隅	平安 11世紀第2	227→226→223住
224	不 整 方 形	×355 西辺側のみ	N-121°-W	無				弥生後期	

第2章 検出された遺構

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	戸・かまど	貯蔵穴	時期	備考
225		北西隅のみ		無	無			弥生後期	225住→1方周
226		西辺隅のみ	N-69°-W	無	無			平安	227→226→223住
227	方形か	西辺側のみ	N-73°-W	無	無			平安	227→226、239→223住
228	隅丸長方形か	北辺の一部	N-122°-W		(1)			弥生後期	228→209住→1方周
229	長方形	×576 西側½	N-108°-W	無	2	中央		弥生中期	229住→160土坑
230	方形	×350	N-91°-W	無	(2)	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀第3	108→87→230住
231	方形	260×340	N-102°-W	有 全周	3	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀第2	
232	方形	×474	N-21°-W	無	4	中央部	無	弥生中期	236→232住
233	長方形か	×325 東側½	N-83°-W	無	無	東壁中央	無	平安	
234	長方形	257×346	N-97°-W	無	1	東壁南寄り	東南隅		7世紀第3
235	方形	376×392	N-83°-W	無	無	東壁中央寄り		平安 11世紀前後	238→235住→158土坑
236	方台形	462×	N-18°-E	無	4	中央部		弥生中期	236→232住→174土坑
237	方形	250×295	N-91°-W	無	無	東壁南寄り	南西隅	平安 10世紀	155、238→237→132住
238	隅丸長方形	422×532	N-3°-W	無	4	中央部2基	無	弥生後期	238→237→235住→158土坑
239	長方形	212×306	N-65°-W	無	有 全周か	東壁南寄り	無	平安 10世紀第4	3区8→227→239住→ 3区2溝
240	隅丸長方形	×606	N-6°-E	無	3	中央北寄り	無	弥生後期	240住→3区2溝→182土坑
241	方形か	×382	N-108°-W	無	無				241→247住→7溝→2 7世紀第4
242	方形	246×233	N-106°-W	無	無	東壁中央	東南隅		7世紀第4
243	長方形	283×343	N-98°-W	無	無	東壁南寄り	無	奈良 8世紀第1	3井戸→246→243、245住

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	伊・かまど	貯蔵穴	時期	備考
244	長方形か	×304 西側のみ	N-104°-W	無	無			7世紀前半	244住→7掘立
245	長方形	×294 東側のみ	N-94°-W	無	無		無	奈良 8世紀後半	3井戸→246→243,245住
246	方形	395×424	N-130°-W	無	無	東壁南寄り	無	7世紀第4	3井戸→246→243,245住
247	方形か	×256 西辺側のみ	N-82°-W	無	無			奈良 8世紀	241→247住→7溝→2区画
248	長方形	396×316	N-75°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀第1	257→248住→39溝→206土坑
249	長方形か	×450 西辺側のみ	N-84°-W	無	無		無	平安 9末～10初	256→249→250住
250	長方形	342×288	N-63°-W	無	無	東壁南寄り	東南隅	平安 11世紀第1	256→249→250住
251	方形か	西西隅のみ	N-65°-W	無	無	南西隅		平安 11世紀前半	259→251住
252	方形か	×370 西辺側のみ	N-68°-W	無	無	南西隅		平安	252→256→249→250→1溝
253	長方形	336×302	N-73°-W	無	無	東南隅	南壁カマド寄り	平安 11世紀第2	252→256→250→253住
254	長方形	273×320	N-66°-W	無	無	東壁南寄り		平安 11世紀	38溝→254住→1溝
255	長方形か	西西隅のみ						平安	255住→198土坑
256	長方形	242×283	N-72°-W	無	無	東壁南寄り		平安 9世紀第4	252→256→250→253住
257	長方形	264×328	N-74°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀第2	257→248住→39溝→206土坑
258	長方形	×318	N-60°-W	無	無			平安 11世紀第1	261→250→258住→37溝
259	長方形	592×496	N-54°-W	無	無			7世紀第3	202土坑→261→259→258住→37溝
260	方形か	×336 西辺側のみ	N-70°-W	無	無			平安	260住→40溝
261	長方形		N-75°-W	無	無	東壁南寄り	無	7世紀後半	261→259→258住→1溝
262	不整形長方形	×310	N-55°-W	無	無			平安	262住→40溝

第2章 検出された遺構

No	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
3-1	方形	552×505	N-99°-W	無	2	東壁南寄り	東南隅	古墳後期 6世紀	3区6-1→2住
3-2	長方形	260×320	N-56°-W	無	無	東壁南隅 新旧2基	南西隅	平安 10世紀	3区6-1→2住
3-3	方形	402×436	N-88°-W	有 全周	3	東壁中央	東南隅	古墳後期 6世紀前半	4区28→3区3住
3-4	方形	443×422	N-107°-W	有	3	東壁南寄り	東南隅	古墳後期 6世紀前半	206→3区4住→3区 3溝二ツ岳FA埋没
3-5	方形	390×390	N-103°-W	有 全周	4	東壁やや南 寄り	東南隅	古墳後期 6世紀後半	3区6-5→7住
3-6	隅丸 長方形	540×710	N-14°-E	有	4	中央部	無	弥生後期	3区6→4区28→3区 1→5→2、7住
3-7	方形	290×305	N-74°-W	無	4	東壁南隅	無	平安 9米～10初	3区6-5→7住
3-8	方形	435×460	N-10°-E	有	(4)		南西隅	古墳前期 4世紀後半	3区8-239住→3区 2溝 石製横造品出土
3-9	長方形	342×304	N-72°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 11世紀前後	3区12-10→145→3 区9住
3-10	方形	×478	N-108°-W	有 全周か	3 (4)	東壁中央	東南隅	古墳中期 5世紀後半	3区12-10→145→3 区9住
3-11									欠番
3-12	隅丸 長方形	640×800	N-7°-E	有	6	中央部と 北柱間		弥生後期	3区10住に同様
3-13									欠番
3-14									欠番
3-15	長方形	273×	N-58°-W	有 全周か				平安 9世紀か	206、3区4住→3区 3溝、3区16→15住
3-16	方形か	北西隅のみ	N-58°-W					平安	206、3区4住→3区3 溝→3区16→15住
3-17		北西隅のみ	N-73°-W					平安	3区3溝→3区17住→ 3区2溝
4-1									I地区56住で既報告3 集報告書88～92頁
4-2	不 整 方 形	448×396	N-92°-W	有 全周	無	東壁中央	東南隅	古墳中期 5世紀後半	

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	炉・かまど	貯蔵穴	時期	備考
4-3	長方形	367×498	N-95°-W	無	2	東壁南寄り	東南隅	平安 9世紀第3	4区4→5→3住
4-4	方形		N-100°-W	無	3 (4)			古墳中期 5世紀後半	4区4→166→3区5 →4区3、167住
4-5	方形	460×478	N-187°-W	有 全周	1	北壁中央	北東隅	古墳後期 6世紀後半	4区4→168→3区5 →4区3住
4-6	隅丸 長方形	512×634	N-22°-W	無	6	中央北	無	弥生後期	4区6→8→7住
4-7	長方形	293×387	N-83°-W	有 全周	無	東壁南寄り	東南隅	平安 10世紀第3	4区6住→1方周墓→ 4区8→7住
4-8	隅丸 方形	235×259	N-113°-W	無	3	無	北東隅	平安	4区6→8→7住
4-9	長方形	394×466	N-99°-W	無	無	東壁中央	東南隅	古墳後期 6世紀後半	171→4区9住→171土 坑
4-10	長方形	295×428	N-95°-W	無	2	東壁南寄り	無	平安 11世紀第1	4区14、11→10住
4-11	方形	682×666	N-107°-W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	古墳後期 6世紀前半	4区14、11→10住
4-12	隅丸 長方形	570×730	N-12°-W	無	6	中央北 中央西	無	弥生後期	
4-13									欠番
4-14	方形	675×644	N-106°-W	有 全周か	4	東壁南寄り	南東隅	古墳後期 6世紀前半	172→4区14、11住 二ツ岳F A埋没
4-15	長方形	680×542	N-106°-W	有 全周	5	中央東寄り 中央		古墳前期 4世紀中頃	194→4区15住→132土 坑
4-16	方形	542×512	N-108°-W	無	4	東壁南寄り	東南隅か	古墳中期 5世紀後半	177住→4区7土坑→ 4区16住
4-17	長方形	255×396	N-84°-W	無	無	東南隅寄り	東南隅	平安 11世紀前半	4区19→18→17住
4-18	隅丸 方台形	635×615	N-6°-W	無		中央部	南壁中央か	弥生後期	4区19→18→199→198 住
4-19	隅丸 長方形	558×670	N-2°-E	無	6	中央北と中 央西の2基	無	弥生後期	4区19→18→17住
4-20		南西隅のみ							209住の南西隅に相当 し欠番とする
4-21	長方形	246×394	N-75°-W	無	無	東壁南寄り	無	平安 10世紀後半	199→4区21→188住

No.	形状	規模	方位	周溝	柱穴	伊・かまど	貯蔵穴	時期	備考
4-22	方形	425×423	N-93°-W	有	4	東壁南寄り	東南隅	古墳中期 5世紀後半	
4-23	隅丸 長方形	472×672	N-14°-W	無	4	中央北と中央西の3基		弥生後期	
4-24	方形	413×	N-93°-W	有		東壁南寄り	東南隅	古墳後期 6世紀前半	4区29→26→24→30→31→27住
4-25	方形か		N-77°-W	有 全周か	2	東壁南寄り		古墳後期 6世紀前半	11、12土坑→4区25住 →2井戸
4-26	方形	540×570	N-105°-W	有	4	東壁南寄りに推定	北東隅寄り	古墳中期 5世紀後半	4区29→26→24→30→31→27住
4-27	長方形	265×348	N-97°-W	有 全周	無	東壁南寄り	南西隅	平安 11世紀前半	4区29→26→24→27住
4-28	方形	726×732	N-115°-W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	古墳中期 5世紀後半	218→4区28→3区3住
4-29	長方形	478×578	N-17°-W	無	3 (4)	中央部か	無	弥生後期	4区29→26→24→30→31→27住
4-30	方台形	380×420	N-17°-W	有	3 (4)	北壁中央		古墳後期 6世紀後半	4区29→26→24→30→31→27住
4-31	方台形	390×420	N-90°-W	無		東壁中央	無	平安 10世紀第4	4区29→26→24→30→31→27住
4-32									219住の一部と推定される
KT1	方形	395×365	N-92°-W	無	無	無	無	平安 10世紀前半	KT3住→1溝→1住 →2住
KT2	長方形	320×245	N-85°-W	無	無	東南隅	東南隅	平安 10世紀後半	KT3→2住→2溝→5土坑
KT3	方形	470×520	N-104°-W	無	4	東壁南寄り	無	奈良 8世紀	KT3住→1溝
KT4	方形	310×272	N-73°-W	無	2	東壁南寄り	北西隅	平安 10世紀後半	

住居一覧表作成の基準及び凡例（原則的に本文と一致するが表記上例外もある）

- 形状 その状態は全体がわかるものを基準としたが、一部の推定を含む。
- 規模 縦は東西方向の長さ、横は南北方向の長さを示している。単位はセンチメートル（cm）である。
- 方位 カマドのない住居は長軸線を基準としてN-W・Eで表示した。例N-45°-Wカマドのある住居はカマド中心軸線を基準としてN-W・Eで表示した。
- 周溝 その有無を表示し、あるもののうち全体に及ぶ例は「全周」として区別した。
柱穴 主柱穴本数を記入したが、推定されものについて（ ）内の数字を表示した。
- 伊、カマド 設置した位置を表示した。
- 貯蔵穴 設置場所を表示し、一部は掘り方で形状を記入した。
- 時期 上段に時代、下段に世紀で相対年代を表示した。
- 備考 重複関係を古い方から矢印で表示した。多数の場合は前後する関係が限られたもので全てではない。

写 真 图 版



熊野堂遺跡と井野川上流域の遺跡群（航空写真、南から）



熊野堂遺跡全景（航空写真、南から）



熊野堂遺跡調査前風景（南から）



熊野堂遺跡調査風景



第2次調査風景



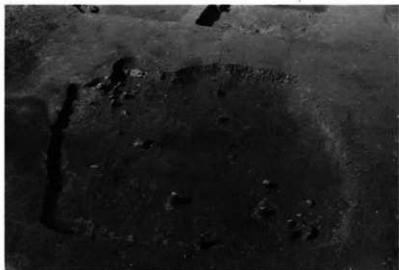
第3次調査風景



基本土層（表土からC水田まで）



基本土層（表土からシルト質土まで）



1号住居址



1号住居址カマド遺物出土状態



1号住居址床面下土坑



2号住居址



2号住居址カマド



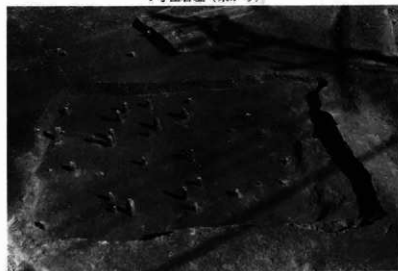
3号住居址



3号住居址



4号住居址(東から)



5号住居址



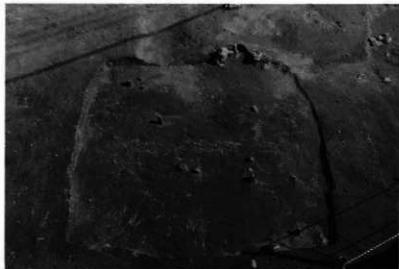
6 A号住居址



6 B号住居址



6 C号住居址



7号住居址（西から）



7号住居址カマド



7号住居址カマド



8号(左)·9号(右)住居址



8号·9号住居址遺物出土狀態



8号·9号住居址遺物出土狀態



9号住居址カマド



9号住居址カマド



9号住居址カマド左壁の石組み



10号住居址



10号住居址



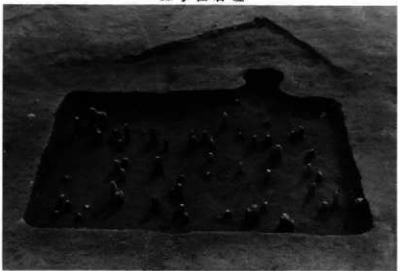
11号住居址



11号住居址



13号住居址



13号住居址



14号住居址



14号住居址カマド



15号住居址（東から）



16号住居址



16号・17号住居址



20号住居址



16号住居址カマド



17号住居址カマド



20号住居址カマド



21号住居址 (西から)



22号住居址



23号住居址



21号住居址カマド



22号住居址カマド



23号住居址カマド



24号住居址



24号住居址カマド



25号住居址(東から)



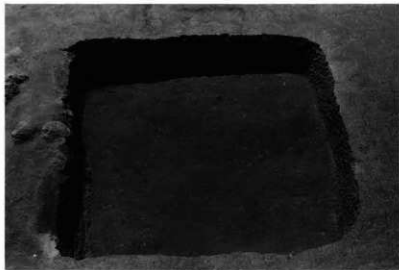
26号住居址



27号住居址



27号住居址



29号住居址



29号住居址



30号住居址



31号住居址



31号・32号・33号住居址



34号住居址



35号住居址



35号住居址



35住居址カマド



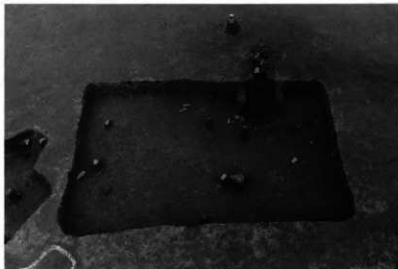
37号・38号住居址



41号住居址



41号住居址カマド



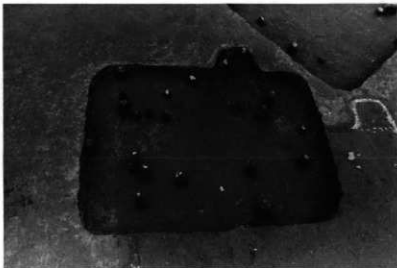
42号住居址



42号住居址カマド



42号住居址カマド



43号住居址



44号住居址



45号住居址



46号住居址



47号住居址



27号(下)・48号(上)住居址



49号住居址



49号住居址遺物出土狀態



49号住居址遺物出土狀態



50号住居址



57号·59号·60号·61号·63号住居址



57号住居址



57号住居址



57号住居址カマド付近遺物出土状態



57号住居址貯藏穴付近遺物出土状態



58号住居址



58号住居址遺物出土狀態



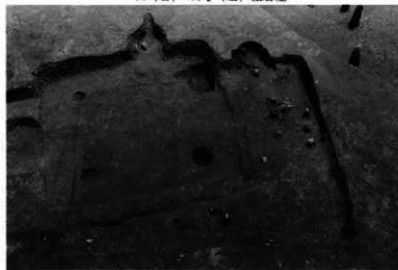
59号住居址



64号(右)・65号(左)住居址



64(右)・65号(左)住居址



64号(左)・66号(右)住居址



67号住居址



67号住居址



68号住居址（北から）



69号住居址



69号住居址馬骨出土狀態



69住居址遺物出土狀態



70号住居址



70号住居址遺物出土狀態



71号住居址



73号(左)・74号(右)住居址



73号(左)・74号(右)住居址遺物出土状態



73号住居址カマド内瓦出土状態



76号住居址（北から）



77号(左)・78号(右)住居址



77号住居址カマド



79号住居址（西から）



79号住居址遺物出土状態



79号住居址東南隅遺物出土状態



81号住居址（北から）



81号住居址遺物出土状態



81号住居址灰輪陶器出土状態



82号住居址



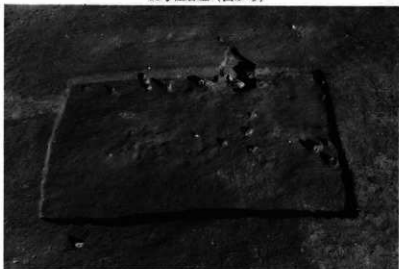
84号住居址(西から)



84号住居址カマド



85号住居址(西から)



86号住居址



86号住居址カマド断面



88号住居址(西から)



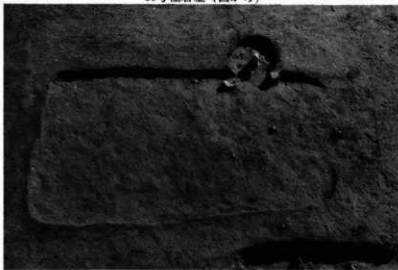
88号住居址カマド断面



89号(下)・90号(中)・91号(上)住居址(東から)



89号住居址（西から）



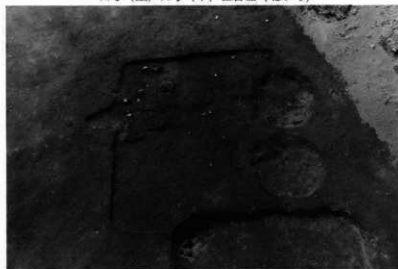
90号住居址（西から）



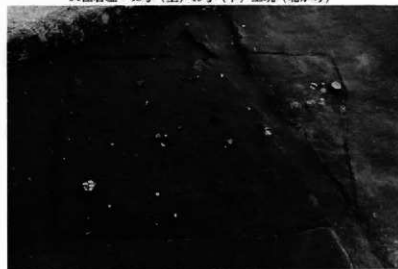
91号住居址（北から）



91号(上)・93号(下)住居址(北から)



94住居址・48号(上)・49号(下)土坑(北から)



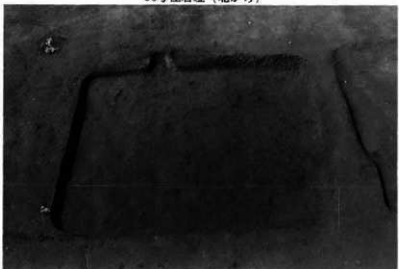
95号住居址(西から)



96号住居址（南から）



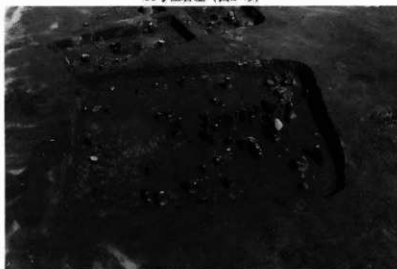
96号住居址（北から）



97号住居址（西から）



99号住居址（西から）



99号住居址遺物出土状態（西から）



100号（右）・101号（左）住居址（北から）



100号(右)・101号(左)住居址遺物出土状態



100号住居址東南隅遺物出土状態



102号住居址(西から)



103号～107号住居址（北から）



103号～107号住居址遺物出土状態（北から）



105号住居址と同関珠出土状態



100号・101号・109号(中央)・111号住居址(西から)



109号(中央)・111号(左)住居址遺物出土状態



109号住居址壁際小孔列



110号住居址（西から）



110号住居址遺物出土状態（西から）



110号住居址基石出土状態



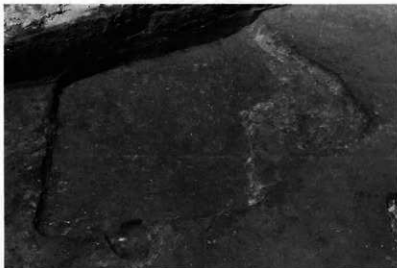
112号住居址 (西から)



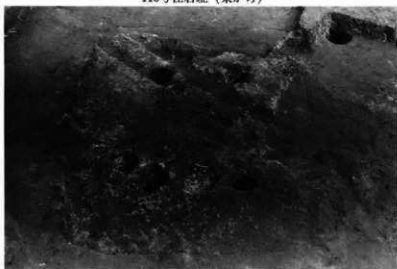
112号住居址遺物出土状態 (西から)



113号住居址遺物出土状態 (東から)



113号住居址 (東から)



115号住居址 (北から)



115号住居址遺物出土状態 (北から)



116号住居址（西から）



116号住居址遺物出土状態（西から）



117号住居址（南から）



119号住居址（南から）



120号住居址（西から）



120号住居址遺物出土状態（西から）



121号～131号住居址遺物出土状態（西から）



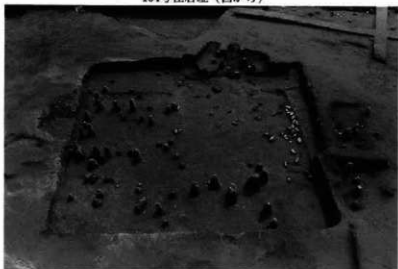
127号住居址（北から）



132号・133号住居址（北から）



134号住居址（西から）



134号住居址遺物出土状態（西から）



134号住居址遺物出土状態



135号(中央)・136号(右下)・137号(左上)住居址遺物出土状態(南から)



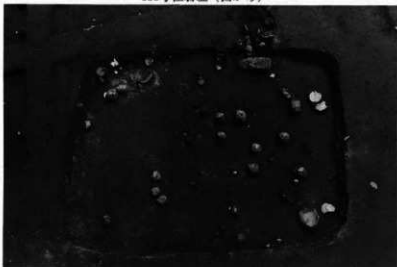
136号住居址(東から)



139号(上)・148号(下)住居址57号(下)・58号(上)土坑



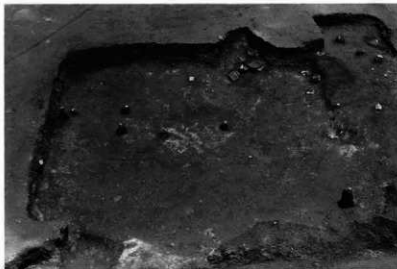
138号住居址（西から）



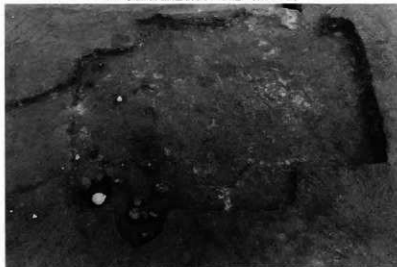
138号住居址遺物出土状態（西から）



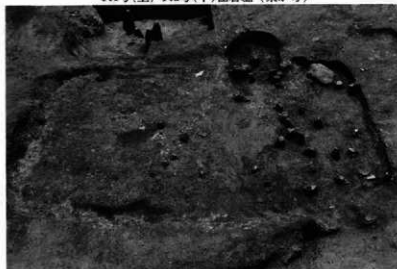
138号住居址鉄鎌出土状態（西から）



141号住居址遺物出土状態（西から）



141号(上)・142号(下)住居址（東から）



143号住居址（西から）



144号住居址(東から)



145号住居址(南から)



138号(中央)・149号(左)・150号(右)住居址(東から)



149号(左)・150号住居址遺物出土状態(東から)



120号(左)・153号(右)住居址(北から)



153号住居址貯蔵穴付近遺物出土状態(東から)



156号住居址（東から）



159号住居址遺物出土状態（西から）



159号住居址カマド残存状態（西から）



164号住居址（西から）



159号(左上)・163号住居址（西から）



3区南半（136号住居付近から南を望む）



166号住居址（北から）



168号住居址（西から）



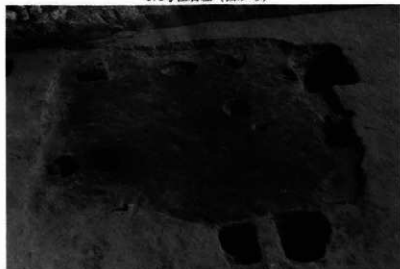
169号住居址（西から）



170号住居址（北から）



171号住居址（西から）



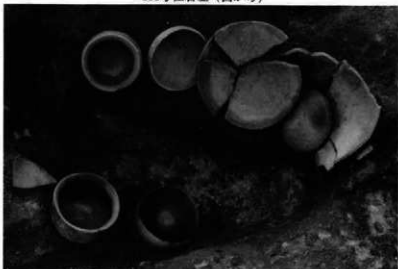
173号住居址（西から）



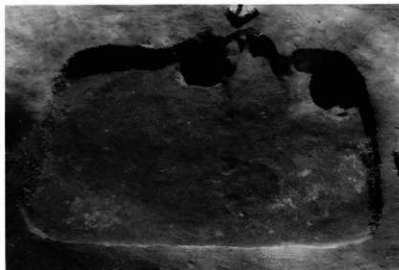
178号住居址（東から）



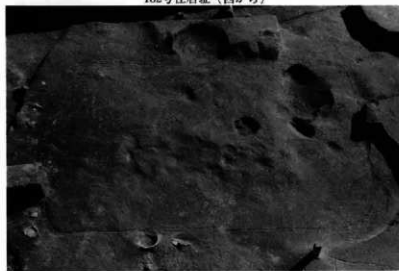
181号住居址（西から）



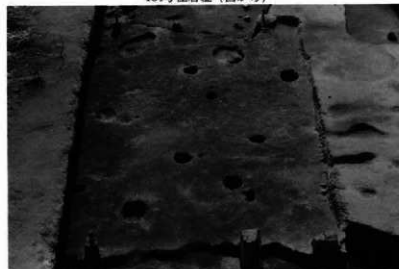
181号住居址貯蔵穴遺物出土状態



182号住居址（西から）



184号住居址（西から）



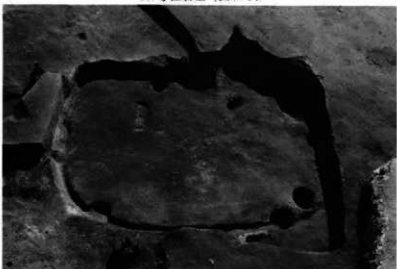
185号住居址（北から）



186号住居址（南から）



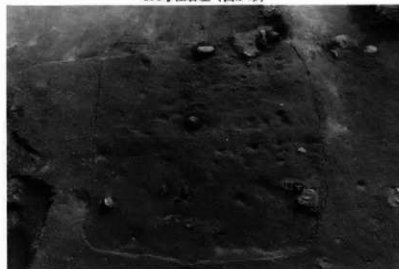
187号住居址（西から）



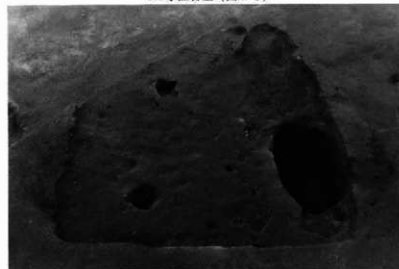
188号住居址（西から）



194号住居址（西から）



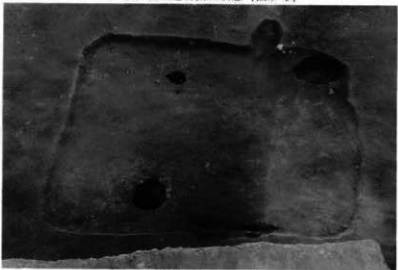
195号住居址（西から）



196号住居址（西から）



197号住居址遺物出土状態（西から）



200号住居址（西から）



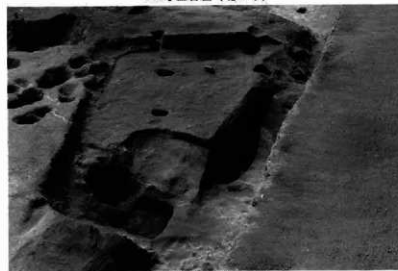
201号(上)・4区31号(下)住居址（西から）



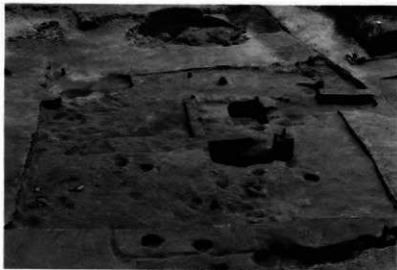
202号(上)・201号(中)・4区31号(下)住居址(西から)



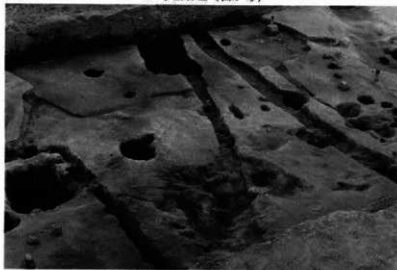
209号住居址(北から)



210号住居址(北から)



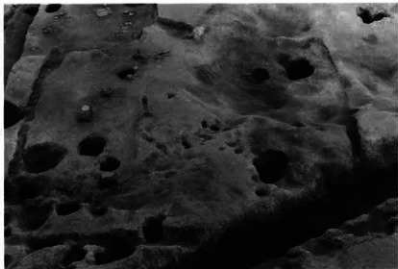
214号住居址（西から）



215号(上)・220号(下)住居址（北西から）



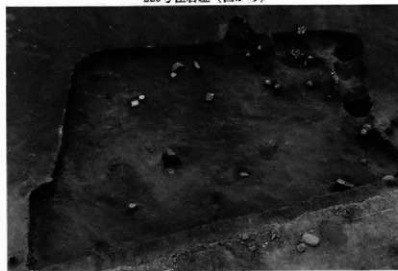
219号住居址（北から）



221号住居址 (西から)



229号住居址 (西から)



230号住居址 (西から)



87号(左下)・108号(右下)・230号(上)住居址



231号住居址(西から)



232号住居址(西から)



248号住居址（西から）



248号住居址カマド遺物出土状態



250号住居址（西から）



253号住居址（西から）



253号住居址カマド遺物出土状態



257号住居址（西から）



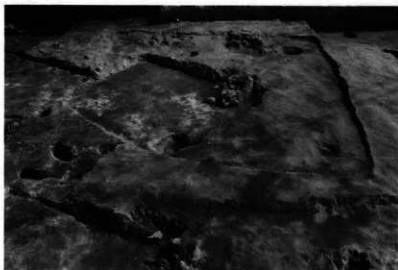
258号住居址（北西から）



259号(左)・261号住居址（北西から）



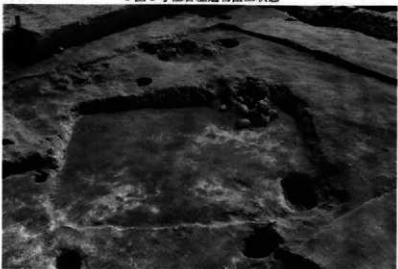
262号住居址（北西から）



3区1号・2号住居址(西から)



3区1号住居址遺物出土状態



3区2号住居址(西から)



3区2号住居址カマド残存状態



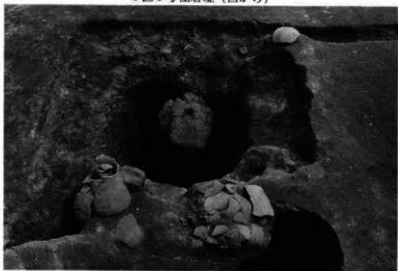
3区4号住居址遺物出土状態（西から）



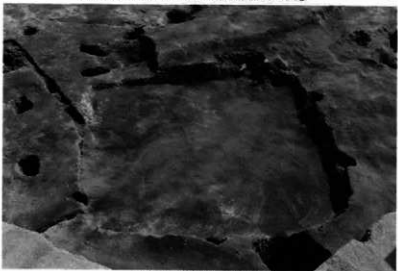
3区4号住居址カマド遺物出土状態（西から）



3区5号住居址(西から)



3区5号住居址・貯蔵穴付近遺物出土状態



3区7号住居址(西から)



3区7号住居址カマド残存状態



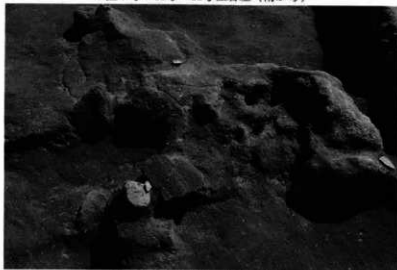
3区8号住居址・3区3号溝（北西から）



3区8号住居址貯蔵穴遺物出土状態



3区9号・10号・12号住居址（南から）



3区9号住居址カマド残存状態



3区10号住居址カマド残存状態



4区6号・7号・8号住居址(南から)



4区10号・11号・14号・15号住居址(北から)



3区1号～7号・4区28号住居址(北から)



4区2号住居址(西から)



4区3号住居址(南から)



4区4号住居址遺物出土状態



4区6号・7号・8号住居址(南から)



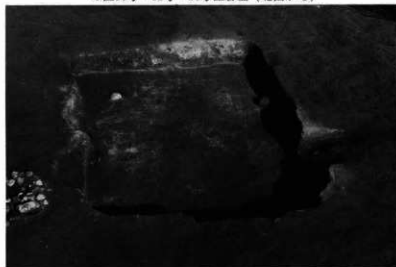
4区7号住居址カマド



4区9号住居址(南東から)



4区10号・11号・14号住居址（北西から）



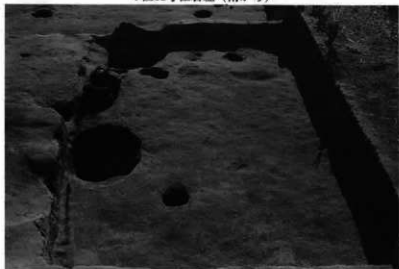
4区10号住居址



4区11号住居址



4区12号住居址(南から)



4区14号住居址



4区14号住居址遺物出土状態(1)



4 区14号住居址遺物出土状態（2）



4 区15号住居址（北から）



3 4 区16号住居址（北から）



4区17号・18号・19号住居址(南から)



4区18号・19号住居址遺物出土状態(南から)



4区18号住居址遺物出土状態



4区18号住居址遺物出状態



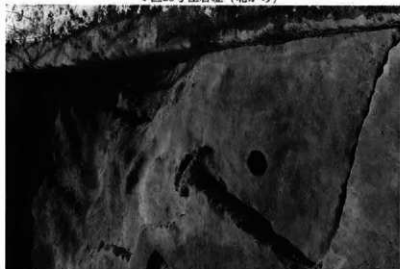
4区22号住居址(西から)



4区22号住居址カマド残存状態



4区23号住居址(北から)



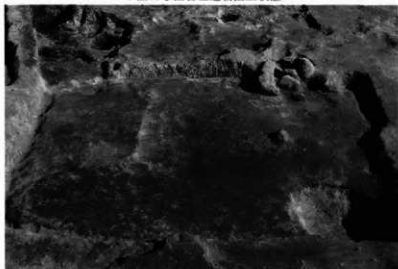
4区25号住居址(北から)



4区26号・27号・29号・30号・31号住居址(西から)



4区26号住居址遺物出土状態



4区27号住居址（西から）



4区27号住居址カマド残存状態



4区28号(左)・3区3号(右)住居址



4区28号住居址カマド・貯蔵穴(西から)



4区28号住居址遺物出土状態

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第100集

熊野堂遺跡(2) 遺構編 1 —上越新幹線開通埋蔵文化財
発掘調査報告 第14集—

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月26日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北極村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北極村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社
